

第4章 出土遺物

栃原岩陰遺跡の遺物については、その取り上げ方や記録方法、保管等について、注意点をあげておく必要がある。

まず調査時によって（あるいは同じ調査時においても）、取り上げ方や記録方法が異なる場合がある。これは約2m毎のグリッドが設定される第3次調査以前と以後にもよるが、出土レベルの記録も、個別の数値の場合や10～20cm程度の幅を持つ場合等、異なるものが存在する。

また遺物の取り上げ方も、個別に記録を残した場合と、一旦掘り出した後に区画とレベルを同じにしたものから取り出してその記録を付したのもの等がある。

遺物単位では、遺物に区画や出土レベルが直接注記されたもの、現在残されている遺物台帳に対応するかたちでのNo.が注記されたもの、区画や出土レベルが記されたビニール袋若しくは小箱にまとめて保管されていたものがある。

但し、経年劣化等で注記の失われたもの、幾度かの遺物の所蔵場所の変更などで上記の記録等が失われるか、あるいは取り上げ時以降そもそも記録の付されていないものも少なからずある。

本報告では、これらの注意点を踏まえた上で、遺物に区画等が注記されたものはそれを最優先とし、次に注記から遺物台帳に対応関係の認められるものはその記録を採用した。また上記のビニール袋や箱単位で記録のあるものも、これを採用している。

これらのデータは、付表の遺物観察表に表記したが、遺物の図版それぞれにも、図版番号の他に出土グリッドと出土レベル（マイナス記号は省略）を付し利便性を図っている。

但し、接合した土器などについては複数の地点が存在するが、その場合は記録の確かなものやより大型の破片の記録を図上には記載した。

また記録が不明瞭のものうち、台帳の記録、あるいは連続するナンバリングなどから予測できるものは（ ）内に記している。また上記の諸記録がないものでも、調査当時の記録となる『栃原新聞』に載る遺物と対応関係が確認可能なものについては、その旨を観察表に明記の上、提示している。

以下基本的には、出土量の多いⅠ～Ⅳ区のを分類しつつ掲載し、比較的出土量の少ないⅤ区については、別図にて掲載している。

尚、Ⅴ区出土のものは、保管の際に箱単位で区分されていたものが多く、基本的にⅠ～Ⅳ区のものが入り混じることは少ないと判断し、出土地点不明のものについてはⅠ～Ⅳ区の中で取り扱っている。

(1) 土 器

土器については、第1次調査以降の出土資料のほとんどが北相木考古博物館に収蔵されたと思われる。その量は、コンテナボックスでおよそ100箱分となり、2007年以降の整理でカウントした数は、復元個体から小破片まで、およそ8000点である。

本報告では、これらのうち、器形復元されたものに加え、口縁部の残されたもの、比較的大型の破片、文様の読み取れる破片、型式学的に類例の少ないもの等について、出土レベル等の記録の有無を加味し、およそ1100点を掲載している。

またここでは主に周知の型式群もしくは施文具の種類によって大別し、それぞれを出土レベル順に掲載している。但し、型式やレベル毎の実際の出土量には必ずしも即していない。

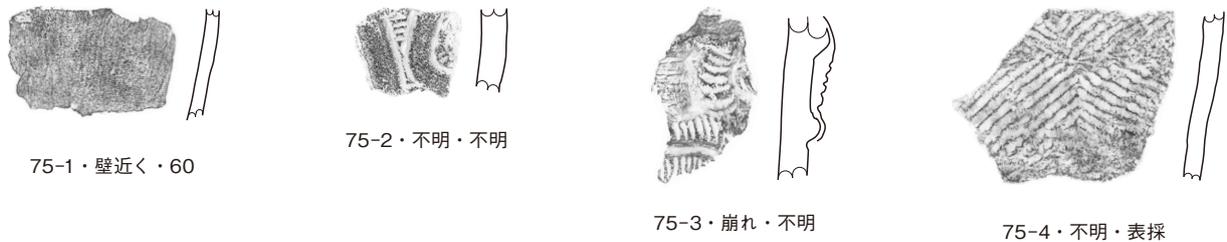


図75 I～IV区 土器1 (S=1/3)

弥生土器

図75-1は弥生時代中期後半～後期の土器の胴部破片と思われる。この他にも同時期と思われるものがV区で見られる(図116-1)。

縄文中期・前期土器

I～Vにおいても、1983年調査区や「天狗岩岩陰部」同様、少数ではあるが、縄文中期～前期の土器が出土している。

図75-2と3は、中期中葉の胴部破片。どちらも出土レベル等は不明であるが、75-3に関しては、第2次調査の日付が残されていることから、比較的浅い部分かと思われる。

図75-4は、無節縄文により、幾何学的な文様を描く。出土地点等は不明。

沈線文痕文系土器

本遺跡出土土器に関する過去の文献では、「上部」から縄文早期後半の貝殻沈線文系、条痕文系土器の出土が多いとされていたが、実際はV区出土のものも含んで考えられていたとも思われ、I～IV区では、出土数も少なく、記録された出土レベルでは「中部」以下の数値も見受けられる。

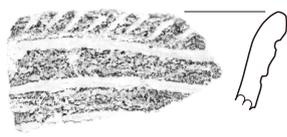
また、V区を含めこれらの土器を検討した結果、沈線により口縁部文様帯に直線的な文様を描く、所謂判ノ木山西式を中心に、その前後の土器と思われる条痕(施文具は貝殻ではないものが多い)もしくは擦痕が内外面に見られ、加えて沈線文による文様が見られる資料が多いと判断された。繊維を含むものも目立つ。

よって本報告では、一部存知の土器型式と認識されるものも含め、早期中葉末から後葉に位置すると思われる一連の土器を「沈線文痕文系土器」として一括し、これを出土レベル順に掲載している。出土レベルは「上部」から「中部」に多いが、一部「下部」にも見られる。

図76-1は横位の沈線文と、口唇下に斜めの連続する刻みを持つ。黒雲母を多量に含み繊維が混入する。76-3は、太く浅い沈線文により施文された胴部破片、硬く焼かれている。田戸下層式に相当しよう。76-4は細い沈線文が横方向に並ぶ。胎土に微量の繊維を含む。76-5はやや太い短めの沈線文で文様を描く。田戸下層式と言えよう。76-6は内外面に条痕のある例だが、貝殻を用いた条痕ではない。このような例も本遺跡では散見される。

図76-7は浅い条痕文の見られる胴下半部の破片。76-8は浅い条痕と沈線文が見える。76-9はV区出土の117-27、28と同一個体。76-10は口唇とその下部に綾杉状の連続刺突を入れ、以下は横位の押引文を巡らす。また、波状口縁の可能性もある。多量の黒雲母や岩石を含む。

図76-11は不規則に条痕が見られる。76-12は口縁部破片で、細い沈線文が交差する。硬く焼けて



76-1・I~IV区・35



76-2・不明・40



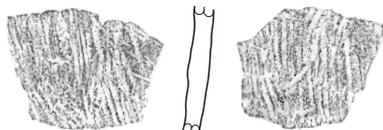
76-3・不明・40



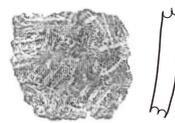
76-4・不明・50



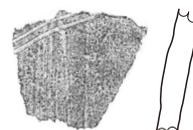
76-5・I~IV区・65



76-6・I・160



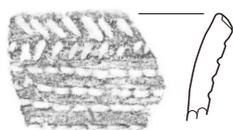
76-7・I-2・189



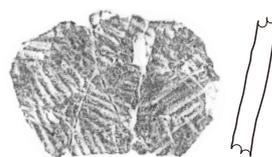
76-8・不明
(200 付近)



76-9・I
210 付近 (8号人骨付近)



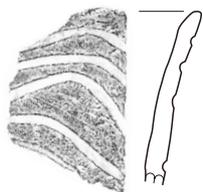
76-10・II・220



76-11・I・220



76-12・III・226



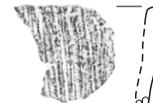
76-13・III・300-310



76-14・II・330-340



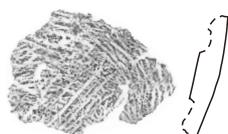
76-15・III-3・485



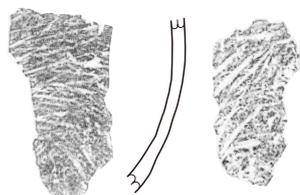
76-16・(I)・不明



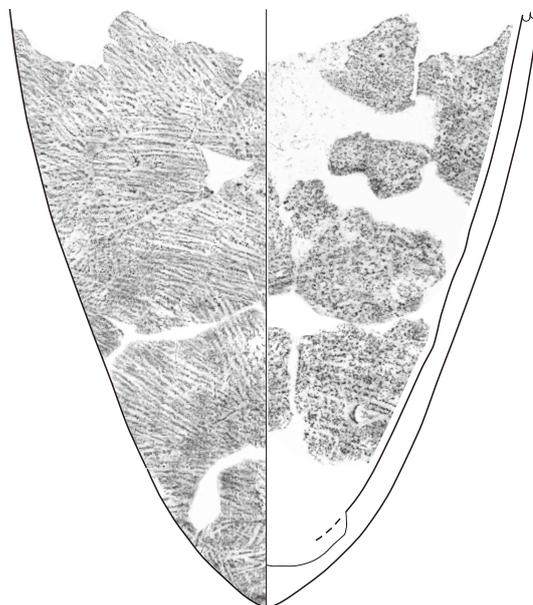
76-17・I・壁より配石の側



76-19・不明・不明



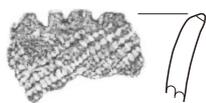
76-20・不明・不明



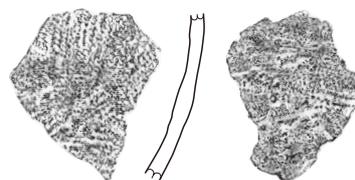
76-18・不明・不明



76-21・(I)・不明

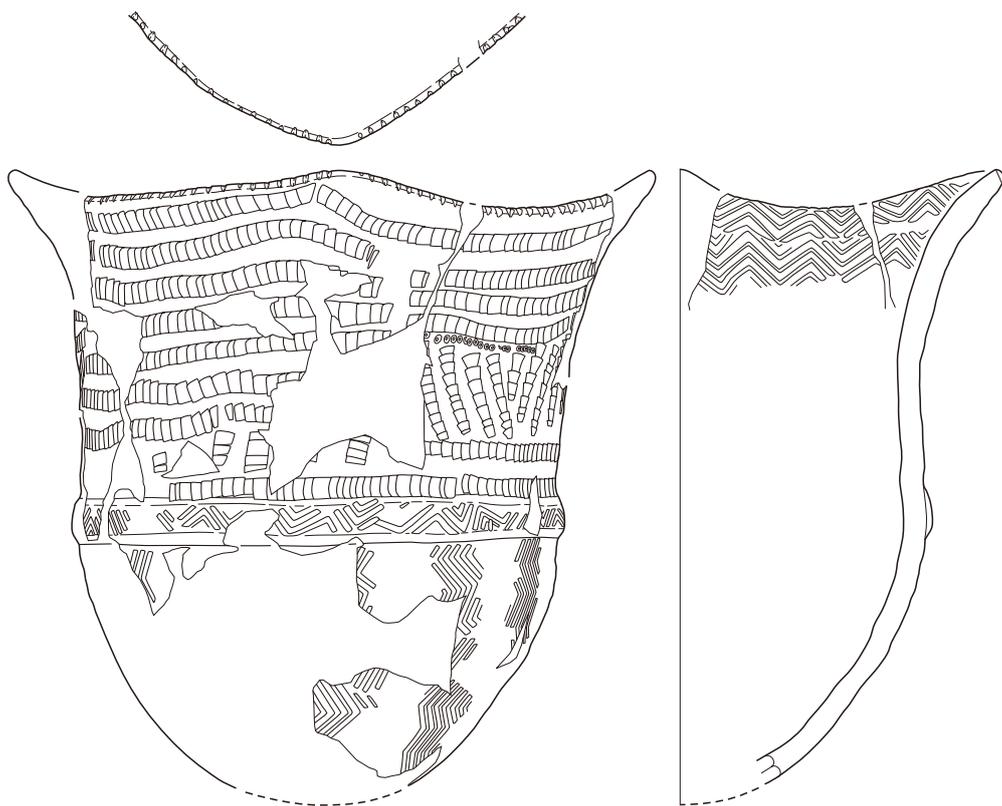


76-22・不明・不明



76-23・不明・不明

图76 I~IV区 土器2 (S=1/3)



77-1·不明·40

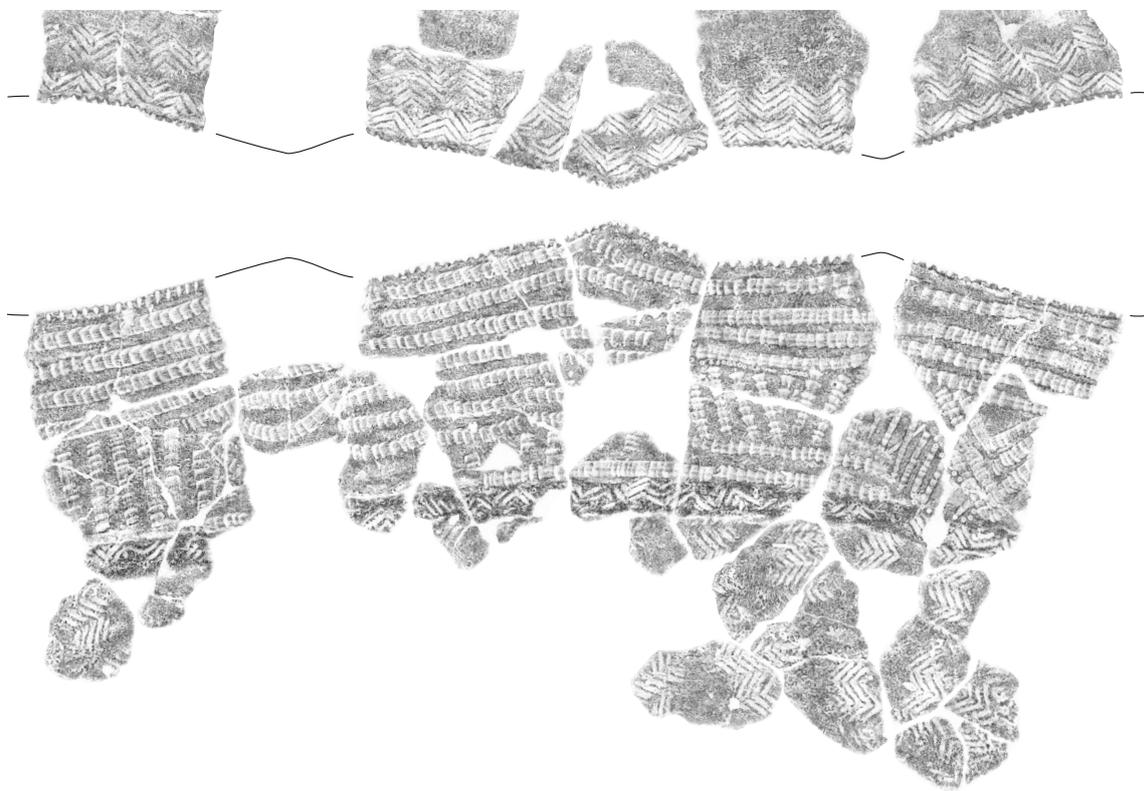


图77 I~IV区 土器3 (实测图S=1/3·拓本S=1/4)

いる。76-13は太い沈線文で波状の文様を描いた口縁部破片。波状口縁かもしれない。76-14は細い沈線文が縦長の格子目状に交差する。判ノ木山西式と言えよう。

図76-17は細い沈線が横位に巡る胴部破片。76-18は出土位置等の記録がないが、胴部から底部の資料で、内外面に条痕文がある。底部は尖底となる。76-19は、底部付近の破片だろうか。76-20は内外面に多方向の条痕文があり、繊維や鋳物を含む。尖底に近い底部と思われる。

図76-21は太い沈線で施文されており、田戸下層式であろう。76-22は縄文施文で、内面には横方向の擦痕がある。口唇は刻まれている。76-23は内面が条痕で、外面はLR縄文が施文される珍しい例である。

図77-1は、所謂「相木式」と呼ばれた個体である。4単位の波状口縁で、胴部がややくびれた、丸底の器形。残存率は約3/4。同一原体と思われるやや大振りの山形押型文を、内面の口縁部には横位に、外面の胴下半には縦位に施文、胴部中程には幅広の隆帯を貼り付けそこにも同様の山形文を横位に施文、4単位の波状口縁の口唇にはヘラ状もしくは棒状工具による刻みを入れ、胴上半部には竹管状の工具で押引文を施す。さらにその間の一部には、直径2mmほどの筒状の工具で円形刺突を加えている。一部破片が-173、-220cm出土であるが、概ね-40cmの「上部」出土となる。

楕円押型文土器

本遺跡では複数の型式の押型文系土器がみられるが、ここでは原体の種類ごとに、出土レベル順で掲載する。このうち数は多くはないが、楕円押型文の資料は、主に-130~-220cm付近で「中部」の上層に偏る。胎土には黒雲母を含むものが多い。

図78-1は横位密接の楕円文胴下半部。78-4と5は横位密接の楕円文施文で口縁を含む同一個体の資料。78-6は口縁部破片であるが、横方向の楕円文の他に、鋸歯状の沈線、さらに貼付隆帯が付され、口唇部にも刻みがある。78-7は縦位密接楕円押型文の底部付近の破片。

図78-8はやや大型の胴下半部破片で、横位密接の楕円文。指頭圧痕による凹凸があり、胎土には黒雲母を含む。78-9は横方向の楕円文の下に無文帯があり、そこに横並びの刺突を施したもの。本遺跡では珍しい例である。

図78-11、12は同一個体で、胴下半部と思われるが、楕円押型文を縦方向にやや間隔を開けて施文している。78-13は横方向帯状の施文、その上部に縦方向の施文がなされている。78-14は口縁部資料で、口唇部にも楕円文を施文。78-15は小刻みな楕円文。78-16は横方向と斜め方向に楕円文を施文。これのみは、いはやや深い部分での出土記録となる。

以下は出土地点不明のものであるが、78-19は硬く焼かれた胴部破片で、緻密な楕円文を横方向に施文し、間に鋸歯状の平行沈線を帯状に施文している。78-20に使われた原体は、横に長いやや特殊な形態だろうか。78-21は斜め方向楕円文の口縁部。78-22は横位密接楕円押型文で、穿孔がある。78-23は、縦方向で帯状に施文。78-26はやや施文が荒い。

キャタピラ状押型文土器

本遺跡ではごく少数となるが、I~IV区とV区それぞれで出土している。図78-27は-143cm出土で、縦、横双方向にキャタピラ状文を回転施文している。

異原体押型文土器

非常に数は少ないが、同一個体の中に異なる形態の押型文原体による施文が認められる資料。

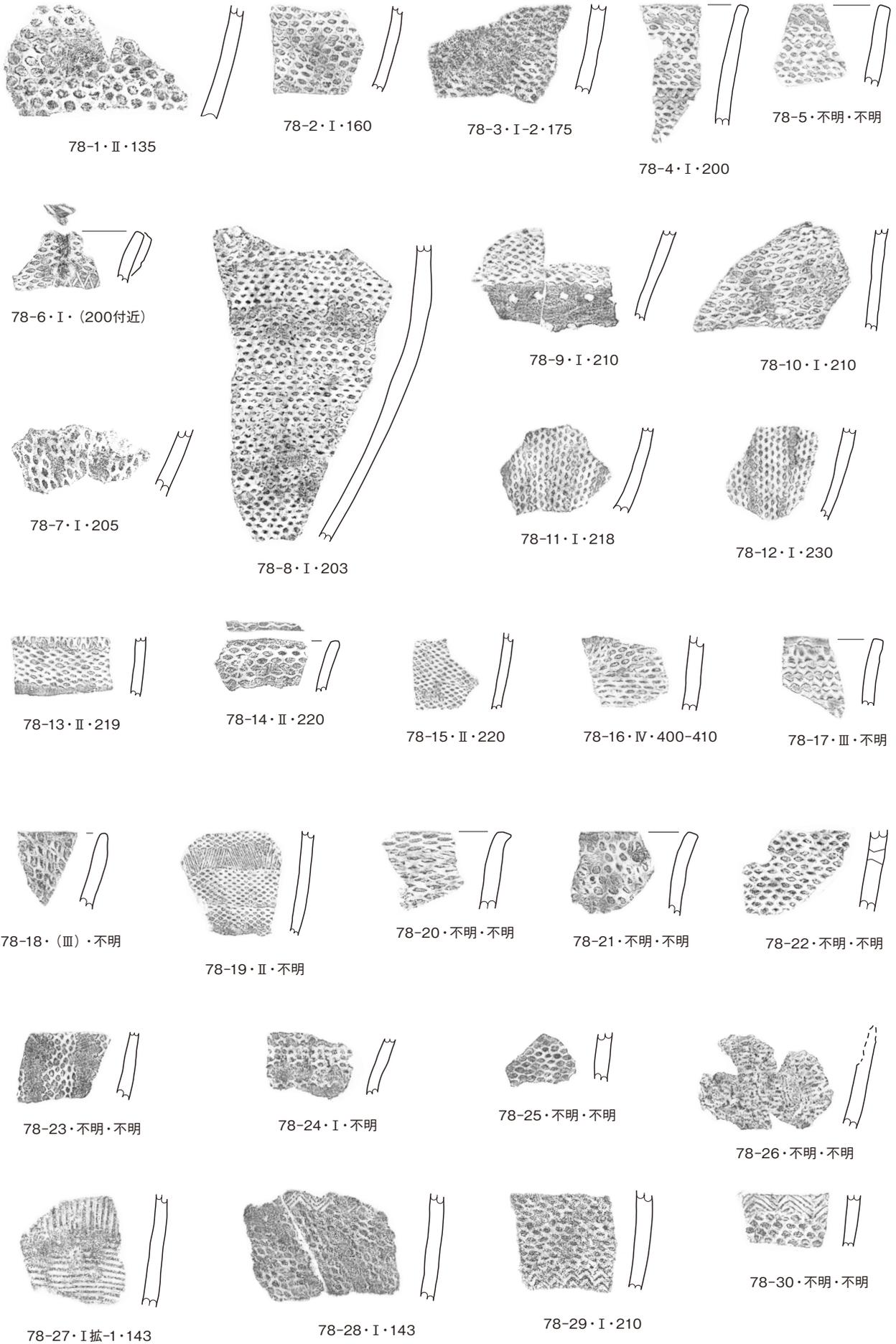


图78 I~IV区 土器4 (S=1/3)

図78-28は楕円文と山形文の例であるが、楕円文は斜め方向に施文されている。78-29は横方向の楕円文と山形文の例。78-30は出土地点等不明であるが、山形文と楕円文が、それぞれ横位に施文されている。

山形押型文土器

山形文施文の土器では、固く緻密で、薄手のものも多い。胎土に黒雲母を多く含むものも目立つ。出土レベルは、概ね-200~-350cmであるが、極端に深いものもある。また口縁部付近のものを除いては、全体として縦方向で密接に施文されている資料が多い。

図79-1は、-117cmと比較的浅い部分から出土した口縁部破片。山形文を縦に施文し、硬く焼かれている。79-2や7、12、13のように、胴部に縦位密接の山形文施文の資料は多い。

図79-4からは、-200cm付近以下出土の資料。79-20と21は8号人骨に共伴と記録されているが、詳細は不明である。

図79-4は薄手で、口縁直下が横、その下には縦方向の山形文を施文。79-7は縦位密接山形文の胴下半部破片。黒雲母が多く含まれ、薄手で硬く焼かれている。79-12は大型の底部付近から胴下半部資料で、縦位の密接施文。やや薄手で硬く焼かれ、胎土には黒雲母を含んでいる。79-13も縦位密接の山形押型文同部破片。

図79-14は横位密に施文されている例。79-15はやや外反し、口唇直下に横位施文、その下部には縦位帯状の施文で、口唇部も施文されている。79-16は接合していないが同一個体で、横位帯状施文であるが、口唇部には原体を押し付けたかと思われる、やや特殊な施文を施している。

底部の形状が分かる資料としては図79-19や図80-2、15などがあるが、79-19は極端に急角度で立ち上がっている。また山形文を上部では横位、下部では縦位に密接施文している。

図79-23は、内面が剥落しているが、山形文土器の口縁部破片で、口唇への施文があり、外面は縦方向で帯状と思われる例である。

図80-1は底部付近を含む胴下半部の資料で、縦位密接の施文。80-2は尖底の底部。80-4は横位密に施文されている例。

図80-5と6は同一個体で、5はやや大型の胴下半部の破片で、縦位密接の山形押型文を施文。薄手で硬く焼けている。80-5は内面付着炭化物の放射性炭素年代測定を行い、7813-7602 cal BC (95.4%)であった(第5章(4)・No.1)。

図80-13は径5mmの原体をを用いた縦位密接山形文の胴下半部。硬く焼け、黒雲母が多い。80-15は底部を含む大型資料で、レベルがやや離れて出土した資料が接合している。縦位密接の山形文施文である。

図80-18からは-300cm以下からの出土資料。80-19と20は薄く硬く焼かれており、それぞれ横と縦の帯状施文。80-22は大きく外反する口縁部破片で、横位帯状の施文。口唇にも施文する。薄手で焼成は良い。80-23は縦横に帯状の施文があり、薄手で硬く焼かれている。

図80-24は、大振りの山形文を縦方向に施文。器壁はやや厚みがあり、胎土には黒雲母を多量に含んでいる。施文は浅い。図81-1~5は同一個体で、やや間隔を開けた縦位の山形押型文が浅く施文させている。胎土には雲母を多量に含んでいる。81-8は大振りの山形文を、口縁部では横方向、胴部では縦方向に施文。黒雲母を多く含む。80-6は大振りの山形文を横方向に施文。胎土には黒雲母を多く含み81-2などに似ており、これらは同一個体の可能性もある。

このような、浅い施文で大振りの山形文については、長野県地域では押型文系土器群最古段階の立

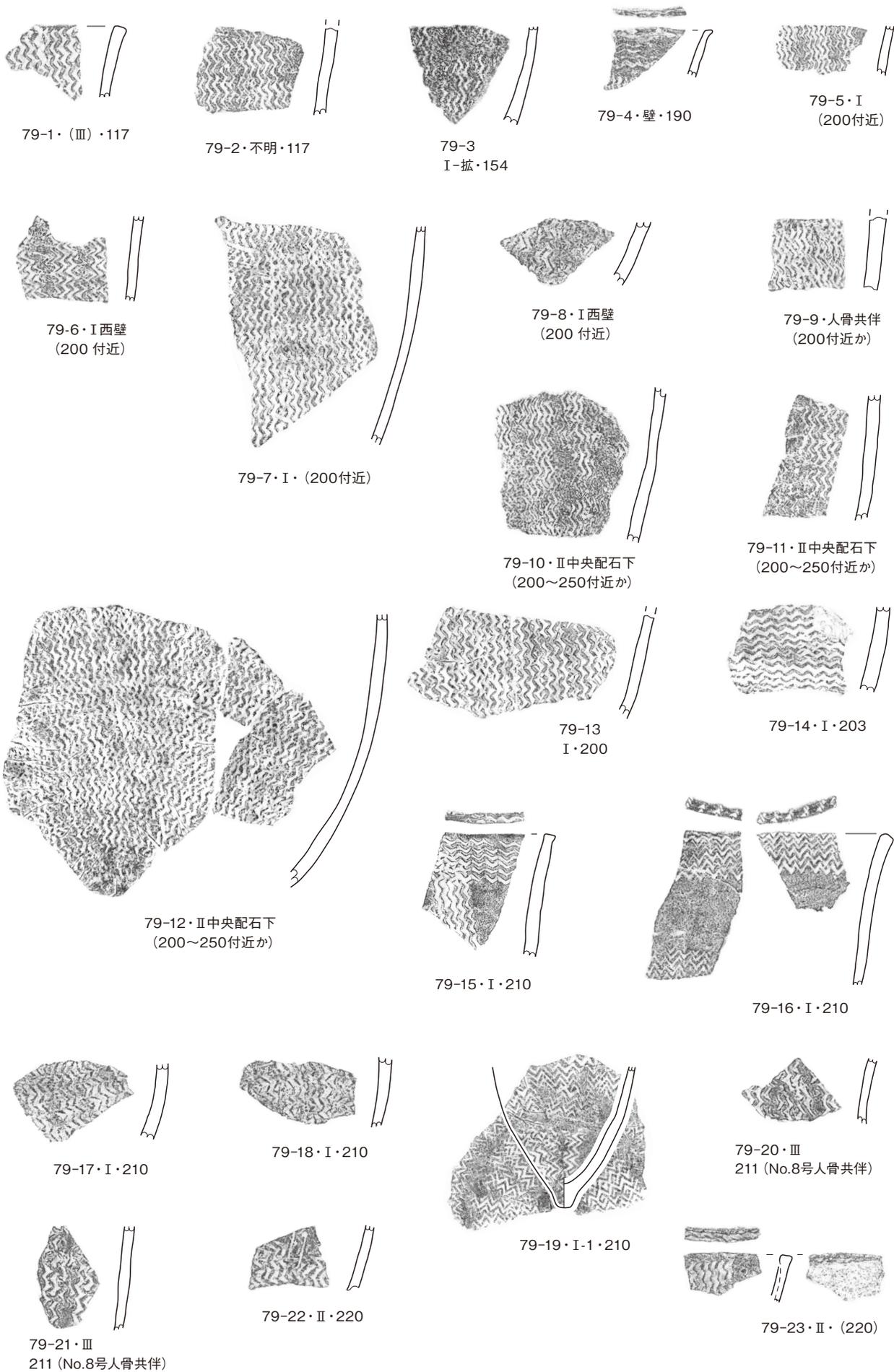
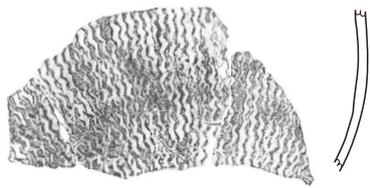
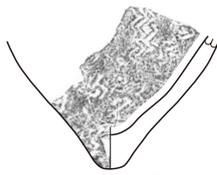


图79 I~IV区 土器5 (S=1/3)



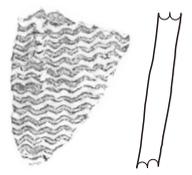
80-1・Ⅱ区・(220 付近)



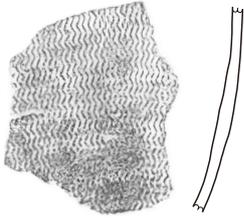
80-2・Ⅱ・225



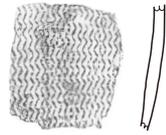
80-3・Ⅲ・226



80-4・Ⅰ・230



80-5・Ⅲ・230



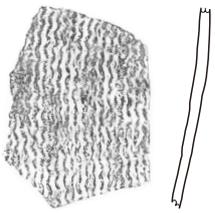
80-6・Ⅱ・(230 前後)



80-7・不明・(230前後)



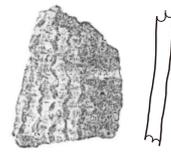
80-8・Ⅱ・230



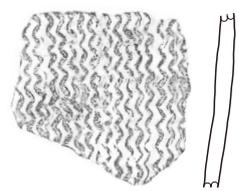
80-9・Ⅱ・234



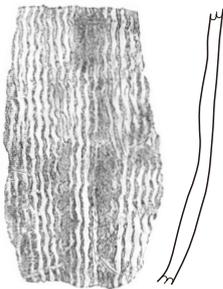
80-10・Ⅱ・234



80-11・Ⅲ・237



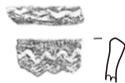
80-12・Ⅱ・238



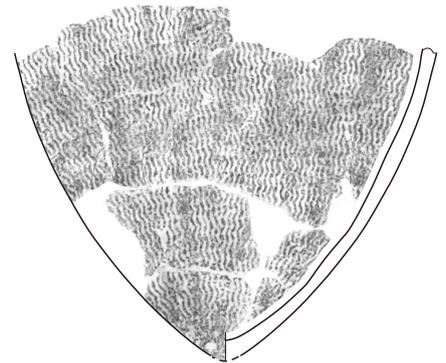
80-13・Ⅰ・250



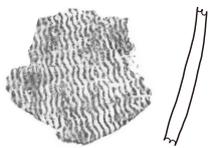
80-14・Ⅲ-4
250-260



80-16・奥の院
260-270



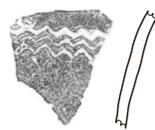
80-15・不明・260-270



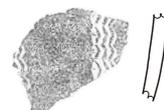
80-17・Ⅲ・260-270



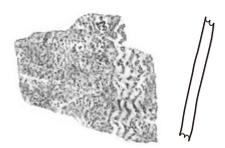
80-18・Ⅱ-2
300-310



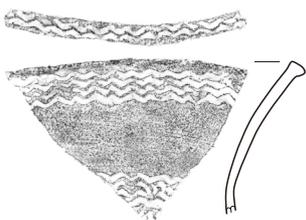
80-19・Ⅲ-1
280-290



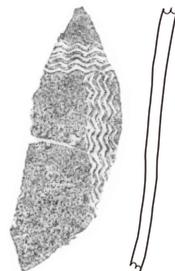
80-20・Ⅲ-1
280-290



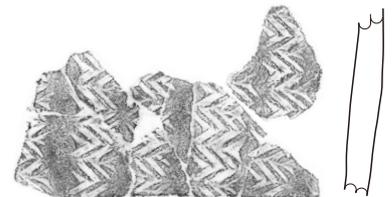
80-21・Ⅱ-1・285



80-22・Ⅲ-2・290-30

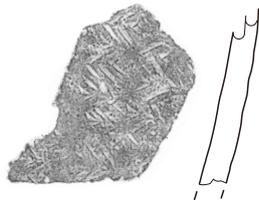


80-23・Ⅱ-2・(300付近)

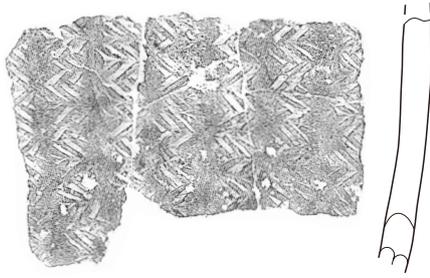


80-24・Ⅲ-3・310-320

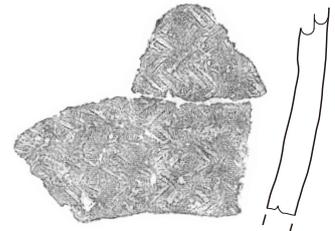
図80 I~Ⅳ区 土器6 (S=1/3)



81-1・Ⅲ-3・310-320



81-2・Ⅲ-3・310-320



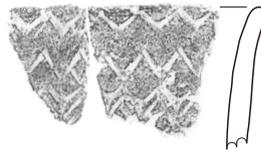
81-3・Ⅱ-3・370



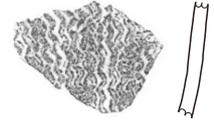
81-4・Ⅲ-1・(573)



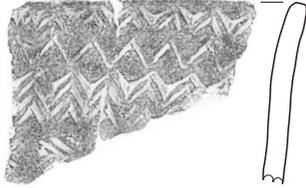
81-5・不明・不明



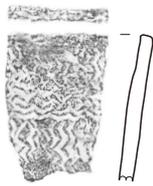
81-6・Ⅲ-1・355



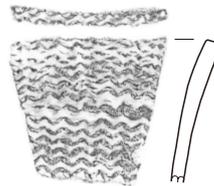
81-7・Ⅱ-3・360-370



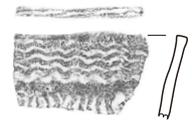
81-8・Ⅲ-2・390



81-9
不明・不明



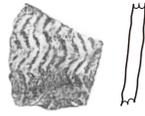
81-10・不明・不明



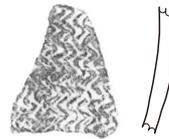
81-11・不明・不明



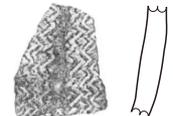
81-12・不明・崩れ



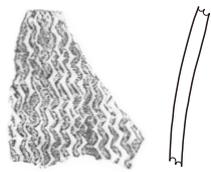
81-13・Ⅲ
トレンチ1



81-14・不明・不明



81-15・Ⅰ・不明



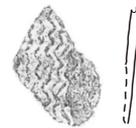
81-16・Ⅲ-1・不明



81-17
不明・不明



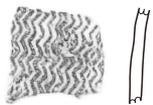
81-18
不明・不明



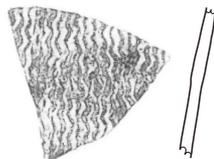
81-19
不明・不明



81-20
Ⅰ・不明



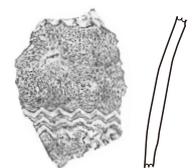
81-21・Ⅱ・不明



81-22・不明・不明

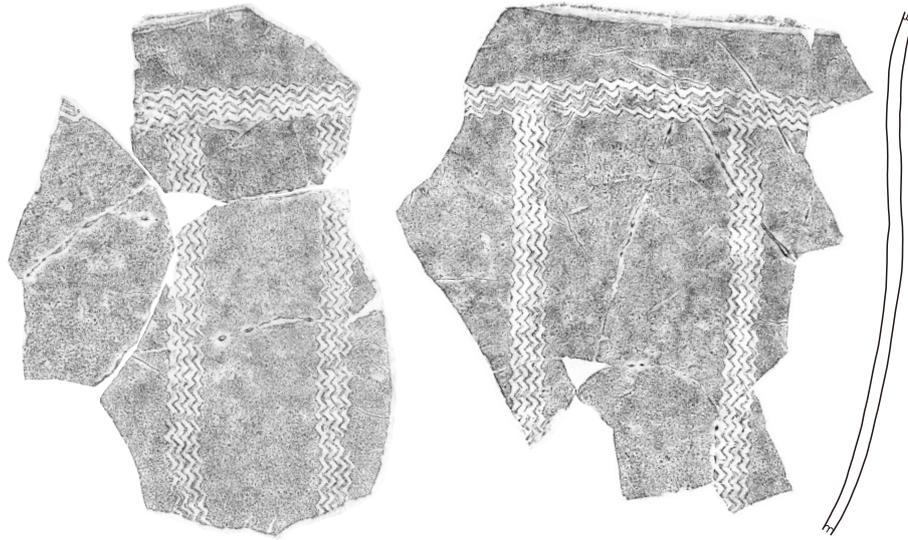


81-23・不明・不明

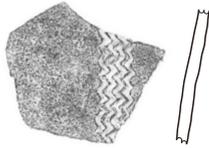


81-24・不明・不明

图81 I~IV区 土器7(S=1/3)



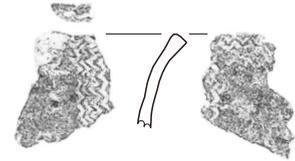
82-1・I・250



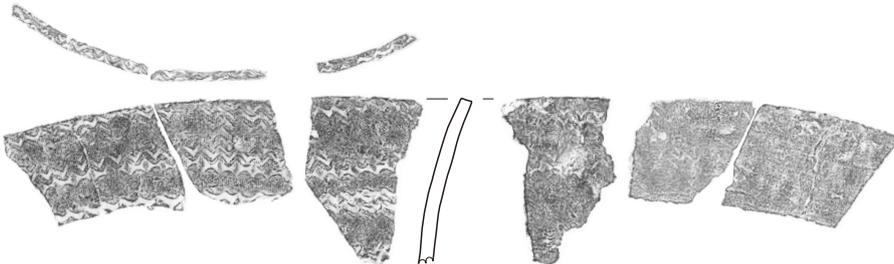
82-2・不明・不明



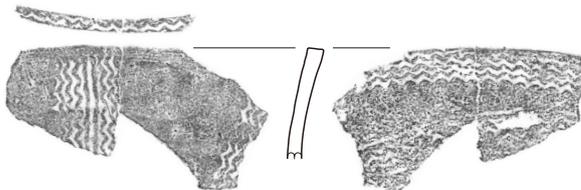
82-3・トレンチ内・10



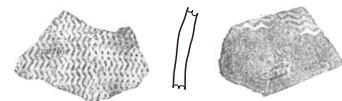
82-4・Ⅲ
211 (No.8号人骨共伴)



82-5・Ⅱ・234



82-6・I・244



82-7・Ⅲ-1・280-290

図82 I~Ⅳ区 土器8 (S=1/3)

野式に伴うともされるが、本遺跡でも、立野式の主要な文表となる格子目押型文と重なりを持つやや深いレベルからも出土している。

以下は、出土レベル不明の山形文系土器の資料。81-9は直線的に開く口縁で、口縁直下は縦、その下位に横位施文さらに縦位施文がある。81-10は外反する口縁部破片で、硬く焼かれ、胎土に黒雲母を多量に含む。横位密接の施文で、口唇部にも施文がある。81-12はやや粗雑な施文で、破片下部に、横方向の沈線文が残る。81-13はやや大振りの山形文。81-23は横位密接の例。81-24は薄手で

硬く焼け、帯状の施文となる。

また山形文施文土器の中には、帯状の施文で、黒鉛を含む胎土等から、岐阜県に多い沢式と思われる資料もある。図82-1は帯状山形押型文を異方向に施文し、上部には沈線文がある。82-2も同一個体と思われる。いずれも灰色の色調で、器厚は薄い、非常に硬く焼かれている。やや胴の張る器形と思われる。

山形押型文では、わずかではあるが、内外面に施文した資料もある。82-3は外面が横と縦の帯状施文、内面は口唇直下のみ横位に施文。口唇部も施文されている。82-4はやや強く外反し、外面は、縦帯状、内面は横と縦の帯状の施文となっている。口唇部にも施文がある。82-5は接合していない破片も含まれるが、硬く焼かれた口縁部資料で、内外面とも横位帯状の施文である。最上段の帯に無文部があるのは、山形文施文後意図的に磨り消したか、施文時に原体が器面に接触しなかったのか、判断は難しい。口唇部も施文。82-6は、やや外反する口縁部破片で、硬く焼かれている。外面は縦帯状、内面は横帯状に施文している。口唇部にも施文がある。82-7は外面が縦位密接の山形文で、内面は横位帯状に施文している。

格子目押型文土器

図83は格子目文が施された資料。数は少ないが、焼成が良好で硬質なものが多い。出土レベル的は、典型的なものは-350~-380cm付近となる。

図83-1は、大きく外反する口縁から胴部の破片資料で、やや乱れた格子目文を異方向の帯状に施文している。口唇部にも施文がある。胎土には黒鉛を含む。薄手で硬く焼かれている。83-2は同一個体。出土レベルは-280~-290cmとやや浅い。

図83-3、4、5は同一個体と思われる。やや外反する口縁部で、縦位密接格子目文の施文はやや間隔を開けた帯状となる。80-5は胴下半部と思われ、格子目押型文を上半は縦位、下半は横位に施文している。

図83-6は横位密接格子目文を有する底部。山形文の80-2と似た形状となる。83-7は接合資料で、やや粗い格子目文を縦位密接に施文した胴下半部と思われる。83-8もやや粗い格子目文の底部付近の破片と思われる。83-9は縦位密接格子目文の底部付近破片。

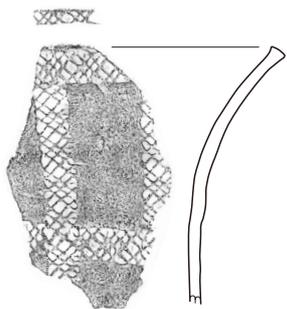
沈線山形文土器

図83-10と11は同一個体で、沈線による山形文様が口縁下を巡り、胴部以下は無文。83-11の沈線上に見られる穴は貫通していない。本遺跡では他に類例の見られないもので、出土レベルは「下部」の上層、-390cm付近となるが、時間的位置付けは難しい。

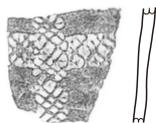
無文土器

一口に無文と表現するが、実際に文様を持たない土器と、本来は有文の土器の破片であるものが存在しよう。また内面もしくは内外面に擦痕や浅い条痕とも思われる調整がある資料は、本来的には沈線文条痕文系土器群に含まれるものがあるとも思われ、その線引きは難しい。よって、様々な時期に含まれる資料を一括して記載している。但し出土レベル的には、一部「上部」のものも含まれるが、多くは「中部」で、「下部」にも見られる。

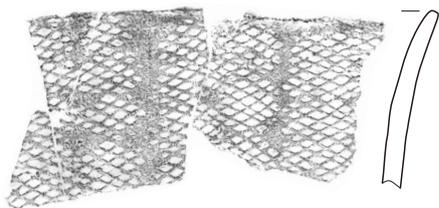
図84-1は外面に縦横の線状痕が見える。3は外面に縦方向のナデ成形。84-5は縦方向に磨かれている。84-6は台帳等から-200cm前後の出土と思われ、ほぼ垂直に立ち上がる器形で、調整の擦



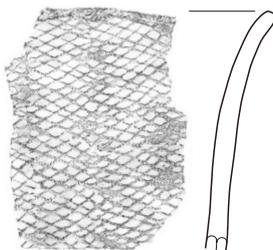
83-1 · (Ⅲ-2) · 280-290



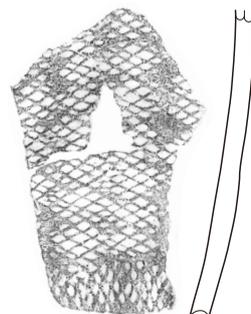
83-2 · Ⅲ-2
280-290



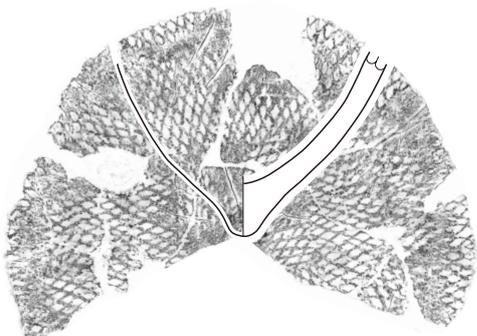
83-3 · Ⅱ-2 · 380-390



83-4 · 不明 · 不明



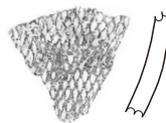
83-5 · Ⅲ · 370



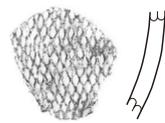
83-6 · Ⅲ-2 · 380-410



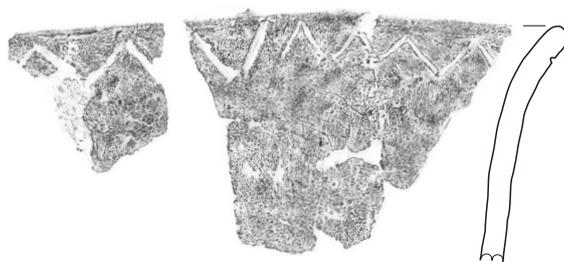
83-7 · Ⅲ-4 · 370-380



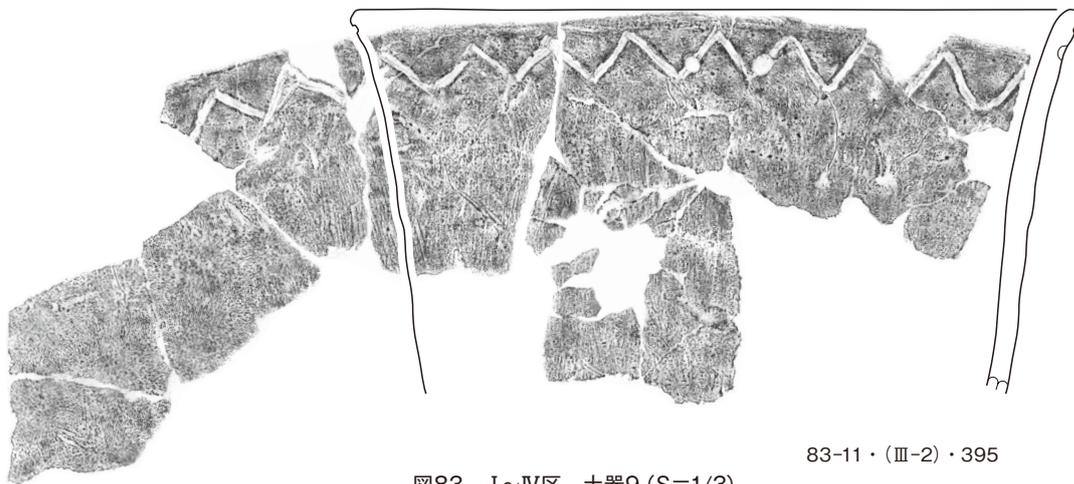
83-8 · Ⅱ-3
440-450



83-9
不明 · 不明

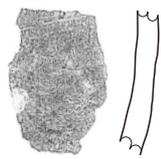


83-10 · Ⅱ-3 · 390-400



83-11 · (Ⅲ-2) · 395

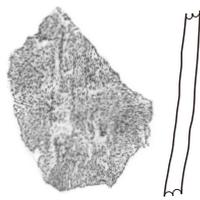
图83 I~IV区 土器9 (S=1/3)



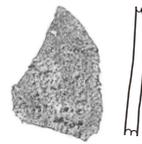
84-1・不明・35



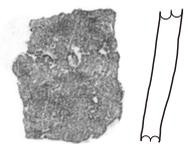
84-2・不明・47



84-3・I・104



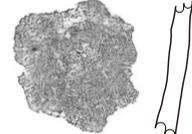
84-4・不明・(115)



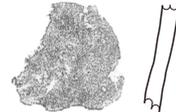
84-5・Ⅲ・177



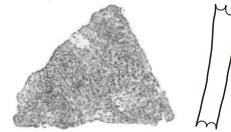
84-6・不明・(200付近)



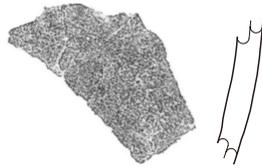
84-7・I・(200付近)



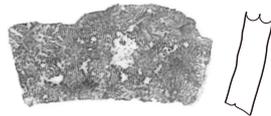
84-8・I・(200付近)



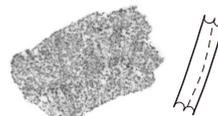
84-9・I・235



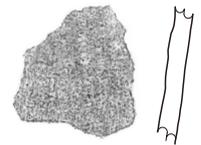
84-10・I・235



84-11・Ⅲ-3・310-320



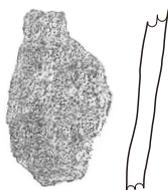
84-12・I・250



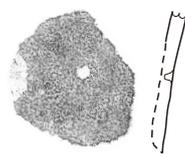
84-13・I・250



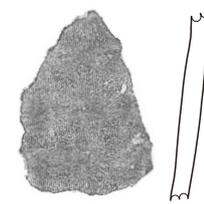
84-14・奥の院
260-270



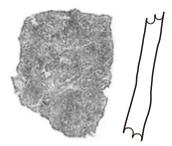
84-15・Ⅱ-2・265



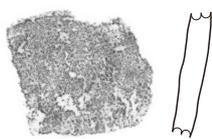
84-16・Ⅱ-2
270-280



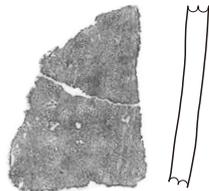
84-17・I・274-284



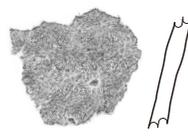
84-18・Ⅲ-2
280-290



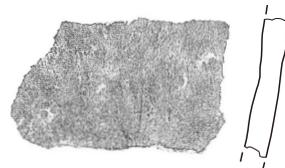
84-19・Ⅱ
300-310



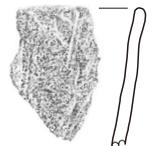
84-20・Ⅲ-1
310-320



84-21・I
310-320



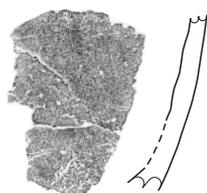
84-22・Ⅲ-3・310-320



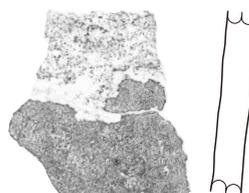
84-23・Ⅱ
320-330



84-24・?-2・(320-330)



84-25・Ⅲ-1・320-330



84-26・Ⅱ-1・330-340



84-27・?-2・340-350

図84 I~IV区 土器10 (S=1/3)

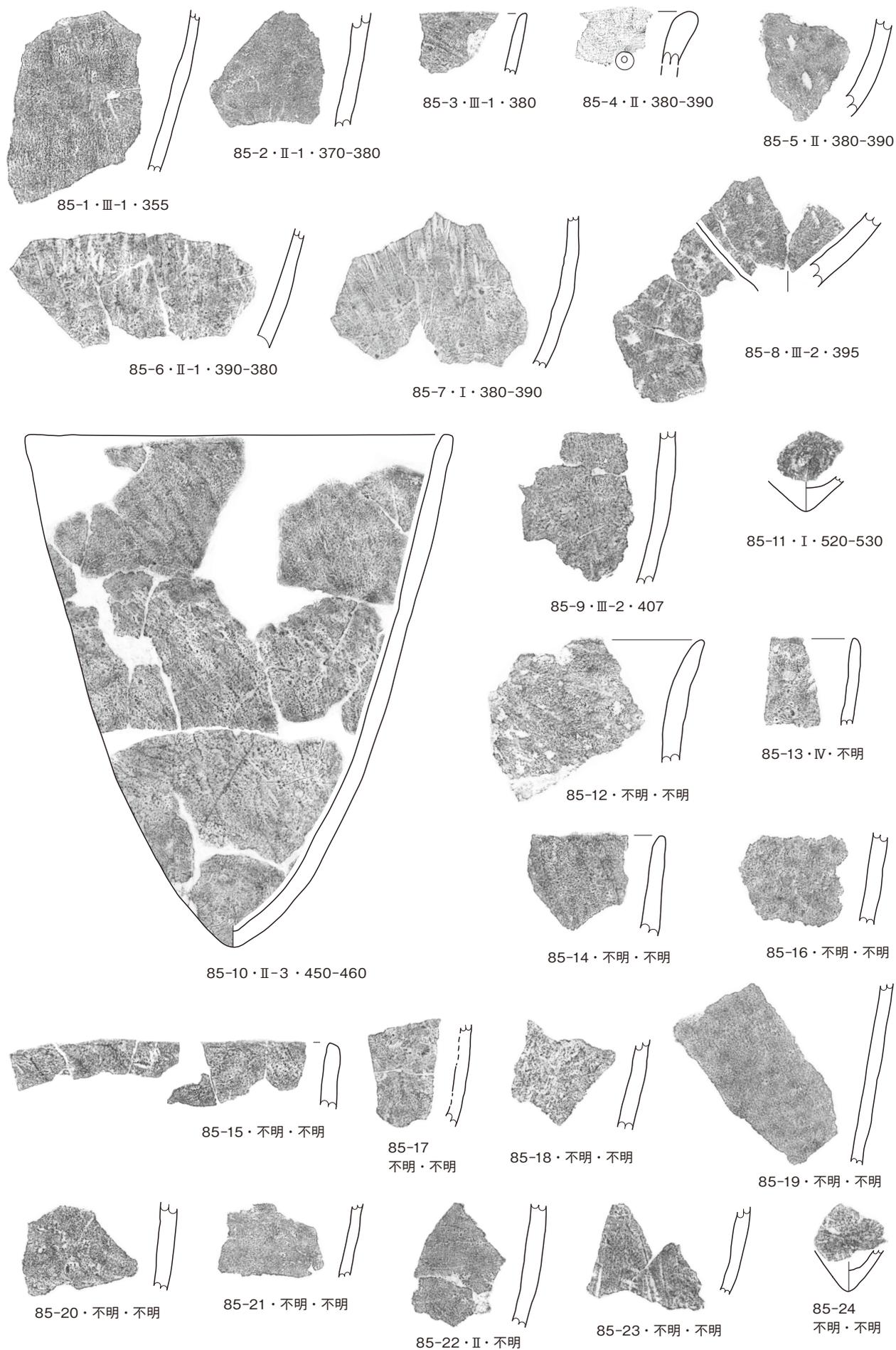


图85 I~IV区 土器11(S=1/3)

痕と浅い指頭圧痕が残る。84-10と11は同一個体と思われ、黒雲母を多く含む。

図84-14は薄手で、口縁部で粘土を下方に押し潰す珍しい例。15は縦方向の擦痕がある。17は縦方向に磨かれ、横から斜行する擦痕が残る。23は口縁部を含み、薄手で縦の擦痕が見て取れる。24は穿孔がある資料。25は底部付近の破片であろう。

図85-1はやや大型の破片で、縦方向の擦痕が残る。胎土には黒雲母が多く含まれる。85-3は斜方向の擦痕がみられる口縁部破片。85-4も口縁部資料で、やや厚みがあり、穿孔されている。

図85-6と7は、それぞれ-380~-390cm出土の接合資料で同一個体。胴下半部から底部付近の資料と思われ、やや強い縦の擦痕が残る。85-8は底部破片で、外面は磨かれている。85-9はやや大型の破片で、縦方向の線状痕が見える。

図85-10は、残存率2/3の器形が把握出来る無文土器で、斜めのナデ（ケズリ）整形が見て取れる。口径は約23.8cmで、器高は28.7cmのV字状の器形。-450~-460cmからの出土である。85-11は底部で、尖底となる。

以下は出土レベル不明の資料。85-12は厚手で外反する口縁部。85-14は直線上に開く口縁部。85-15は口縁部破片で、ほぼ垂直に立ち上がる資料。85-23は縦の線状痕が見て取れる。85-24は出土地点等不明であるが、急角度の器形の底部資料である。

網目捺糸文土器

網目状に施文される捺糸文も出土している。この中には縄を交差するように巻いた原体で格子目状に施文されたものと、波状の効果を出しているもの2種類が認められる。

図86-1~6は同一個体で、細いR捺糸文で波状になる原体を縦位回転施文。黒雲母が含まれ、浅い指頭圧痕による凹凸がある。比較的浅い深度の-117~-155cmで出土している。

図86-7と8は同一個体で、8は底部付近であろう。黒雲母を多量に含んでいる。

図86-9の口縁部破片と、86-10~21の胴部破片はいずれも同一個体と思われ、格子目状になるR捺糸文を縦方向に施文している。これも黒雲母が多量に含まれている。出土レベルは、判明する限りでは-350cm前後である。

図86-22は波状となる捺糸文施文で、硬く焼けている。86-24は、外面は格子目状もしくは異方向に回転させたR捺、内面にはR捺糸を横方向に施文。25は原体の判別が難しいが、格子目状の捺糸文と思われ、内面の口縁部にも施文がある。

図86-26は出土地点不明だが、口縁から底部まで残された比較的小型の個体。底部は狭いが分厚く平らになっている。やや波状となるR捺糸文の縦位回転施文が加えられている。

表捺糸文土器

図87~89は外面に捺糸文が施文されたもの。本来はいくつかの分類群が含まれると思われるが、便宜的に一括し、出土レベル順に掲載した。但し、関東地方の所謂捺糸文系土器群に含まれると思われるものは分けて紹介する。出土レベル的には一部「上部」「中部」にも見られるが、「下部」に多い傾向となる

図87-1はやや太めのLR捺糸文を斜位回転施文した破片。87-6は、R捺糸もしくは無節の縄文が原体と思われ、胴下半部で、指頭圧痕による凹凸がやや目立つ。7はL捺糸を縦方向に帯状施文。87-8~13は同一個体で、L捺糸文を口唇下部は横方向、胴部は縦方向に帯状施文。やや薄い器厚で、口縁はほぼ直立する。

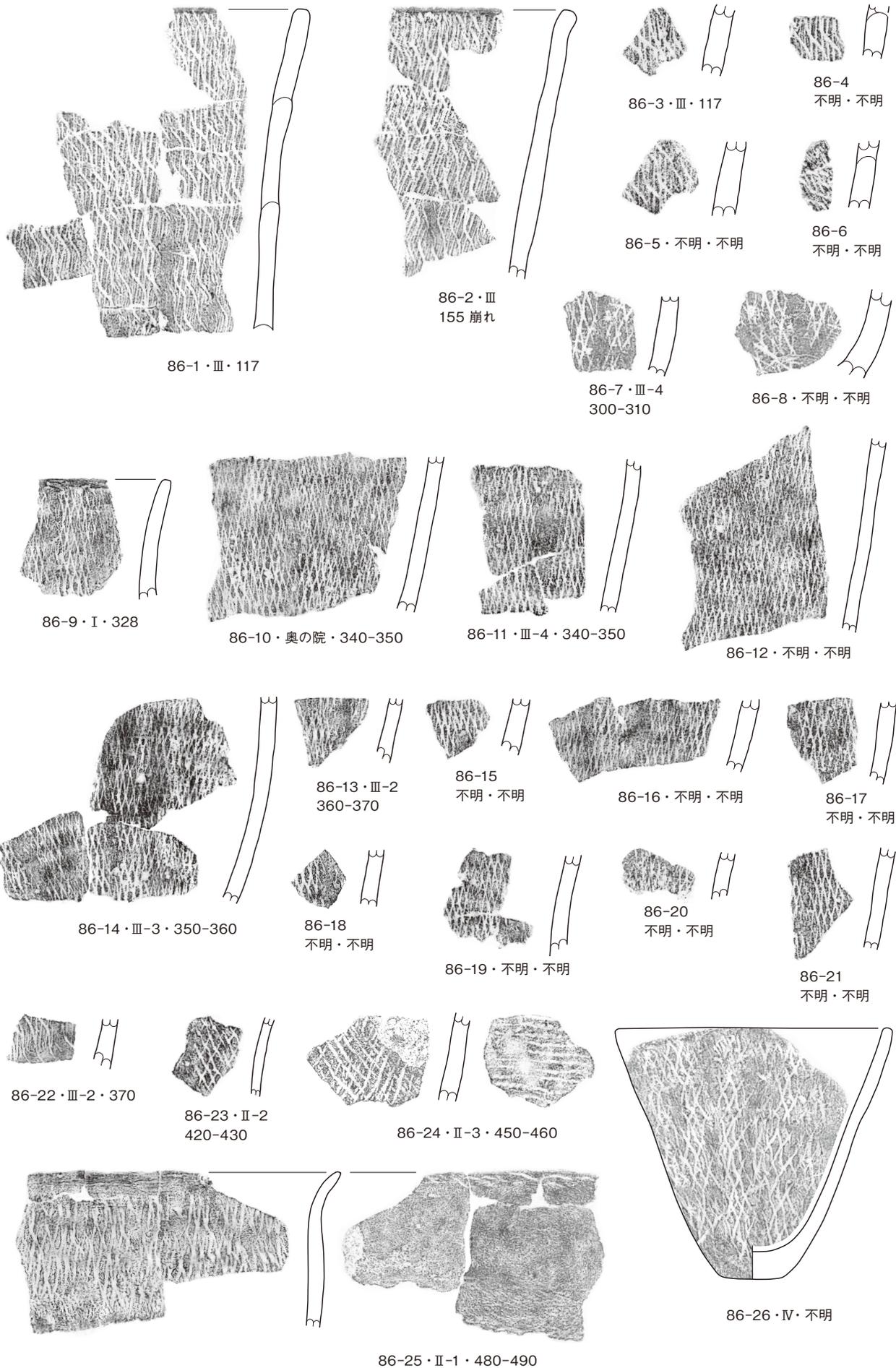


図86 I~IV区 土器12 (S=1/3)

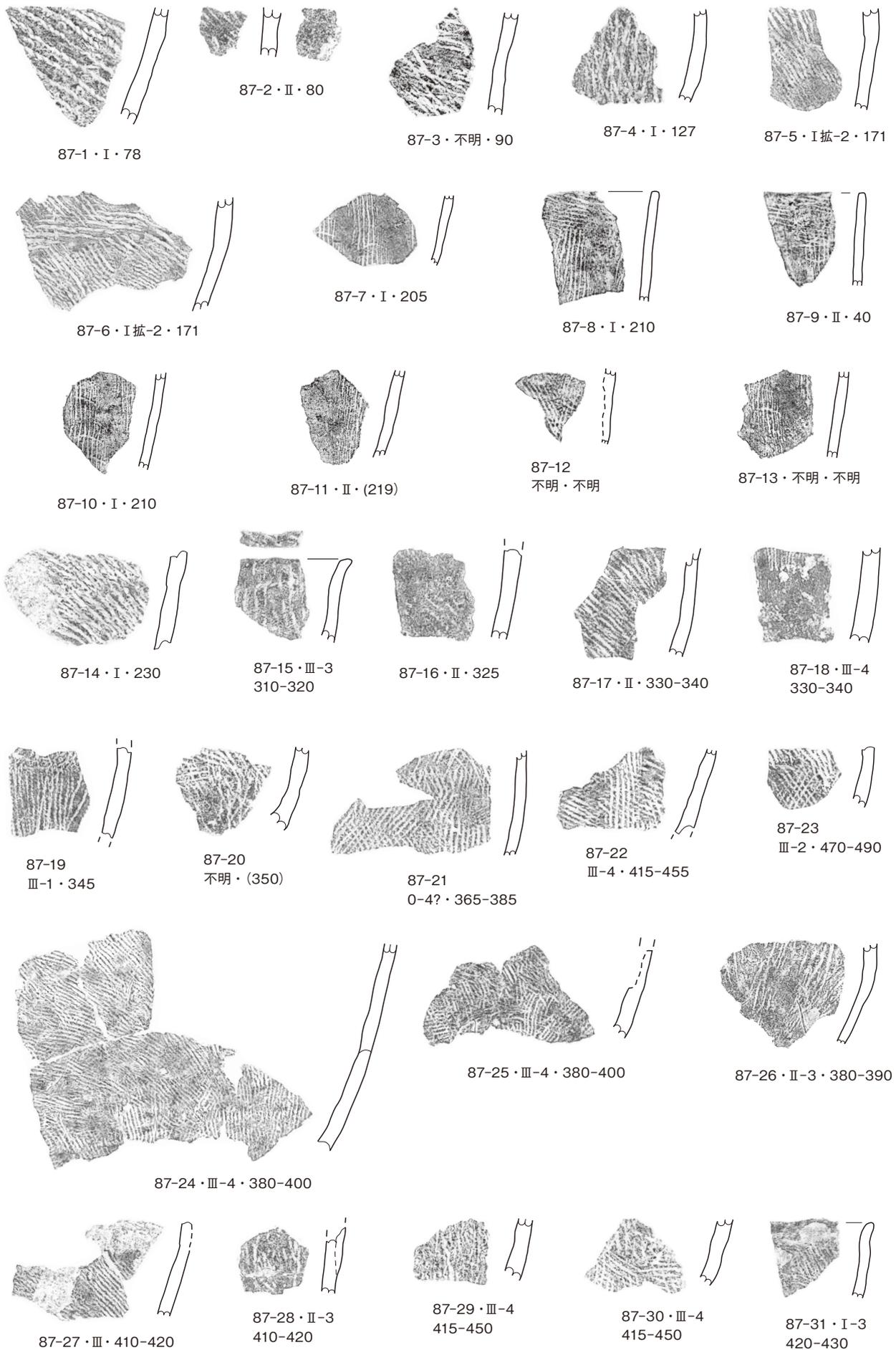


图87 I~IV区 土器13 (S=1/3)

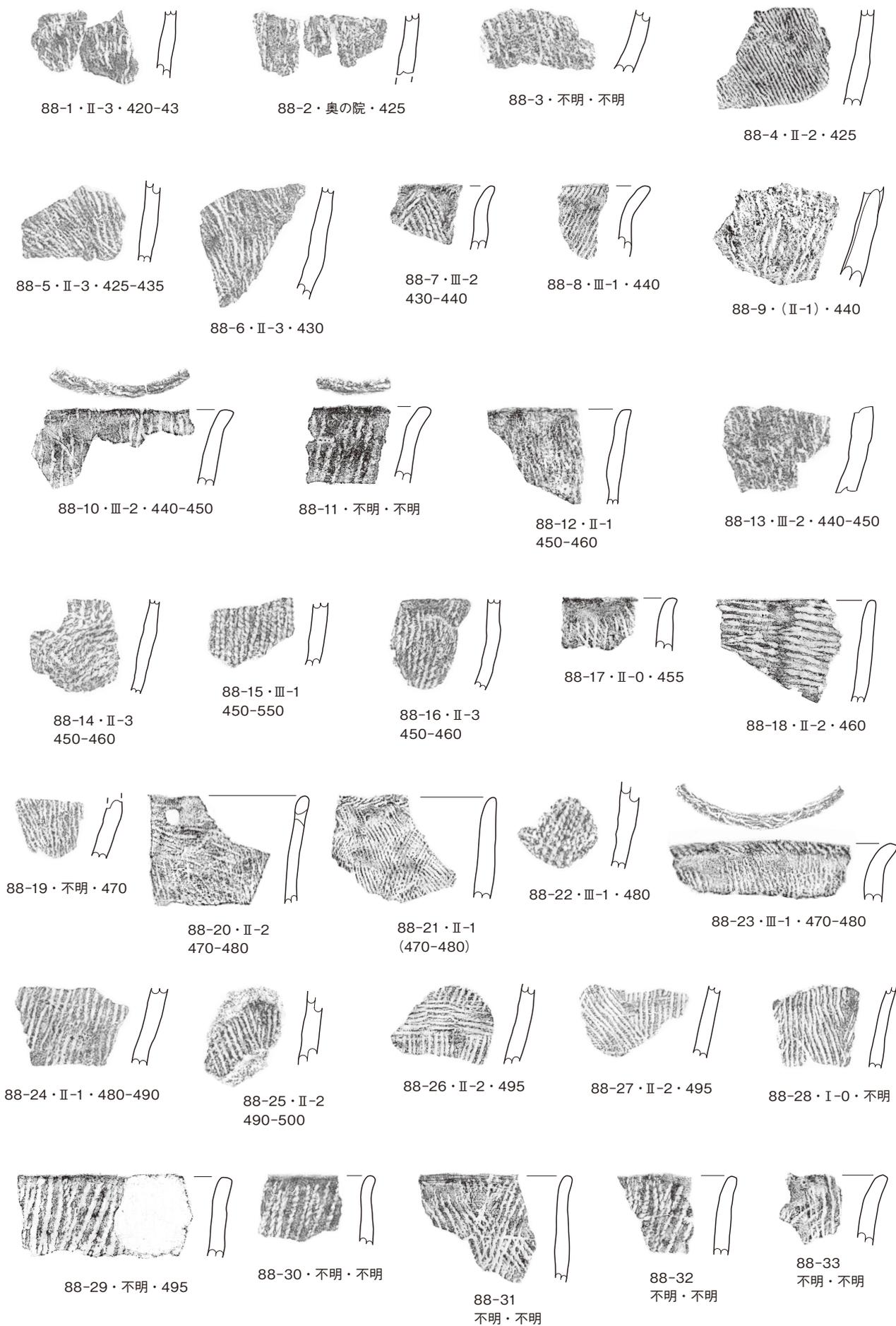


图88 I~IV区 土器14 (S=1/3)

図87-15は原体が不明瞭だが、ゆるく外反する口縁部で口唇への施文もある。指頭圧痕による凹凸もやや目立つ。87-16はやや撚りの粗いR撚糸を斜めに施文した例。87-20は底部付近と思われ、L撚糸文を多方向に回転施文している。

これ以下は「下部」からの出土となる。図87-21はR撚糸を多方向に施文した胴部破片。87-22、23は同一個体の胴下半から底部付近の破片であろう。87-24は胴下半部の大型の胴部から胴下半部の破片で、R撚糸を縦から斜方向に回転施文。黒雲母を少量含み、指頭圧痕による凹凸がある。87-25は同一個体。

図87-28は接合資料で、一度撚糸文を施文後、器面外面に粘土を被せ、さらにその上に施文している様子がわかる。本遺跡ではこのような技法が「下部」出土の土器に目立ち、輪積単位施文と仮称しておく。87-31は若干外反する口縁部資料で、撚りの方向が不明な撚糸を斜めに回転施文している。

図88-1～3は同一個体で、やや粗雑な施文である。浅い指頭圧痕が残る。88-4は密に巻かれたR撚糸が斜めに回転施文されている。88-5は指頭圧痕による凹凸が顕著。88-6は同一個体。

図88-7はわずかに外反する口縁部資料で、R撚糸を斜めの2方向に回転施文。88-8はやや強く外反する口縁部。88-10と11は同一個体で、やや外反する器形で、L撚糸文を縦に施文。推定される口縁径はおよそ12cmと小ぶりの土器である。88-12は特に内面に指頭圧痕が見える。

図88-17は若干外反する口縁で、R撚糸を異方向に回転施文。88-18はほぼ直立する口縁で、0段撚糸文を横方向に回転施文。本遺跡ではあまり例がない。88-20はR撚糸文を異方向に回転施文し、口縁が直立する。孔は補修孔だろうか。88-21はL撚糸を多方向に施文。口縁は直立する。

図88-23は弱く屈曲するR撚糸文施文の接合資料で、やや厚みを持つが、口縁径は約10cmと推定でき、小型の土器と予想される。88-26はR撚糸を縦横それぞれの方向で交互に施文している珍しい例。88-27と28は同一個体で、R撚糸文を斜め、もしくは縦方向に施文。88-29～32は同一個体と思われる。無節L撚糸を斜め多方向に回転施文。一部交錯している。

以下は出土レベル不明の表面撚糸文施文の資料。

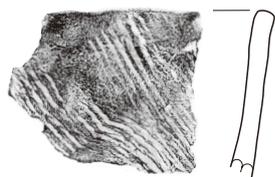
図89-1はR撚糸施文を斜めに施文。口縁はほぼ垂直に立ち上がる。89-2はわずかに外反する口縁。89-3もやや外反し、L撚糸が斜めに施文される。89-4は外反する口縁で、穿孔がある。胎土には黒雲母が多量に含まれている。

図89-5は底部付近と思われ、L撚糸が斜めに交差。89-7はR撚糸を斜め二方向で施文。89-8はL撚糸が横に施文された胴下半部の資料。89-10はやや薄手で、他の個体にあるような指頭圧痕による凹凸が見られない。施文もごく浅い。89-13は、R撚糸文を縦横交互の帯状に施文している。89-14～24は同一個体。89-26はやや大型の胴部破片。L撚糸を縦方向に回転施文。胎土には黒雲母を多量に含んでいる。

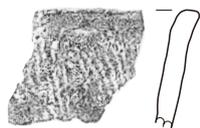
関東の撚糸文系土器

図89-27～30は関東地方に分布する所謂撚糸文系土器群に類するものである。出土地点不明の89-30を除くと、いずれも-450cm以下と「下部」でも下層部から出土している。

図89-27と28は同一個体で、硬く焼け赤みを帯びた色調で、R撚糸文を縦方向に施文した、関東地方の稲荷台式に類する資料と思われる。89-29は、口縁下に一条の横位沈線文が巡る他は無文であるが、関東地方の撚糸文系土器終末のものと似る。30は出土地点不明であるが、締りの良い胎土で硬く焼けており、関東地方の撚糸文系土器に似る。



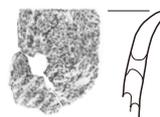
89-1 · 不明 · 不明



89-2 · 不明 · 不明



89-3 · 不明 · 不明



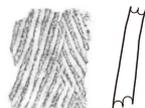
89-4 · 不明 · 不明



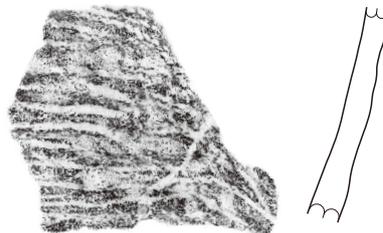
89-5 · Ⅲ · 崩丸



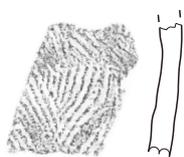
89-6 · 不明 · 不明



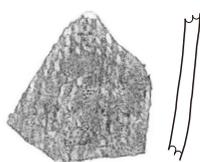
89-7 · 不明 · 不明



89-8 · I-2 · 不明



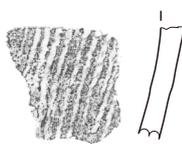
89-9 · 不明 · 不明



89-10 · 不明 · 不明



89-11 · Ⅱ · 不明



89-12 · 不明 · 不明



89-13 · Ⅱ-2 · 不明



89-14
不明 · 不明



89-15
不明 · 不明



89-16
不明 · 不明



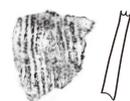
89-17
不明 · 不明



89-18
不明 · 不明



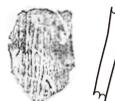
89-19
不明 · 不明



89-20
不明 · 不明



89-21
不明 · 不明



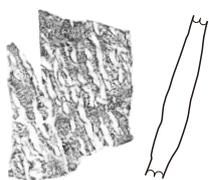
89-22
不明 · 不明



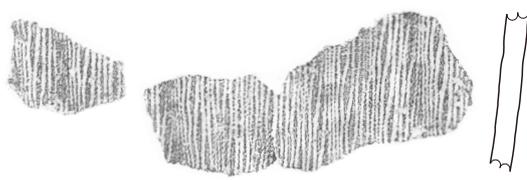
89-23
不明 · 不明



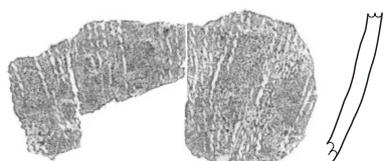
89-24
不明 · 不明



89-25 · 不明 · 不明



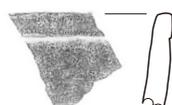
89-26 · 不明 · 不明



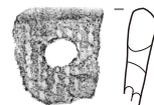
89-27 · Ⅱ-1 · 470-480



89-28
Ⅱ-2 · 465



89-29
Ⅲ-2 · 520-530



89-30
不明 · 不明

图89 I~IV区 土器15 (S=1/3)

表裏撚糸文土器

図90～92は、内外面に撚糸文施文のあるもの。出土レベルは「下部」、特に-450～-500cm付近に多い。

図90-1と2は同一個体で、胴はほぼ直立し口縁は外反する。原体はR撚糸文で、外面は口唇部下で斜め、胴部は縦、内面は横方向に回転施文している。胎土には黒雲母を多く含む。90-4はやや厚手で外反する口縁部破片で、R撚糸を外面は斜め、内面は横方向に施文。口唇部にも施文がある。90-5は屈曲した口縁で、やはり内面は横方向に回転施文している。

図90-6は胴下半部と思われるが、内面も施文されている例。輪積単位施文も分かる。90-9はやや外反する口縁部で、外面はR撚糸をやや斜めの縦方向に、内面は90-4や5と同様横方向に回転施文。90-10はやや大型の破片で、胴下半部の内面まで撚糸文施文のある例。胎土には黒雲母が多く含まれる。

図90-11は接合していないが、同一個体の破片。口縁はやや屈曲し、胴部もやや張る。内面には口縁にのみ、R撚糸が横方に施文されている。口唇部にも施文がある。内面付着炭化物の放射性炭素年代測定を行い、11105-10745 cal BP (95.4%) とされた(第5章(3)・No.1)。また第4章(10)-4で示すようにダイズ属の種子圧痕が検出されている。90-12は同一個体である。

図90-13はやや外に開く口縁部であるが、やはり内面は横方向に回転施文している。

図91-1は口縁から胴下半部が残る個体。胴の張る器形で、指頭圧痕による凹凸で器面の厚さが一定しない。内外面とも大振りのR撚糸文施文で、外面は縦から斜位回転、内面は口縁部のみに横から斜位回転、口唇部は斜位回転となる。91-2も同一個体。

図91-3は、外面に交差する撚糸文を施す。内面は横施文。黒雲母が多い。91-4は口縁が外反し、外面は縦、内面は横方向にR撚糸文を施文。5も内面は横方向に回転施文。

図91-6と7は同一個体で、表裏にR撚糸の施文がある。胎土には黒雲母が多く含まれる。また91-6については、内面付着炭化物の放射性炭素年代測定を行い11056-11040 cal BP (1.1%)、10991-10983 cal BP (0.6%)、10786-10578 cal BP (93.7%) とされた(第5章(3)・No.4)。尚、本資料については、過去に出土レベル等不明としたが(藤森2012)、今回再確認し、-450cm出土と断定できた。また91-7では、第4章(10)-4で示すようにダイズ属?の種子圧痕が検出されている。

図91-8は胴部破片で、R撚糸を外面は多方向、内面は横方向に回転施文している。91-9は同一個体と思われる。91-12は-480～-490cmと深い位置での出土で、外面は縦から斜め、内面は横方向の回転施文となっている。91-13はやや屈曲する口縁で、R撚糸を外面はやや傾いた縦、内面は横方向に施文。91-14はR撚糸を外面で多方向に交錯するように施文している。

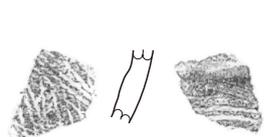
図91-15は口縁がゆるく屈曲する。外面はR撚糸を縦もしくは斜方向に、内面は横方向に回転施文している。胎土には黒雲母が多く含まれる。91-16はわずかに外反する口縁で、内面は横方向に加え斜方向に回転施文している。図92-3は口縁が外反し、内外面と口唇部にR撚糸文を施文。胎土には多量の黒曜石が含まれている

以下は出土レベル不明の資料。92-4は緩く外反する口縁で、外面は斜、内面は斜から横方向に回転施文。やや厚手。5もこれに近い構成。92-6は口縁が屈曲し、外面は多方向、内面は横方向に回転施文。7は胴部で、R撚糸の内外面施文例。92-9は指頭圧痕による凹凸が顕著で、内外面とも撚糸文施文と思われるが、施文が浅いためか不明瞭である。

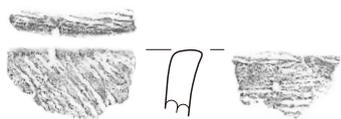


90-1 · Ⅲ-4 · 340-350

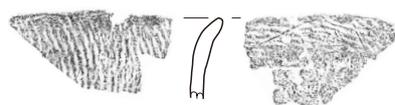
90-2 · 不明 · 不明



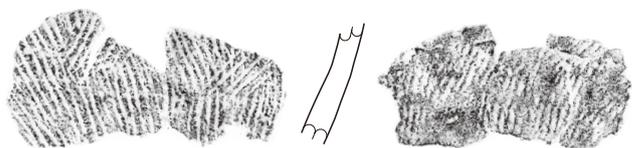
90-3 · Ⅱ-3 · 380-390



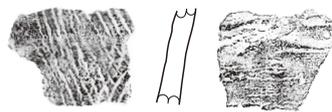
90-4 · Ⅱ-3 · 410-430



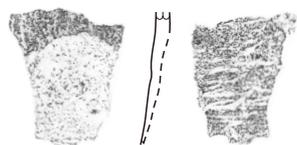
90-5 · Ⅲ-4 · 415-450



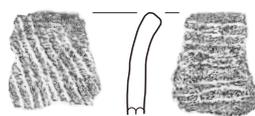
90-6 · Ⅱ-3 · 430



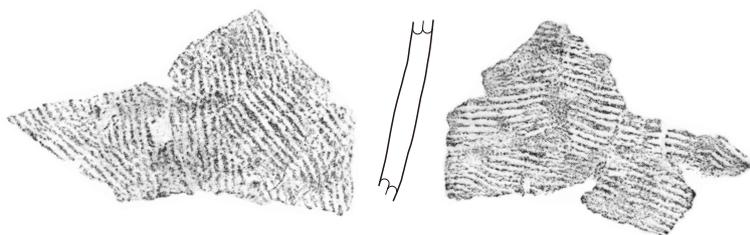
90-7 · Ⅱ-3 · 430



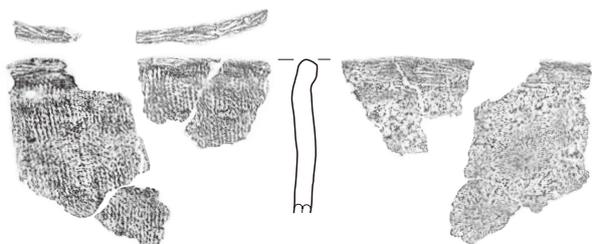
90-8 · Ⅱ-3 · 430-440



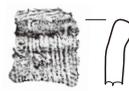
90-9 · Ⅱ-1 · 430-450



90-10 · Ⅱ-2 · 455



90-11 · Ⅱ-1 · 440

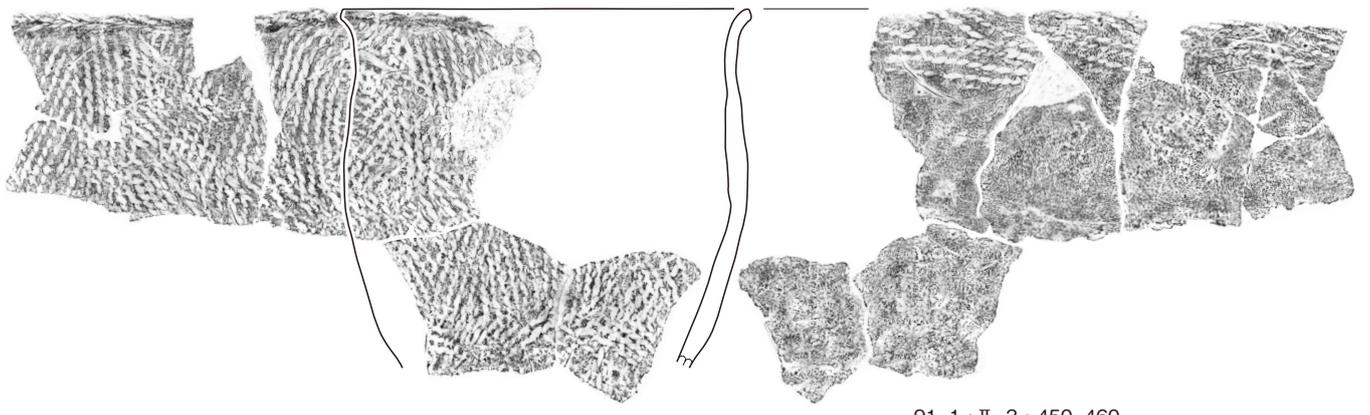


90-12
不明 · 425

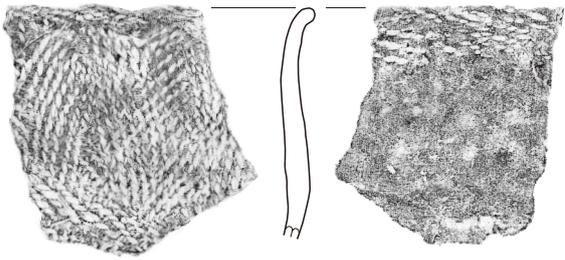


90-13
Ⅲ-3 · 440-450

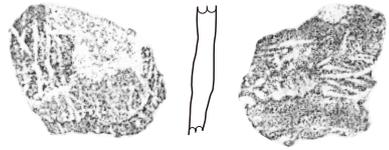
图90 I~IV区 土器16 (S=1/3)



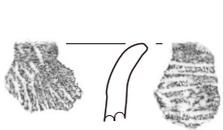
91-1 · II-3 · 450-460



91-2 · II-3 · 460



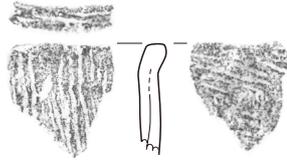
91-3 · II-3 · 440-450



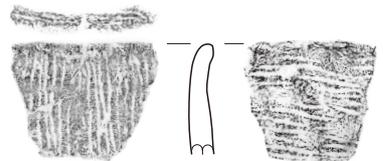
91-4 · III-1 · 450



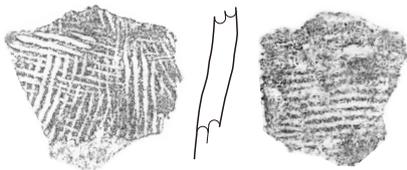
91-5 · II-2 · 450-460



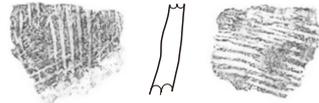
91-6 · II-0 · 450



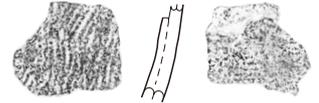
91-7 · 不明 · 不明



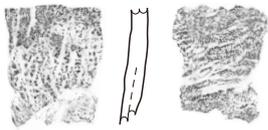
91-8 · III-1 · 450-460



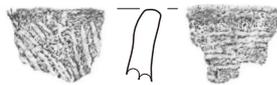
91-9 · III-1 · 450-490



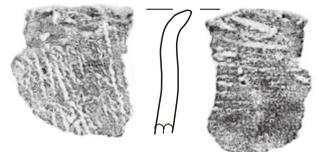
91-10 · III-3 · 460-47



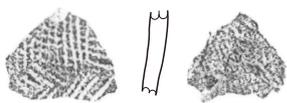
91-11 · II-1 · 460-470



91-12 · III-0 · 480-490



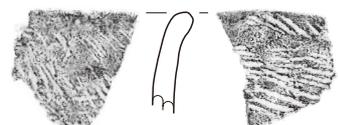
91-13 · III-1 · 480



91-14 · III-2 · 490-500

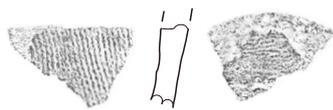


91-15 · III-1 · 495

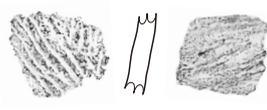


91-16 · II-1 · 495

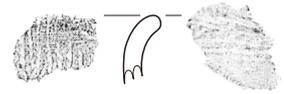
图91 I~IV区 土器17(S=1/3)



92-1・I-0・500-530



92-2・II-2・510



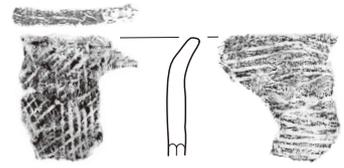
92-3・III-1・530-540



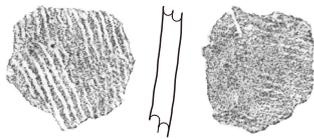
92-4・不明・不明



92-5・不明・不明



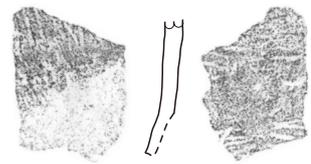
92-6・不明・不明



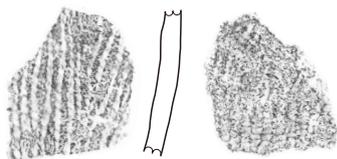
92-7・不明・不明



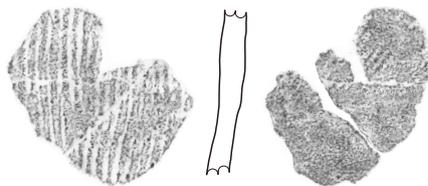
92-8・不明・不明



92-9・不明・不明



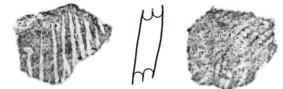
92-10・III-1・440



92-11・I-1・490-500



92-12・III-1・500-510



92-13・III-2・520-530

図92 I~IV区 土器18 (S=1/3)

表撚糸文裏縄文土器

極少数であるが、外面が撚糸文、内面が縄文施文という資料が出土している。いずれも「下部」からの出土である。

図92-10は外面がR撚糸、内面がLR縄文施文。黒雲母を多量に含んでいる。92-11は外面がR撚糸、内面は特定不能だが縄文施文。やはり黒雲母を多量に含んでいる。92-12は外面はR撚糸文、内面には口縁のみにR縄文を施文。92-13は胴部で、外面はR撚糸文、内面はRL縄文を縦方向に施文している。

表縄文土器

図93-96は、外面に縄文が施文されたもの。但し、資料によっては、表裏縄文土器の破片も含まれていると思われる。また出土レベルは「上部」「中部」「下部」のいずれにも及び、異なる時期のものを含んでいると思われる。但し数そのものは「下部」に多く、結果的に早期前葉のものを多く掲載している。

図93-1と2は、「上部」出土のうち明確に前期以降と判断できない例。93-1はRL縄文を横方

向に帯状施文しているが、第1次調査のごく浅いレベルで出土したとされる。93-2も-80cmと浅い部分から出土しており、RL0段多条の原体を縦方向に施文している。

「中部」でも出土数は多くはない。93-4はLR縄文を縦に帯状施文。93-5は大きく外反する口縁部で、口唇部にもLR縄文が施文されている。93-6はLR縄文を横方向に帯状に施文したと思われる。93-7は尖底の底部破片で、RL縄文を異方向に回転施文し羽状の文様としている。93-8、9は5号人骨左隅出土とされるが、共伴関係にあったのかは不明である。

図93-10~13は、-240cm付近出土の同一個体と思われ、口縁ほぼ直線的に外側に開く。RL縄文を縦位帯状に施文しており、一部には擦り消しが見られる。93-14も縦位帯状だが、原体を異にする。

図93-15は先端が突起状になる底部。93-16は、奥の院、-276cm出土と思われ、指頭圧痕による凹凸が顕著で、口縁部も安定しない。施文はRL縄文を縦横それぞれの向きに回転させ、羽状縄文的な構成としている。

図93-18以下は、主に「下部」からの出土となる。93-18~21は同一個体と思われ、やや厚手で、LRとRL縄文をそれぞれ縦に回転させ、羽状縄文の構成となる。黒雲母を多く含む。

図93-22は器形がほぼ残され、高さ36.7cmとやや大型の個体。ナデ整形であるが、胴上半部と底部付近にRL縄文縦の施文が残存してみられる。主に-380cm前後からの出土である。胎土には黒雲母を含んでいる。

図93-24、25は底部付近の破片で、丸みを持つ底部と思われる。94-2は、先端がやや突出している底部で、94-3は先端が丸い例。

図94-5は底部を除く残りの良い個体で、口縁がやや外反し、RL縄文を縦方向に施文。94-7は口縁部を含む資料で、やや大きくカーブしながら外反する。94-8、9は底部で、先端が丸い例となる。

図94-11は、LR縄文施文の胴部破片であるが、圧痕レプリカ法により、アズキ垂属の種子が確認されている(第4章(10)-4参照)。94-12は先端がやや突起状になる底部。94-13は無節R縄文を多方向に回転施文し、内面は剥落しているが、指頭圧痕による凹凸が目立つ。

図94-14は外反する口縁部で、LR縄文を斜めから横方向に回転施文。黒雲母を多く含む。94-15は口縁が外反し、やや胴部が張る器形かと思われる。94-16は擬口縁を持つ底部付近の破片と判断した。94-17は緩く外反する口縁で、LR縄文が地文であるが、口縁下に原体の側面押圧がみられる。

図94-18はLR縄文の施文された口縁部破片で、わずかに内反する本遺跡では少数の例。また内面附着炭化物の放射性炭素年代測定を行い、8712-8544 cal BC (94.0%) および8504-8492 cal BC (1.4%) とされた(第5章(4)・No.2)。

図94-19は口縁が外反し、やや胴部の張る器形と思われる。94-22はやや特色のある例で、口縁はナデ整形で波状口縁になるかもしれない。さらに下部に一条のLR縄文側面押圧が回り、以下、斜めから縦方向の回転施文となる。94-23は同一個体であろう。94-25は底部であるが、大きく開く形状となっている

図94-27と28は同一個体の口縁部を含む資料で、大きく外反し、指頭圧痕による凹凸が目立つ。

図95-1は押圧縄文だろうか。95-2は-500cmを超える深さから出土しており、丸みを帯びた底部資料。95-3はやや外反し、輪積単位施文の観察できる口縁部破片。95-4はLR縄文施文で、指頭圧痕による凹凸が顕著な例。95-5は口縁が屈曲し、胴部がやや張る器形と思われる。やや薄手。95-6はやや厚手で、口唇部が平面的で施文も見られる。

図95-7はLR縄文の他に、R撚糸を施文している可能性がある。95-9は先端が突起した底部。

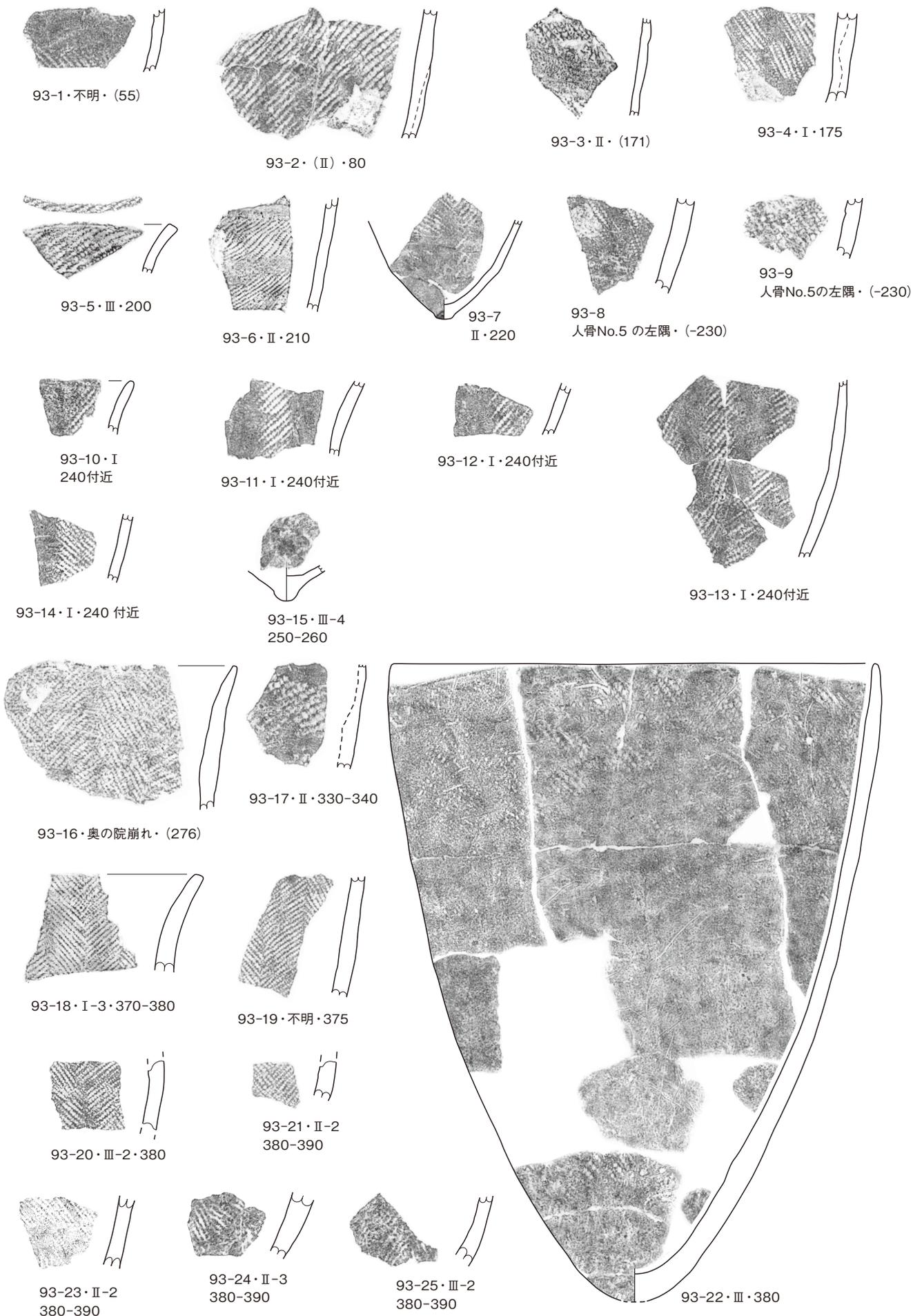


図93 I~IV区 土器19 (S=1/3)

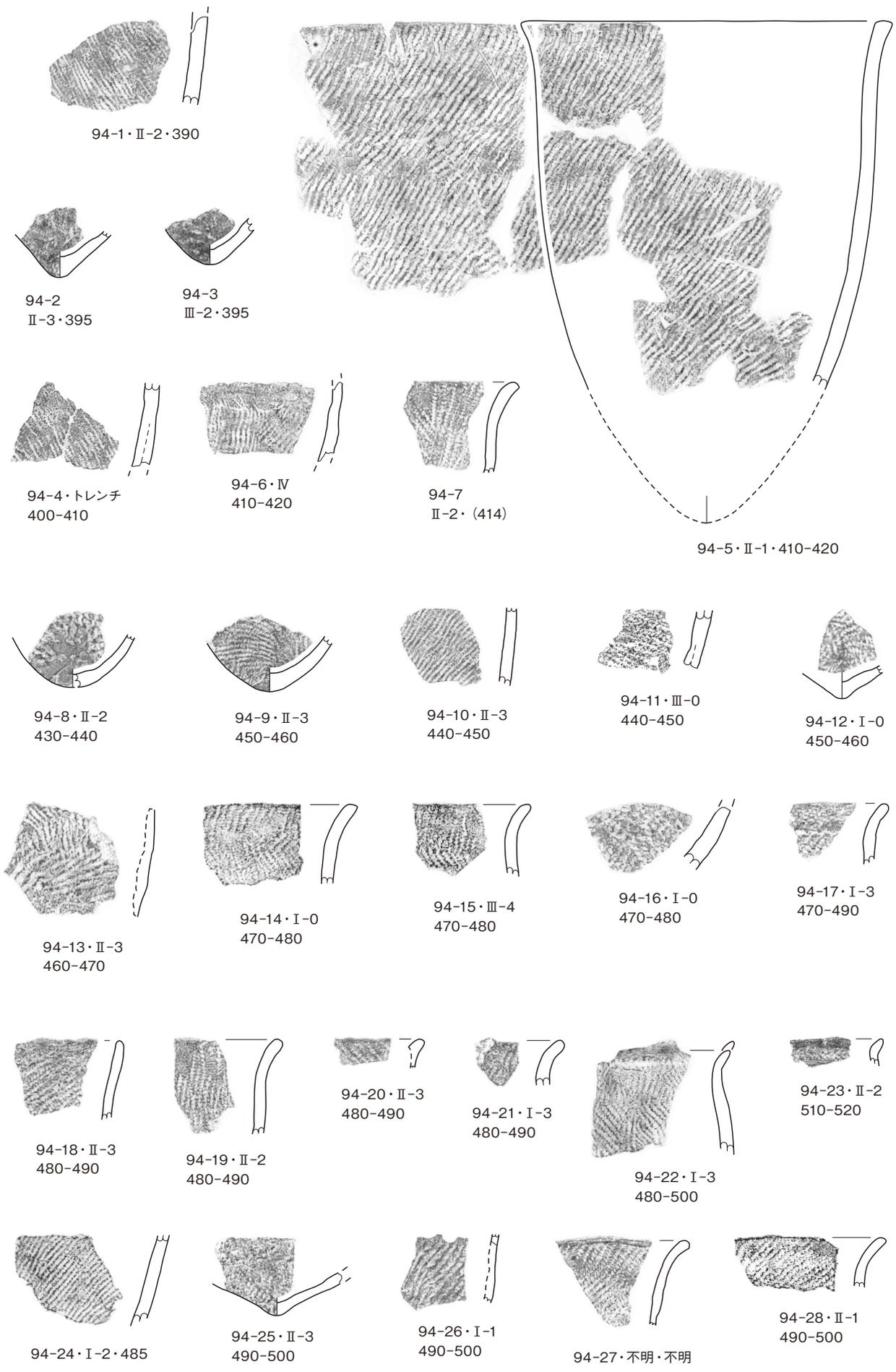


図94 I~IV区 土器20(S=1/3)

形状は93-15と似るが、こちらは-520cmと、深いレベルから出土している。95-10と11は同一個体で、L R縄文の横位回転施文の胴下半部と思われる。指頭圧痕による凹凸が顕著である。胎土には黒雲母が多く含まれる。95-12は黒雲母を多く含む口縁部破片。やや外反する。

図95-13は、L R縄文が地文であるが、口縁下に原体の側面押圧がみられる。95-17は口縁が屈曲し、L R縄文が横から斜め方向に施文されている。95-18は、内面にも縄文があるかもしれないが不明瞭。95-19は胴下半部と思われ、L R縄文を斜めから縦に回転施文している。

図95-20以下は、出土レベルが不明の資料となる。図95-20は胴上部が張る器形で、L R縄文を横位回転施文。口縁部上位に1条のL R縄文側面押圧を施す。これと似た構成となる95-21は、口縁から胴下半部までが残った個体。やや胴の張る器形である。口唇部に突起状貼付文が1ヶ残存する。内面に指頭押圧による成形痕が明瞭で、一对の補修孔がある。原体はR L縄文で、外面と口唇部に横位回転。口縁部上位に1条のR L側面押圧もある。95-22は口縁径約12cmの小ぶりの土器で、口唇はやや波打つ。

図96-1は口縁が緩やかに外反する例。平面になる口唇部にも回転施文がある。96-2と3（同一個体）及び4は、どちらも出土レベル等不明であるが、口縁が外反し胴部が張る器形や、指頭圧痕による凹凸の様子などが共通している。また2・3では1条、4では2条の側面押圧が巡る。口唇にも施文。これらは表裏縄文土器とも共通点が多いものがある（例えば109-20、21など）。

図96-5はゆるく外反する口縁。96-6は無節R縄文を縦方向に施文し、口縁はほぼ垂直に立ち上がっている。96-7はL R縄文縦位回転施文の胴部破片。96-9はL R縄文を縦方向に施文後、磨り消している箇所がある。96-11は指頭圧痕による凹凸が顕著に見られる。96-12はL R縄文を縦位帯状に施文している。96-14は丸みを帯びた底部。

表裏縄文土器

図97~114は、土器の内外面に縄文施文が見られる土器群。その内容はバラエティーに富んでおり、器形や施文箇所、また成形方法からはいくつかの類型化が可能かと思われるが、ここではやはり主に出土レベル順に掲載する。

全体的な傾向としては、原体にL R縄文を使う例が多く、器面には内外面問わず指頭圧痕による凹凸が残るものが多い。また輪積単位施文とここでは表現したが、輪積の度に縄文を施文し、その上にさらに輪積を重ねる様が見て取れる資料があり、上記の指頭圧痕とともに多くの土器で採用していた成形方法と思われる。器形では口縁が外反するものも多く、胴部が張り、中には口縁径を上回る個体も認められる。

出土レベルは、ほぼ-400cm以下、つまり従来の「下部」に限られ、-450cm以下に特に多い。

図97-1~6は、わずかに「中部」から出土した例であるが、内容は「下部」のものと同様。97-1は緩く外反する口縁部で、口唇部がほぼ平となり、L R縄文の施文がある。97-2は大きく外反する器形で、指頭圧痕や輪積単位施文の分かる資料である。内面の施文は口縁周辺のみとなる。3は口縁部を含む資料で、緩く外反し、R L縄文を外面横、内面斜、横方向に施文。97-5は外反する口縁。97-6は2種の原体を使用している可能性がある。

以下、主に「下部」出土の資料である。

図97-7は、外反する口縁で、やや薄手。L R縄文を外面は横、内面は横から斜め方向に施文。97-9は口縁が外反し、胴部の張りの強い器形と思われ、内外面、口唇部にL R横位回転施文。指頭圧痕による凹凸や輪積毎施文の痕跡が残る（出土レベルに注意）。97-10は内面が剥落しているが、そ

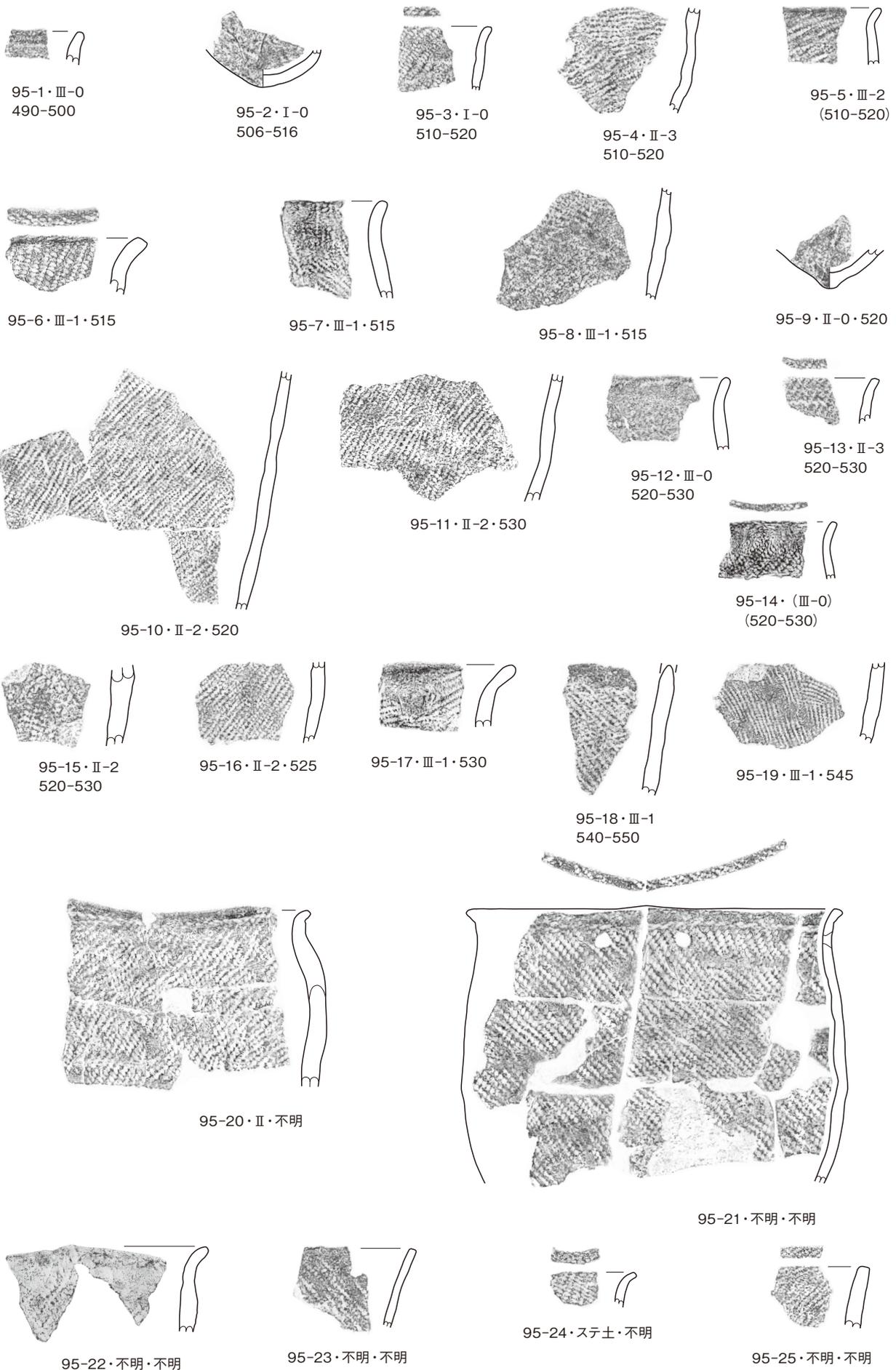


図95 I~IV区 土器21 (S=1/3)

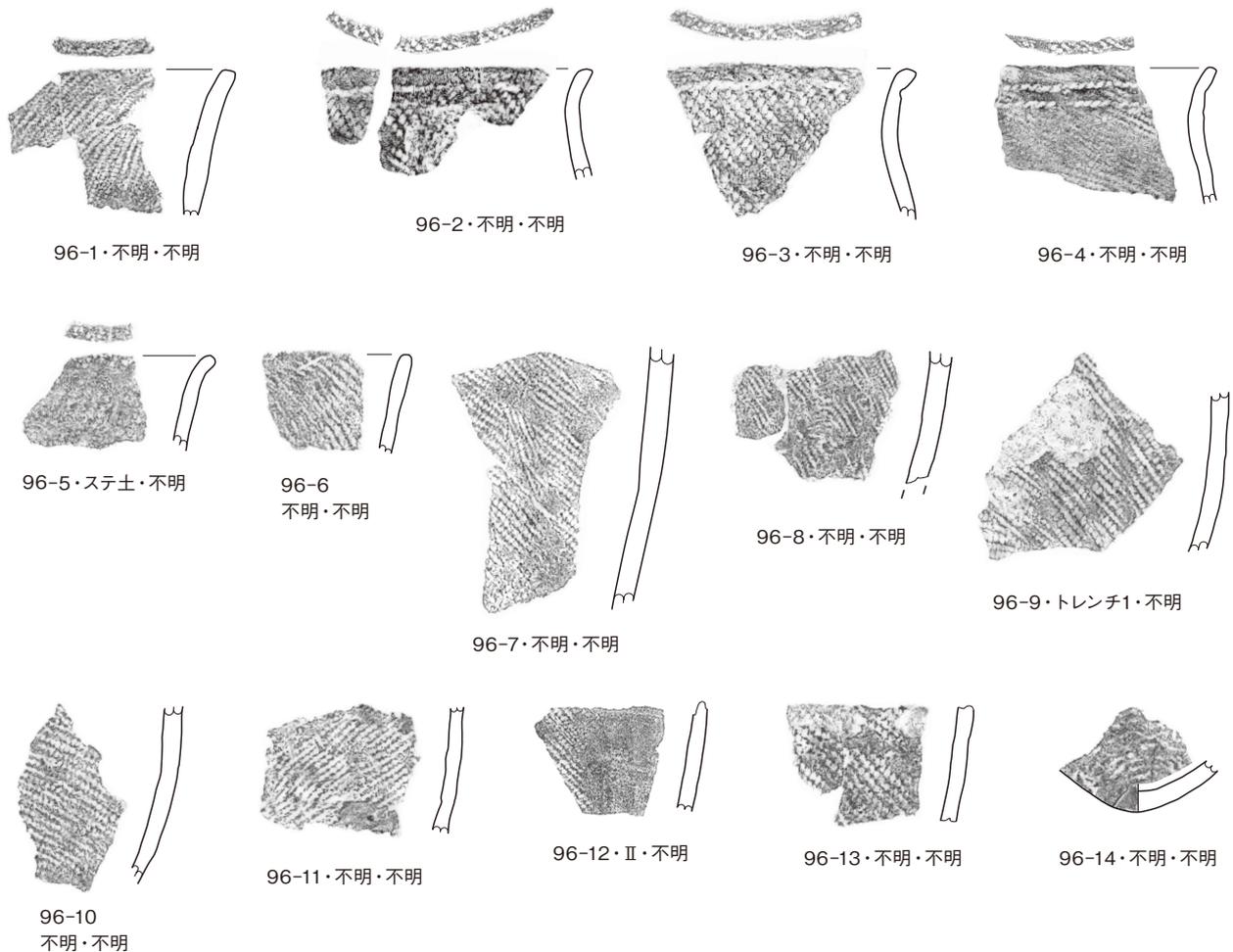


図96 I~IV区 土器22 (S=1/3)

の面に縄文の痕跡があり、輪積単位施文の例と思われる。

図97-11は外反する口縁で指頭圧痕による凹凸が顕著である。外面にはL R縄文の施文と、斜方向の線状痕が残る。97-12は外反する口縁部破片で、2つの穿孔が並んでいる。97-14は胴下半部の大型の破片資料で、内面の下半部まで施文がされている例である。97-15も同様。

図98-4は口縁から胴部のやや大型の破片で、外面はR L縄文を左上がりの斜めに、内面は右上がりの斜め方向に施文。指頭圧痕による凹凸が顕著である。「中部」出土の98-5はこれと同一個体。98-6は無節L縄文を用いており、さらに外面に横方向の擦痕が残る。

図98-7は口縁を含むやや大型の破片で、口縁は外反する。外面はL R縄文を斜めに施文している。98-8は、内外面とも無節R縄文で施文し、指頭圧痕による凹凸が顕著で、口唇も安定していない。98-9も無節R縄文原体だが、外反する口縁。98-10も無節縄文を回転施文。

図98-11は大きく外反する口縁で、口唇部はやや平坦で縄文の施文がある。98-14は薄手で大きく屈曲する。98-15は屈曲し、口唇部も施文される。98-19は、内面に縄文原体と思われる押圧が、R Lの回転縄文の上に見られる。またアズキ亜属の圧痕が検出されている(第4章(10)-4)。98-20はやや大型の胴部破片で、図上部の内面には擬口縁の部分に縄文施文の痕が残り、輪積単位施文が見て取れる(口絵25)。98-22は外面がR L縄文の斜め方向に回転施文される。98-23は底部を含む破片で、丸底となる。内面もほぼ全面に施文がある。

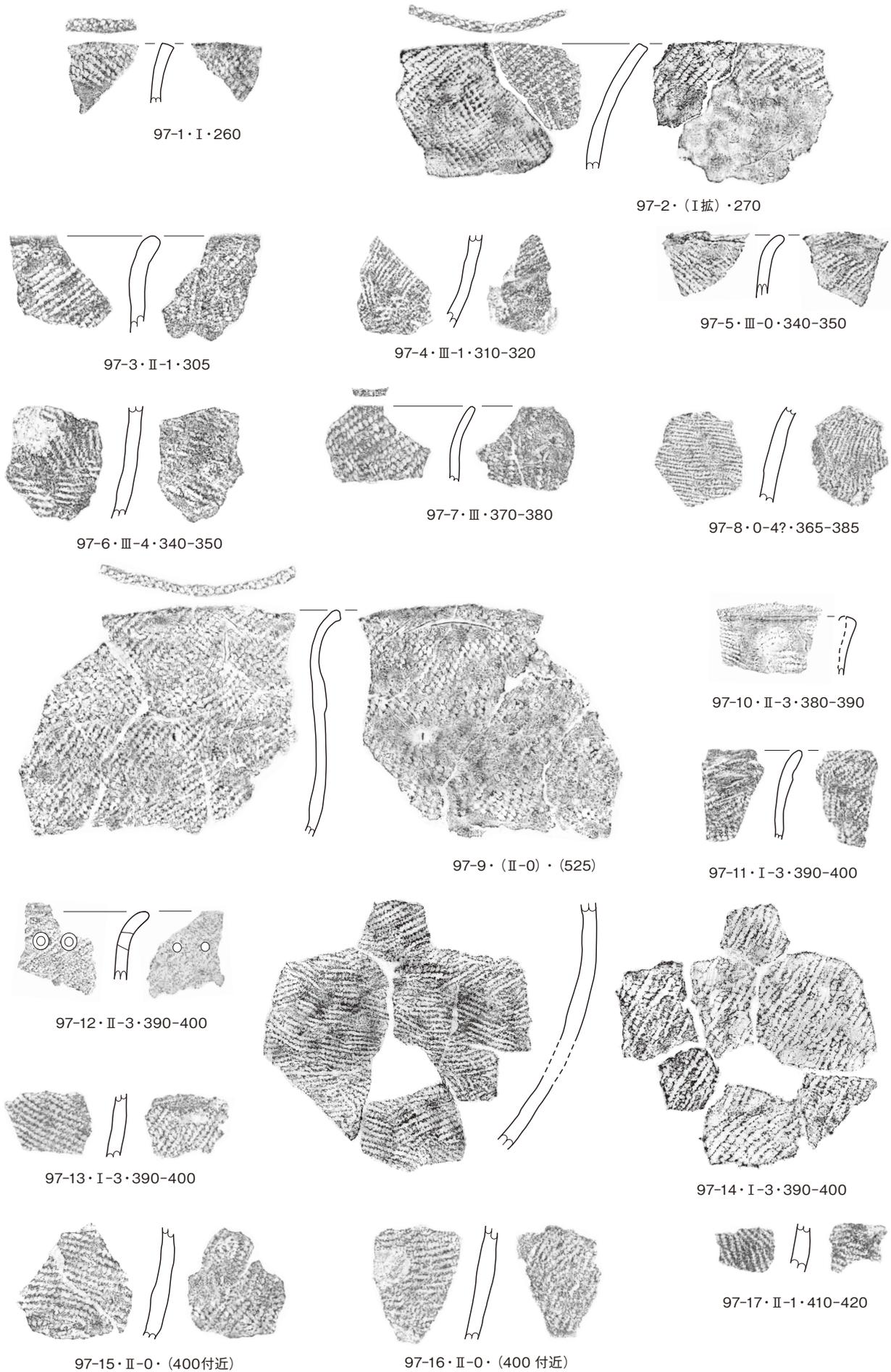
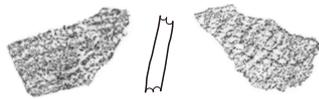


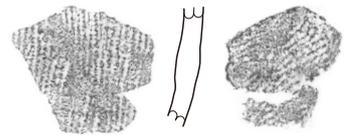
图97 I~IV区 土器23 (S=1/3)



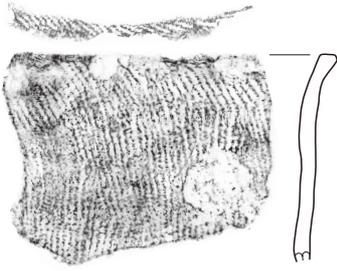
98-1·II-3·410-430



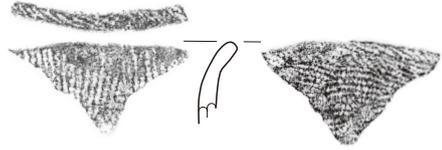
98-2·III-2·410-430



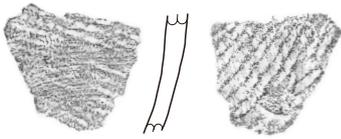
98-3·II-2·410-435



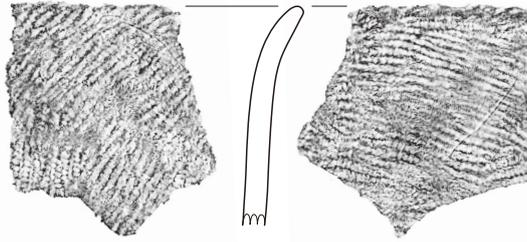
98-4·II-3·410-435



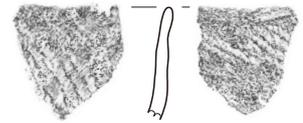
98-5·III-3·330-340



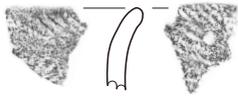
98-6·III-3·420



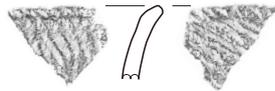
98-7·II-3·420



98-8·II-3·420-430



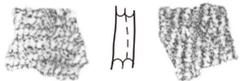
98-9·I-3·420-440



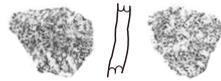
98-10·I-3·420-440



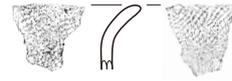
98-11·II-1·430



98-12·II-3·430



98-13·II-3·430



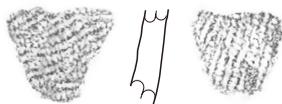
98-14·II-2·430-440



98-15·II-2·430-440



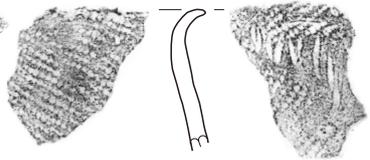
98-16·II-2·430-440



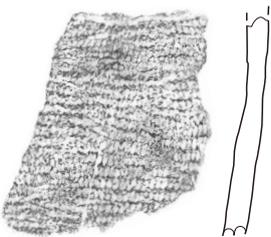
98-17·II-3·430-440



98-18·III-3·430-440



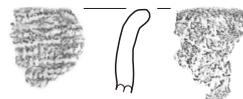
98-19·III-1·440



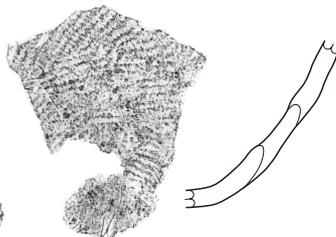
98-20·I-4·440



98-21·II-1·440



98-22·III-1·440



98-23·不明·445

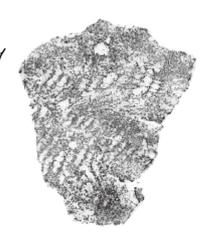


图98 I~IV区 土器24 (S=1/3)

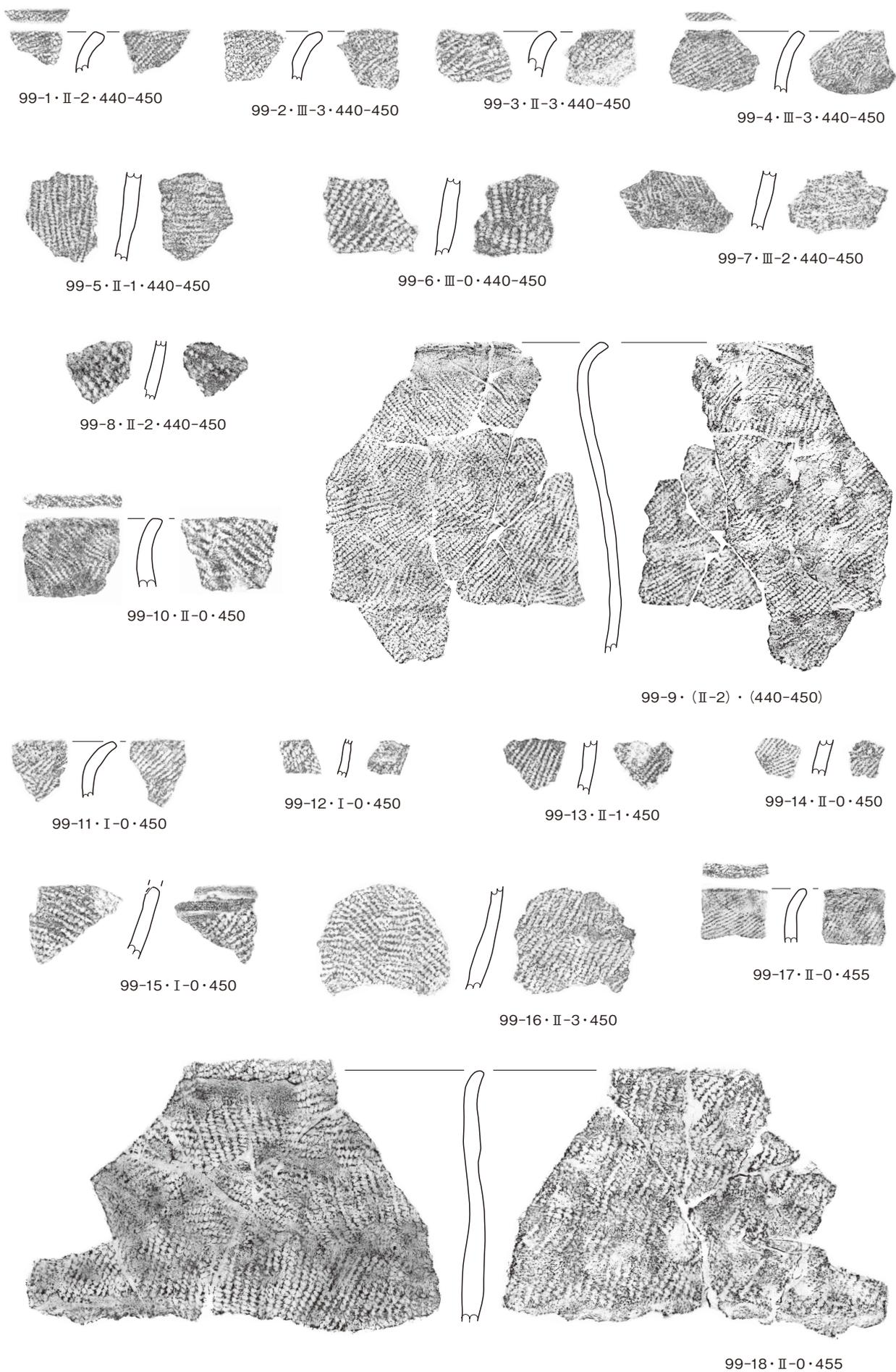


图99 I~IV区 土器25 (S=1/3)

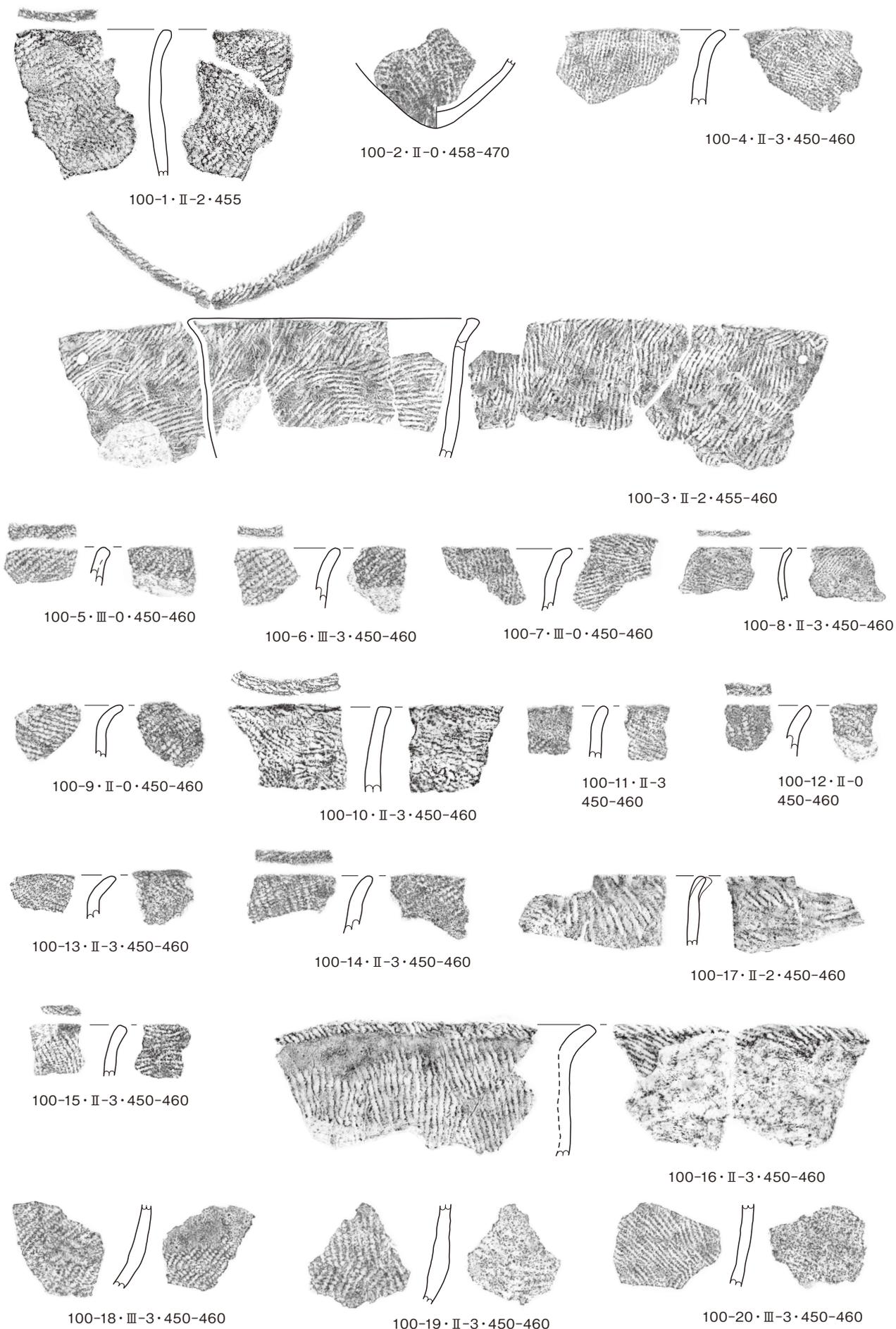


图100 I~IV区 土器26 (S=1/3)

図99-1～4は、外反する口縁の小破片。それぞれ口唇部にも施文がみられる。

図99-9は口縁から胴部までの大型の破片資料で、口縁は外反し胴部が張る器形。輪積単位施文の様子や、指頭圧痕による凹凸など、本遺跡に見られる表裏縄文土器の典型例とも言える。99-10は外反する口縁で、平坦な口唇部にも施文。また内外面で異なる原体を使っていると思われる、本遺跡では珍しい例である。99-11は大きく外反し、胴部が張る器形と思われる。

図99-15は擬口縁を持つ底部付近の資料と判断したい。99-16は外面に回転方向を変えたLR縄文の施文がある。99-18は胴部が緩く張る器形で、口縁径から大型の個体と思われる。外面はLR縄文を多方向に施文。指頭圧痕による凹凸も目立つ。

図100-1は緩く外反し、黒雲母を多く含む。100-2は丸みのある底部資料で、内面の施文は不鮮明だが、縄文と思われる。100-3は口縁がくの字状に屈曲し、胴部が若干張る器形。1ヶ残存する孔は補修孔だろうか。原体は無節L縄文で、内外面の口縁部に横位回転、胴部に斜位回転、口唇部に横位回転施文している。100-4はゆるく外反する口縁。100-8は薄手で、口縁はやや大きく外反する。

図100-9は口縁が大きく屈曲する。100-10はわずかに外反する口縁で、口唇部は平坦で施文がある。100-13は口縁を屈曲させている例。100-14はわずかに外反する口縁。口唇部にも施文がある。100-15は内面にRL縄文を斜めに施文した例。

図100-16は内面が剥落しているが、大きく屈曲した口縁を持つやや大型の破片。関東地方の井草式に似る。100-17は無節R縄文の内外面施文の例。口縁はやや緩く屈曲する。指頭圧痕による凹凸が顕著である。100-18は底部付近の資料であるが、内面も縄文施文がある。100-19も同様。

101-2は胴部の小破片であるが、粘土が被さる輪積単位施文が見て取れる。101-3は底部付近で、内面の施文が見られる例。図101-4は胴下半部と思われるが、内面にも施文がある。101-6は内外面とも無節R縄文で施文した例。

図101-10は大きく外反する口縁資料。胴部が張る器形となろう。101-14～24は同一個体と思われ、RL縄文を外面は概ね縦に、内面は横もしくは斜めに施文している。胎土に黒雲母を含み、指頭圧痕による凹凸もやや目立つ。101-19は、アズキ亜属の種子圧痕が検出されている（第4章10-4）。

図102-1～4は同一個体と思われ、口縁が外反し、胴部が張る。このような器形と思われる資料は多数あり、口唇部への施文も多い。102-5～8は同一個体と思われ、輪積単位施文が分かる。口縁は基本的に外反するが、部位により反り方に差があるようである。外面の施文は多方向からの回転と言える。

図102-10は、無節R縄文を内外面に施文した口縁部破片。9は同一個体。102-12は口縁が屈曲し胴部が張る資料で、やや厚みのある例。102-13はわずかに外反する口縁で、口唇部は平坦に近く施文がある。穿孔されている。102-14は口縁部から胴部を含むやや大型の破片資料で、口縁はわずかに外反し胴部が張る器形。指頭圧痕による凹凸も目立つ。

図103-1はLR縄文施文で、口唇部に貼付を持つ。黒雲母を多量に含む。103-7は口唇部に粘土の貼付が2箇所が残存し、LR縄文を内面と口唇部、外面の口縁直下には横位に、胴部以下は異方向の回転で羽状に施文している。口縁は屈曲しやや胴部が開く器形。指頭圧痕による凹凸がやや顕著にみられ、輪積単位施文の手法も伺える。二つの穿孔は補修孔だろうか。103-8はこれと同一個体である。

図103-10は小型の胴部破片であるが、輪積単位施文の後、内面が剥落した可能性がある。103-11は無節R縄文施文の口縁部破片。103-12は外反する口縁で、口唇部に粘土の貼付があり、さらにそ

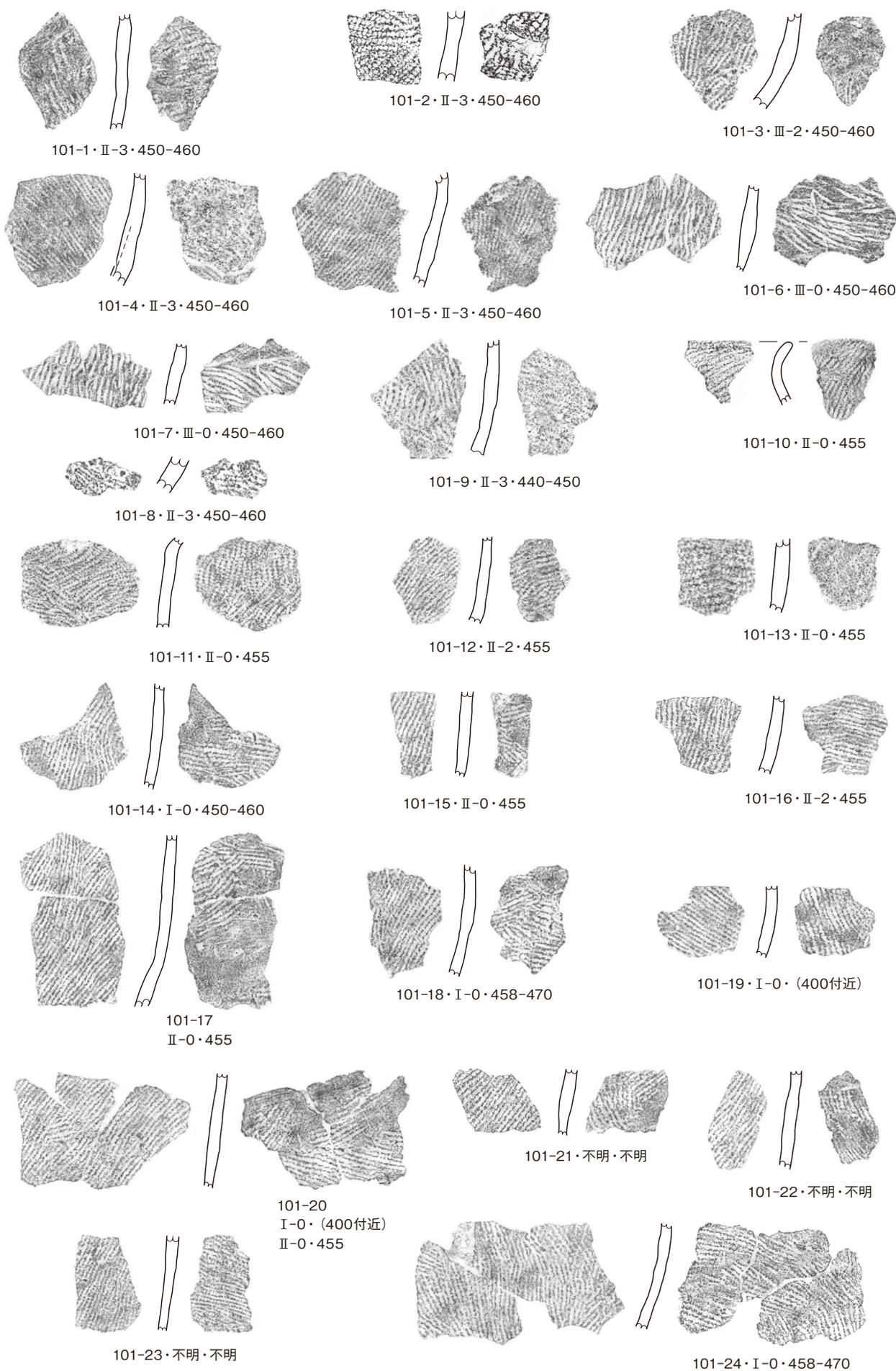
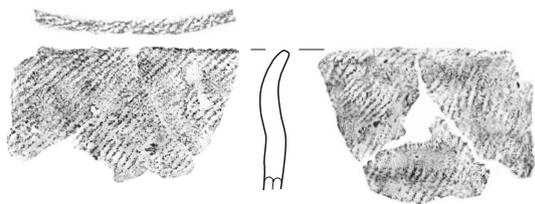
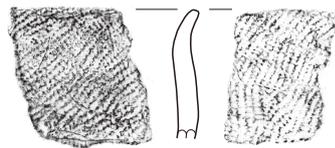


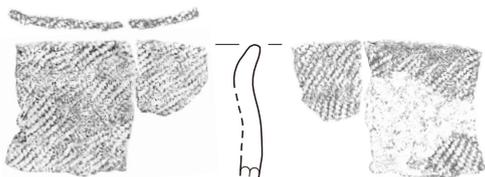
图101 I~IV区 土器27 (S=1/3)



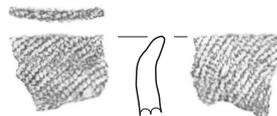
102-1·I-0·450-460



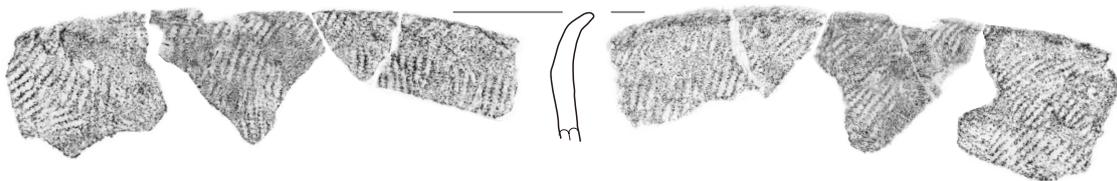
102-2·不明·不明



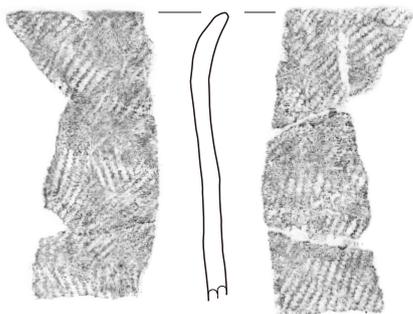
102-3·III-1·490-500



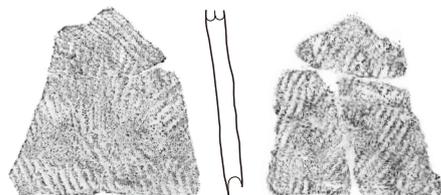
102-4·II-0·不明



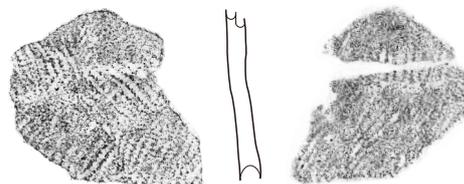
102-6·II-3·470-480



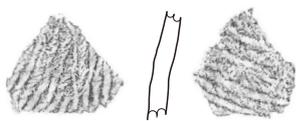
102-5·II-3·450-460



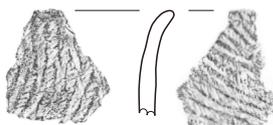
102-7·不明·不明



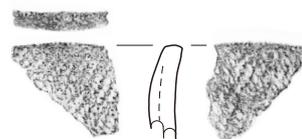
102-8·不明·不明



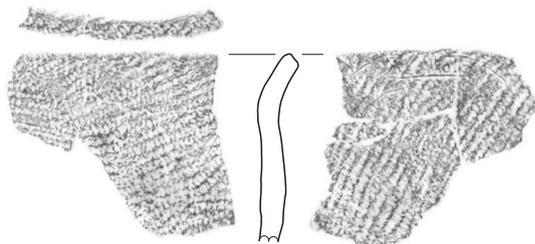
102-9·II-2·450-460



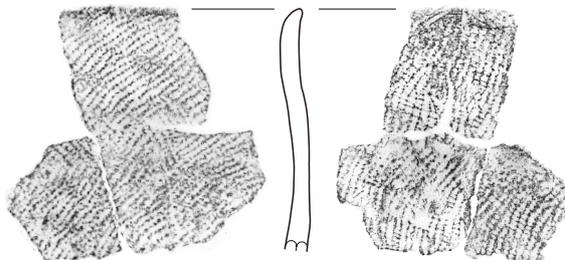
102-10·I-2·520



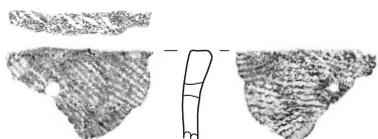
102-11·I-3·450-460



102-12·II-2·450



102-14·I-0·458-470



102-13·III-1·450-470

图102 I~IV区 土器28 (S=1/3)

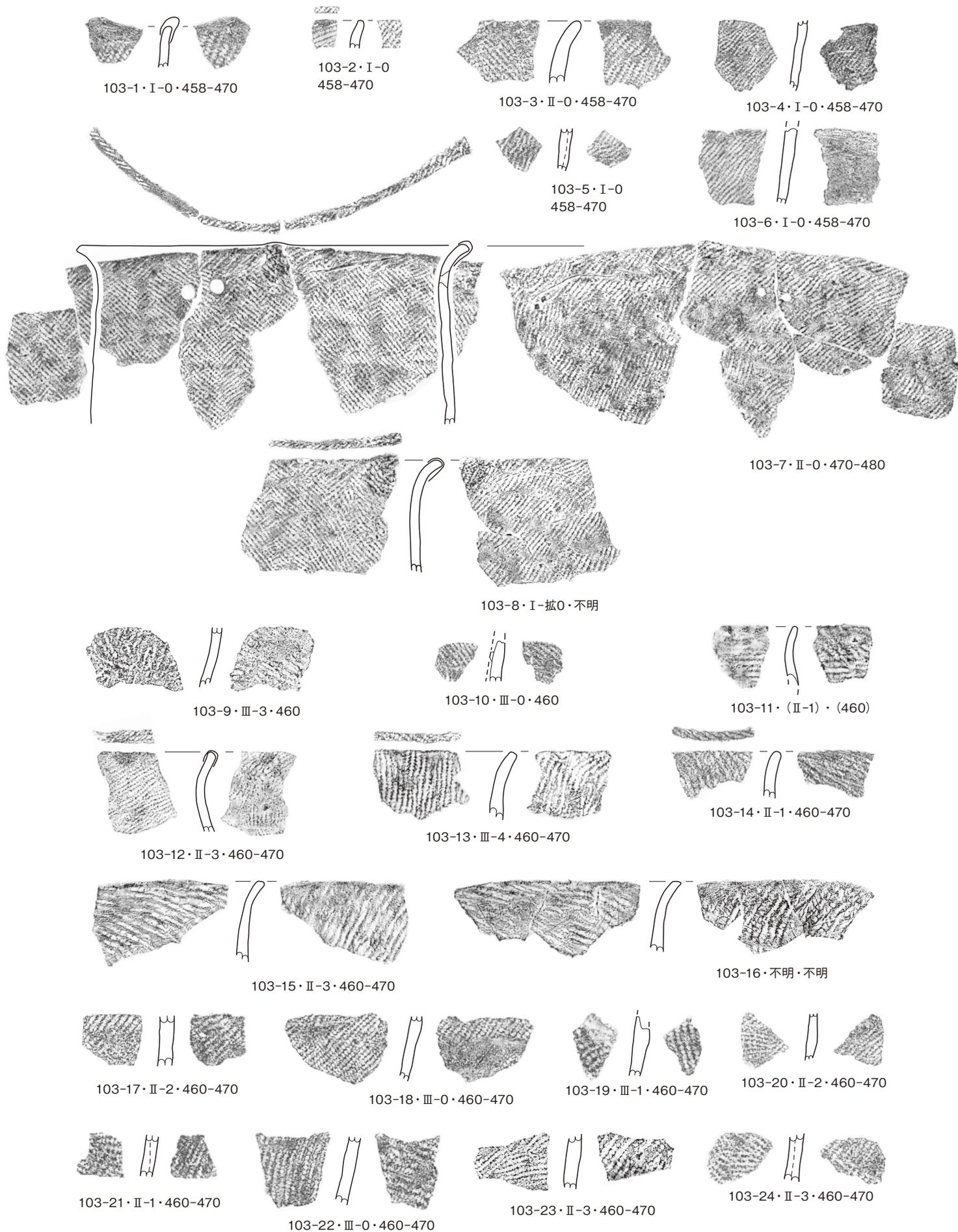


图103 I~IV区 土器29 (S=1/3)



104-1・II-2・460-470



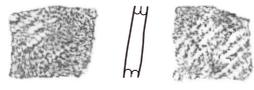
104-2・II-3・460-470



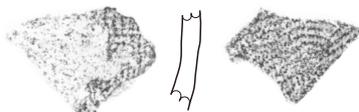
104-3・II-3
460-470



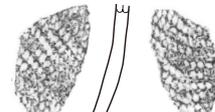
104-4・II-2・460-470



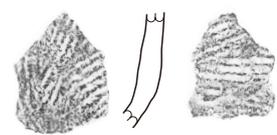
104-5・II-2・460-470



104-6・III-0・460-480



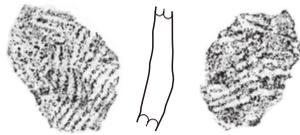
104-7・III-0・460-470



104-8・II-1・460-470



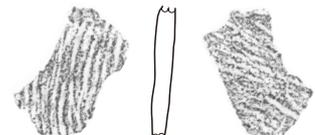
104-9・II-1
460-470



104-10・II-3・460-470



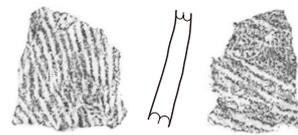
104-11・II-1
460-470



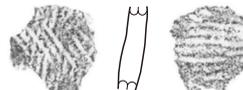
104-12・II-1・460-470



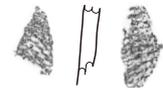
104-13・II-3
460-470



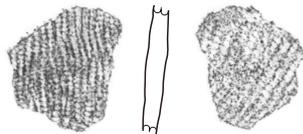
104-14・III-1・460-470



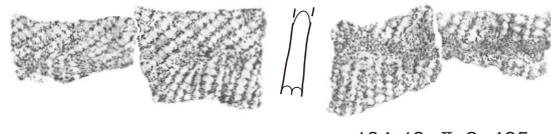
104-15・II-1・460-470



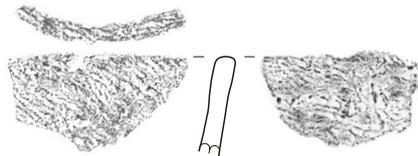
104-16・III-1
460-470



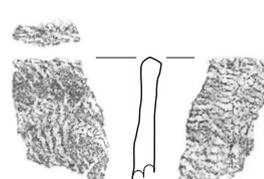
104-17・III-0・460-485



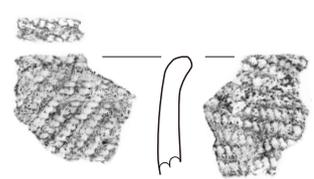
104-19・II-2・465



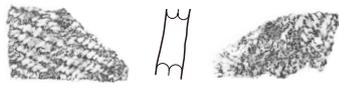
104-18・II-2・465



104-20・II-1・465-470



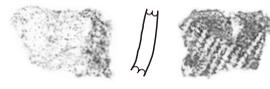
104-21・III-1・465-470



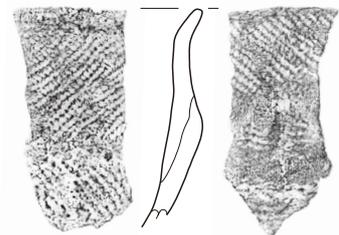
104-22・III-1・465-470



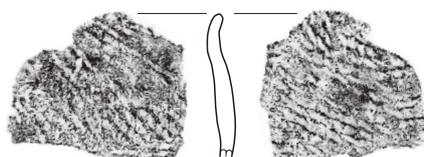
104-23・III-0・465-480



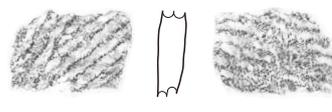
104-24・III-0・465-480



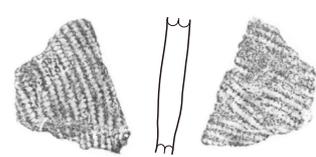
104-25・奥の院・465-495



104-26・II-3・470



104-27・III-1・470



104-28・III-2・470

図104 I~IV区 土器30 (S=1/3)

の上からL R縄文を施文している。103-13は外反する口縁で、やや平坦な口唇部にもR L縄文を回転施文している例。103-14は無節縄文の例。

図103-15と16は同一個体で、緩く外反する。無節L縄文を施文している。103-18は輪積単位施文の分かる例。

図104-9～15は無節R縄文回転施文の例を多く含むが、このレベルにやや集中している。

図104-18はほぼ直立する口縁部破片で、口縁径は小さい。口唇部は平坦で施文がある。104-20もほぼ直立するが、顕著な指頭圧痕による凹凸が見える。104-21は口唇付近がわずかに屈曲している。104-25は、口縁部を含む粘土を胴部の内側に貼り付けるように成形。口縁は外反する。

図104-26は、指頭圧痕による凹凸が目立つ口縁部を含む資料で、わずかに口縁が外反し胴部が張る器形であろう。また内面付着炭化物の放射性炭素年代測定を行い、11080-10933 cal BP (42.9%)、10879-10687 cal BP (52.5%) とされた(第5章(3)・No.5)。

図105-1は接合資料で、口縁から胴下半部までが残る。口縁はゆるく外反しやや胴が張る。内外面共、施文の回転方向は一定しない。

図105-2～9は-470～-480cm出土で、それぞれ湾曲等は異なるが、L R縄文を主に横回転した口縁部破片。105-6は、内面付着炭化物の放射性炭素年代測定を行い、8735-8560 cal BC (95.4%) とされた(第5章(4)・No.4)。

図105-10～12も同じレベル出土の口縁であるが、これらR L縄文施文例は少ない。以下胴部でもL R縄文が多い。105-13はゆるく外反する口縁であるが、外面にはR L縄文が異方向に回転施文がされている。105-14はわずかに外反する無節縄文施文の口縁。

図106-1～5は同一個体で、胴下半部の破片と思われ、外面はL R縄文を多方向に回転施文している。106-8は接合資料で、口縁は屈曲し、胴部が張る器形であろう。一旦L R縄文を施文した後、口唇裏に貼り付けをしている部分がある。106-9は口縁部破片だが、外面に見られる円形のくぼみは、貫通していない。

図106-10はR L縄文施文の外反する口縁破片。106-13は外反する口縁であるが、内面は口唇部直下のみを施文。106-14は、口縁が屈曲し胴部が張る器形であろう。106-15は内面がくの字状に屈曲しているが、その屈曲からの欠損部には、輪積単位施文によって下段の粘土紐につけられた施文痕が反転して残っている。106-16、17はこれと同一個体で、内面の胴部以下には施文は見られない。

図106-20は、口縁部破片で、やや強く外反する。原体はL R縄文で、外面は横位～斜位回転、内面と口唇部は横位回転の施文。輪積痕が明瞭に見て取れる。106-21は無節R縄文原体の施文で、湾曲した口縁よりも胴部が厚手に作られている。106-23はゆるく外反する口縁。

図107-2は、内面に輪積単位施文が見て取れる。107-4、5も同様。107-7は、撚りはR Lであるものの、内外面で違う原体を用いていると思われる少ない例である。

図107-10はわずかに外反し、比較的少ないR L縄文施文の口縁。107-13は外面口唇下に無文の部位がある。内面では口唇部付近のみに施文。黒雲母をやや多く含む。107-15は小破片であるが、輪積単位施文が見て取れる。107-16はL R縄文施文の胴部で、断面がS字状のカーブを描く。107-17は接合資料で、胴下半部と思われ、輪積単位施文が見られる。

図107-18からは出土レベル-490～-500cmとなる。107-18～26は口縁部破片で、やはりL R縄文原体を用いているものが多い。107-25は無節縄文施文の例。107-27は底部付近と思われるが、内面にも施文がある。107-28も同様。

図107-29～108-6は胴部破片であるが、やはりL R縄文が多い。108-6の外面は、L R、R L

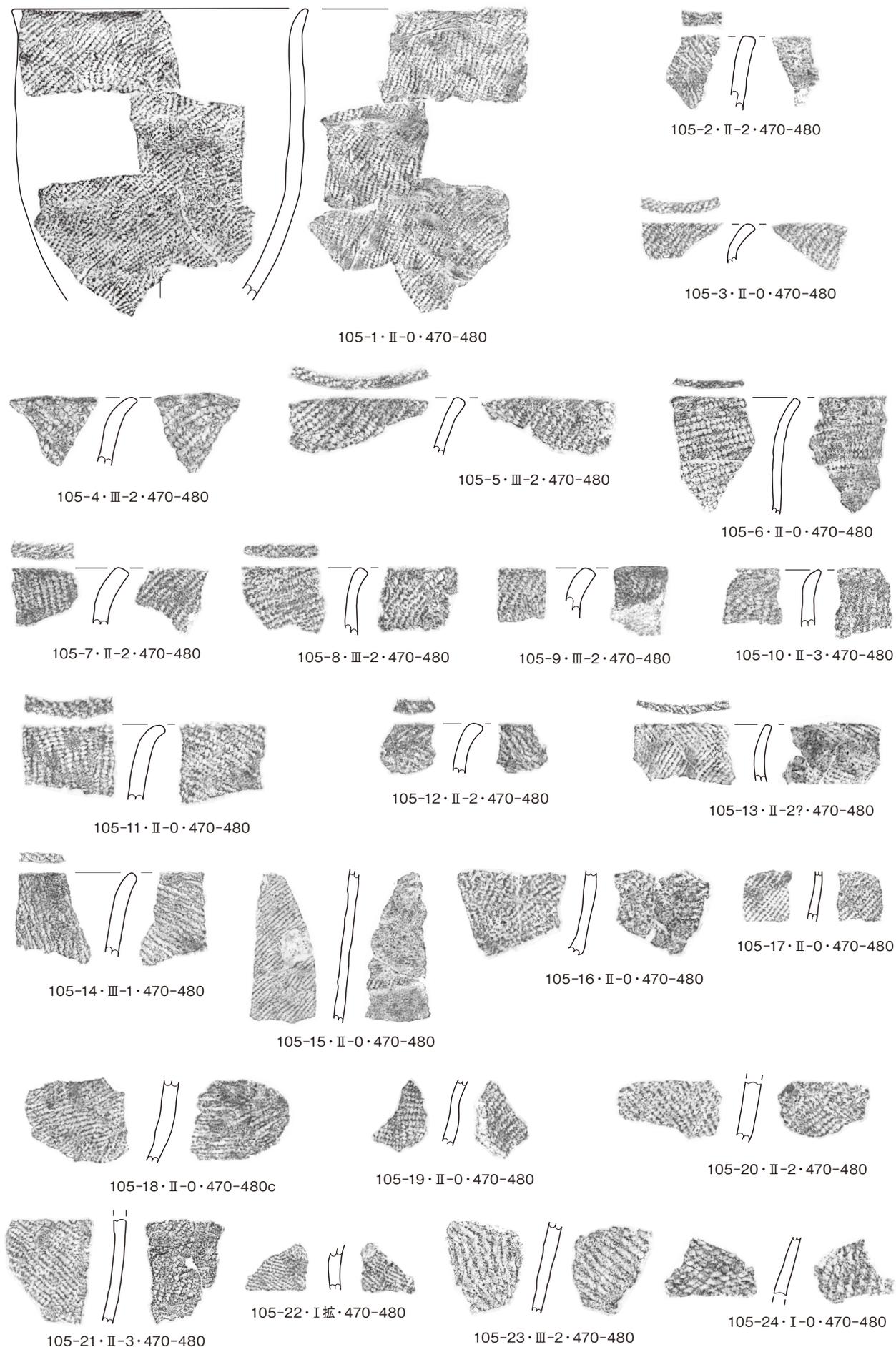


图105 I~IV区 土器31 (S=1/3)

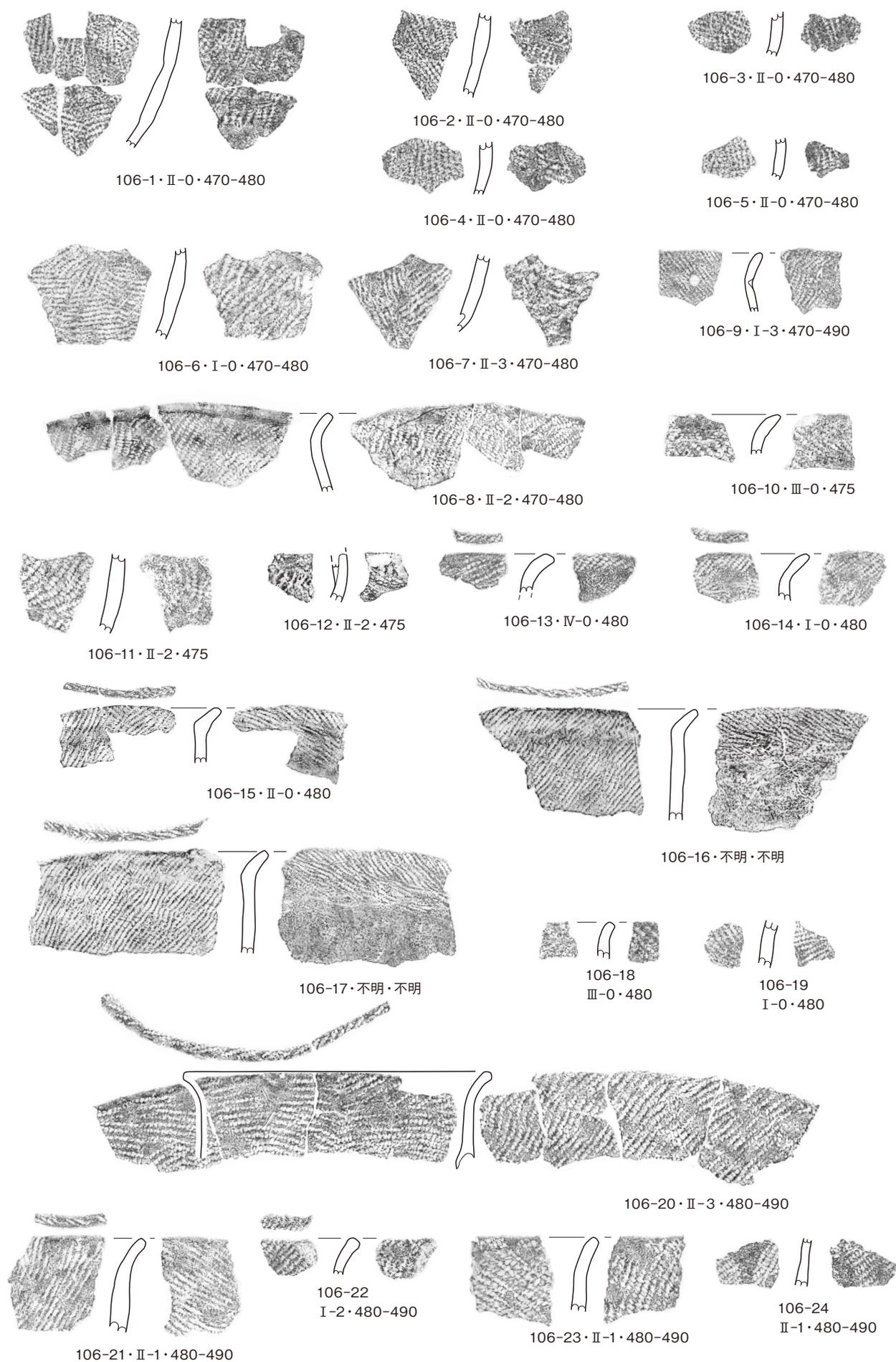


图106 I~IV区 土器32 (S=1/3)

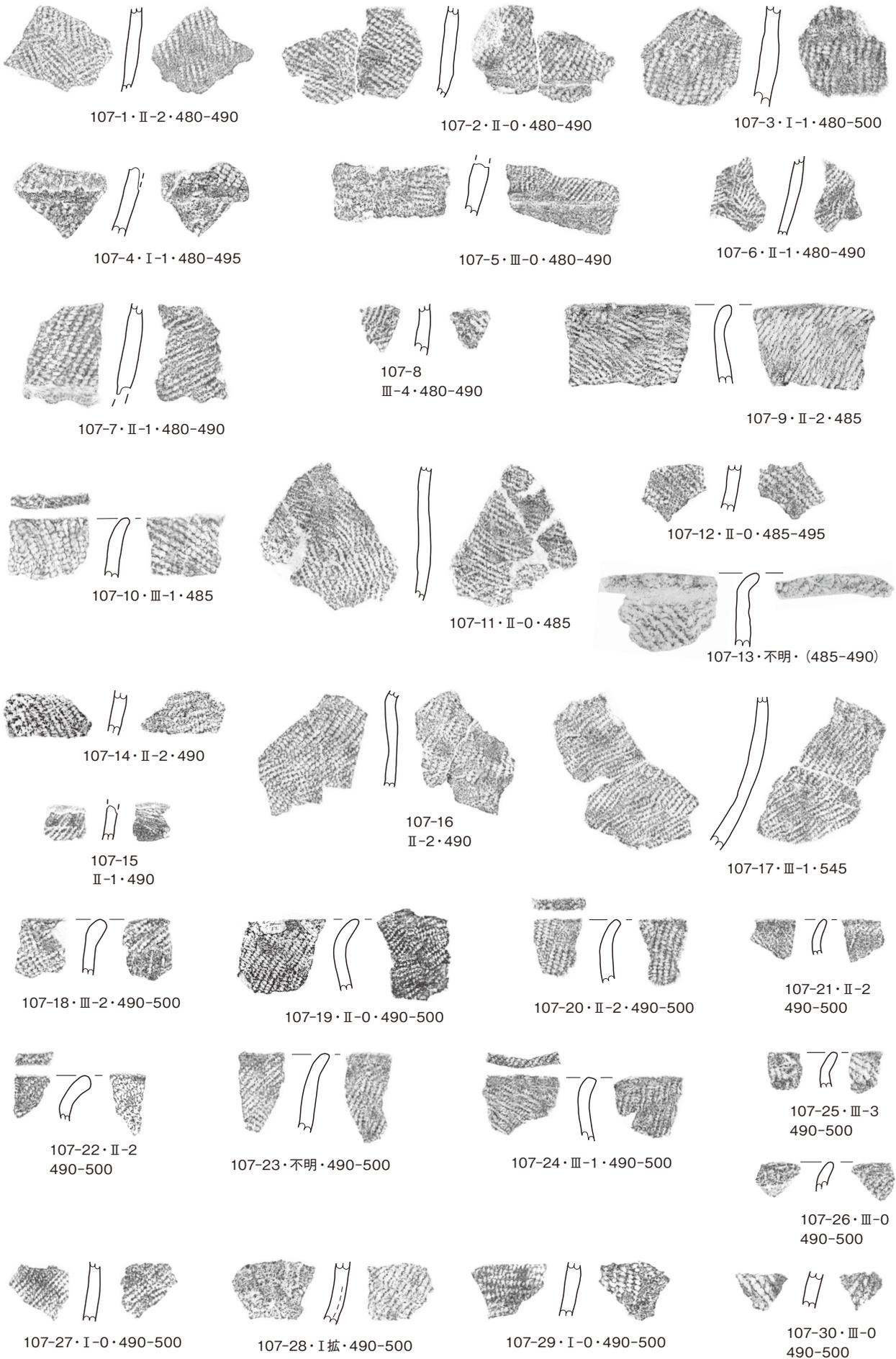


图107 I~IV区 土器33 (S=1/3)

縄文をそれぞれ横回転させ羽状の構成としていると思われる。

図108-9以降は、-500cm以下出土の資料となる。108-9は外面でL R縄文の回転方向を変え施文している。108-10は大きく屈曲する口縁部破片。108-13は薄手で、口縁が大きく屈曲する。108-14は口縁部破片であるが、若干外反し、穿孔されている。15、16はやや薄手で、15では口唇部が平らで、やや外に突出している。108-17は強く屈曲する口縁。108-18は直立する口縁の例。108-19は外反する口縁。これらは内外面、そして多くの場合、口唇部にもL R縄文を回転施文している。

図108-20は、強く屈曲した口縁部破片の接合資料で、内外面ともL R縄文を施文している。また内外面付着炭化物の放射性炭素年代測定を行い、11207-11069 cal BP (70.9%)、10954-10866 cal BP (21.5%)、10846-10806 cal BP (3.0%) とされた(第5章(3)・No.3)。

図108-21は、R L原体の屈曲する口縁。108-22もR L縄文施文例。口縁は外反し、外側を向いたやや平坦な口唇部にも回転施文。穿孔がなされている。108-24、25は無節縄文の例で、108-24はやや薄手。108-26も無節縄文施文の接合資料で、口縁は直線的に開き、指頭圧痕による凹凸が顕著である。口唇部にも回転施文がある。

図108-27~109-9は、-500~-510cm付近出土の胴部破片であるが、やはり内外面ともにL R縄文横の施文が多い。また109-1や3、胴下半部の109-7のように、輪積単位施文が分かる資料も多い。

図109-10はL R縄文施文で、口縁がつまみ出されるように屈曲している。黒雲母が多く含まれている。109-12は外反する口縁部で、口唇部に貼付文があり、その上にも縄文施文がある。109-14は口縁から胴部の資料で、口縁が屈曲し胴部が膨らむ器形。指頭圧痕による凹凸が目立つ。109-15は、やや薄手で外反する口縁。口唇部は平坦で、縄文を施文。

図109-16は、口径15cmと小型で、やや胴の張る器形。L R縄文原体で、外面は口縁部上位一段に斜位回転、以下口縁部から胴部に縦位回転、内面は横位回転となる。109-18はやや大型の胴部破片で、指頭圧痕による凹凸があり、穿孔もされている。R L縄文施文の例でもある。

図109-19は強く屈曲する口縁で、平坦な口唇部にも縄文の回転施文がある。109-20と21は同一個体。L R縄文施文で、外面の口唇下に一条の原体側面押圧が横周する。22は胴下半部と思われ、内面の縄文施文が土器の下部まで及び、なおかつ、この部位でも輪積単位施文が使われていたことも見て取れる資料である。

図110-1は、図上部にわずかに穿孔が残る。110-2はやや口縁が厚みを増し、ゆるく屈曲する。口唇は平坦でL R縄文を回転施文している。110-4と5は同一個体の胴部であるが、輪積単位施文が見られる。110-7は口唇部付近がわずかに外反し、口唇部にも施文がある。

図110-8は接合資料。L R縄文施文で、口縁が緩やかに屈曲し胴部が張る器形と思われる。110-9と10は同一個体と思われる外反する口縁。110-11は外反し口唇部が平坦。110-12は外反し胴が張る器形であろう。ともにL R縄文原体と思われる。110-14は、やや屈曲する口縁破片。15は口縁がわずかに屈曲し、やや器厚が薄くなっている。

図110-20~30は-510~-520cm付近の胴部破片。やはりL R縄文原体を使った例が多い。110-20はL R縄文施文の比較的大型の胴部破片で、指頭圧痕による凹凸が顕著である。110-21は輪積単位施文の痕跡が見える。110-26も輪積単位施文が見て取れる。

図111-1は胴下半部から底部付近と思われ、無節R縄文を回転施文。胎土には黒雲母が多い。111-2はL R縄文施文で、口縁は外反しやや薄くなる例。111-3はやや厚手で、口縁は緩やかに屈曲し、比較的広い口唇部にも回転施文がある。黒雲母を含む。111-4は強く屈曲する口縁で、口唇部

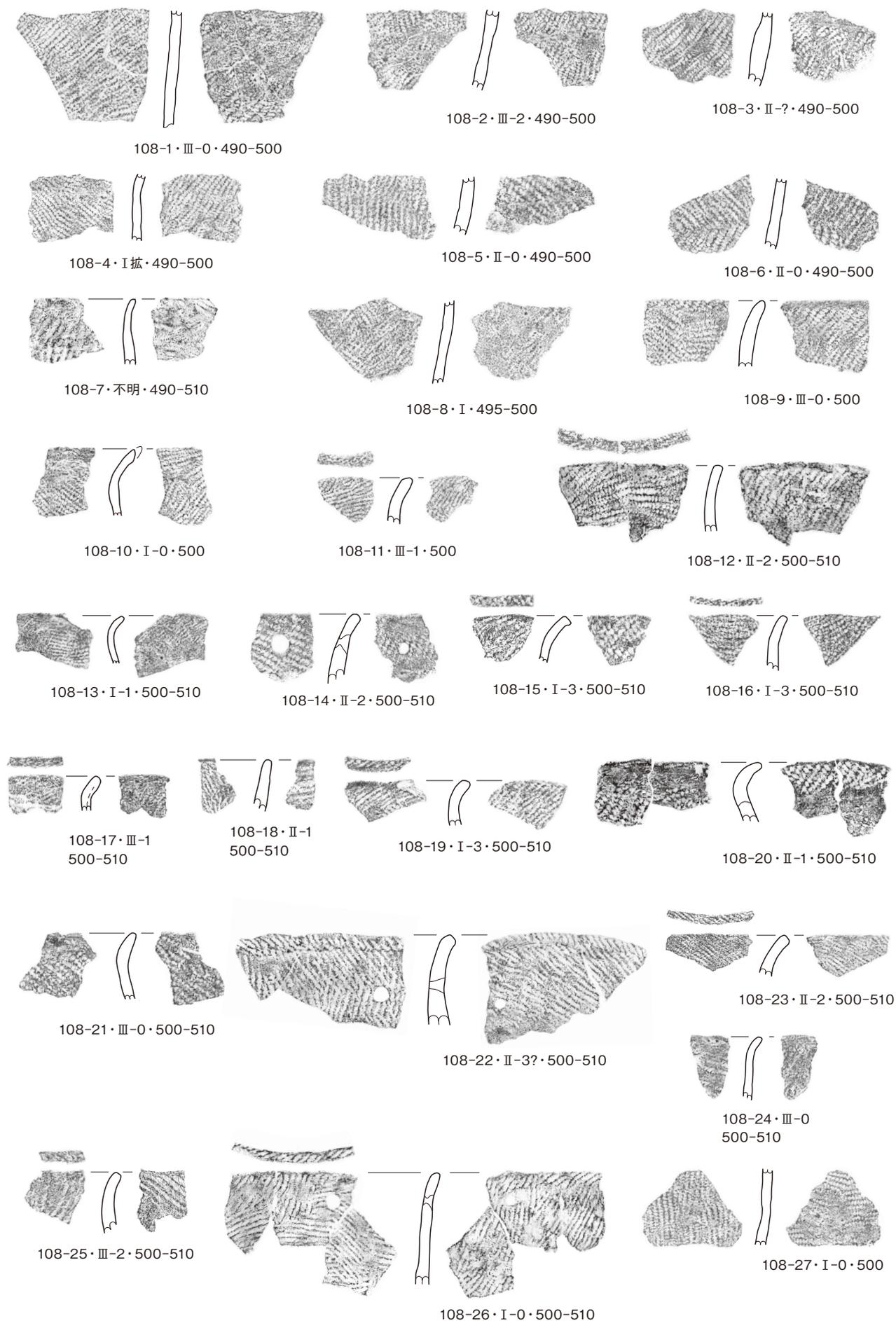


图108 I~IV区 土器34 (S=1/3)

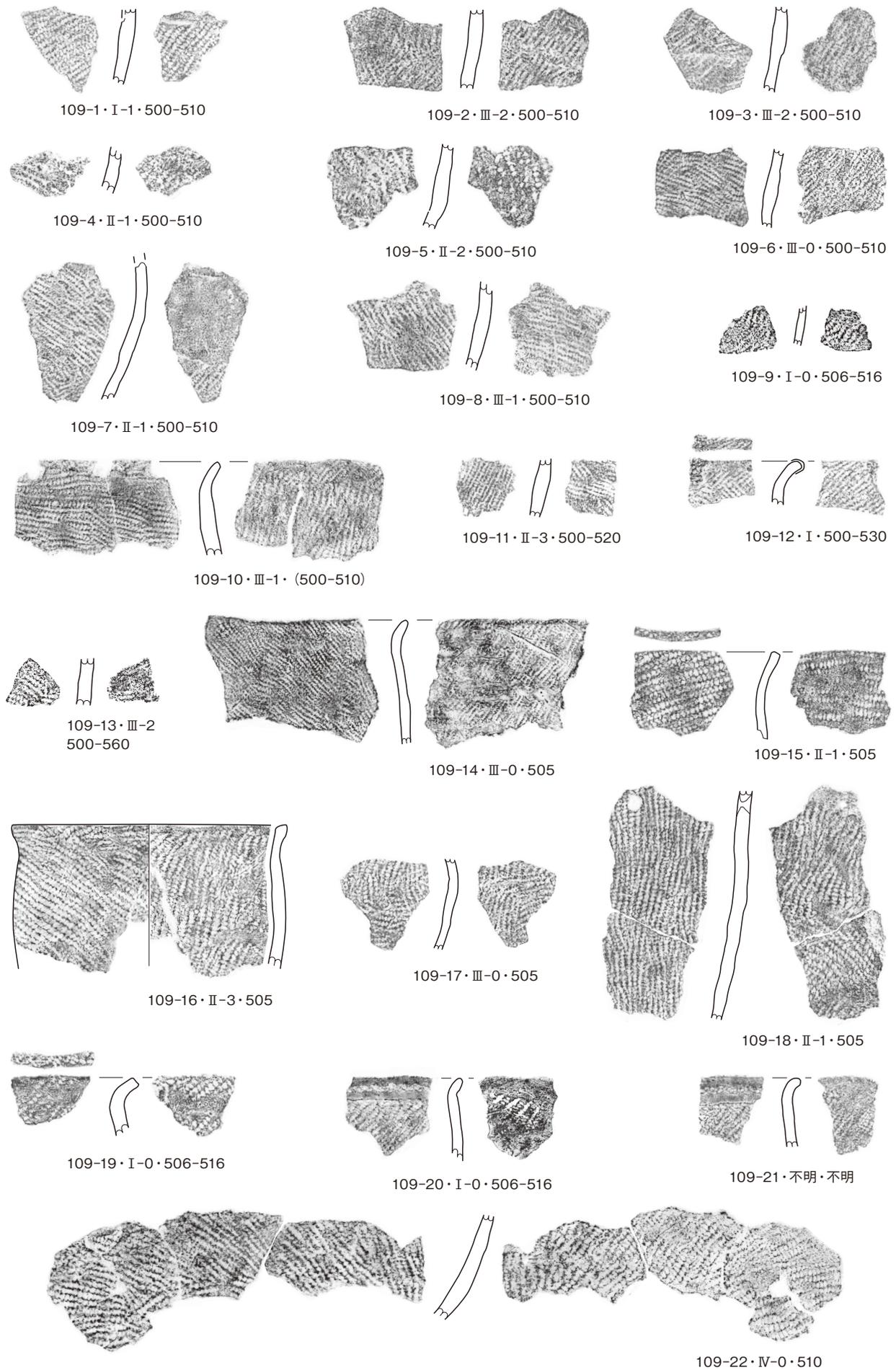


图109 I~IV区 土器35 (S=1/3)

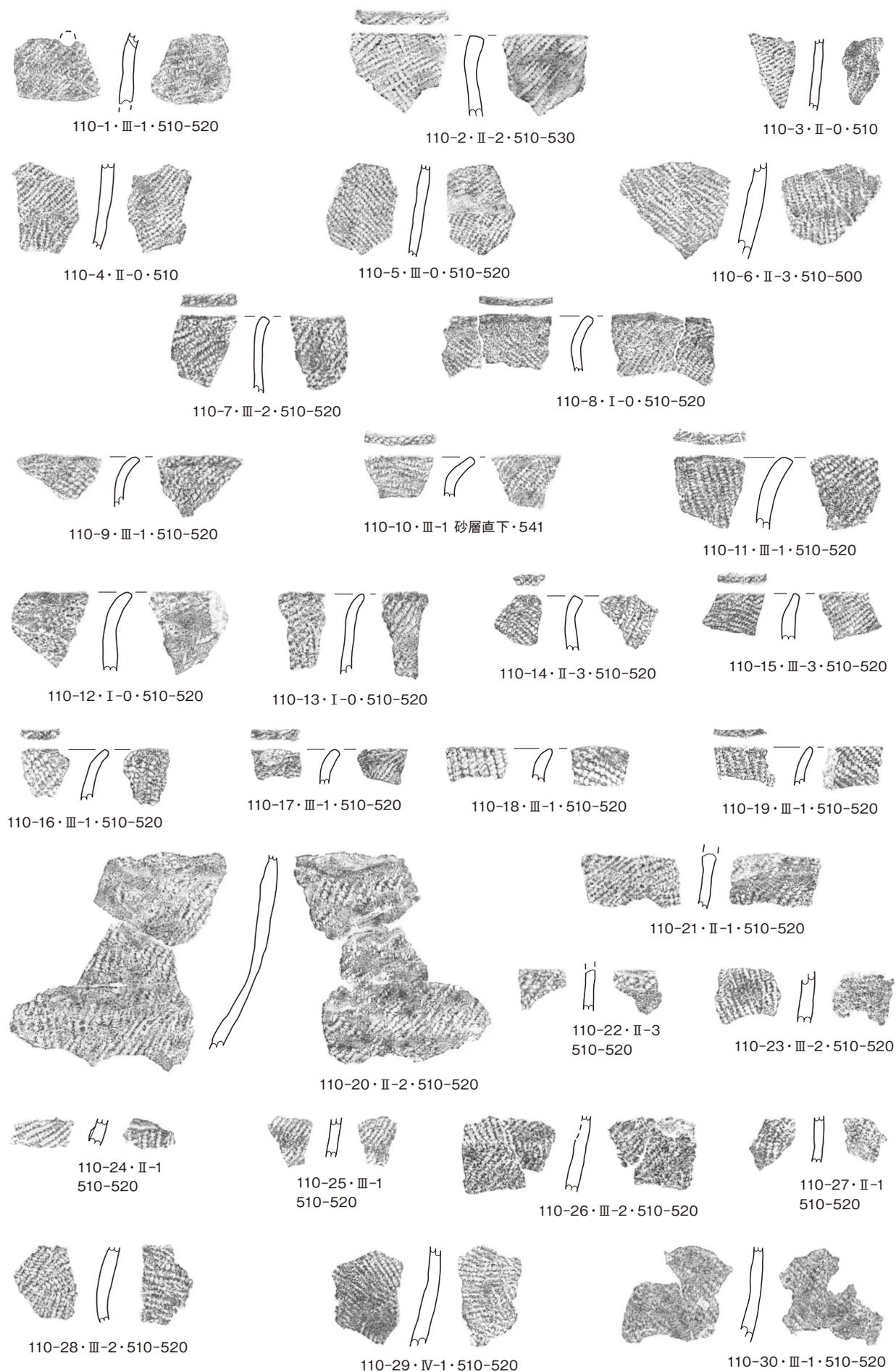


图110 I~Ⅳ区 土器36 (S=1/3)

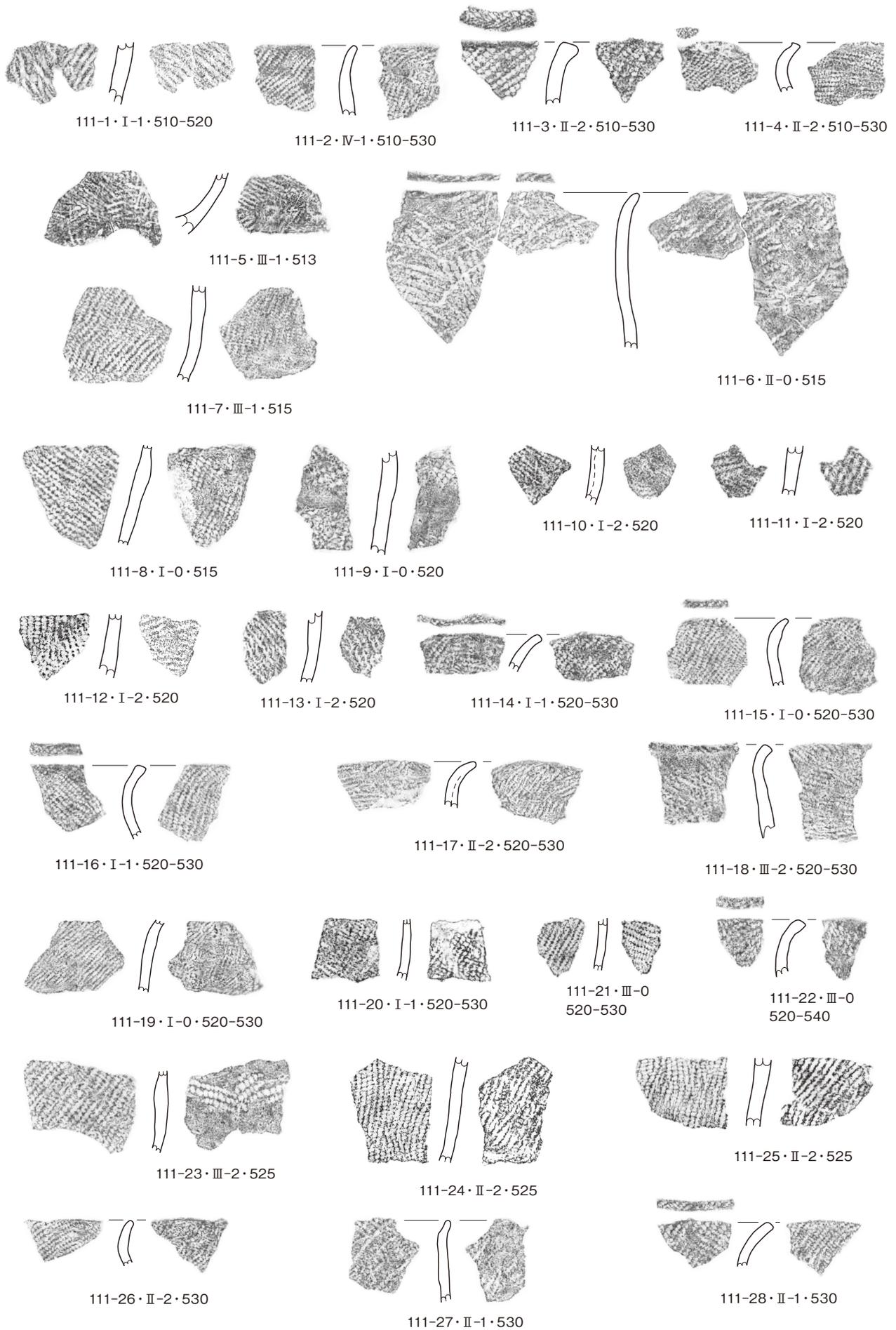


图111 I~IV区 土器37 (S=1/3)

にもL R縄文の回転施文がある。

図111-5は丸みを帯びた底部破片で、内外面ともにL R縄文が多方向に回転施文される。111-6は接合資料で、やや胴が膨らむ。L R縄文を他方向に施文。口唇部にも施文があり、口縁はやや波を打つ。

図111-7~13は、-515~-520cm付近の胴部破片。無節の13以外はL R縄文を施文している。

図111-14は大きく外反する口縁。15は屈曲する口縁断面に凹凸が残る。16は大きく屈曲し、口唇部が平面となる。

図111-18はR L縄文施文で、口縁が屈曲し口唇部が平面となる。内面付着炭化物の放射性炭素年代測定を行い、8723-8552 cal BC (95.4%) とされた(第5章(4)・No.3)。

図111-20は輪積単位施文がよくわかり、内面剥落の表面が剥落した部分にも縄文施文の痕が残っている。111-24と25は同一個体でR L縄文施文の例。

図111-26以降は、-530cm以下の遺物包含層最深部に近い資料。図示したものでは、L R縄文には限られる。

図111-26~図112-2は、-530cm付近出土の口縁破片。いずれも施文の原体はL R縄文。111-27はわずかに口縁が屈曲する。111-28は大きく外反する口縁で、口唇部はやや平坦。外面ではL R縄文の方向を変えて施文。112-1は強く屈曲し、口唇部は平坦でここにもL R縄文を回転施文。口縁内面には粘土の貼り付けがある。112-2も口縁が大きく屈曲し、口唇部にコブ状の貼付けをし、さらにL R縄文を施文している。

図112-3は-530cm出土で、L R縄文施文の胴下半部破片と思われる。内面付着炭化物の放射性炭素年代測定を行い、11150-10771 cal BP (95.4%) とされた(第5章(3)・No.2)。

図112-4は屈曲する口縁部で、口唇部は平坦だが施文はない。112-5は大きく屈曲する口縁で、外面上部は無文となっている。口唇部も施文はない。112-8は外反する口縁であるが、口縁部付近が薄い作りとなっている。112-9はR L縄文施文の例。112-10はやや大型の胴下半部破片であるが、輪積単位施文と、縄文施文後の指頭圧痕が見て取れる。

図112-11は口縁が屈曲する。-540~-550cmと、遺物包含層の最深部での出土である。112-14はやや大型の胴部破片で、裏面には指頭圧痕による顕著な凹凸がある。112-16はわずかに外反する口縁であるが、口唇部に突起を持っている。

図112-17からは、出土レベル不明の表裏縄文土器の資料。全体としては、やはりL R縄文施文の例が多く、口縁部では外反もしくは屈曲し、口唇部にも縄文を回転施文をするものが多く含まれる。

図112-17は、厚手で輪積単位施文の痕跡が残る。112-18は、屈曲し口唇部は面状になり、L R縄文の回転施文がある。112-19はやや厚手で、口縁が大きく屈曲する。口唇部はやや稜を持つ。112-20は緩やかに外反し、外面では口唇直下は斜め、胴部には横方向でL R縄文を施文。112-21は外反し、口縁部がやや薄くなる例。胎土には黒雲母が多く含まれる。112-22は緩く屈曲し胴部が張り出す例で、内面には輪積単位施文の痕跡が見える。112-23は緩く屈曲する口縁で、外面口唇下に1条の原体側面押圧がある。

図113-2は、内面に貼付けられた突起がある。113-5は大きく外反し、口唇部ほぼ平坦に整形され縄文を回転施文。113-6は口縁部を含むやや大型の破片。やや外反する口縁で、胴部が若干膨らむ。113-7も口唇部がほぼ平坦に整形されている。113-8は無節R縄文施文で、わずかに屈曲する。

図113-12は大型の胴部破片で、胴部が膨らむ。内面の施文はおそらく口縁部付近のみであろう。

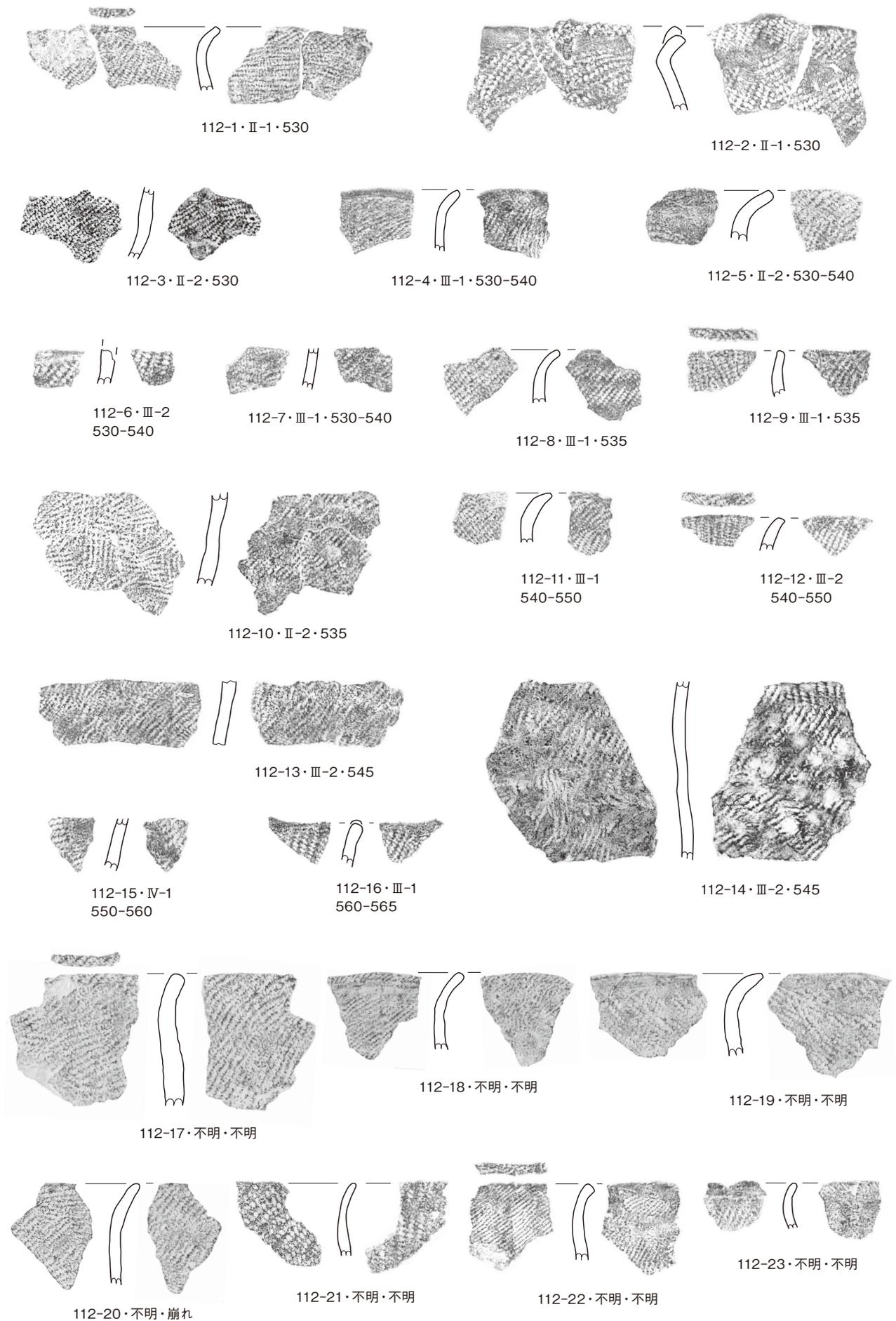


图112 I~IV区 土器38 (S=1/3)

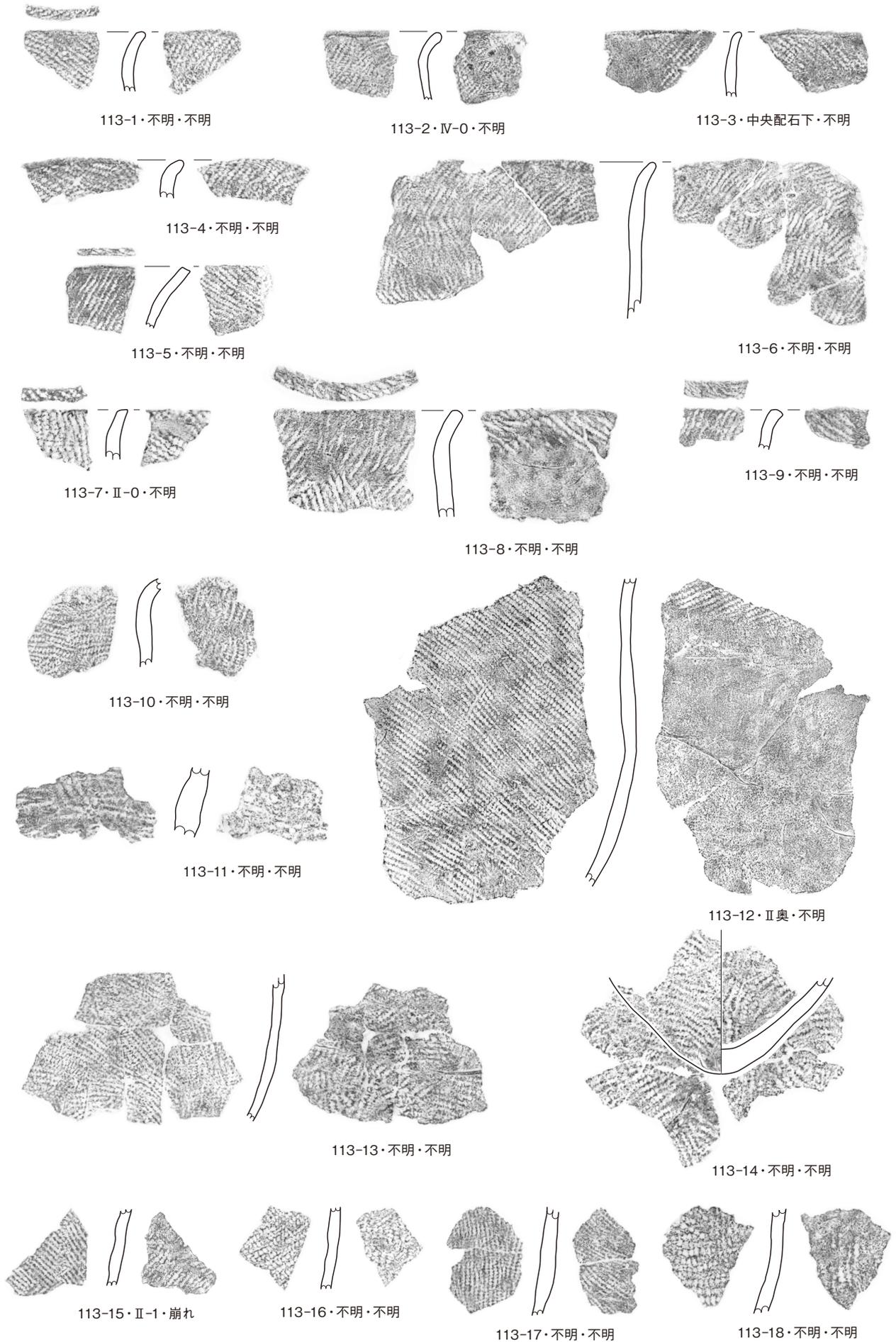
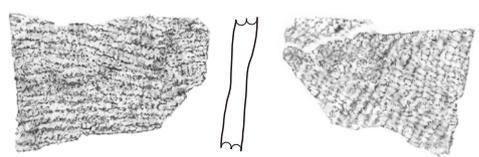


图113 I~IV区 土器39 (S=1/3)



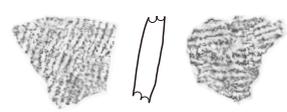
114-1・不明・不明



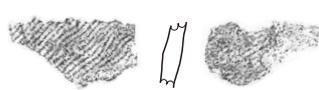
114-2・Ⅲ-下方・不明



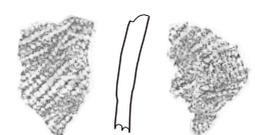
114-3・Ⅱ-0・不明



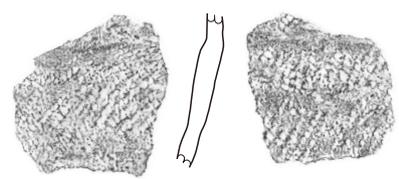
114-4・不明・不明



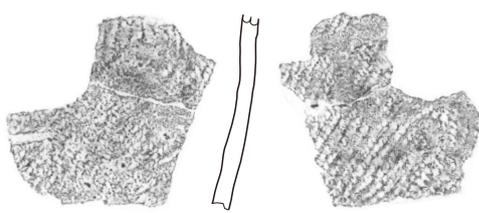
114-5・(Ⅰ-拵)・不明



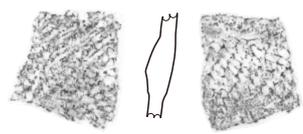
114-6・Ⅳ-0・不明



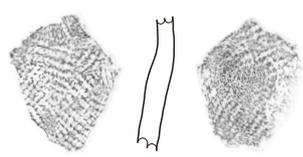
114-7・不明・不明



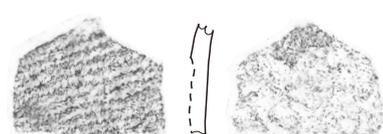
114-8・不明・不明



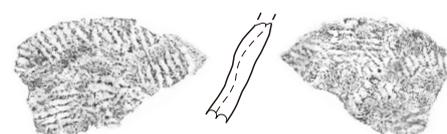
114-9・砂(?)層表面・不明



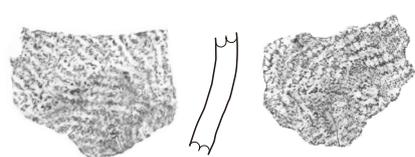
114-10・(Ⅰ-拵)・不明



114-11・不明・不明



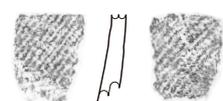
114-12・不明・不明



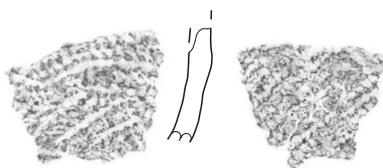
114-13・不明・不明



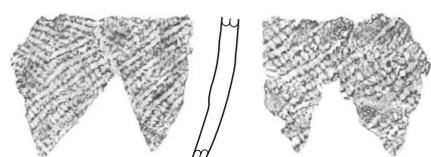
114-14・(Ⅰ-拵)・不明



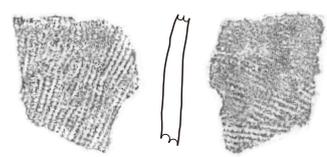
114-15・Ⅱ-3・不明



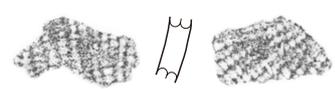
114-16・不明・不明



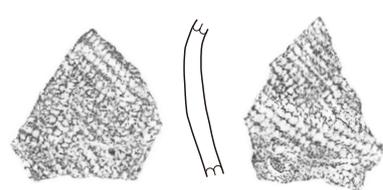
114-17・不明・不明



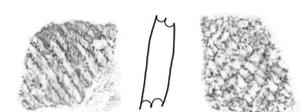
114-18・不明・不明



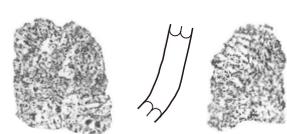
114-19・くずれ・不明



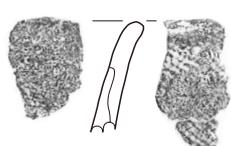
114-20・クズレ



114-21・不明・不明



114-22・Ⅱ-0・458-470



114-23・Ⅱ-2
470-480

図114 I~Ⅳ区 土器40 (S=1/3)

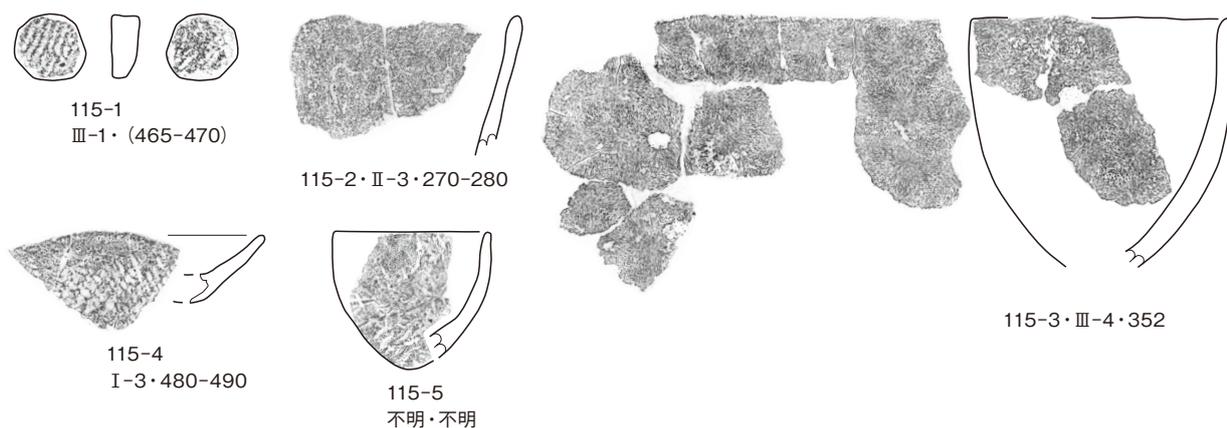


図115 I~IV区 土器41 (S=1/3)

113-14は、やや丸みを帯びた底部資料。原体はLR縄文で、外面は縦位回転、内面は横～斜位回転で施文。底部の内面にまで施文が及んでいる例となる。輪積単位施文と思われる。

図114-7と8は同一個体で、輪積単位施文が読み取れる。114-9は、輪積みの箇所が極端に分厚くなっている例。114-17は接合資料で、内面では、縄文施文の上に粘土が帯状に盛られており、輪積単位施文が見て取れる。

特殊事例

図115-1は、「下部」出土と思われる、1点のみであるが表裏縄文土器の破片からなる土製円盤と思われる資料。

また本遺跡では、擬口縁を残した通常サイズの土器の底部の可能性もあるが、器形からはミニチュア土器と思われる資料が数点ある。115-2は、通常サイズの土器の底部の可能性もあるが、径は小さい。115-3は無文で、全体の3/4が残存する。115-4は縄文施文で、大きく開く形状となっている。115-5も縄文施文かもしれない。

V区

V区でも縄文早期の土器が中心に出土しているが、中でも早期後葉の土器がややまとまっている。出土レベルを見ると、早期後葉の土器が上位、中葉以前が下位に多い傾向はあるが、層位的とまでは捉えられない。

縄文時代前期以降

図116-1は底部資料で、胎土などから時期は弥生時代中期後半から後期のものであろうか。116-2は縄文中期中葉藤内式の胴部である。116-3は縄文前期後葉の諸磯a式、116-5~10が縄文前期前葉の羽状縄文系土器であろう。116-8は胎土に繊維を含み、口唇部には刻みがある。116-10は結束羽状縄文で、やはり繊維を含んでいる。

図116-11は繊維が含まれる縄文施文の口縁部破片で、波状口縁かもしれない。116-12はRL縄文による羽状縄文の胴部破片。この2点については、やや時代が下る可能性もある。

沈線文条痕文系土器

前述したように、V区では本報告で沈線文条痕文系土器とした資料の出土が比較的多い。地点を異

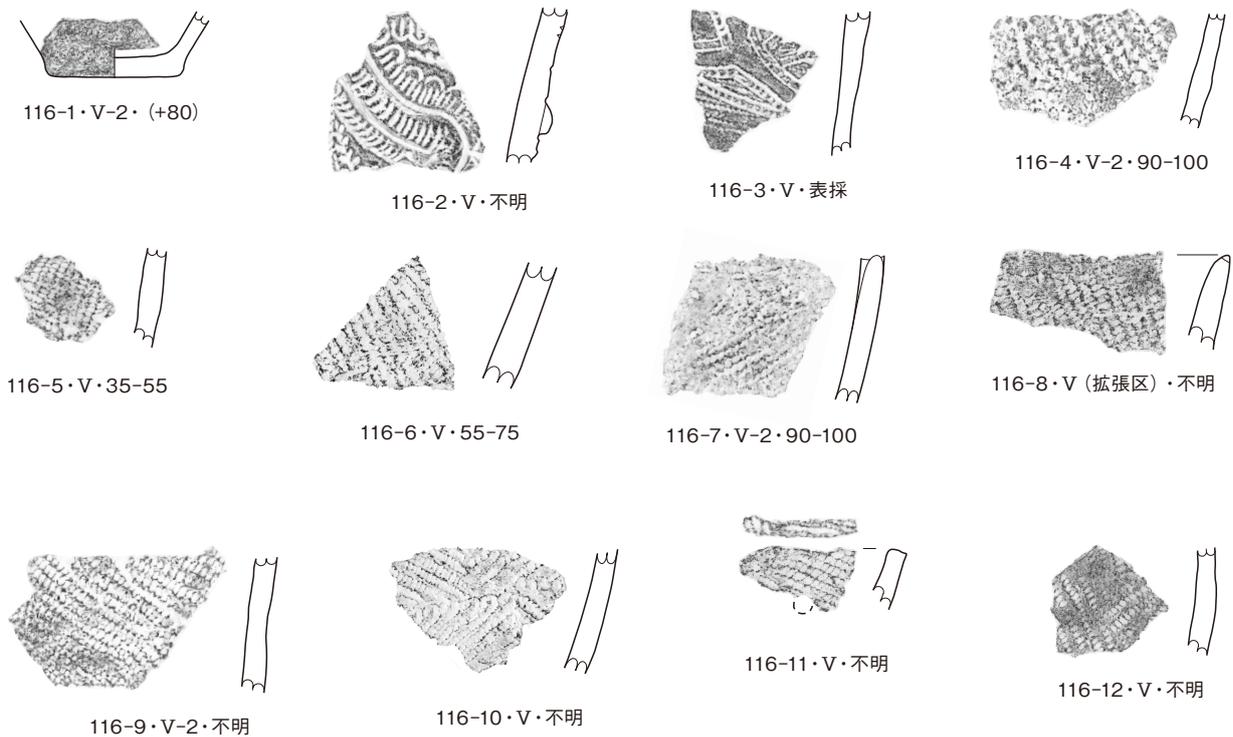


図116 V区 土器1 (S=1/3)

にする I～IV区との大きな差異となり、遺跡の空間的利用を考える上でも重要である。微量の繊維を含み、内面が黒褐色から黒色の破片資料が多い。

図117-1は外面がRL縄文施文であるが、内面に浅い条痕がある。117-2は内面に条痕が見られ、微量な繊維と岩石を含む。117-3は胎土に多量の黒雲母と繊維を含み、横方向の押引文が2条見られる。117-4は繊維を多く含み、斜め方向の押引文が見える。より下層で出土している118-16や21と同一個体または同一のグループであろう。117-5は繊維を含み、内外面に条痕があり、外面ではその上にやや太い沈線文を入れている。

図117-7は、沈線により格子目状の文様が描かれる。判ノ木山西式に含まれる資料であろう。117-11は横方向の条痕の上に、3条の平行沈線文による格子目文と、口縁に楕円形の連続刺突を施している。このような例も、判ノ木山西式に含まれる資料といえよう。

図117-12は、0段多条のRL縄文施文で、やや器厚の増す上部には太い沈線文による刻みがある。胎土には繊維や多量の黒雲母を含む。117-13は外面に条痕があり、その上に沈線（条痕）の格子目状文様と横位連続刺突がある。117-14は浅い平行沈線文で格子目状の文様を描いている。胎土には繊維を含む。117-15は繊維を微量に含み、浅い条痕の上にRLと思われる縄文を施文している。117-17は外面が斜め、内面は横方向の条痕がある。

図117-18は条痕の上に、刺突のある隆帯による区画を設け、太い斜め方向の沈線文で充填。内面は条痕による調整。関東地方の野島式と言えようか。117-19は同一個体とも思われる。117-20も野島式の口縁部であろう。

図117-21は、ほぼ垂直に立ち上がる器形で、外面に横方向の条痕が見える。胎土に黒雲母を含む。

117-22は接合資料で、横位条痕の上に、格子目状の沈線による区画内と角押文を施文。内面は斜めの条痕と扇状に並ぶ連続刺突がある。繊維と、多量の黒雲母を含む。117-23は浅い条痕があり繊維が多量に含まれたやや丸みを帯びた尖底の底部で、外面には回転を思わせる溝が巡っている。117

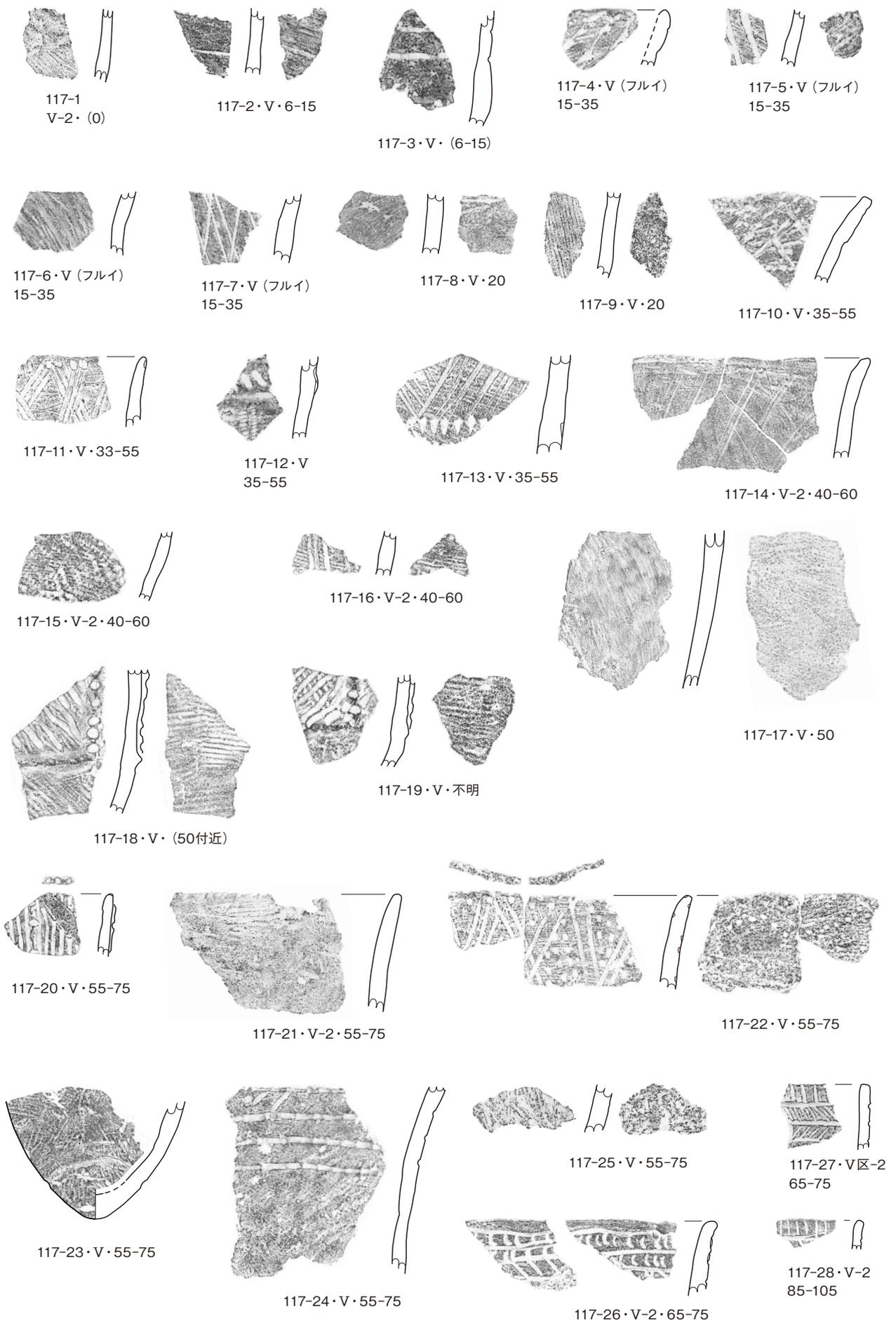


図117 V区 土器2 (S=1/3)

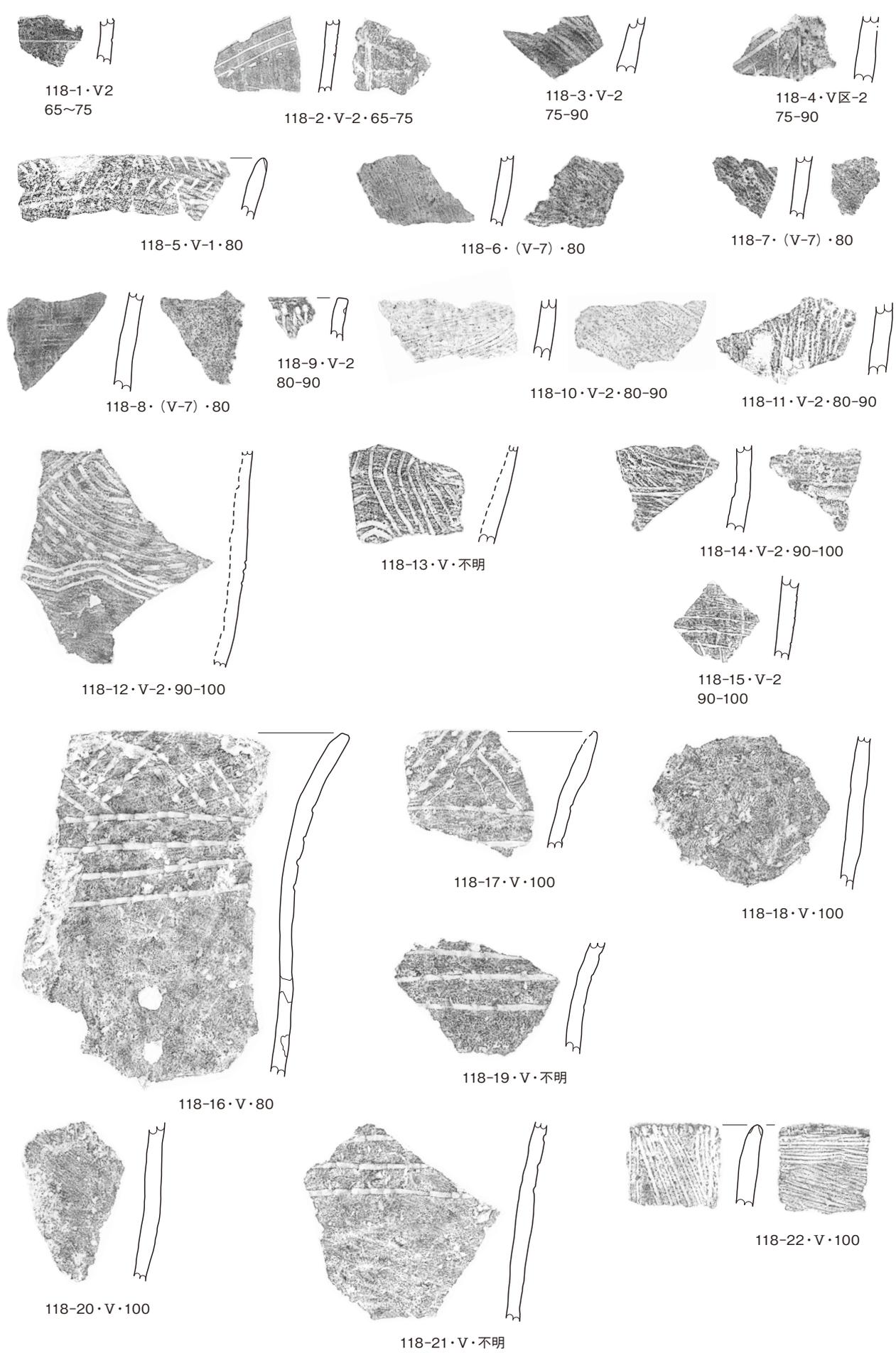
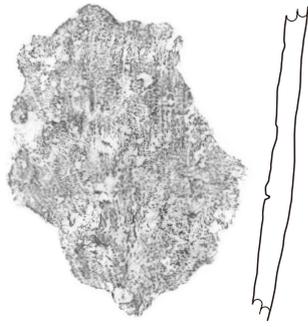
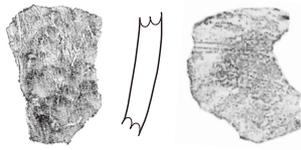


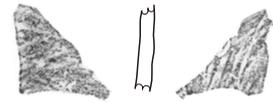
图118 V区 土器3 (S=1/3)



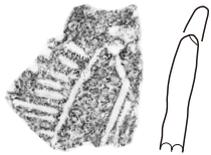
119-1·V·100



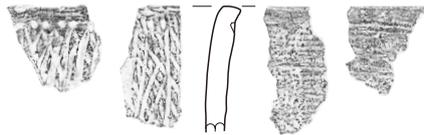
119-2·V·(100附近)



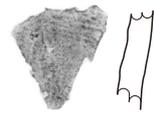
119-3·V·100-110



119-4·V-2
100-120



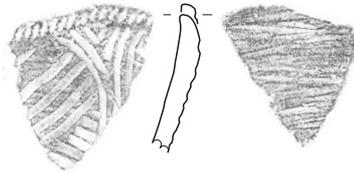
119-5·V-1·110-120



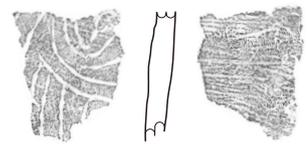
119-6·V-1
110-120



119-7·(V-1)
(110-120)



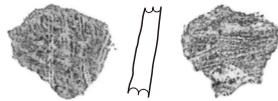
119-8·V·(120附近)



119-9·V-1·120-130



119-10·V-2
120-140



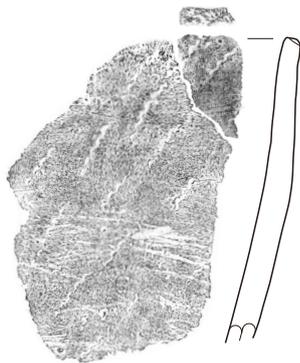
119-11·V-2
120-140



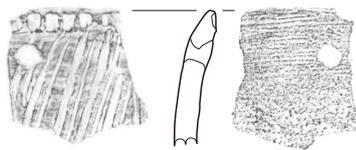
119-12·V-2
120-140



119-13·V-2·120-140



119-14·V·130



119-15·V·138



119-16·V·138



119-17·V·138



119-18·V-2
150-170



119-19·V-1·170-180



119-20·V-1
240-250

图119 V区 土器4 (S=1/3)

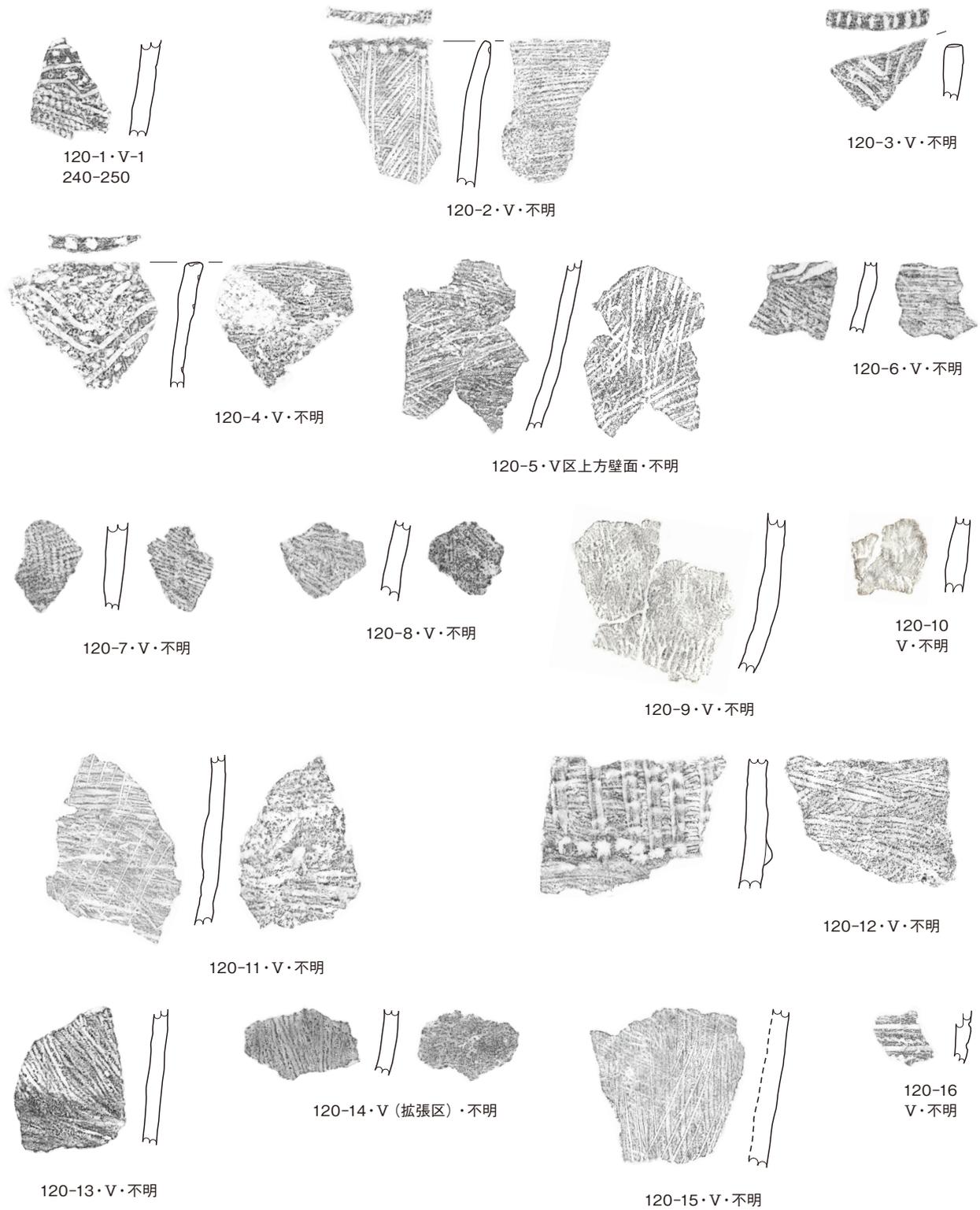


図120 V区 土器5 (S=1/3)

-24は繊維が多く、内面に浅い条痕と思われる痕跡がある。図118-16や21と同一のグループであろう。

図117-26は接合関係のない同一個体の口縁部破片で、横位平行の沈線文を爪形文と斜沈線で充填している。口縁はやや波を打つ。117-27と28は同一個体で、焼成の良い口縁部破片。綾杉状の沈線文が見られる。またI～IV区出土の76-9と同一個体となる。

図118-2は平行沈線文に沿う連続刺突が見える。118-5は胎土に繊維や多量の黒雲母を含み、やや外に開く口縁で、横ハの字状沈線と横位押引状沈線が巡る。118-9は小破片であるが、条痕の上に縦方向の沈線文と横位の連続刺突がある。判ノ木山西式と言えよう。118-12と13は同一個体と思われる、太く浅い沈線による曲線を主体に文様を描き、12の下端区画は無文となる。内面は剥落だろうか。

図118-16~19は同一個体で、黒色で胎土には多量の黒雲母と繊維を含み、指頭圧痕による凹凸も顕著である。口縁は外反する。口縁部には押引による格子目状の文様が描かれ、その下部には4条の押引文が横位に巡る。胴部は無文であるが、16では貫通した孔と、貫通していない穴が縦に並んでいる。118-20と21、やや浅いレベルで出土している117-3、4、10、24も胎土や文様構成等これに近いが、同一個体とは断定出来ない。119-1も無文であるが、これらに類する資料である。

図118-22は、縦及び斜め方向の沈線と、口縁直下の円形連続刺突、内面は条痕による調整が見える。

図119-2は内面に条痕がある。119-4は波状の口縁で、口唇には刻みがあり、太い沈線文による文様を描かれる。鶯ヶ島台式に近い。119-5は接合していないが同一個体で、内面は横方向の条痕、外面は円形の連続刺突が巡り、やや崩れた格子目状の沈線文が描かれる。

図119-7は底部付近の破片で、縦と横方向にそれぞれに条痕が付けられている。胎土には黒雲母を多く含む。119-8は、太く浅い沈線による曲線を主体に文様を描き、口唇部には連続の刻みを入れている。内面は横方向の条痕。119-9は、内面は条痕が見られ、外面は押引状の沈線文で文様を描いている。119-10は判ノ木山西式であろう。

図119-13は硬く焼かれ、横方向の沈線文が巡る。119-14は貝殻腹縁文のある口縁から胴部破片。繊維が微量混入。口唇部にも貝殻で施文か。119-15は内面は横方向の条痕で、外面口唇には連続の刺突、その下部には斜めの沈線文が見られる。穿孔があり、胎土に繊維を含む。119-16はやや大型の口縁から胴部の破片で、ほぼ垂直に立ち上がる器形と思われる、外面は横方向の浅い条痕が巡る。119-17は斜めの条痕と、押し引き状の黄位の沈線文が2条巡る。119-18は繊維を含み、明瞭ではないが、内外面とも条痕文が残ると思われる。119-19は-170~-180cmとやや深い部分から出土しており、口縁部文様帯に横位の沈線と押引が巡る。図120-1は、縄文施文後、沈線文と刺突を入れている。

図120-2以下は、出土レベル不明のものとなる。120-2は口唇部に刻みを入れ、文様带上端に連続刺突、その下には3条の沈線による縦区画を軸に葉脈状の沈線を施文。内面は横方向の条痕が見られる。120-3は波状口縁で、太い沈線文により曲線を描く。口唇部には刻みがある。120-4は内外面とも条痕を施し、外面では太い沈線文と列点による文様を描く。胎土には鉍物を多く含む。

図120-5は胴下半部で、内外面とも多方向の条痕が見られる。胎土には繊維や鉍物を含む。120-6は外面に斜め条痕と太い沈線文の文様が、内面には横方向の条痕が見られる。120-7は外面がRL縄文による羽状縄文で、内面は条痕が施されている珍しい例。120-8は内面にも浅い条痕が見える。

図120-9は接合資料で、外面に条痕が見られる。120-10も同一個体。120-11は胎土に繊維を含み、内外面に条痕がある。120-12は条痕地文で刺突の被る隆帯で上下を区画し、上端区画には押角状の施文を充填している。内面も条痕の調整。120-15は内面が剥落。外面には擦痕(条痕)の上に沈線文を施す。120-16は条痕文と貝殻腹縁文が見られる。

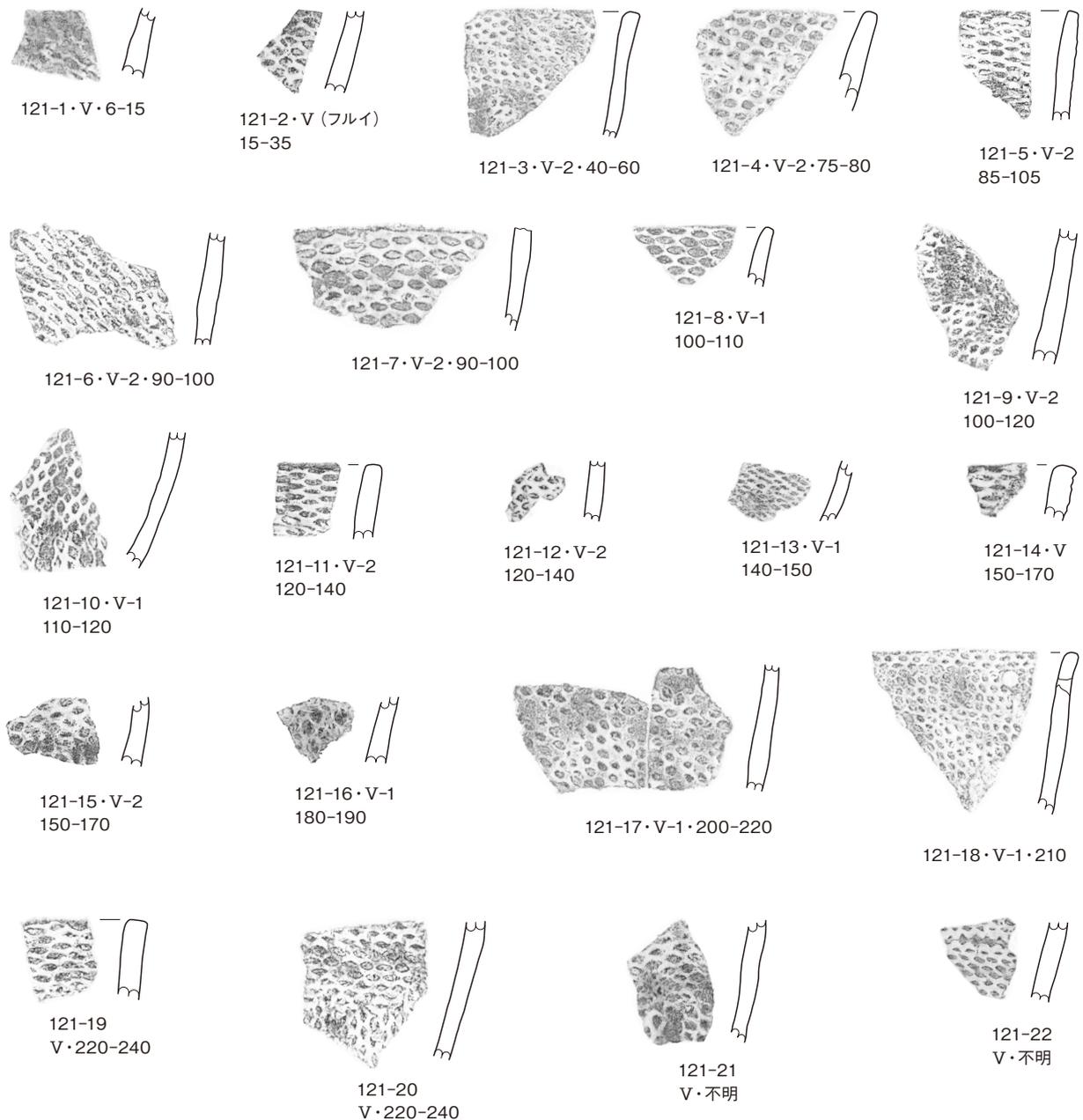


図121 V区 土器6 (S=1/3)

押型文系土器

V区でも押型文系土器が出土しているが、I～IV区とは異なり、格子目文を欠く。レベル的にはばらつきがある。

図121は楕円文施文の資料。黒雲母を含むものが多い。121-3～5は口縁を含む楕円文資料。3は黒雲母を多量に含み、121-4は硬く焼かれている。121-5は黒雲母を多量に含み。121-6は斜め方向に施文された胴部破片。121-10は胴下半部で縦方向に施文。121-13は横位密接の楕円文で、黒雲母を多く含む。121-14は口縁部破片。121-18は口縁を含む楕円文の資料で、黒雲母を多く含み、硬く焼かれている。穿孔がある。121-20は縦横両方向に楕円文が施文されている。121-21は楕円文の底部付近の資料。

図122-1～8は山形文施文の資料。硬く焼けているものが多い。122-1は胴下半部の資料。122-2は山形文横方向施文で、岩石を多く含む。122-3は山形文を横位帯状に施文。122-4は山形文を縦横それぞれに帯状に施文した例と思われる。薄手で硬く焼かれている。122-5は縦位密接施文

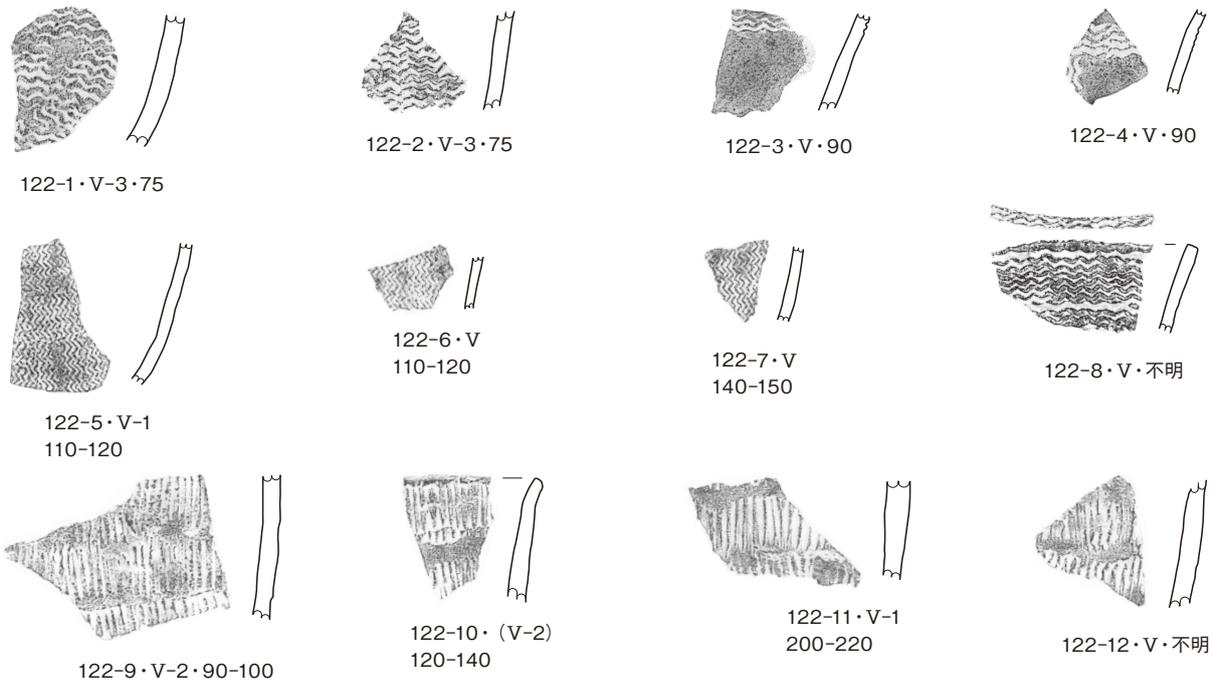


図122 V区 土器7 (S=1/3)

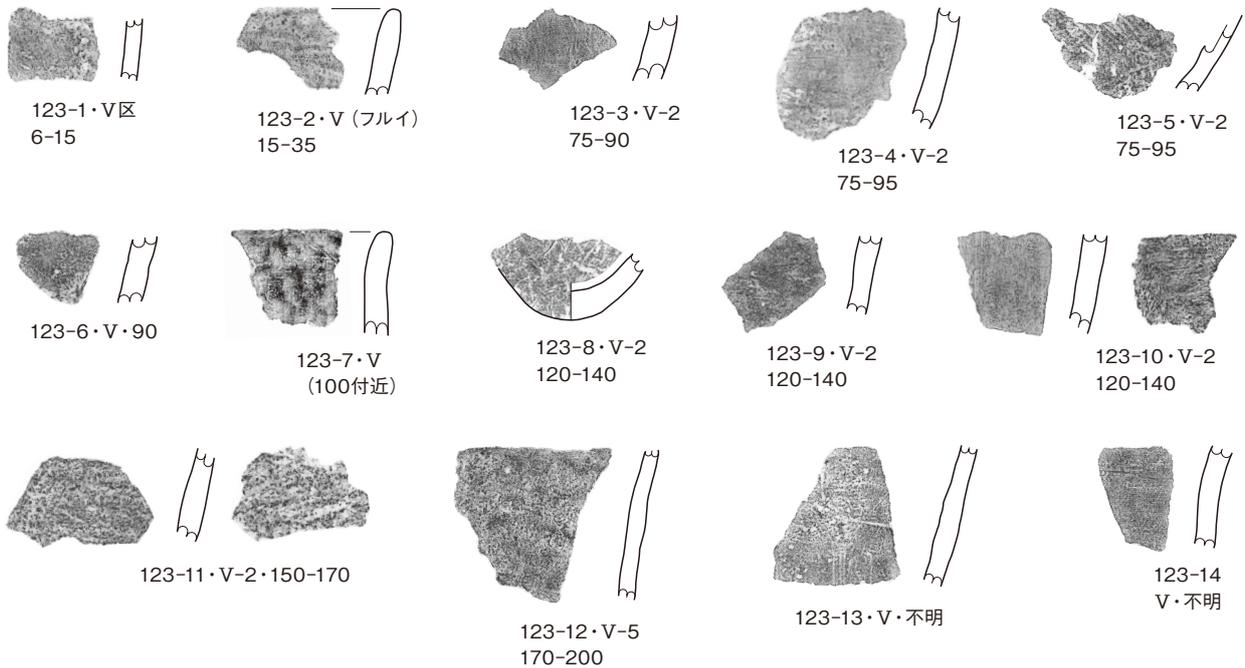


図123 V区 土器8 (S=1/3)

の胴下半部。122-6は縦位密接の刻みの細かい山形文。薄手である。122-8は横位に施文している口縁部で、口唇部にも施文がある。内面は丁寧な調整があり、薄手で硬く焼かれている。

図122-9～12は、キャタピラ状押型文の資料。いずれも焼成が良く、胎土の様子からも同一個体の可能性が高い。

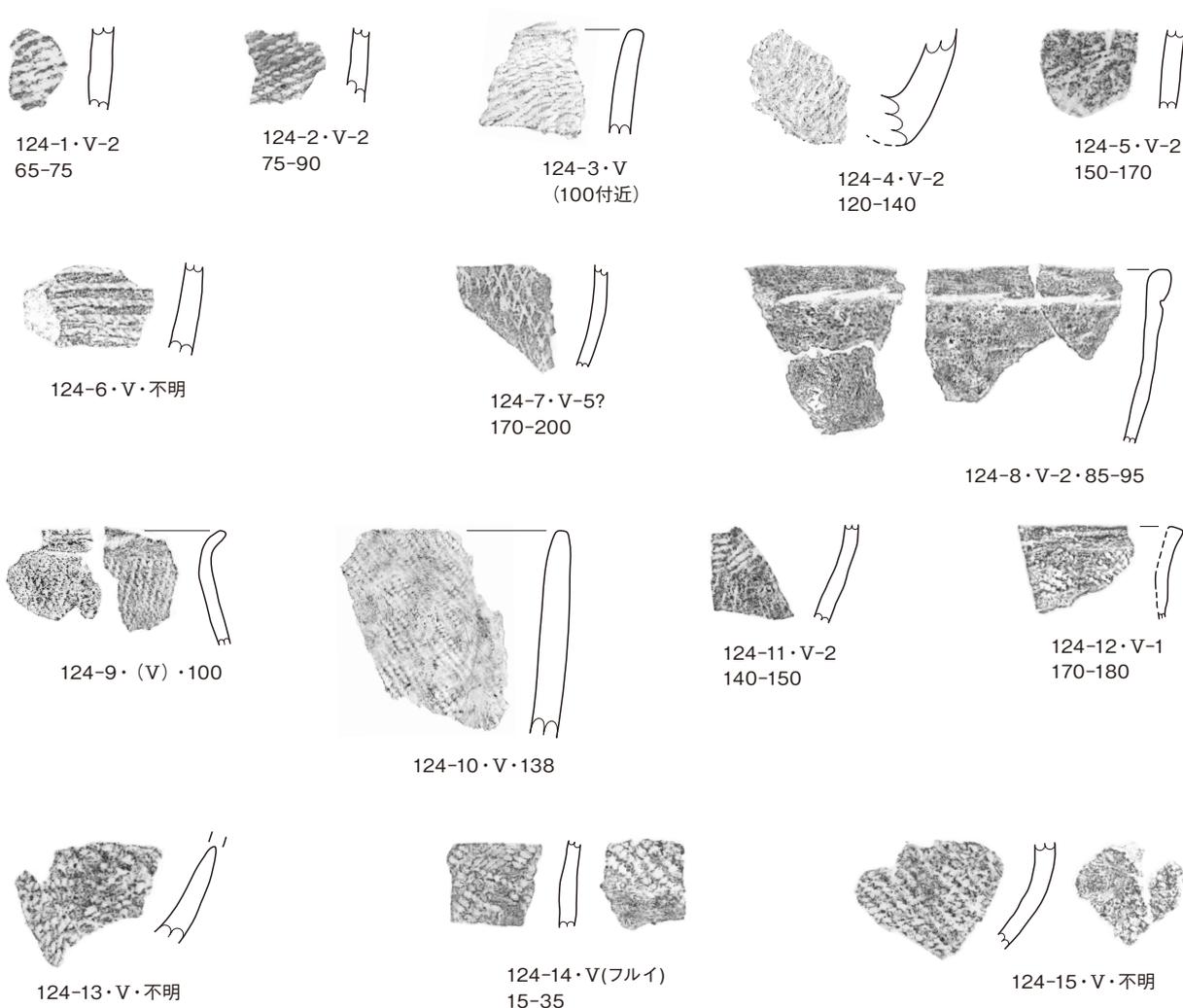


図124 V区 土器9 (S=1/3)

無文土器

図123はV区出土の無文土器。123-2はほぼ直立する無文の口縁部破片。123-5は底部付近で、浅い条痕ともとれる。123-7はごくわずかに屈曲する口縁部破片。123-8は無文で丸みを帯びた底部資料。

縄文・撚糸文土器

図124はV区出土の縄文または撚糸文施文の土器。124-4は撚糸文のある底部破片。124-7は一見格子目押型文に見えるが、網目状撚糸文と思われる。124-8は無文であるが、口縁下に連結させた沈線が巡り、撚糸文系土器の東山式と思われる。124-9は、口縁が屈曲する資料で、横位に1条のR縄文側面押圧が見える。124-10はほぼ垂直に立ち上がる口縁部の破片で、外面のみにLR縄文を施文している。124-13は外面LR縄文で、底部破片もしくは小型の土器となろう。124-14は表裏縄文土器で、外面はRL縄文を縦と横に回転させている。124-15は、出土レベル不明であるが、内外面にLR縄文施文の底部破片。

(2) 石器

剥片石器

剥片石器、またはその未製品、素材剥片、原石、残核を含めて紹介する。また厳密には、剥片以外の小型原石や残核等を素材にした製品も含んでいる。カウントした点数はおよそ4,700点、図示したのは747点である。石材では、8割りに当たる黒曜石がその代表となるが、チャートを主にしたその他の石材も、「中部」「上部」ではやや多い。

ここでは、石鏃、拇指状搔器、その他分類可能な石器、加工のある剥片等、両極剥離剥片、原石、残核、剥片の順に、基本的に黒曜石とそれ以外の石材に分け掲載した。但し土器同様、V区出土資料については別にしていく。

尚、黒曜石製石器については、蛍光X線による産地推定分析を150点行なっている。その結果については、過去に発表もされているが（藤森2011a）、基礎資料の一部として第5章(6)に掲載している。

石鏃

図125～129は石鏃と、未成品などその関連資料。基本的に両面加工で、二次加工が全面に及んでいるものが多いが、主要剥離面や自然面・風化面を残すものもある。形態的には多様であるが、脚部を持つものは「中部」に多く、「下部」では小型三角形のものが目立つ。また少数であるが、抉り部に磨面を持つ、いわゆる局部磨製石鏃がある。

図125～128は黒曜石製の石鏃及び関連資料である。図125-2は、抉り部両面に磨面がある。125-7、8は分厚く形状も不揃いで、未成品だろうか。125-9は欠損があるが、やや大型の例。125-13は片面のみの加工で未成品だろうか。

図125-19は左右均等の作りで、表裏面ともに抉部に磨きが見て取れる。125-20、23、27、28にも抉り部に磨きが見られ、いずれも-220～260cm出土で、-48cm出土の2を除くと、「中部」での出土となる。125-25は主要剥離面が残る。125-26はやや作りが荒い。

図126-2は左側縁が欠損するが、裏面は二次加工が少ない。126-3は深い抉りと意図的に側縁を鋸歯状の凹凸を残した例と思われ、128-27と同様と思われる。126-10は板状の小型原石素材と思われるが、未成品かもしれない。126-16は裏面に主要剥離面が残る。126-17は表裏に若干の磨面がある。

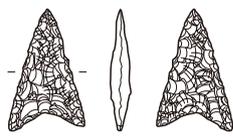
図126-22以降は、出土レベル-380cm以下の「下部」出土の資料。これより上のレベルでも、図126-9や19の例もあるが、「下部」では126-26や28のような重さ0.2g以下の小型のものが増えてくる。126-27は未成品だろうか。

図127では、5、6、8、10、19、20、30、31のように、出土レベル-450～480cm付近で主要剥離面を残すものがやや目立つ。また5、18、19、21、20、31、など小型三角形の形状が多い。127-28は両面にやや風化した面を残し、厚みからも未成品かもしれない。

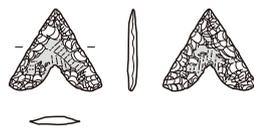
図127-31～図128-21は-500cm付近以下の黒曜石製石鏃。図128-2、4、8、12、13のような、小型で正三角形に近い形状の資料が目立つ。128-9は未製品であろうか。

図128-22～28は出土レベル不明のもの。128-22と23は未製品だろうか。128-28は、抉り部両面に磨面がある。

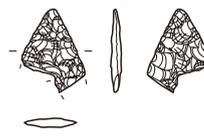
図129は、黒曜石以外の石材の石鏃である。大部分がチャート製だが、その他に水晶、頁岩が認められる。比較的大型の脚部を持つものが「中部」、小型三角鏃が「下部」に多い傾向は黒曜石と同様



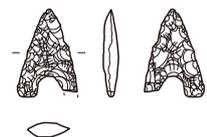
125-1・不明・35



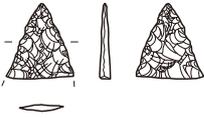
125-2・奥の院・48



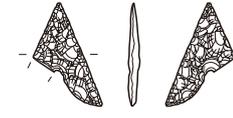
125-3・II・0・50



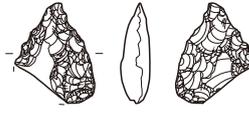
125-4・不明・60



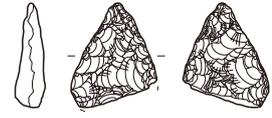
125-5・不明・145



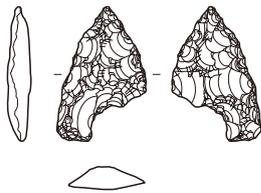
125-6・I・抔・175



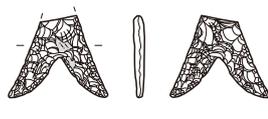
125-7・I・200



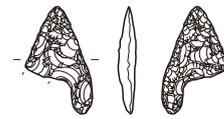
125-8・I・210



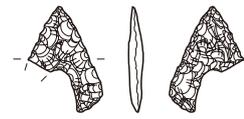
125-9・不明・不明



125-10・8号人骨下・211



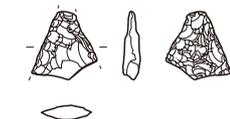
125-11・II・219



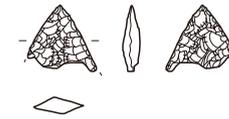
125-12・I・220



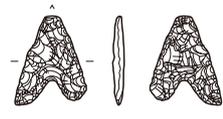
125-13・II・220



125-14・II・220



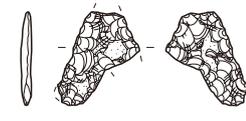
125-15・II・220



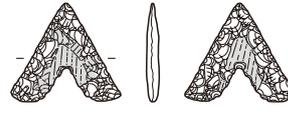
125-16
溝(13orB)・220



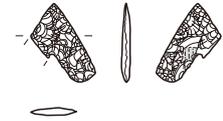
125-17・不明・220



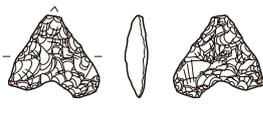
125-18・不明・220



125-19・不明・220



125-20・不明・220



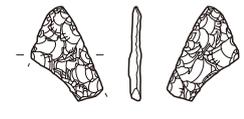
125-21・不明・220



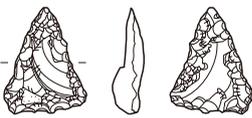
125-22・奥の院・230-240



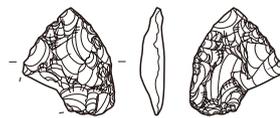
125-23・I・230-240



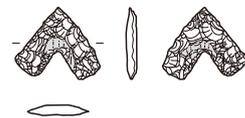
125-24・II・230-240



125-25・不明・235



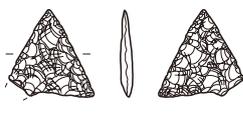
125-26・II・240



125-27・奥の院・250-260



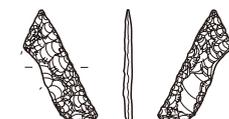
125-28・奥の院・250-260



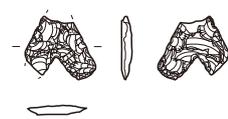
125-29・I・抔人骨・253-265



125-30・III・1・255-260



125-31・II・260-270

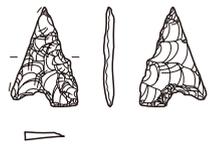


125-32
中央配石70下・270

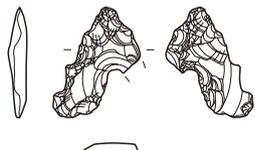
图125 I~IV区 剥片石器1(S=2/3)



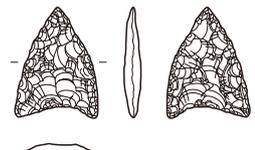
126-1・奥の院・270-280



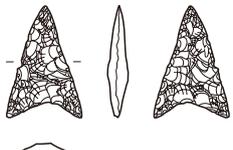
126-2・奥の院・270-280



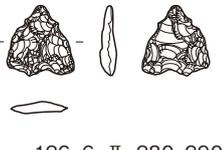
126-3・Ⅱ・270-280



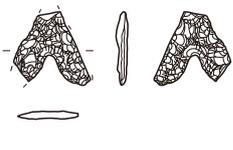
126-4・Ⅱ・270-280



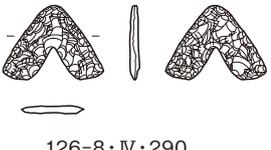
126-5・Ⅲ・270-280



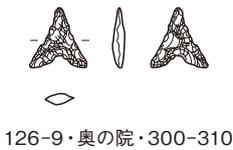
126-6・Ⅱ・280-290



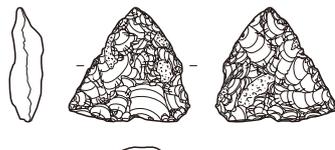
126-7・Ⅲ-2・280-290



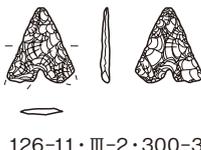
126-8・Ⅳ・290



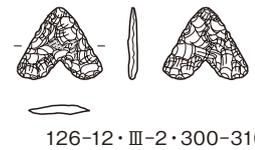
126-9・奥の院・300-310



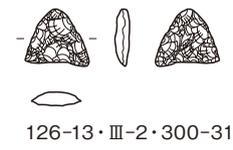
126-10・Ⅲ-2・300-310



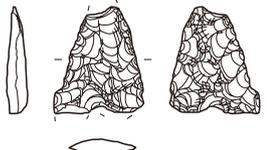
126-11・Ⅲ-2・300-310



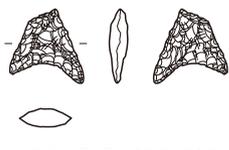
126-12・Ⅲ-2・300-310



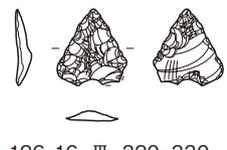
126-13・Ⅲ-2・300-310



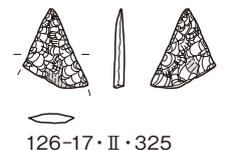
126-14・Ⅱ-1・310-320



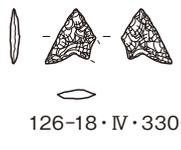
126-15・Ⅱ・320-330



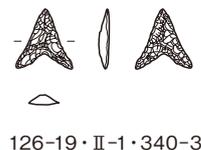
126-16・Ⅲ・320-330



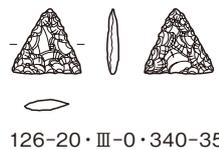
126-17・Ⅱ・325



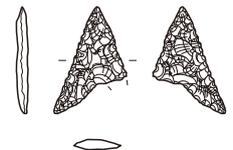
126-18・Ⅳ・330-340



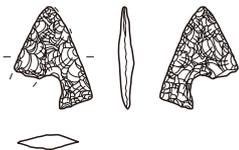
126-19・Ⅱ-1・340-350



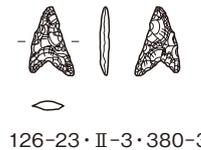
126-20・Ⅲ-0・340-350



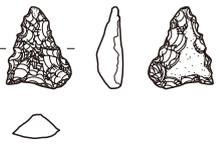
126-21・Ⅲ-0・340-350



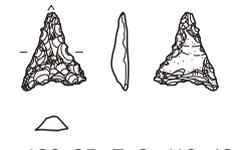
126-22・Ⅲ-1・380



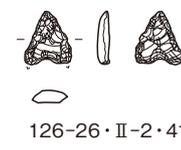
126-23・Ⅱ-3・380-390



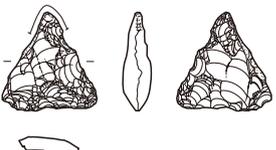
126-24・Ⅱ-3・460



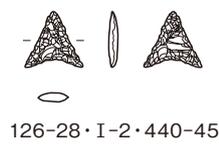
126-25・Ⅱ-2・410-420



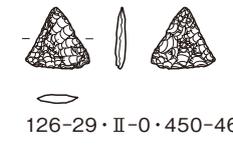
126-26・Ⅱ-2・410-420



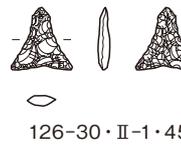
126-27・Ⅱ-2・435-440



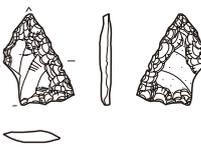
126-28・Ⅰ-2・440-450



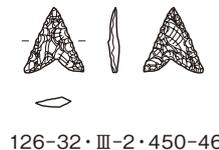
126-29・Ⅱ-0・450-460



126-30・Ⅱ-1・450-460



126-31・Ⅱ-3・450-460



126-32・Ⅲ-2・450-460

图126 I~IV区 剥片石器2 (S=2/3)

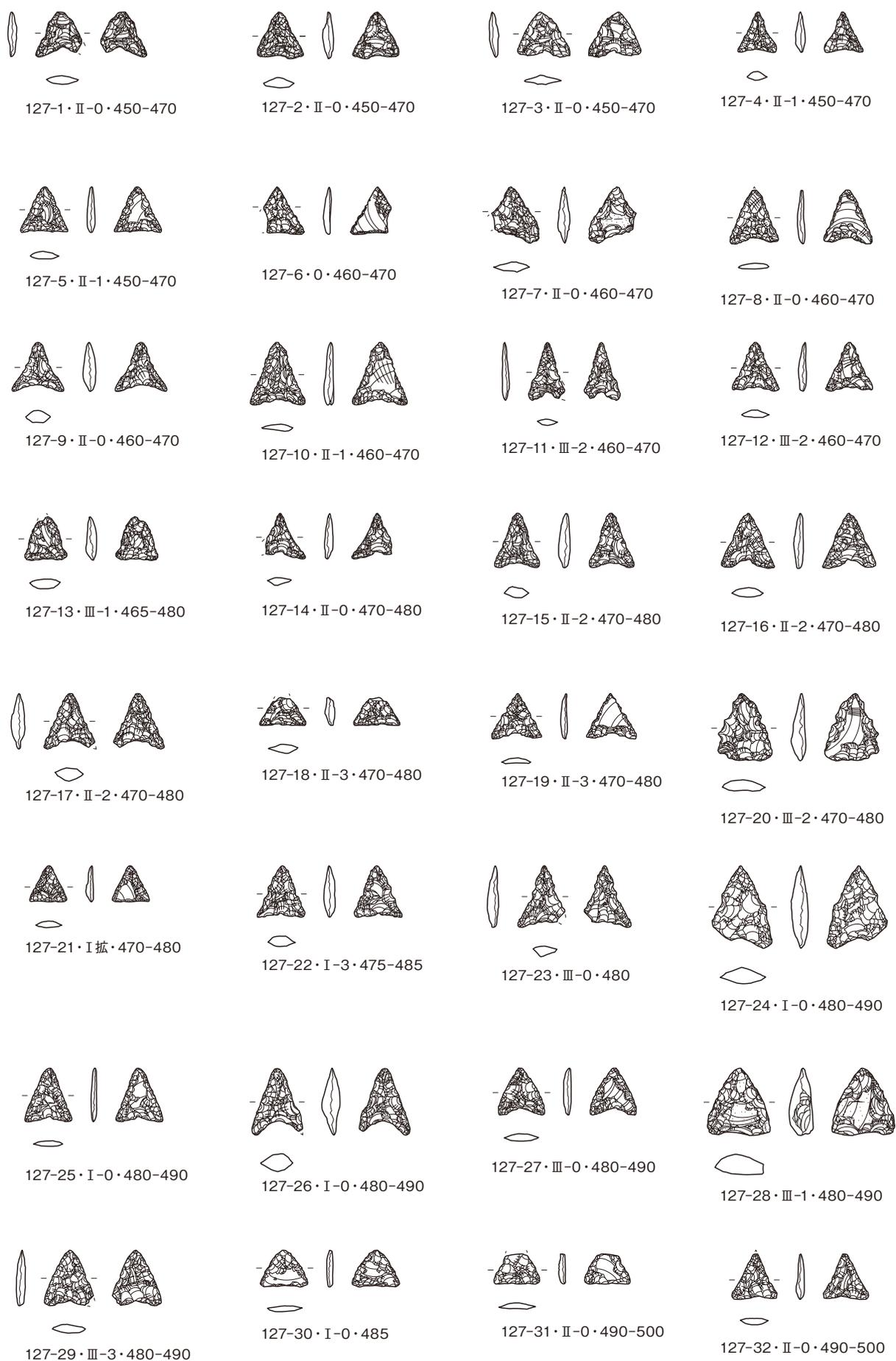


图127 I~IV区 剥片石器3(S=2/3)

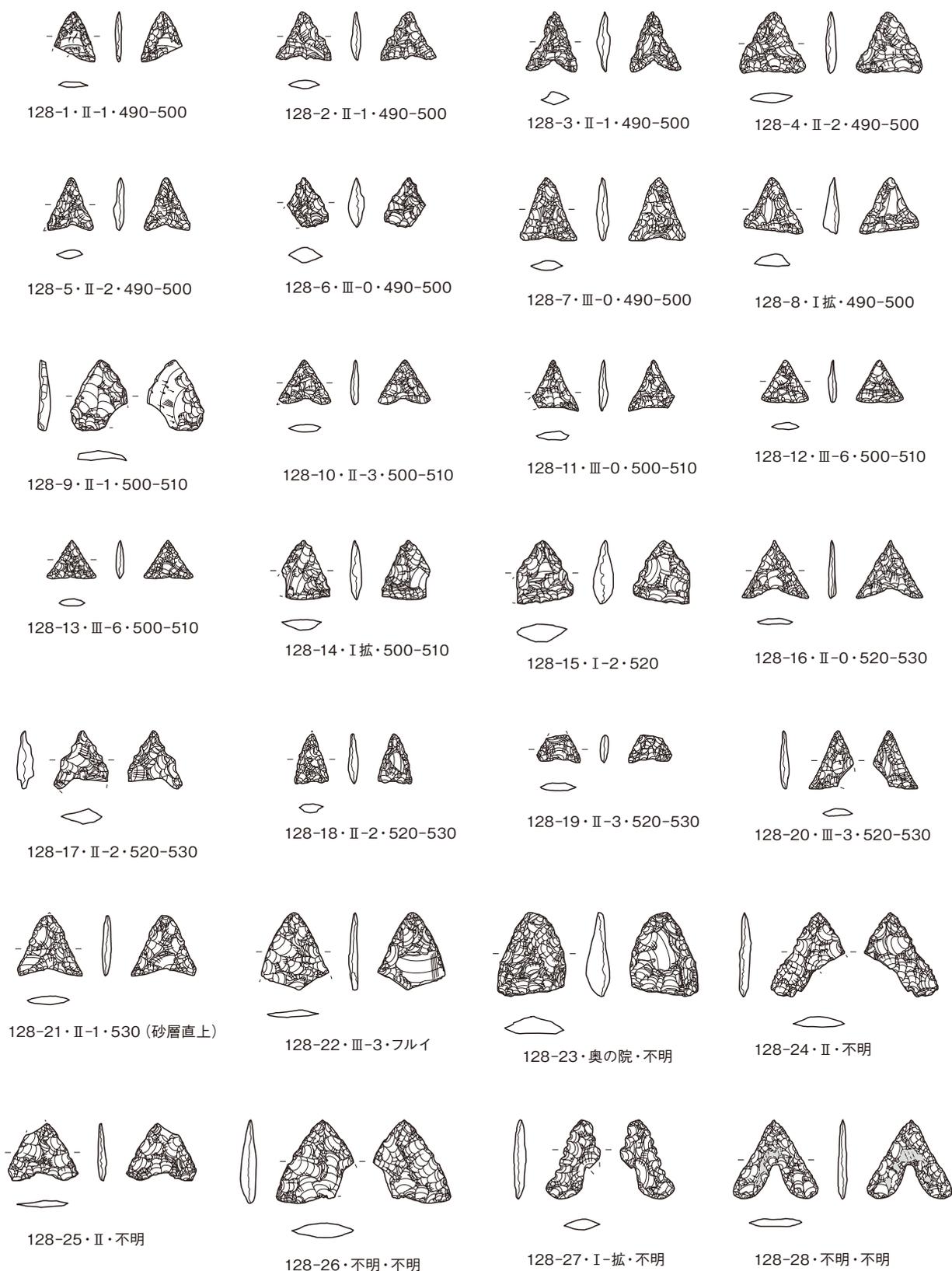


図128 I~IV区 剥片石器4 (S=2/3)

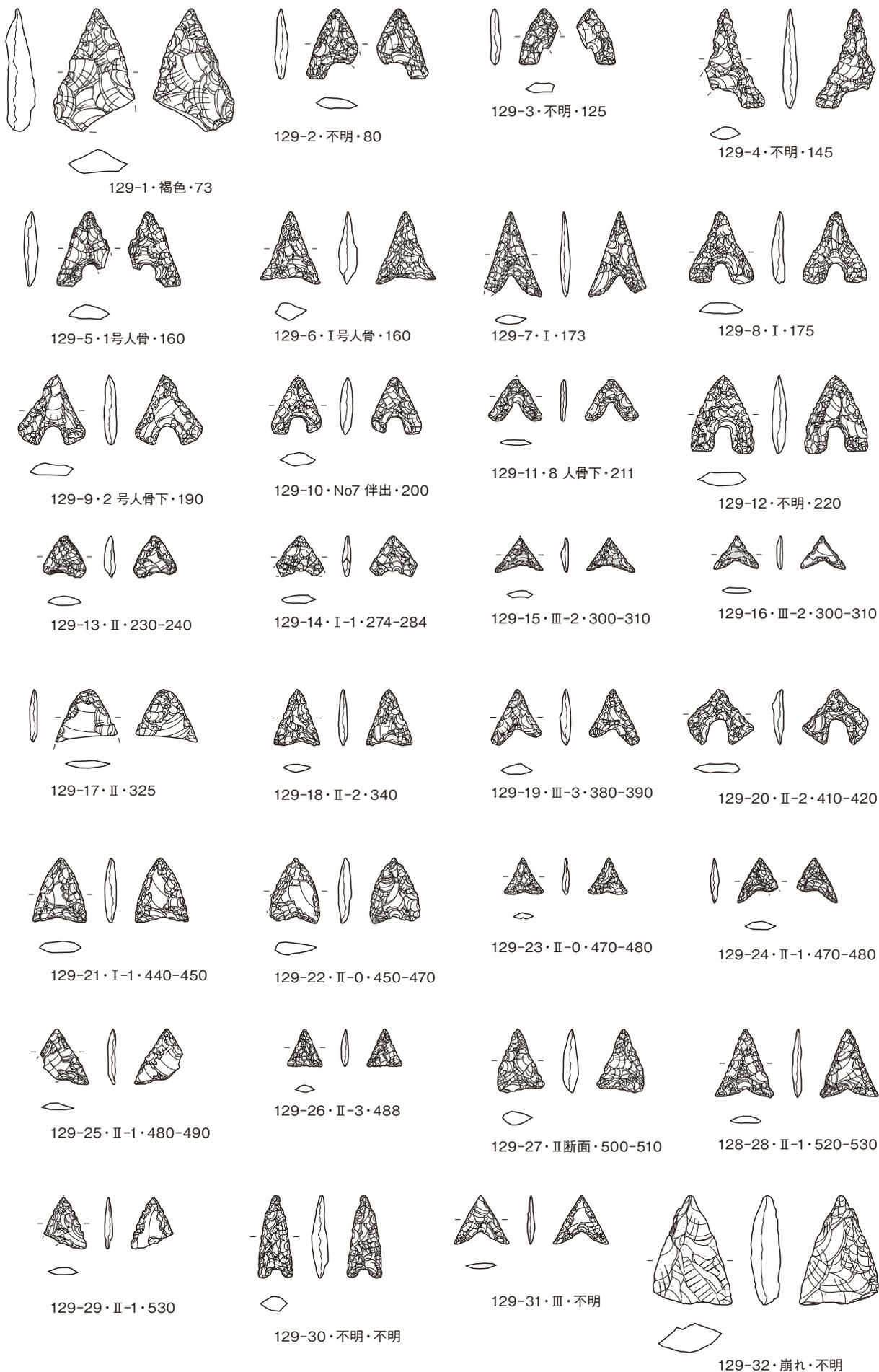


图129 I~IV区 剥片石器5 (S=2/3)

である。

水晶製の129-1と32は、ここでは石鏃未成品としたが、ポイント状の石器と考える余地もある。129-2～28はチャート製。9、16、17、21、22、25は主要剥離面が残ると思われる。15、16は小型で両脚が大きく開く形態で、磨面を持つ。129-29は頁岩製で、主要剥離面を残す。

拇指状搔器

小型の剥片石器には不定形なものが多いが、図130～133には、ある程度定義付けが可能な小型のエンドスクレイパー、所謂拇指状搔器を抽出した。

比較的小型の剥片あるいは小型の原石の一部を、片面から急角度で剥離し、分厚い弧状の刃部を作り出しているものをここ含めた。しかし、後に示す二次加工を持つ石器の一部との判別は難しい場合もある。

素材剥片もしくは原石の形態を知りうる資料も多く、大きくは通常の剥片素材、両極剥片素材、小型原石を素材としたものがあるが、剥片の中には自然面を残したものが多い。また原石素材としたものは、板状の原石や、古い剥離面に覆われたものを含む。石材はほぼ黒曜石に限定される。出土レベルは、図130-1～3を除き、-400cm以下の「下部」に集中し、表裏縄文土器が主体のレベルとほぼ重なる。

図130-3は二次加工が全周に近く施され、全体が円形に近い。130-5や8、10、15なども同様に、形状を整える必要からか、あるいは刃部として機能する部位が広がった可能性もあろうか。130-8はやや厚みのある原石素材。130-12は自然面が多く、素材の形を利用し先端に急角度の刃部を設けている。130-14は小型だが、二次加工の剥離は多い。

図131-1、7、18は、小型で板状の原石を加工した例。15や17も、やや風化した剥離面に覆われた素材を用いている。131-9は、裏面右側辺で線状痕とポリッシュが確認されている（藤森1996）。皮なめしに用いたと想定される。また、131-5や9、10は両極打法による剥片を素材としている。

図132-2は厚みのある自然面（古い剥離面）を残した剥片を利用。132-7は裏面（主要剥離面）が大きく湾曲しており、その形状のまま急角度の刃部を設けている。132-8は風化面に覆われていた原石を、ほぼ円形に加工している。132-15や18は板状原石を利用したものであろう。

図132-20～図133-17は-500cm以下の出土。132-20や133-3、4、6、8のような両極剥片素材も多い。133-5は板状の原石を一部両面から加工している。133-9は厚みが1.4cmある分厚い剥片を素材としている。

石匙状石器

石鏃と拇指状搔器以外に、定型的な形態の石器を見出すことは困難だが、わずかであるが、縦長剥片等の側縁を加工し、さらに基部近くに抉り状の剥離を施した資料がある。後の石匙と呼ばれる定型石器に通ずる形態とも思われるが、ここでは3点の例を挙げた。図134-1と2は縦長の小型剥片素材で、1は両面から、2はほぼ片面から二次加工。134-3はやや大型の板状原石を両面から加工している。いずれも「下部」の-440cm以下の出土となる。

石 錐

剥片の一端を細く加工した、錐状の資料である。図134-4は主に片面から、5は両面からの加工で先端部を作り出している。いずれも「下部」の-450cm以下からの出土。4は板状原石が素材で

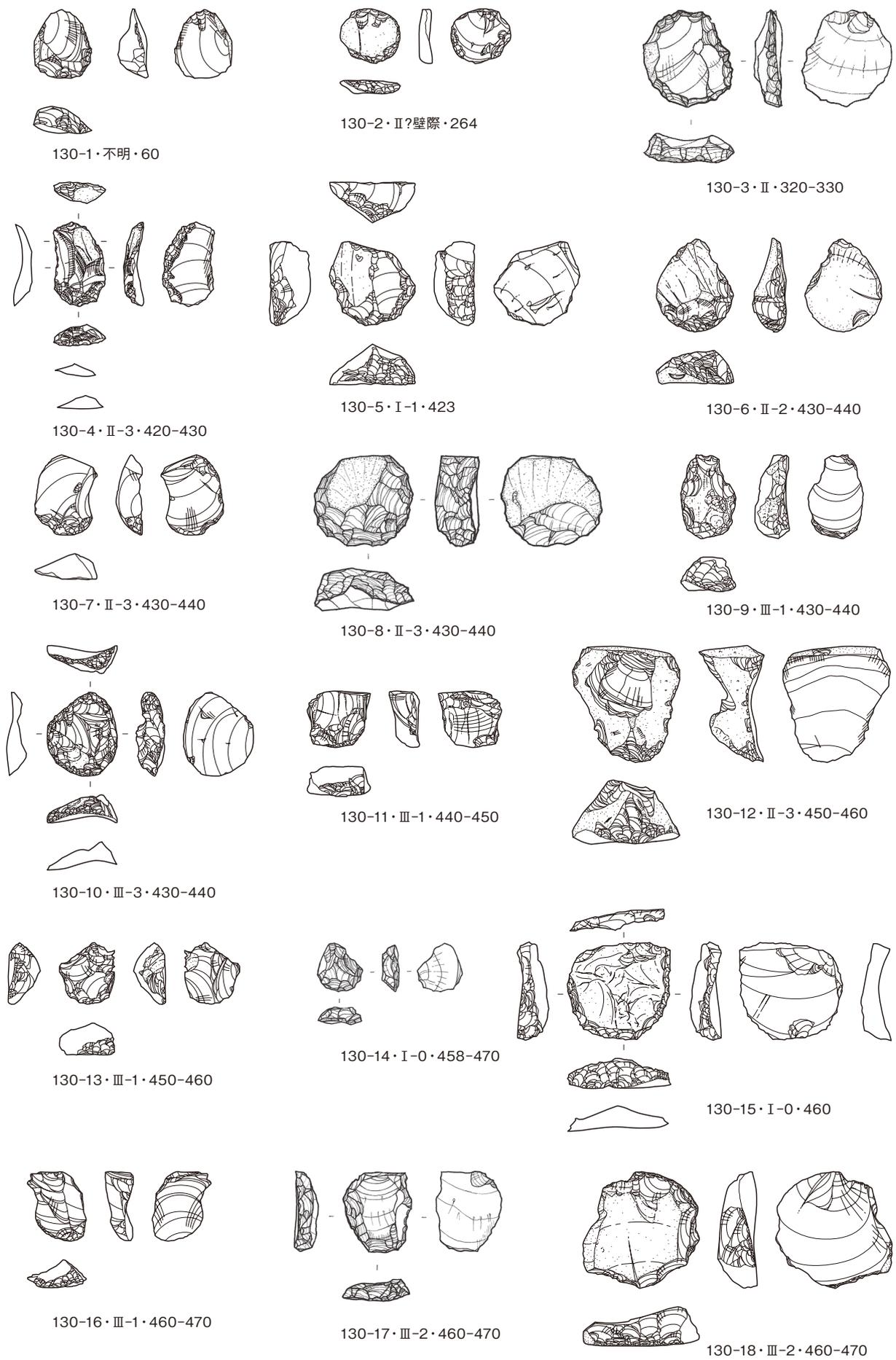
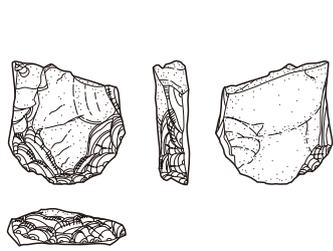
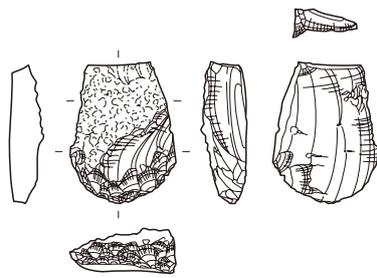


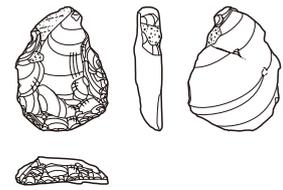
图130 I~IV区 剥片石器6 (S=2/3)



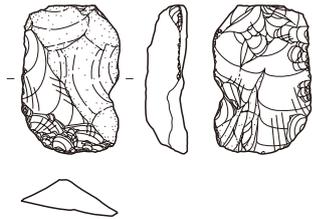
131-1・Ⅲ-2・460-470



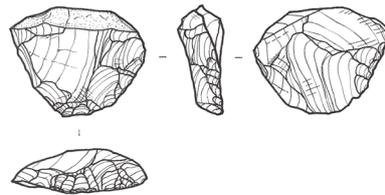
131-2・Ⅲ-2・460-470



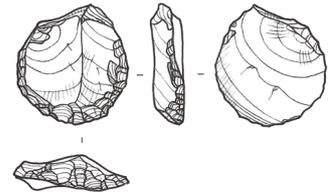
131-3・奥の院・460-470



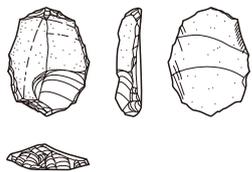
131-4・Ⅲ-0・465-480



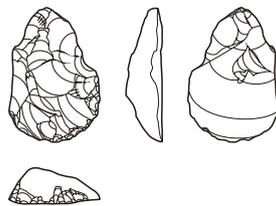
131-5・Ⅱ-3・470



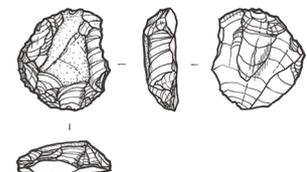
131-6・Ⅱ-3・470



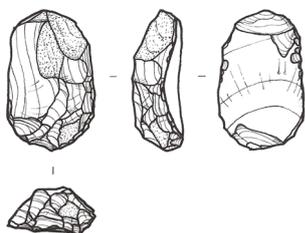
131-7・Ⅲ-2・470



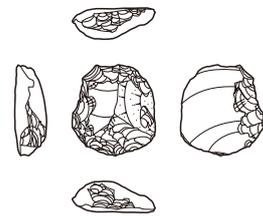
131-8・Ⅱ-0・470-480



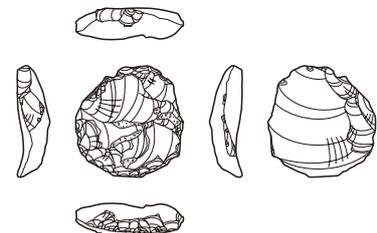
131-9・Ⅱ-0・470-480



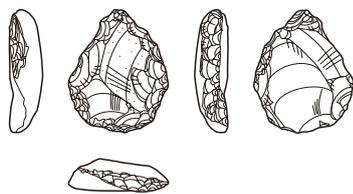
131-10・Ⅱ-1・470-480



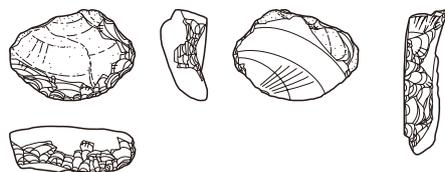
131-11・Ⅱ-2・470-480



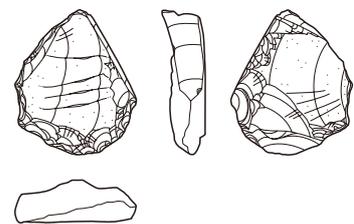
131-12・Ⅱ-3・470-480



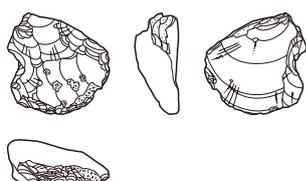
131-13・Ⅲ-0・470-480



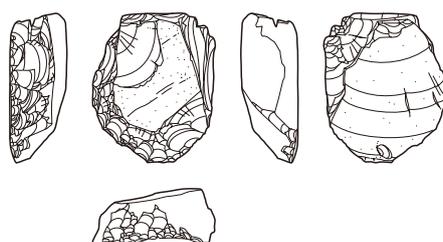
131-14・Ⅲ-2・470-480



131-15・Ⅲ-3・470-480



131-16・Ⅲ-3・470-480



131-17・奥の院・470-480



131-18・Ⅱ-0・470-480

図131 I~IV区 剥片石器7 (S=2/3)

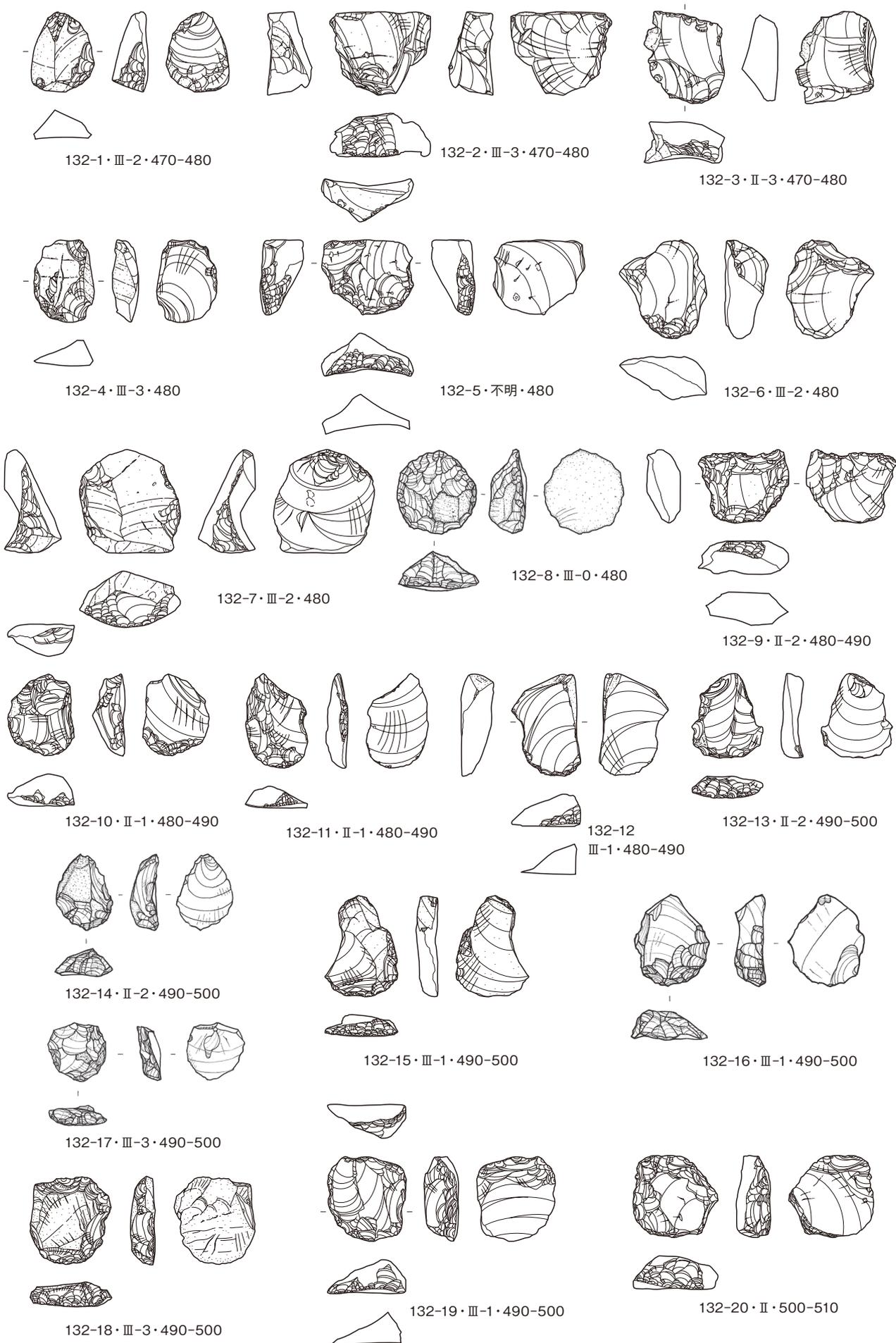
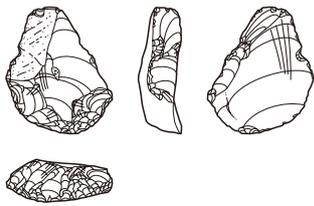
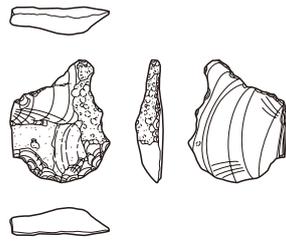


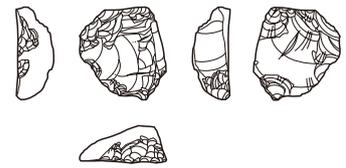
图132 I~IV区 剥片石器8 (S=2/3)



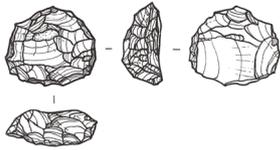
133-1・II-1・500-510



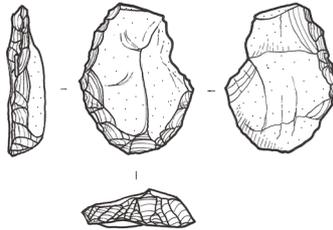
133-2・II-3・500-510



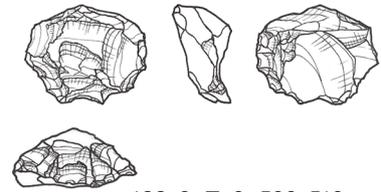
133-3・III-0・500-510



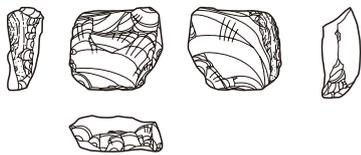
133-4・III-0・500-510



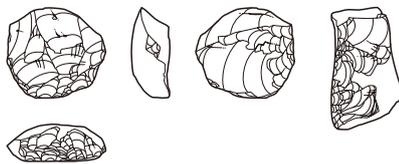
133-5・IV-1・500-510



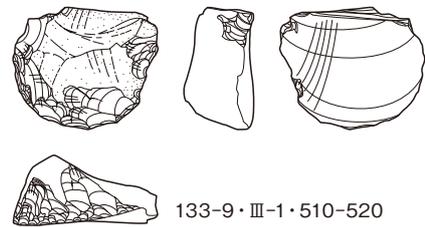
133-6・III-0・500-510



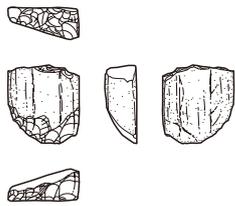
133-7・I・510-520



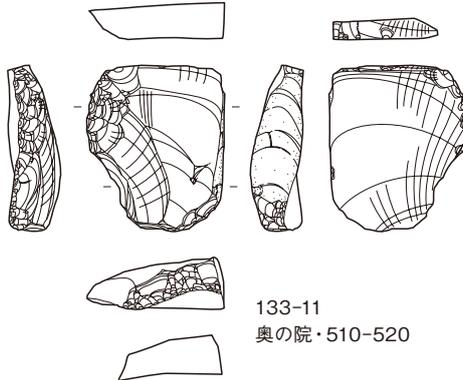
133-8・II-1・510-520



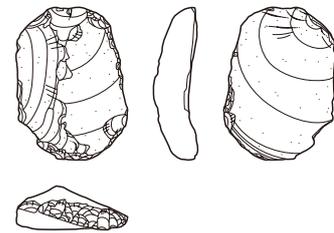
133-9・III-1・510-520



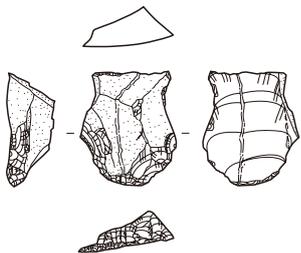
133-10・III-2・510-520



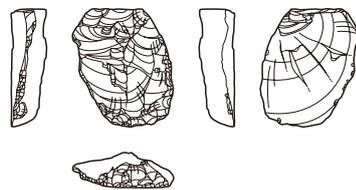
133-11
奥の院・510-520



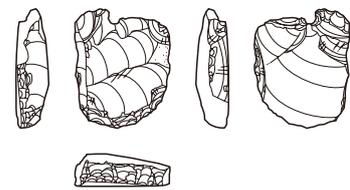
133-12・I・510-530



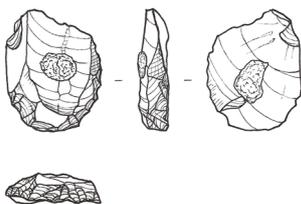
133-13・I-2・520



133-14・III-1・520-530



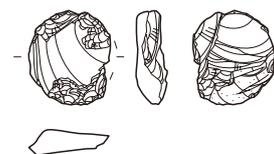
133-15・不明・520-530



133-16・II-1・535



133-17・IV-1・550-560



133-18・崩れ・不明

図133 I~IV区 剥片石器9 (S=2/3)

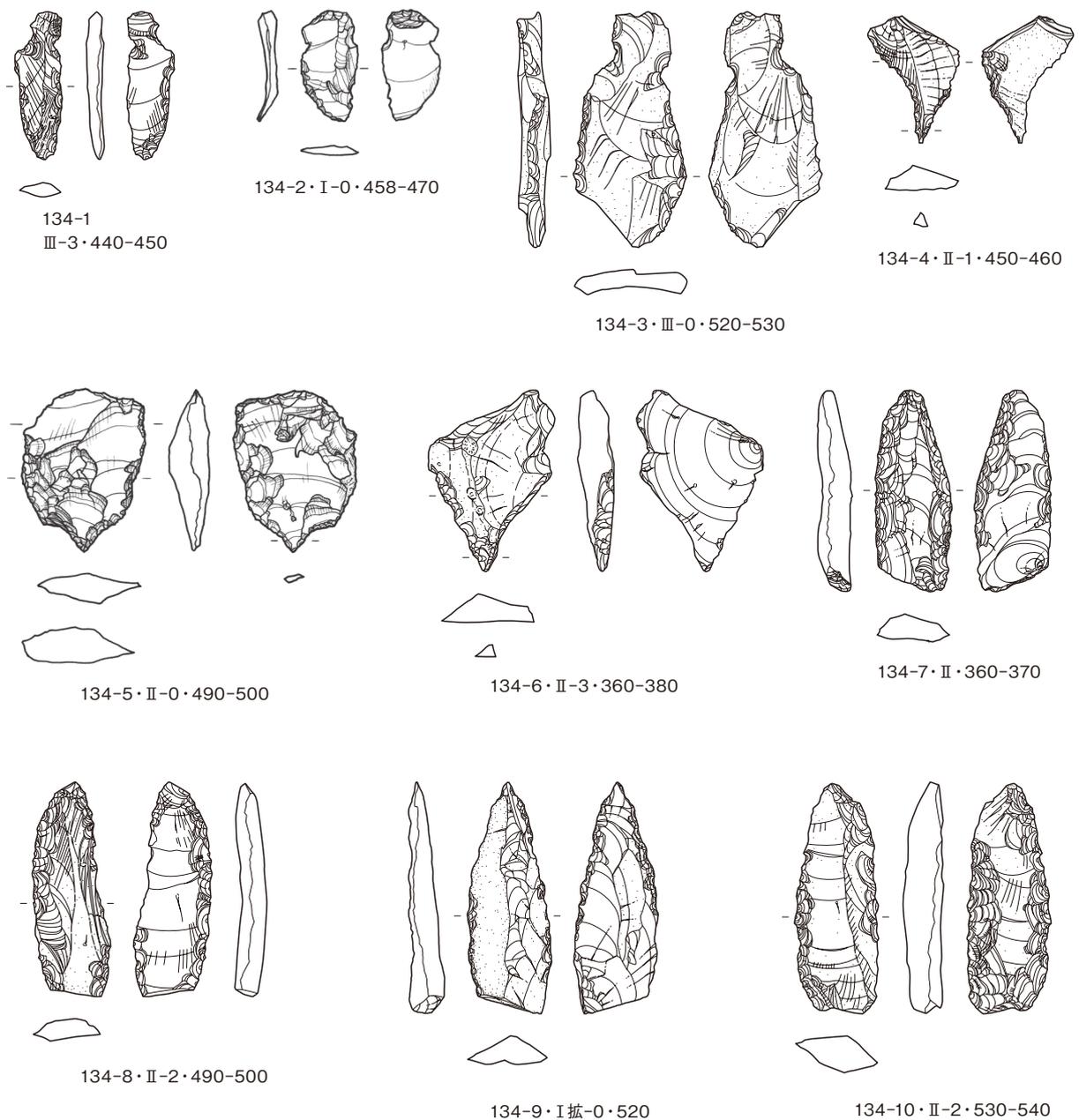


図134 I~IV区 剥片石器10 (S=2/3)

ある。6は石錐か否か判断は難しいが、-360~380cmの出土で、横長の剥片の一端を片面からの加工し、先端部を作り出している。

縦長両面加工石器

定型的とはいえないが、やや特徴的なものを挙げた。いずれも縦長の素材を両面加工により柳葉状に成形したもので、図134-8と10は黒曜石製、7と9はチャート製である。7を除いて「下部」の-500cm付近以下からの出土である。10は、やや厚みをもつ古い剥離面を待つ板状原石を素材としている。

スクレイパー類・二次加工のある剥片・使用された剥片他

小型剥片石器には多種多様なものが含まれるが、本報告では従来の搔器（エンドスクレイパー）や

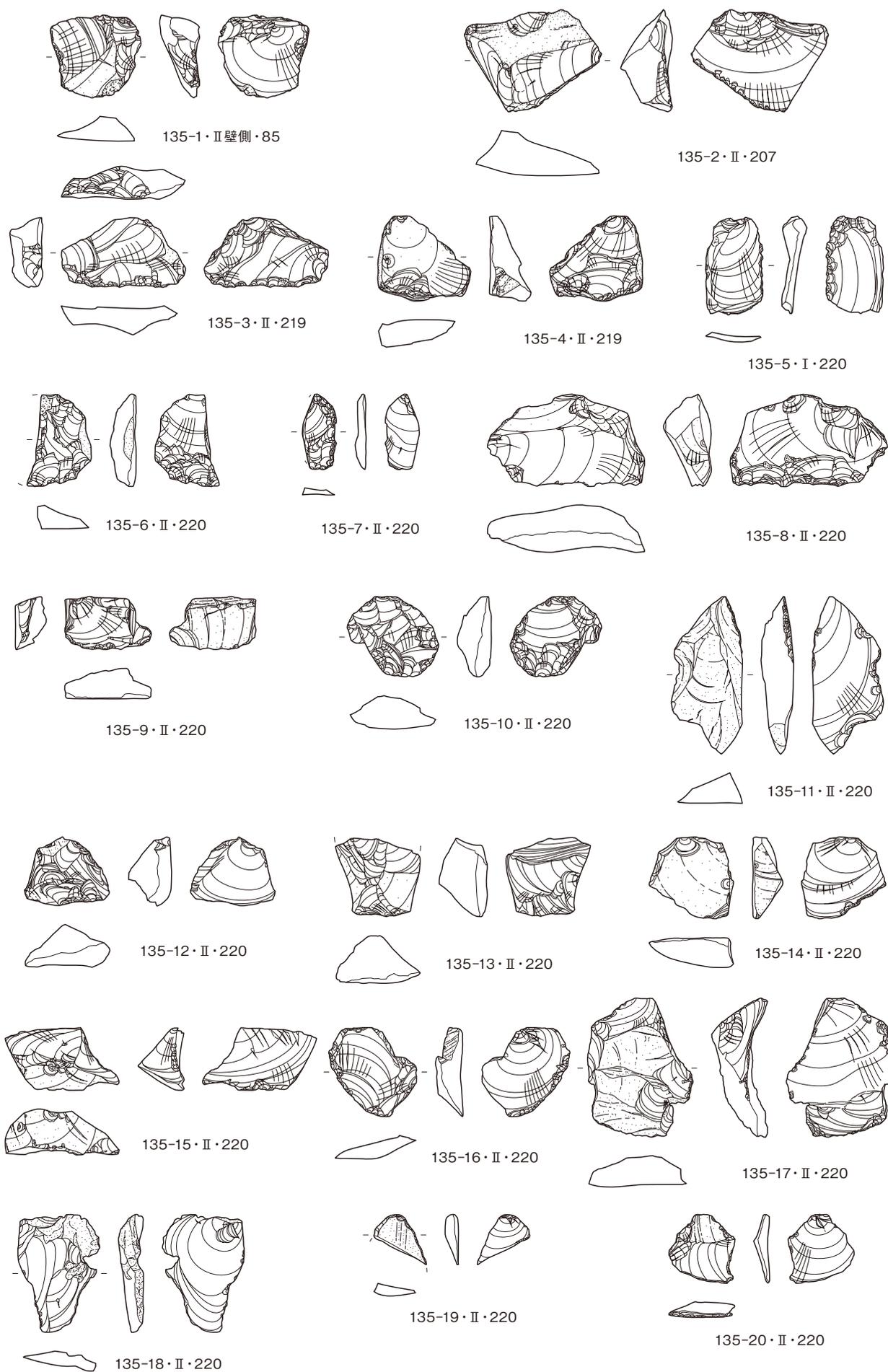


图135 I~IV区 剥片石器11 (S=2/3)

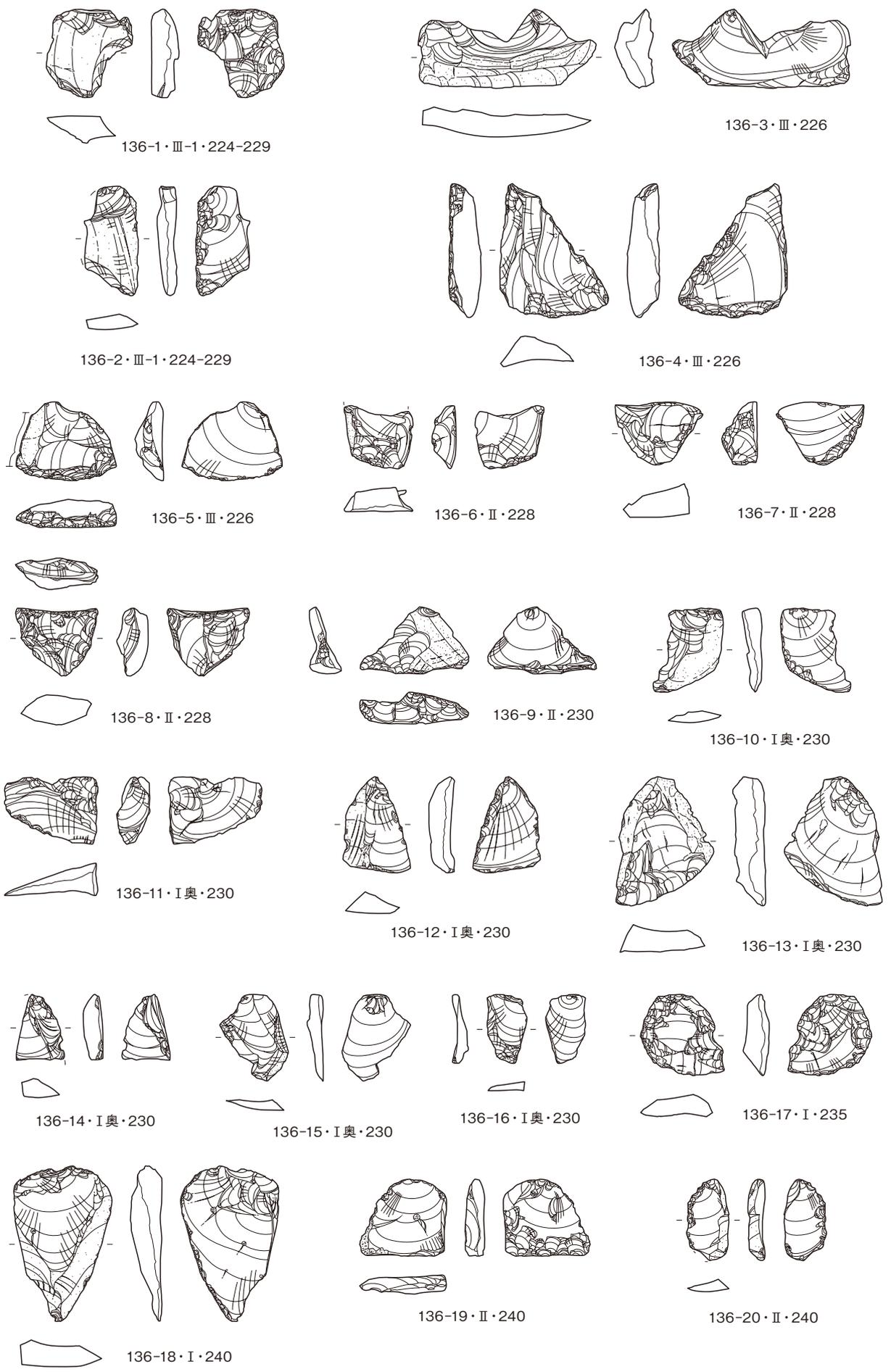
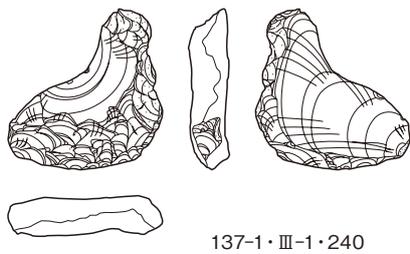
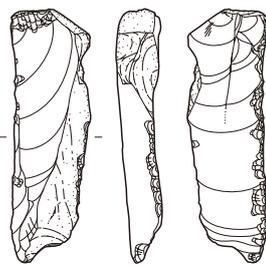


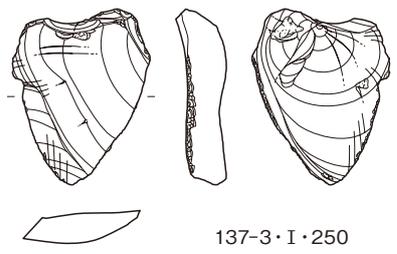
图136 I~IV区 剥片石器12 (S=2/3)



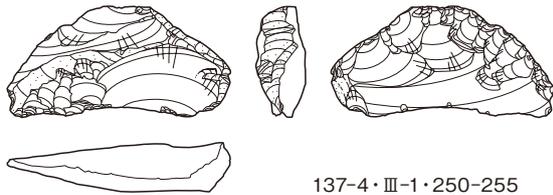
137-1・Ⅲ-1・240



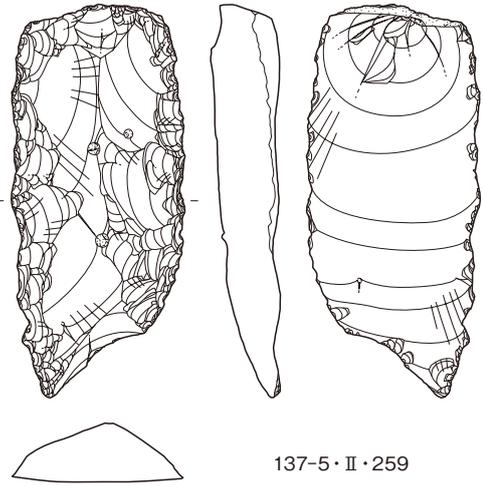
137-2・Ⅲ-1・240



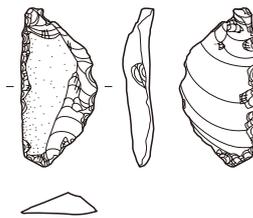
137-3・Ⅰ・250



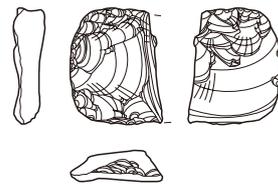
137-4・Ⅲ-1・250-255



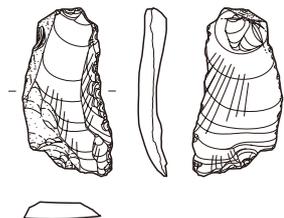
137-5・Ⅱ・259



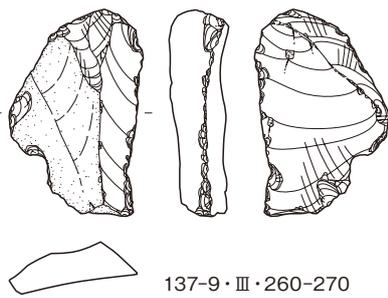
137-6・Ⅱ・260-270



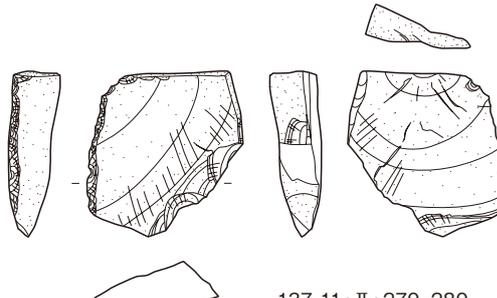
137-7・Ⅲ・260-270



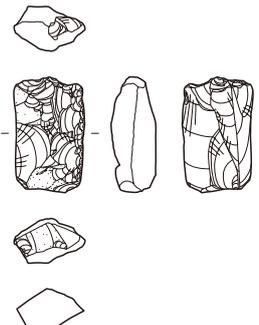
137-8・Ⅲ・260-270



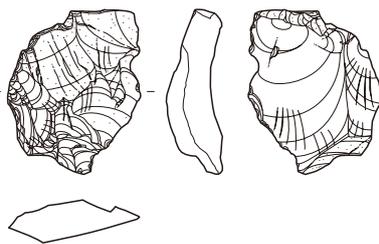
137-9・Ⅲ・260-270



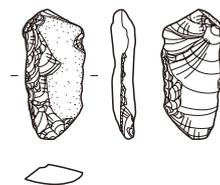
137-11・Ⅱ・270-280



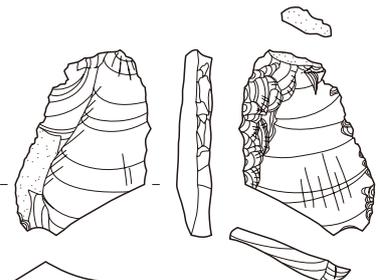
137-13・奥の院・300-310



137-10・奥の院・260-270



137-12
Ⅲフルイ・280-290



137-14・Ⅲ-1・310-320

図137 I~IV区 剥片石器13 (S=2/3)

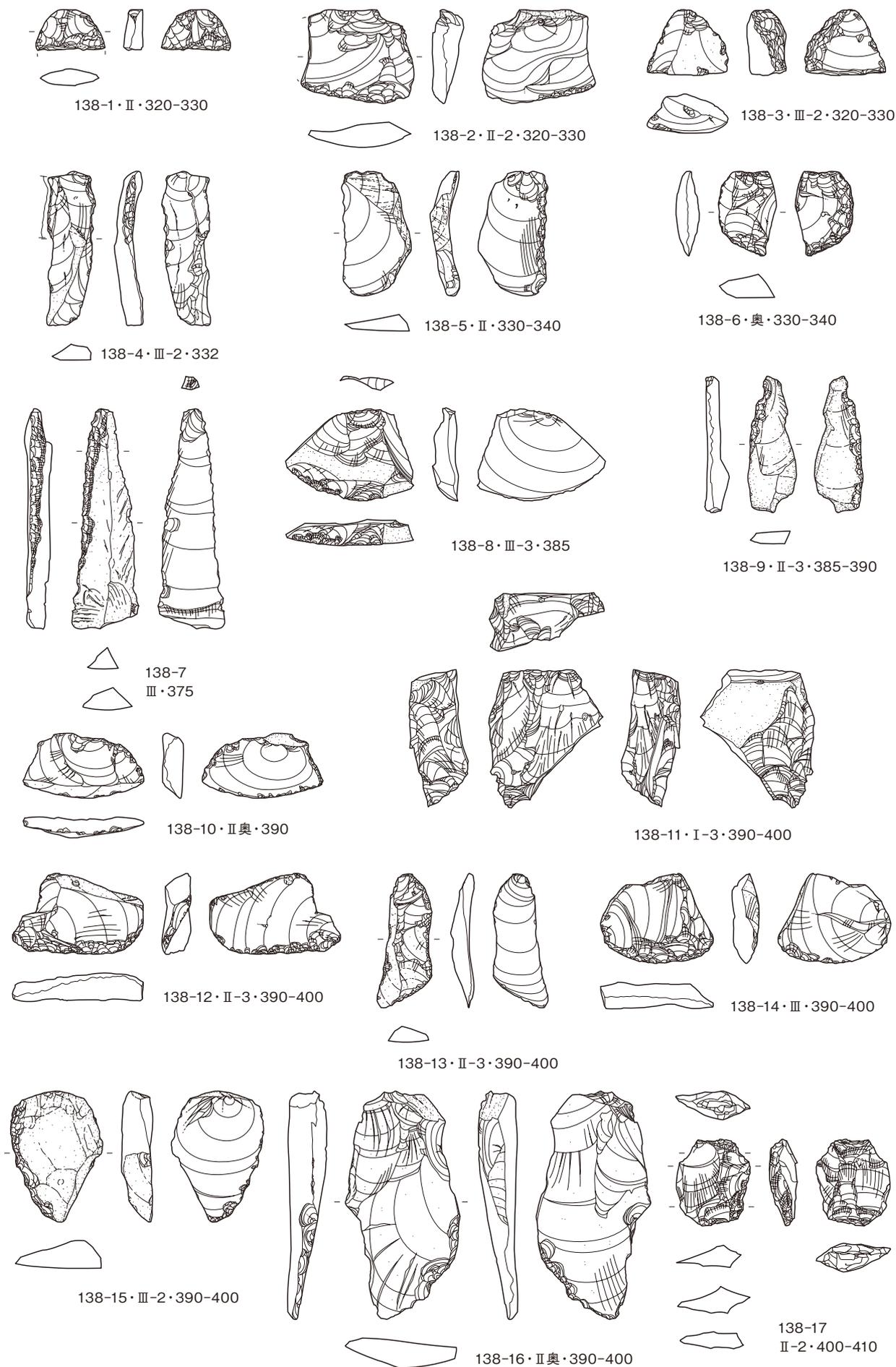


图138 I~IV区 剥片石器14 (S=2/3)

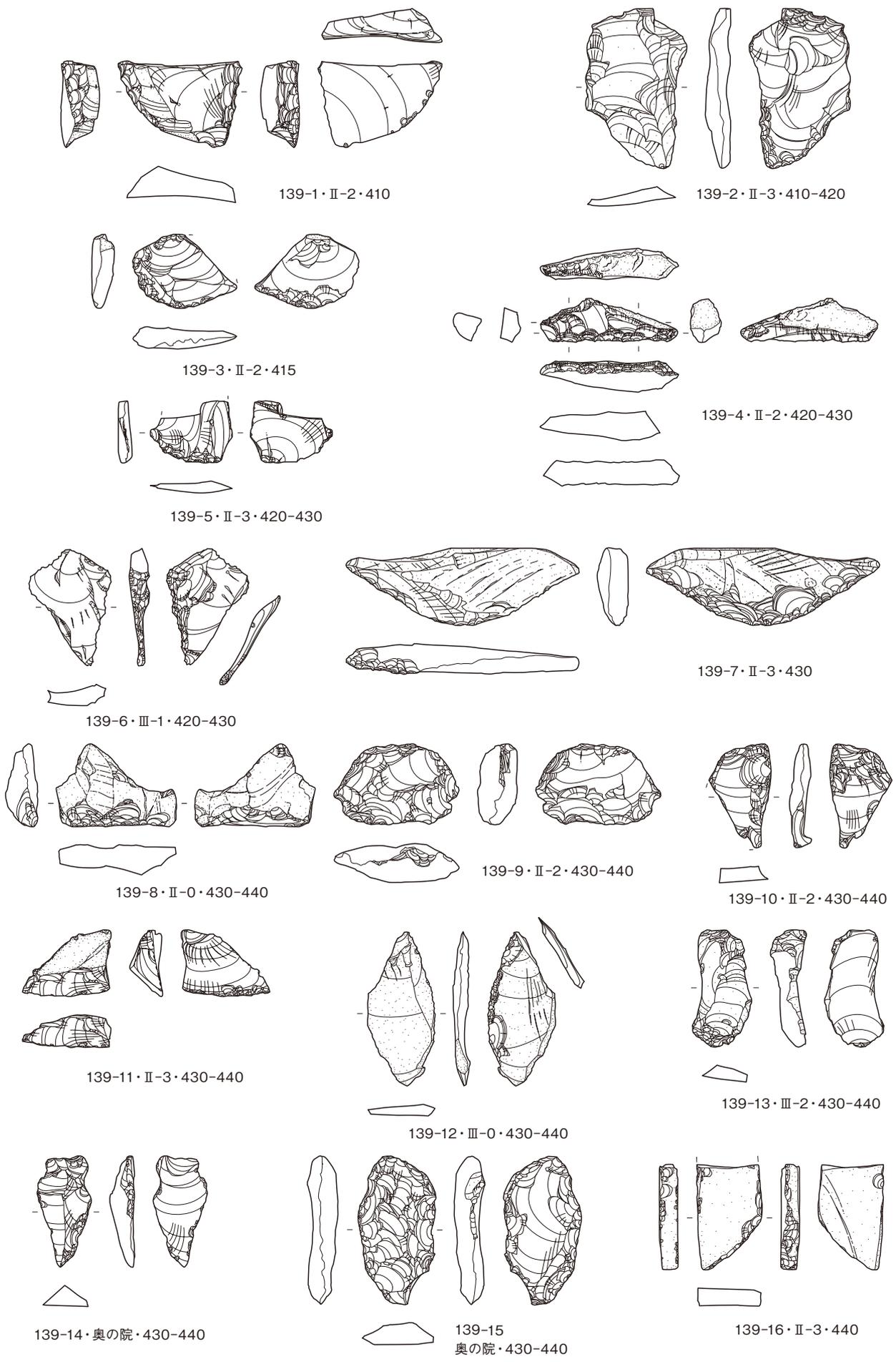


図139 I~IV区 剥片石器15 (S=2/3)

削器（サイドスクレイパー）の一部、二次加工のある剥片や使用痕のある剥片を一括し、レベル順に掲載した。

素材は拇指状搔器同様、剥片、両極剥片、小型（板状）原石が主なものであるが、その組成は出土レベルによって異なる傾向をもつ。石材は黒曜石が圧倒的であるが、チャートもやや多く、頁岩や水晶が少数混ざる。

図135～147は黒曜石製で、「中部」以下での出土が多い。135-2からは出土レベル-200cm以下出土の資料。自然面（風化した剥離面）を残した剥片を素材としたものが多い。図135-10は、二次加工の多い資料ではなく、多方向からの両極剥離のある資料かもしれない。このような例は他にも見受けられる（137-13等）。図136-5は、分厚く直線的な刃部を持つ。136-9は、剥片末端部を、表面から急角度で剥離し、さらに左側に連続的な加工を行っている。

図137-5は、本遺跡では最大級の黒曜石製石器で、大型の縦長剥片を片面から加工している。137-11はやや厚みを持つ板状原石素材。図138-3は、左側縁に分厚い刃部加工があり、あるいは拇指状搔器としてもいい資料であろうか。

図138-8からは、出土レベル-380cm以下の「下部」出土の資料。138-9は、小型の板状原石の片側縁を両面から加工。138-16は本遺跡では大型の黒曜石製石器。138-17は両極剥片の一部に二次加工を施している。139-7は、やや大型の原石を両面から加工。

「下部」の-430cm付近以下では、両極剥片や小型（板状）原石を加工した資料が増える。139-12は、薄手の板状原石製である。139-13は、厚みのある縦長剥片の打点側を、裏面から加工してエンドスクレイパー状にしている資料。139-15は、二次加工の剥離が表面のほぼ全面に及ぶもので、本遺跡では石鏃を除くと、あまり類例がない。139-16は板状原石素材の例。

図140-1も、板状原石の一端に刃部を設けている。140-3はやや大型の板状原石が素材。140-5は、やや大型の剥片に分厚い刃部を設けている。140-6は板状原石を両面加工している。141-5は、やや厚みのある原石に急角度の刃部を設けている。141-8は縦長剥片の打点側に分厚くやや弧状の刃部を設けている。拇指状搔器に分類可能かもしれない。141-11は、剥片の一側辺を両面から加工し、弧状の刃部を作り出している。141-14は角錐状の両極剥片に急角度の二次加工を施す。

図142では、4、5、13、16が、板状の原石素材である。142-17は弧状で急角度の刃部を持つ。拇指状搔器と言えるかもしれない。143-16は形態が拇指状搔器に似るが、刃部がやや緩い角度となる。

図144-2も機能としては拇指状搔器と同様と言えるかもしれない。144-3は厚みのある両極剥片に急角度の二次加工を施す。144-9は、自然面をわずかに残す剥片の左側縁に、連続する細かな剥離を入れている。144-12はやや風化した面で構成される縦長の板状原石に、急角度の刃部を設けている。144-15もやや風化した面で構成される原石に、急角度の刃部を設けている。

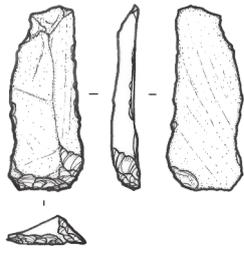
図145-2は本遺跡ではあまり類例のないもので、やや大型の剥片に多方向からの大きな剥離をし、さらに縁辺に二次加工を加えている。145-9は古い剥離面を持つやや大型の原石を素材とする。

図146-2は、ほぼ全面に二次加工が及んでいる。146-5は本遺跡では最大級の黒曜石製石器で、礫面の残る剥片に二次加工を加えている。146-8は板状原石が素材。

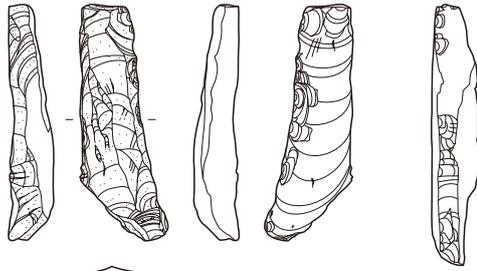
図147-3、4は、出土位置が不明であるが、大型の例となる。

図148～153は、黒曜石以外の石材のスクレイパーや二次加工のある石器資料。黒曜石に比べ、大型のものも多いが、形状は一定しない。基本的には、素材剥片の周縁部に、わずかな二次加工を施したものが多い。「下部」よりも「中部」に多い。

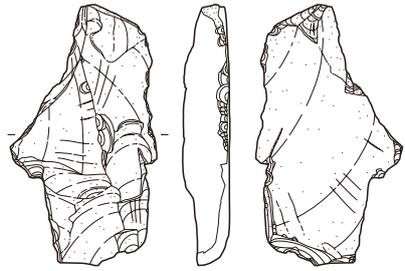
図148-2～150-9までが「中部」出土のチャート製の資料。図148-3は、やや大型で、右側縁



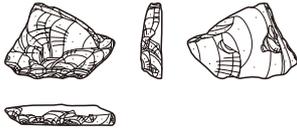
140-1・II-1・440-450



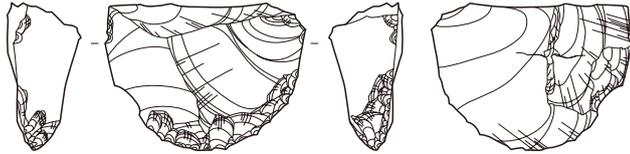
140-2・II-2・440-450



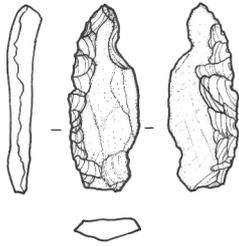
140-3・III-0・440-450



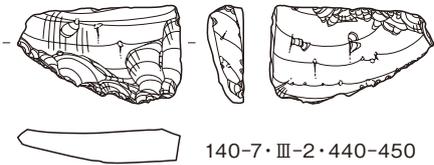
140-4・III-1・440-450



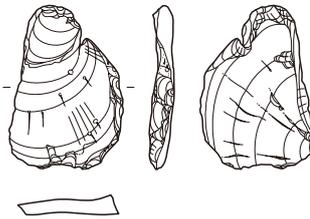
140-5・III-1・440-450



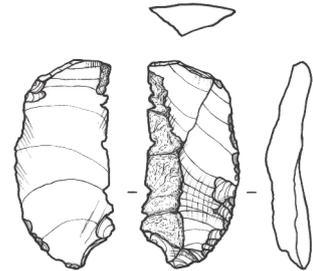
140-6・III-2・440-450



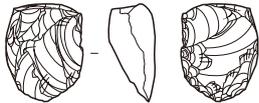
140-7・III-2・440-450



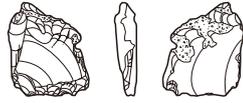
140-8・III-2・440-450



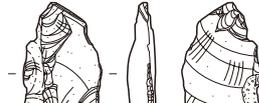
140-9・III-3・440-450



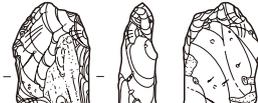
140-10・I-0・450



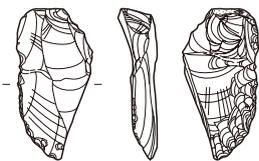
140-11・I-0・450



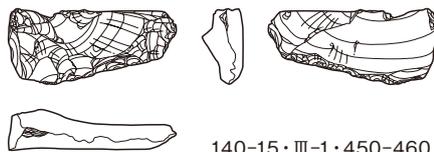
140-12・II-0・455



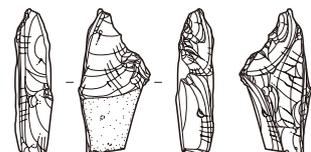
140-13・II-0・455



140-14・II-1・450-460



140-15・III-1・450-460



140-16・奥の院・450-460

図140 I~IV区 剥片石器16 (S=2/3)

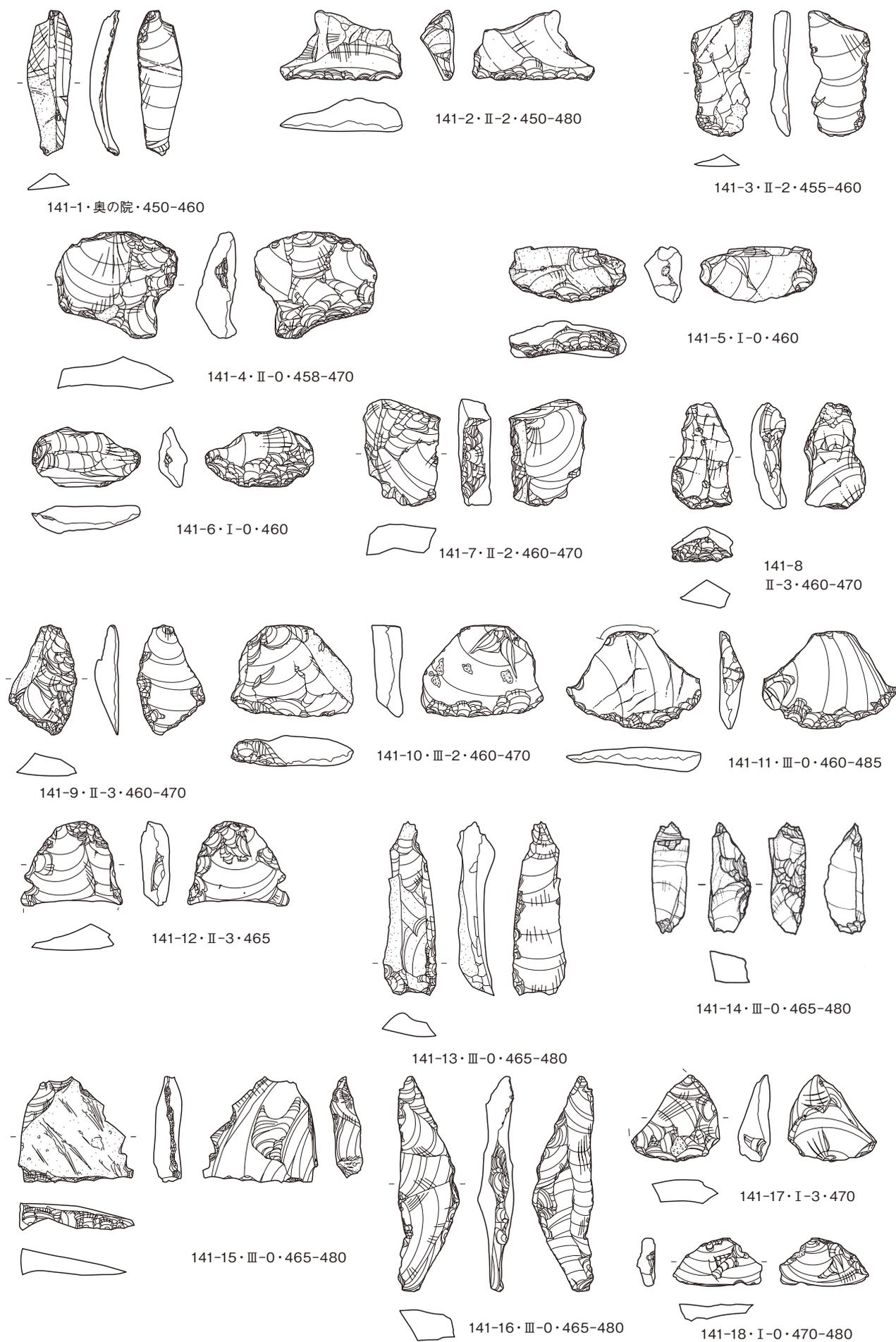


図141 I~IV区 剥片石器17 (S=2/3)

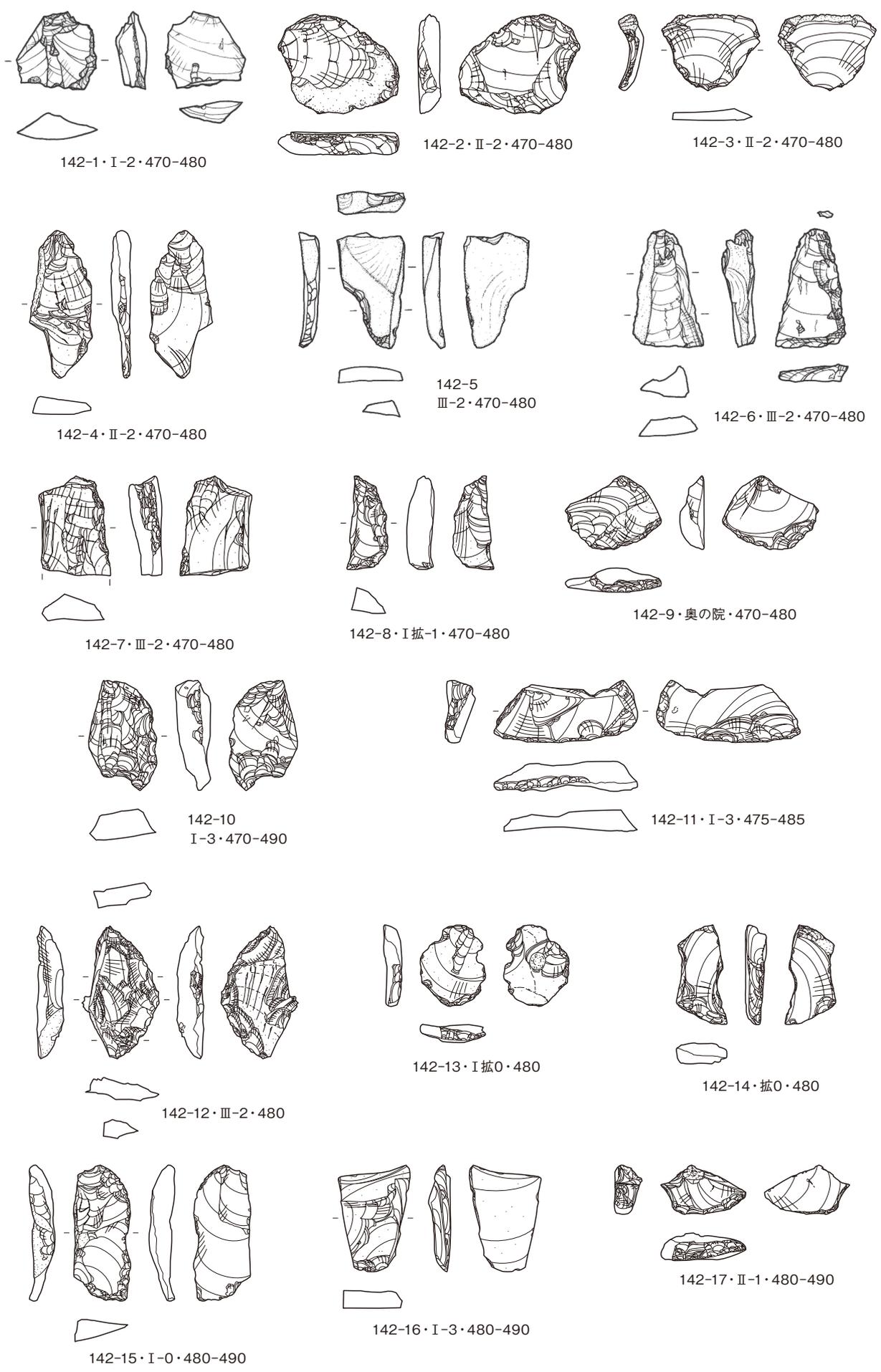


図142 I~IV区 剥片石器18 (S=2/3)

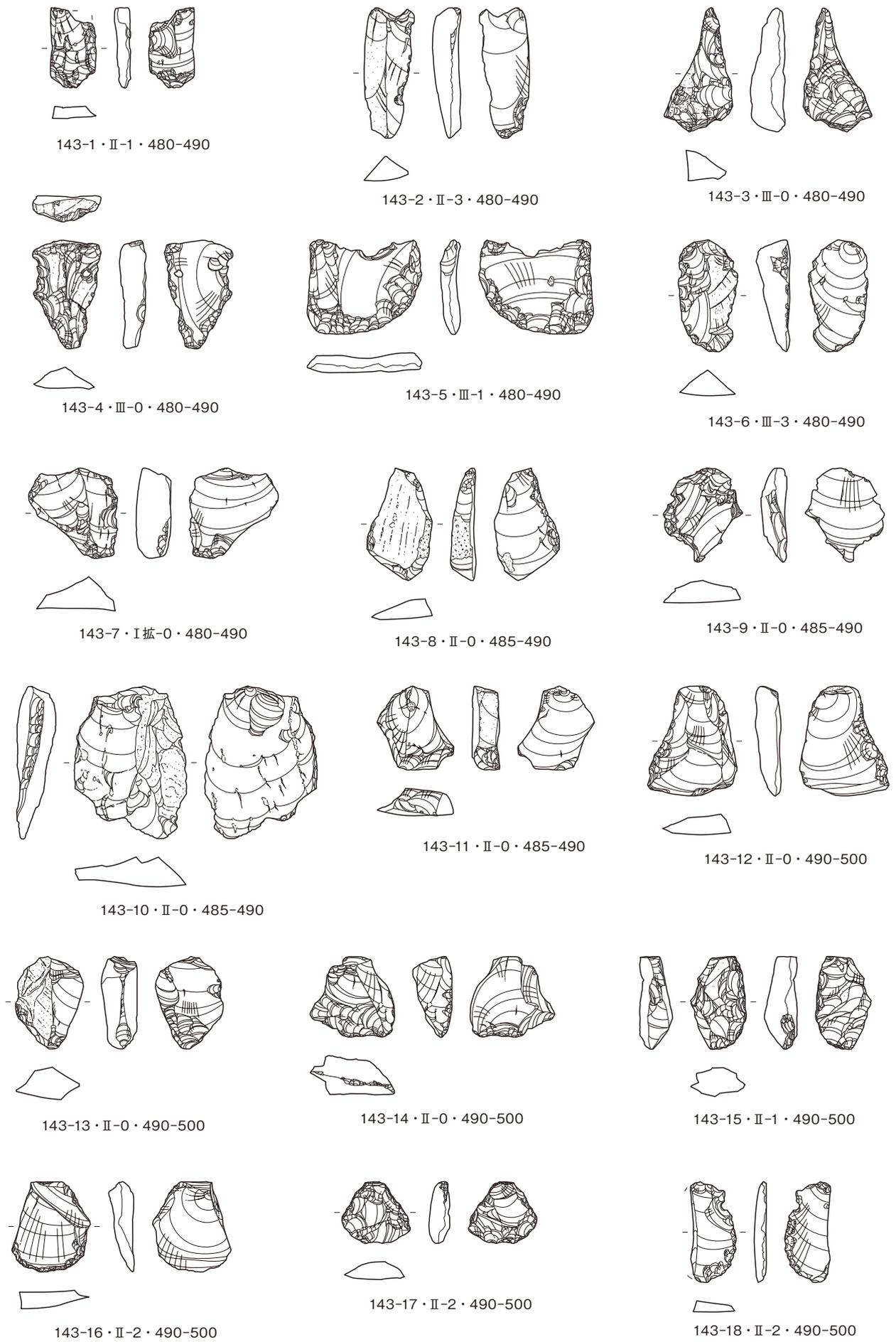


图143 I~IV区 剥片石器19 (S=2/3)

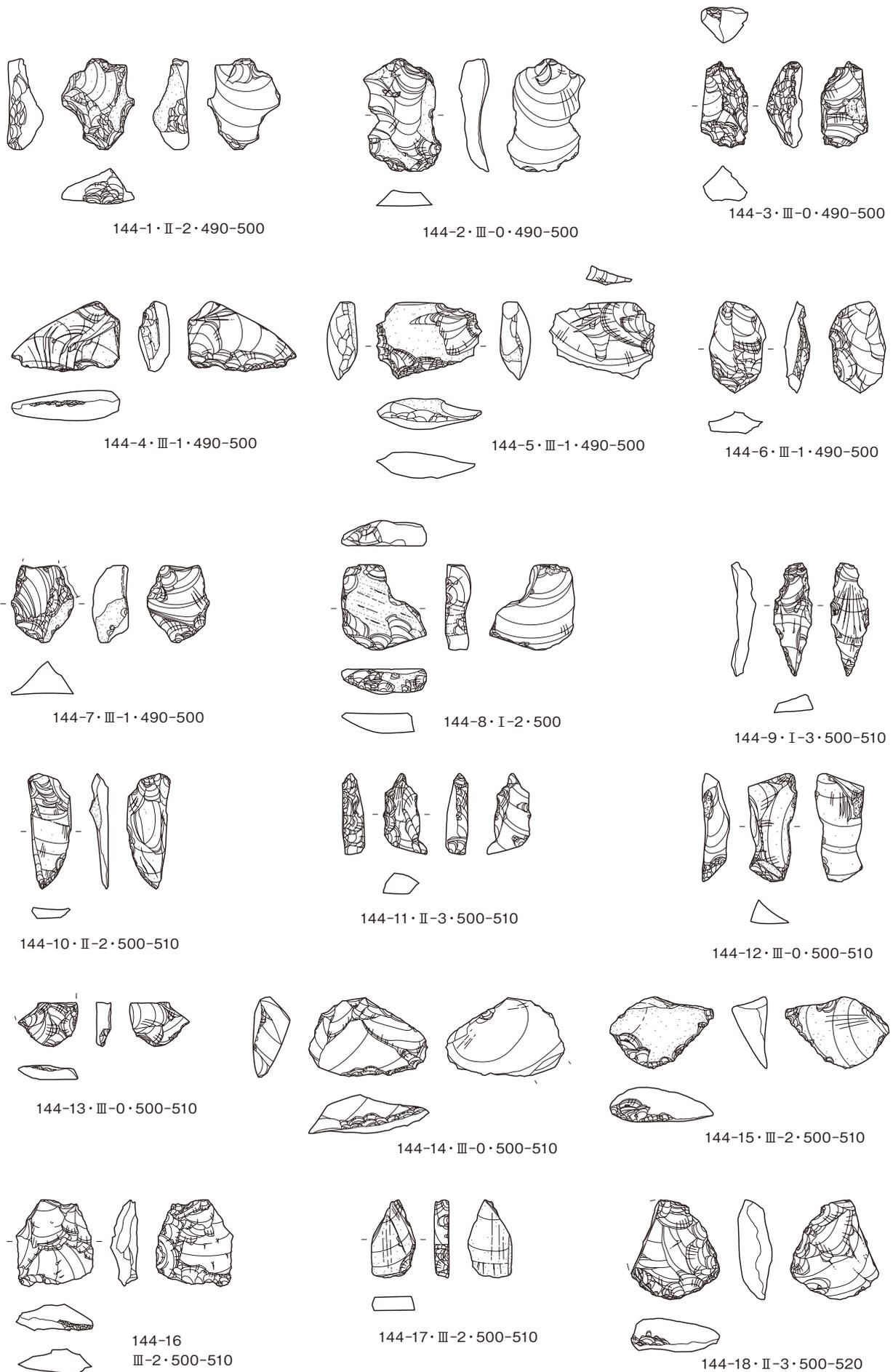


图144 I~IV区 剥片石器20 (S=2/3)

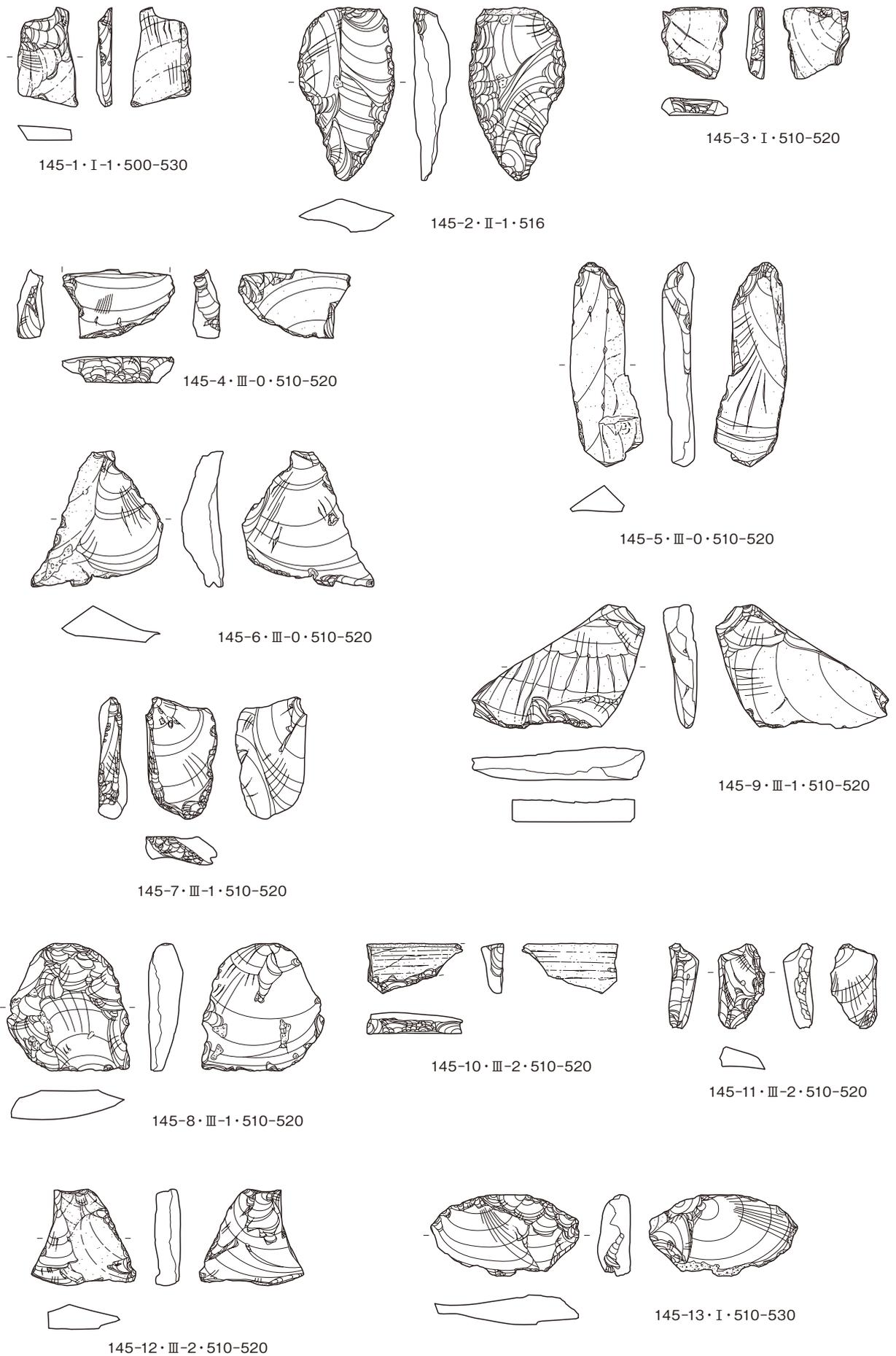


图145 I~IV区 剥片石器21 (S=2/3)

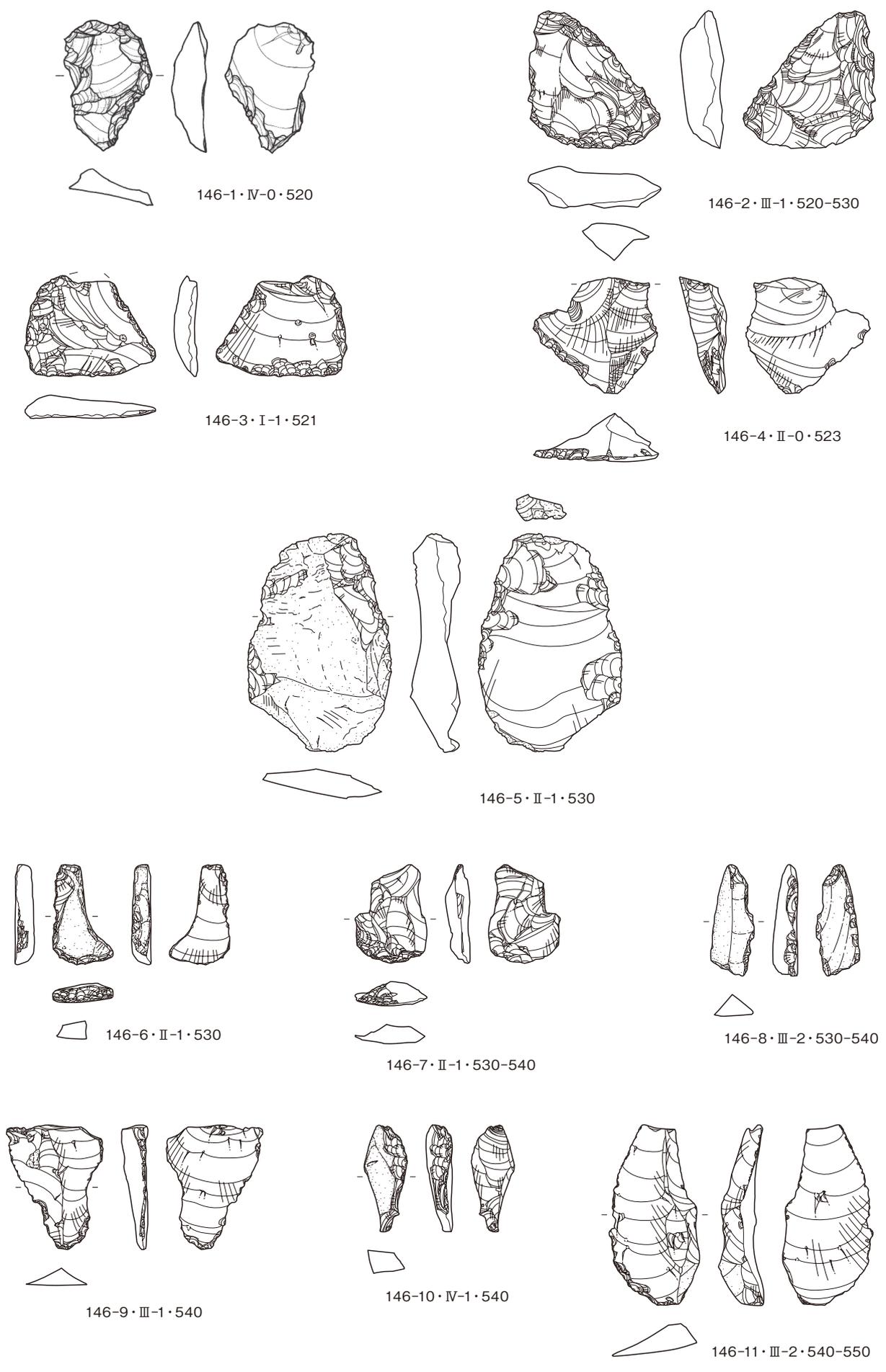


图146 I~IV区 剥片石器22 (S=2/3)

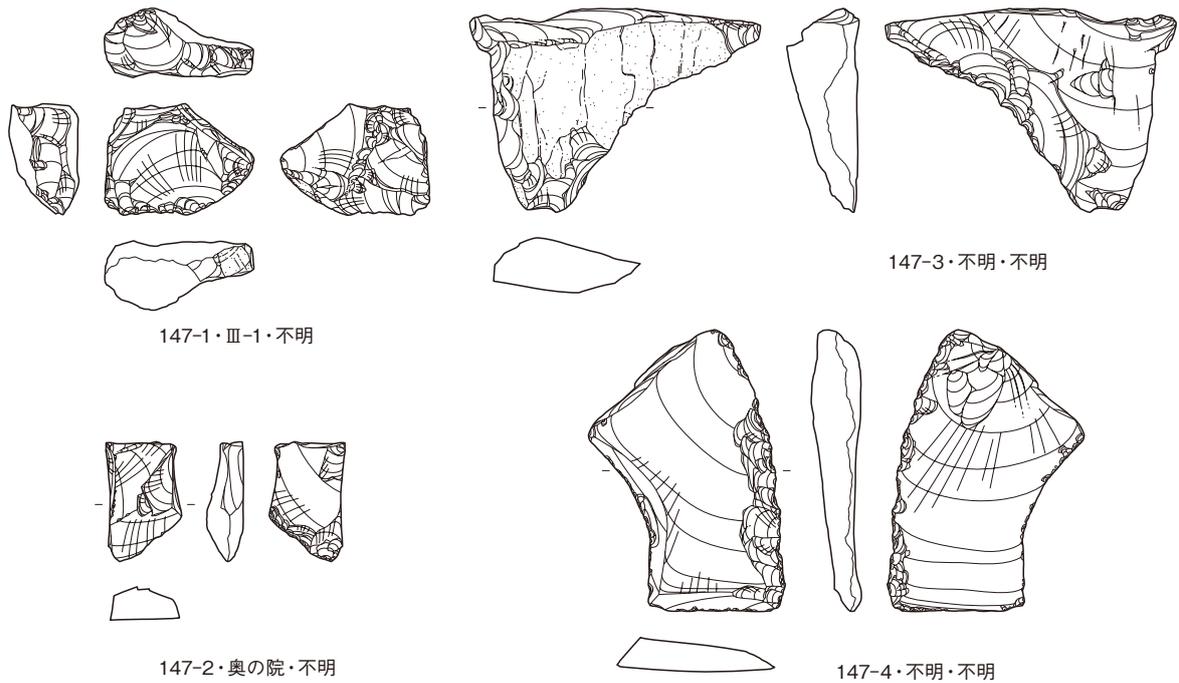


図147 I~IV区 剥片石器23 (S=2/3)

に抉り状の加工を入れている。148-10は自然面を残すやや大型の縦長剥片に、先端と左側辺に二次加工を入れている。

図149-1は、裏面の二次加工が、比較的深くまで及んだ例。149-4は、厚みを持つ剥片に加工をし、三角状の形態を作り出している。149-5は厚みを持つ横長の剥片に、急角度の加工を施す。149-10は、横長剥片の一辺に、急角度の刃部を設けている。一部磨耗している。

図150-7は、厚みのある剥片に、四方から二次加工を行い、急角度の刃部を持つ拇指状搔器的な形態である。150-9は二次加工がほぼ全面に及ぶ例。150-10は、両極剥片に二次加工を施した例。

図151-1はやや大型。151-8は、表面の二次加工がほぼ全面に及ぶ例。

図152~図153は出土レベル等不明のもの。152-3は、横長の剥片の一辺に弧状の刃部を設けている。152-6は出土位置不明だが、ほぼ周回するかたちで、両面から二次加工を施している。

図153-2はガラス質安山岩または流紋岩と思われ、横長の剥片の下面に、片面からの二次加工がある例。153-5は、自然面を残した水晶の剥片に両面から二次加工を入れている。153-6も水晶製で、自然面を残す縦長剥片に連続する二次加工を施している。

両極剥離剥片

両極打法が見られる石器類では、何らかの素材として二次加工が加えられたものも多いが、明確な二次加工が認められないものや、残角として残されたものも存在する。

図154~図155-13は黒曜石製で、うち154-1~11は「中部」出土の資料。154-1は、一見二次加工を施した両極剥片に見えるが、打面を変え複数回の両極剥離を行った資料とも思われる。154-5も同様だろうか。

図154-12~図155-13は「下部」出土で、出土レベル-440cm付近以下に多く形態も多様であるが、特徴的な形態としては、縦長で板状もしくは角錐状のもの(154-14、16、17、19、23、25、155-2、

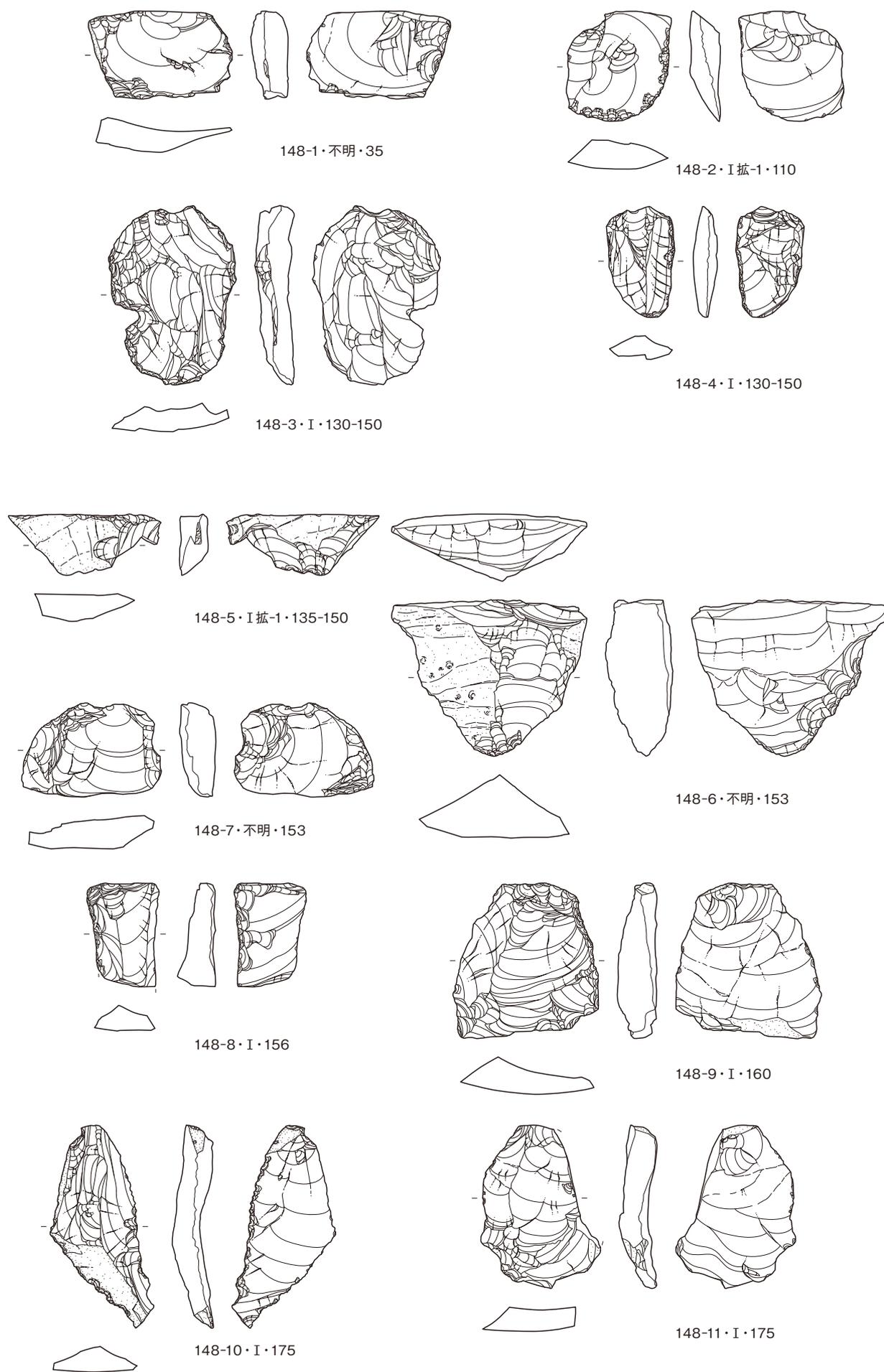


图148 I~IV区 剥片石器24 (S=2/3)

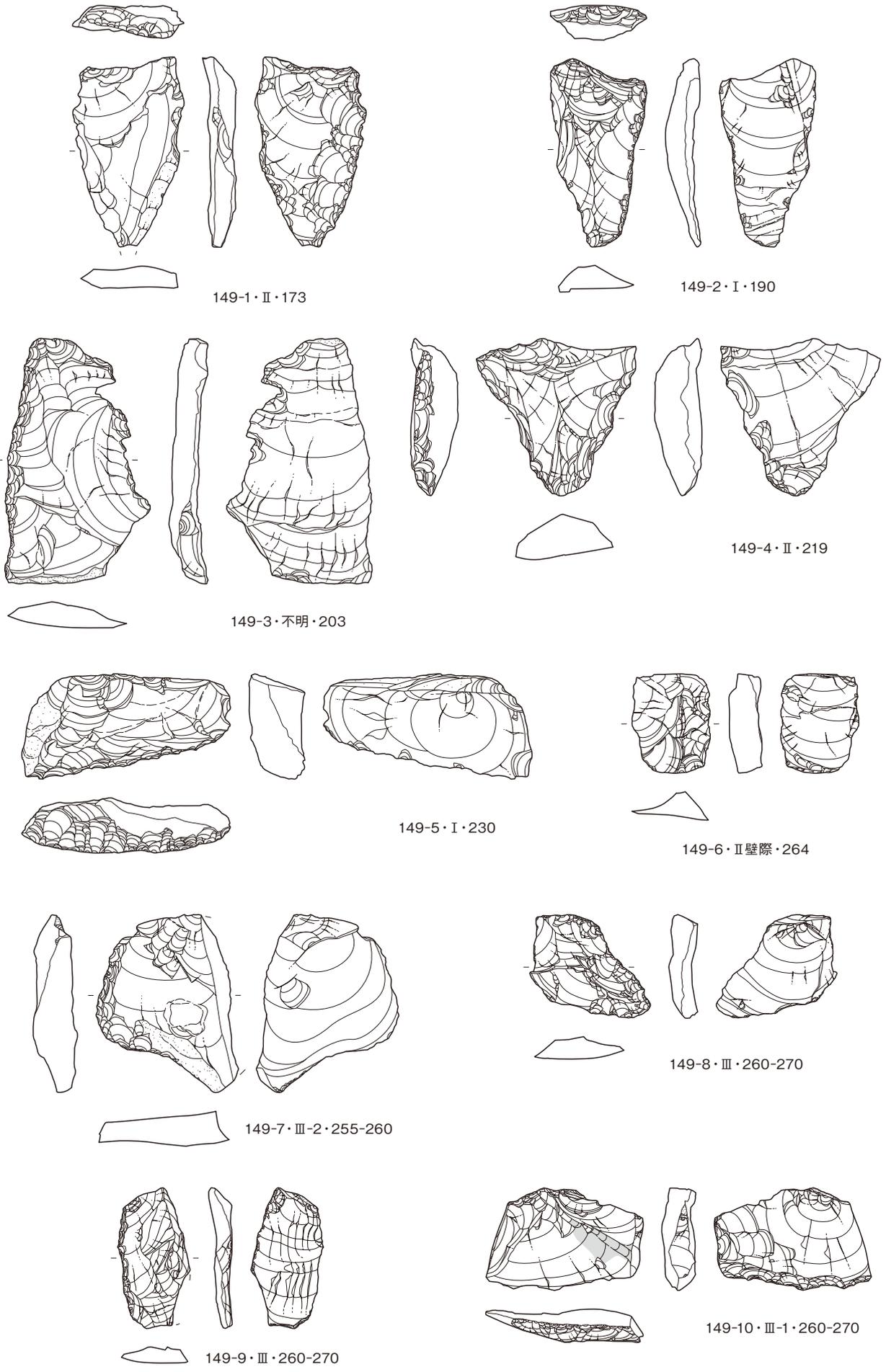
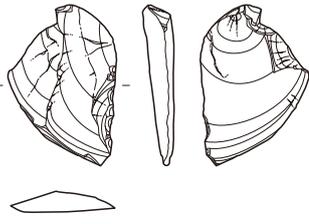
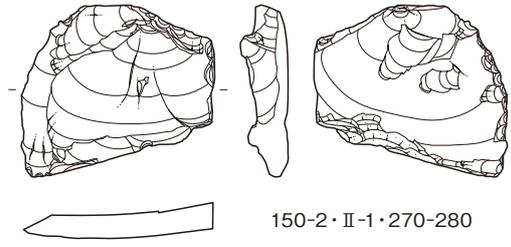


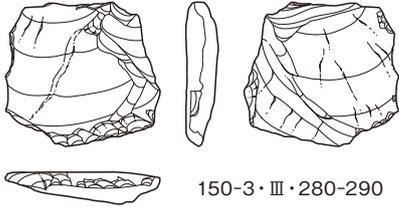
图149 I~IV区 剥片石器25 (S=2/3)



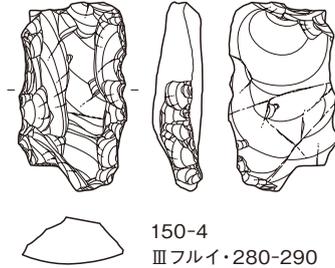
150-1・Ⅲ-1・260-270



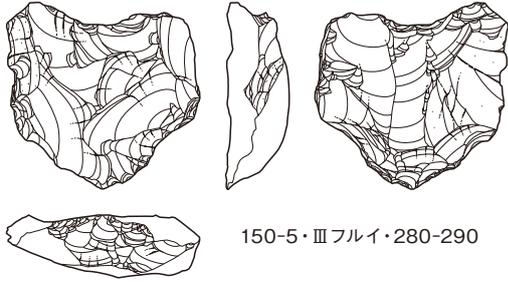
150-2・Ⅱ-1・270-280



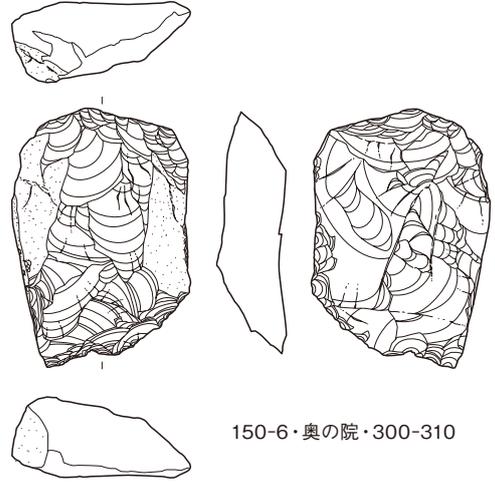
150-3・Ⅲ・280-290



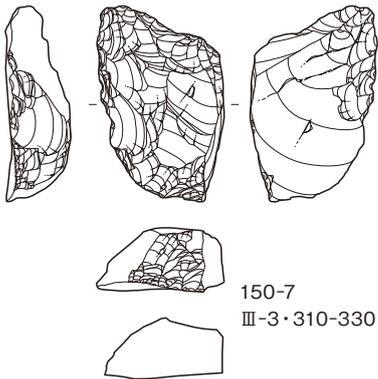
150-4
Ⅲフルイ・280-290



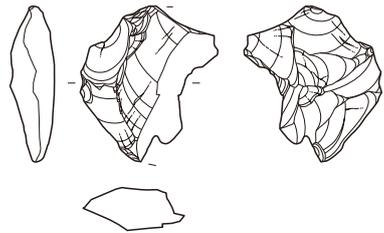
150-5・Ⅲフルイ・280-290



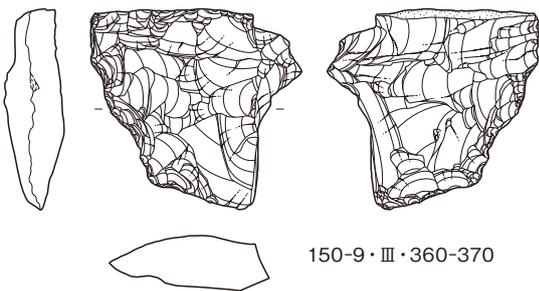
150-6・奥の院・300-310



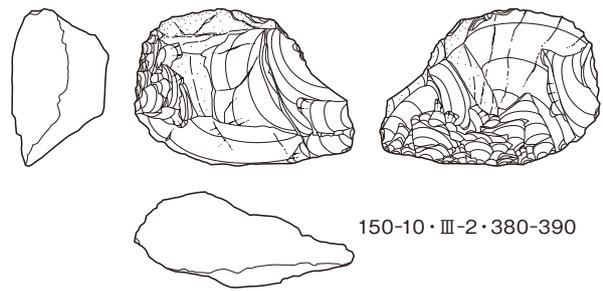
150-7
Ⅲ-3・310-330



150-8・Ⅱ・330-340

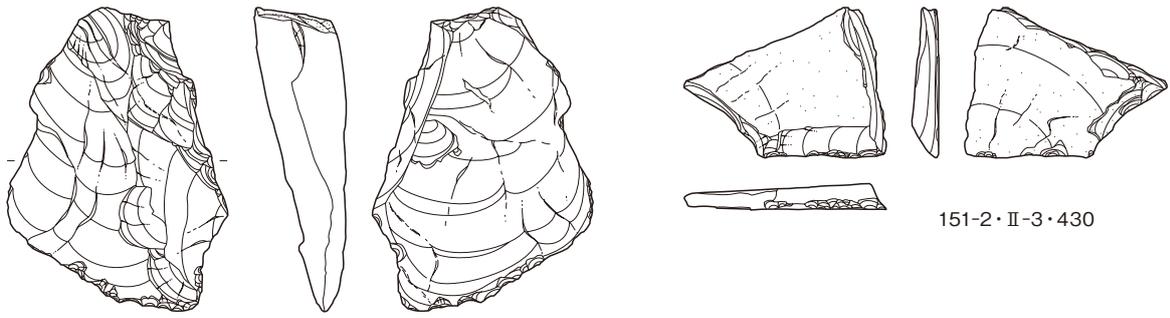


150-9・Ⅲ・360-370



150-10・Ⅲ-2・380-390

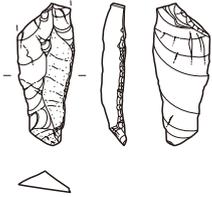
図150 I~Ⅳ区 剥片石器26 (S=2/3)



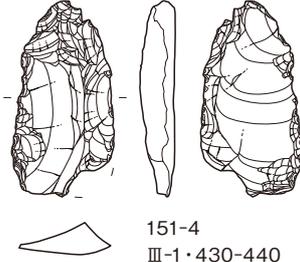
151-2·II-3·430



151-1·II奥·385-390



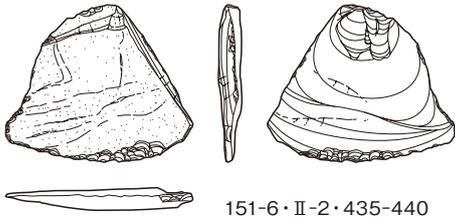
151-3·II-3·430-440



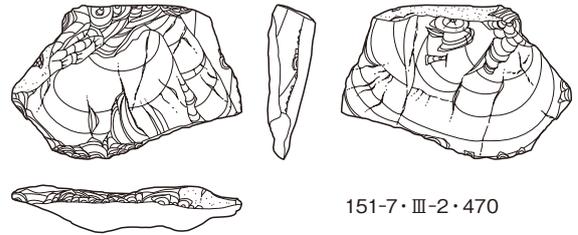
151-4
III-1·430-440



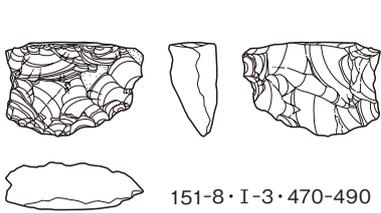
151-5·III-2·430-440



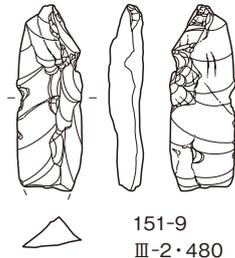
151-6·II-2·435-440



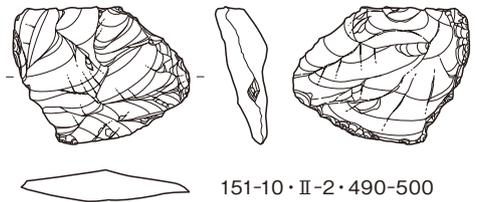
151-7·III-2·470



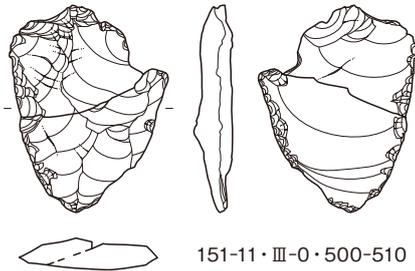
151-8·I-3·470-490



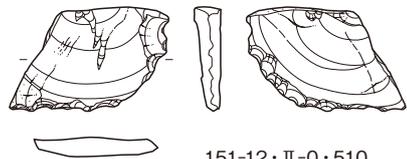
151-9
III-2·480



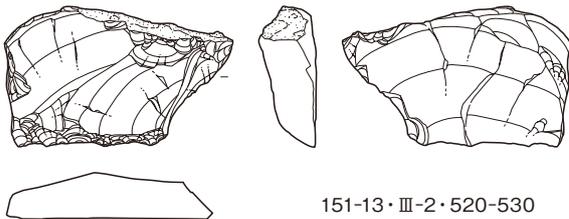
151-10·II-2·490-500



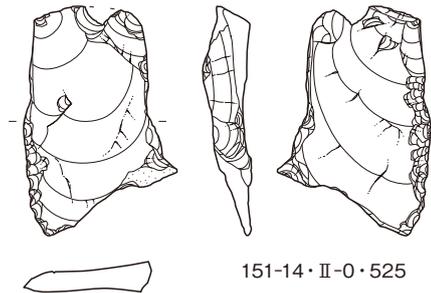
151-11·III-0·500-510



151-12·II-0·510

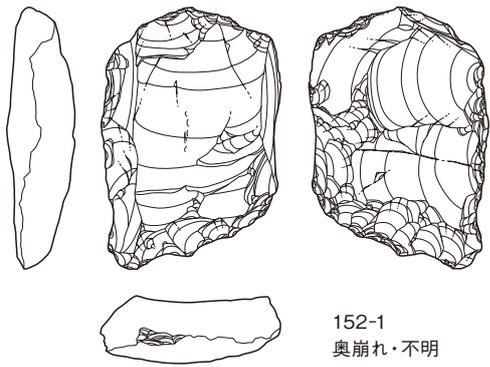


151-13·III-2·520-530

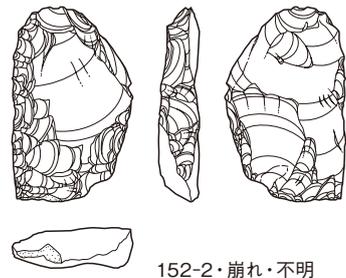


151-14·II-0·525

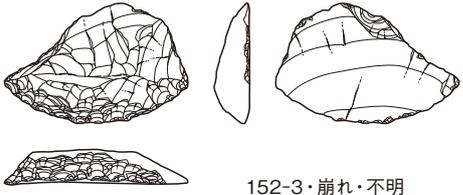
图151 I~IV区 剥片石器27 (S=2/3)



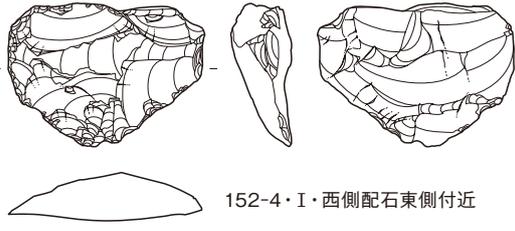
152-1
奥崩れ・不明



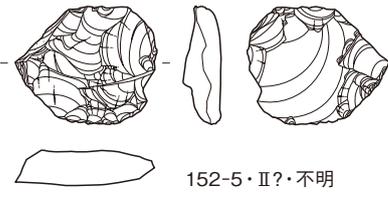
152-2・崩れ・不明



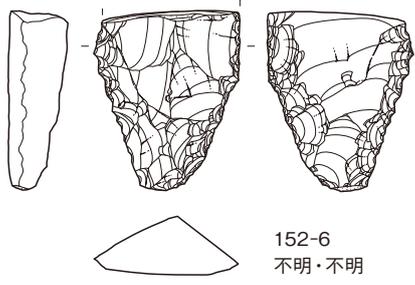
152-3・崩れ・不明



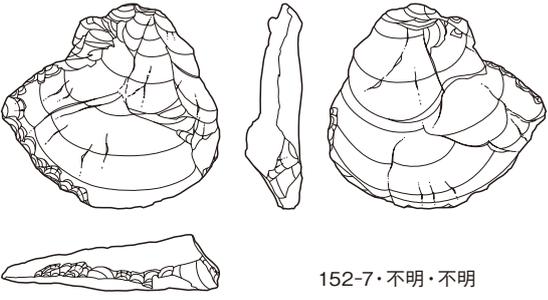
152-4・I・西側配石東側付近



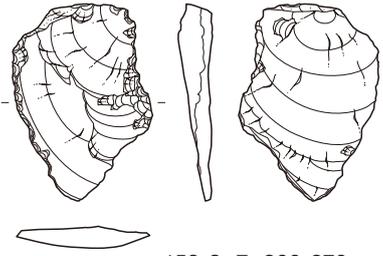
152-5・II?・不明



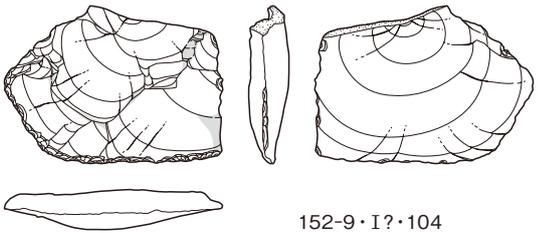
152-6
不明・不明



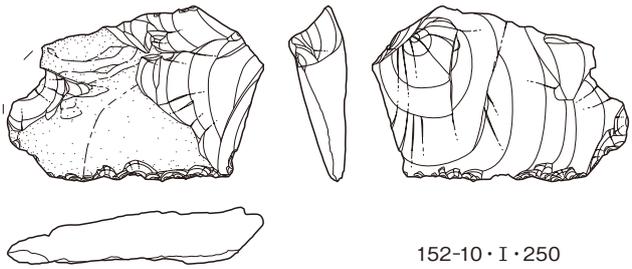
152-7・不明・不明



152-8・II・260-270



152-9・I?・104



152-10・I・250

図152 I~IV区 剥片石器28 (S=2/3)

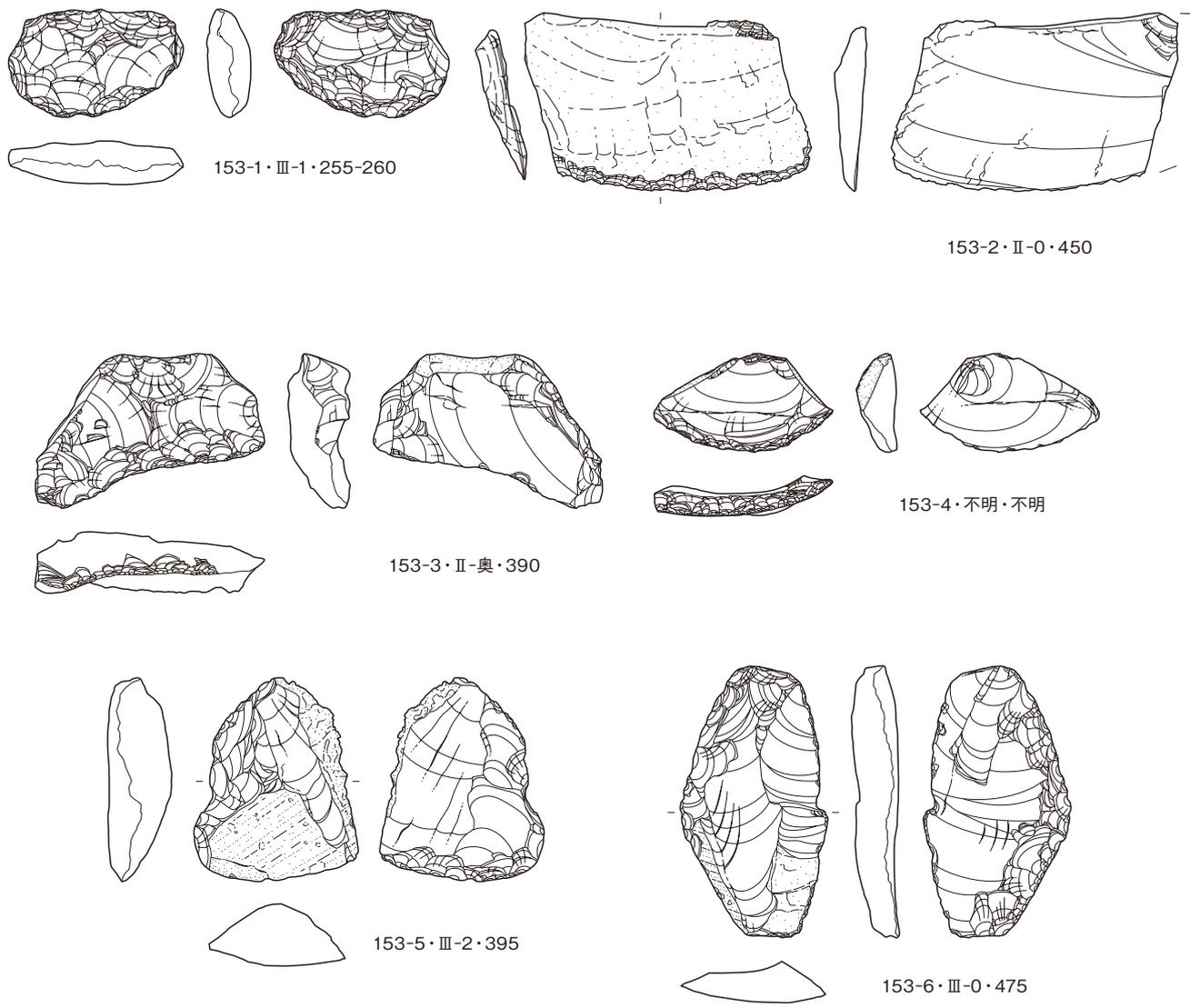


図153 I~IV区 剥片石器30 (S=2/3)

3、7)、異方向からの両極剥離により円形もしくは正方形に近いもの（154-18、20、21、155-6、17）が抽出出来そうである。155-1はやや大型であるが、他方向からの両極剥離が見られる例。

尚、上記板状もしくは角錐状の資料の中には、残核も含まれるかもしれない。一方で、多方向からの両極打法が認められるものは、楔としての使用も想定できようか。いずれにせよ、形態による違いは今後の課題である。

また154-14が板状の原石素材である他、154-25や155-11など、自然面もしくはやや風化した剥離面を残したものも多く、素材の原石もそう大型ではないと推測できる。

図155-14~19はチャート製の資料。155-14はやや大型で、多方向からの二次加工が見られる。

原 石

主に黒曜石の小型原石が見られるが、ここでは、極わずかに剥離があるものも含めている。また、明らかな自然面とは別に、風化した剥離面についても、素材入手以前に形成された面と判断し自然面と同様に扱っている。

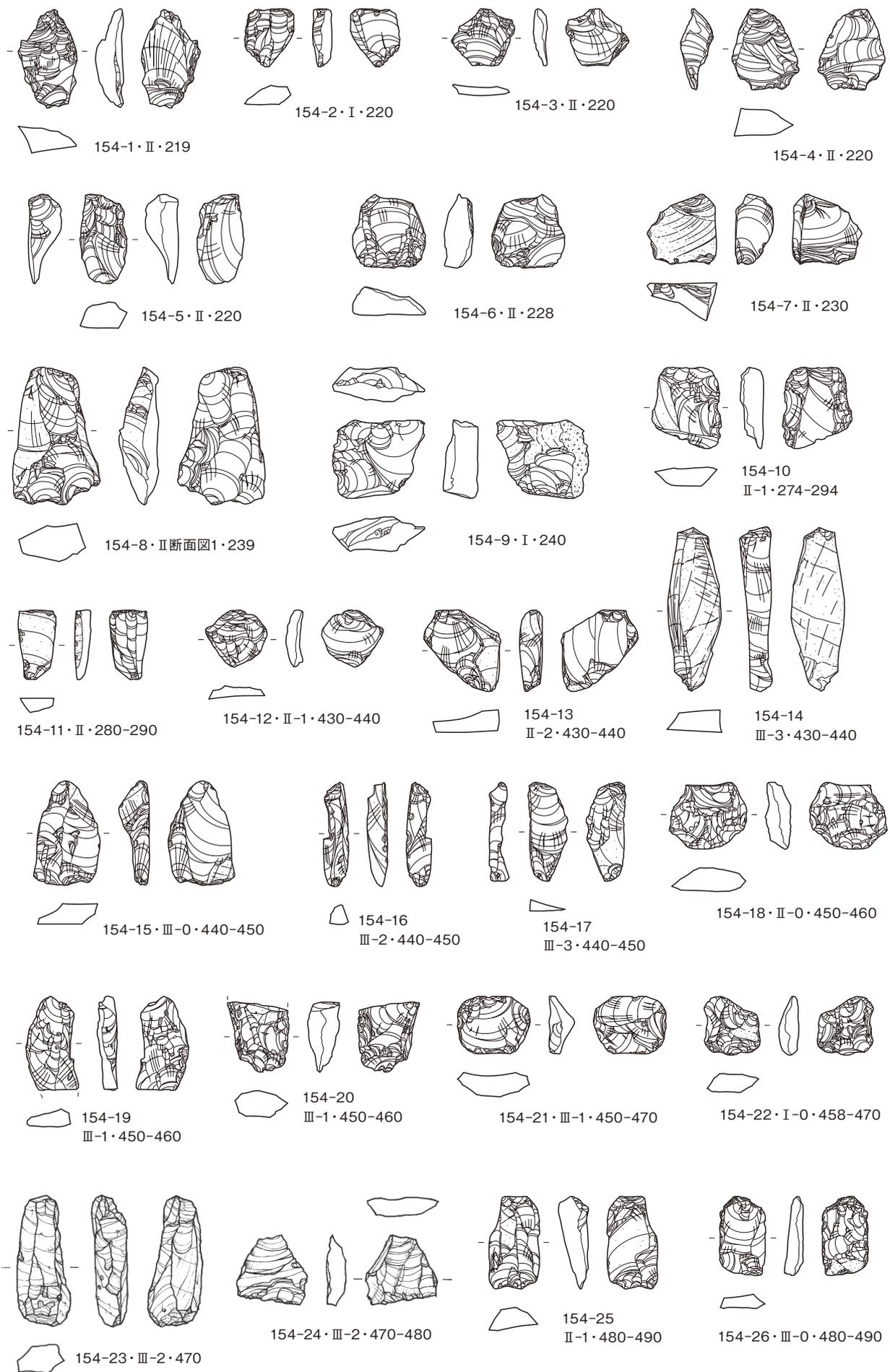


图154 I~IV区 剥片石器30 (S=2/3)

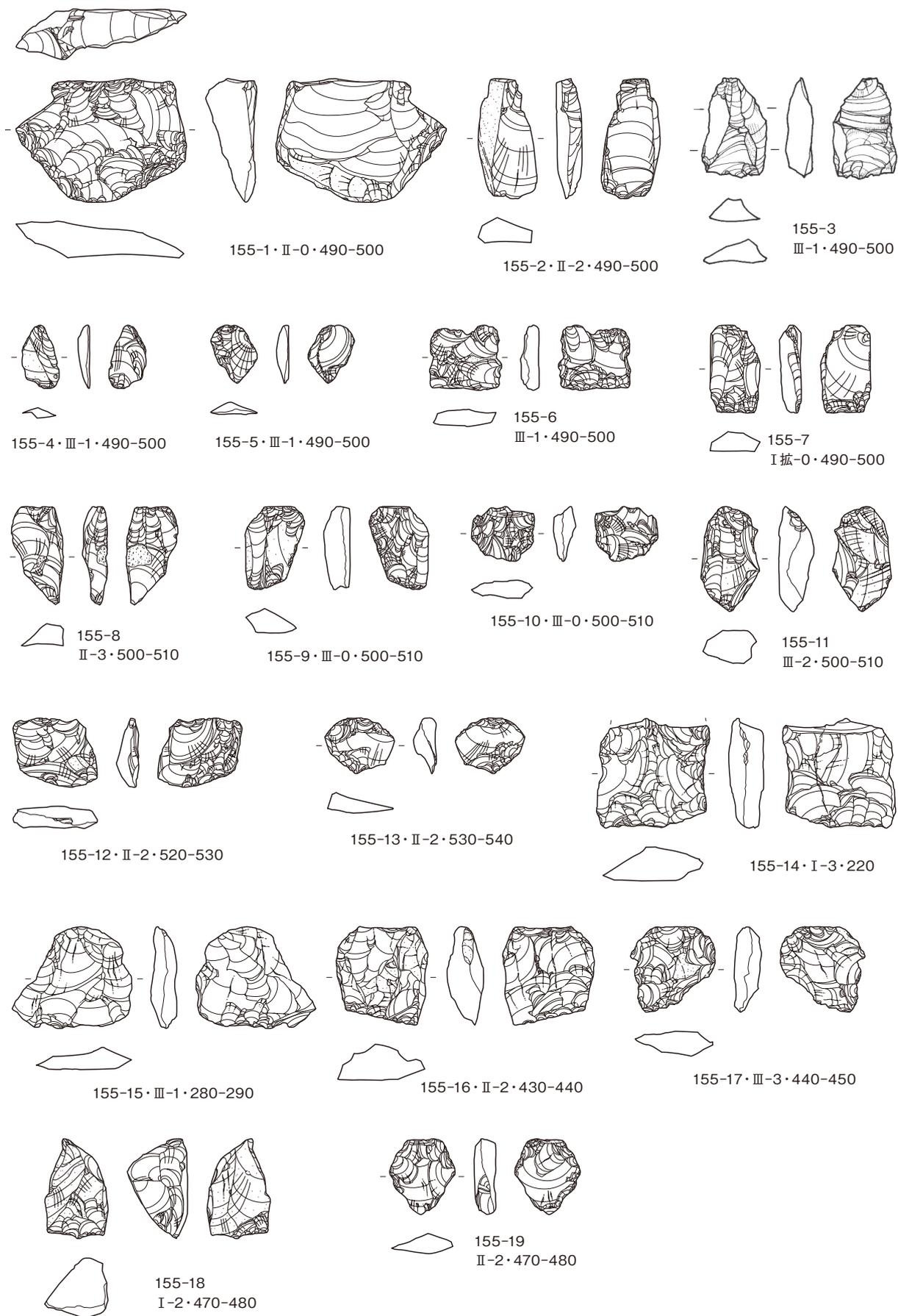


图155 I~IV区 剥片石器31 (S=2/3)

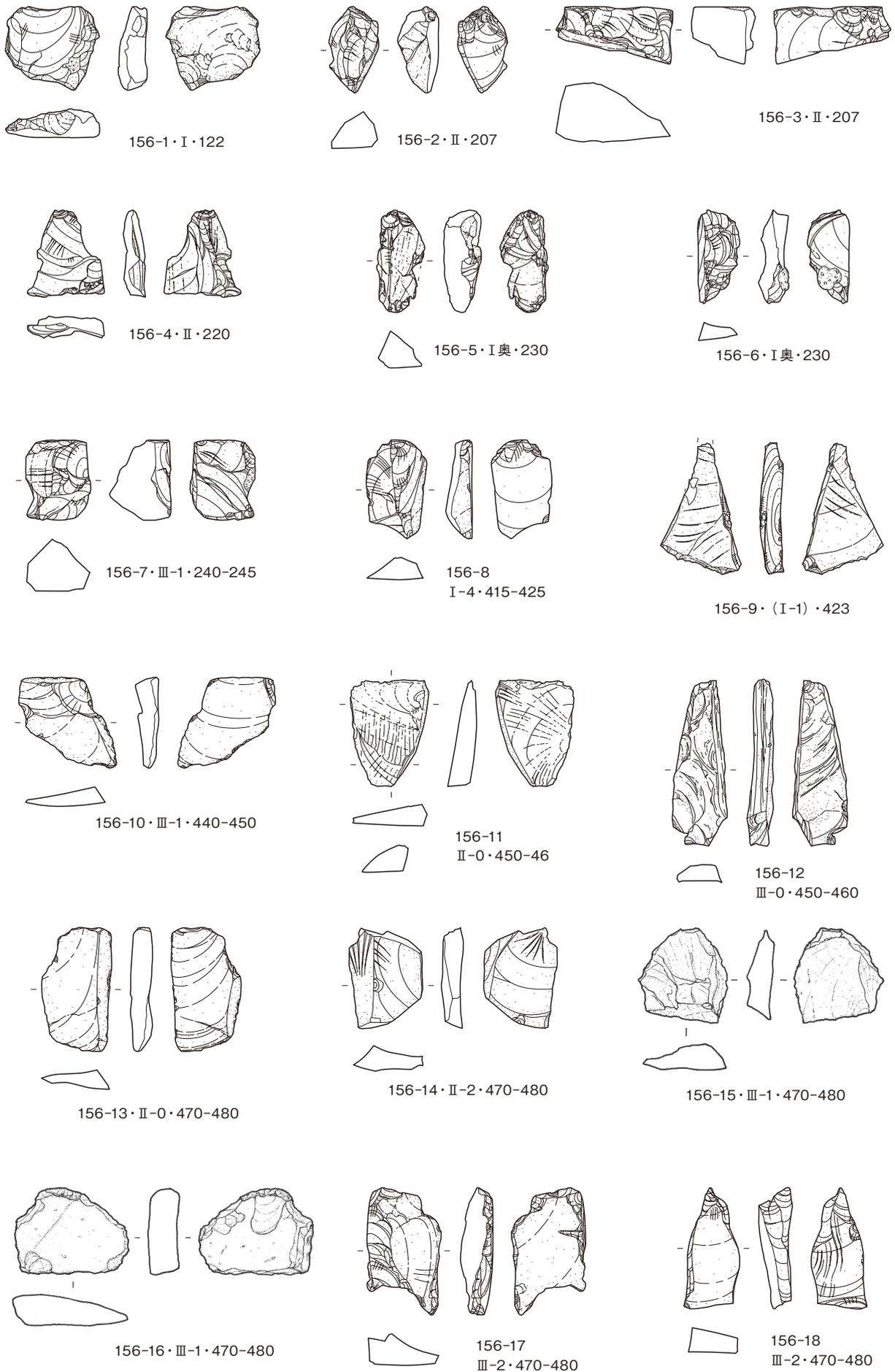


图156 I~IV区 剥片石器32 (S=2/3)

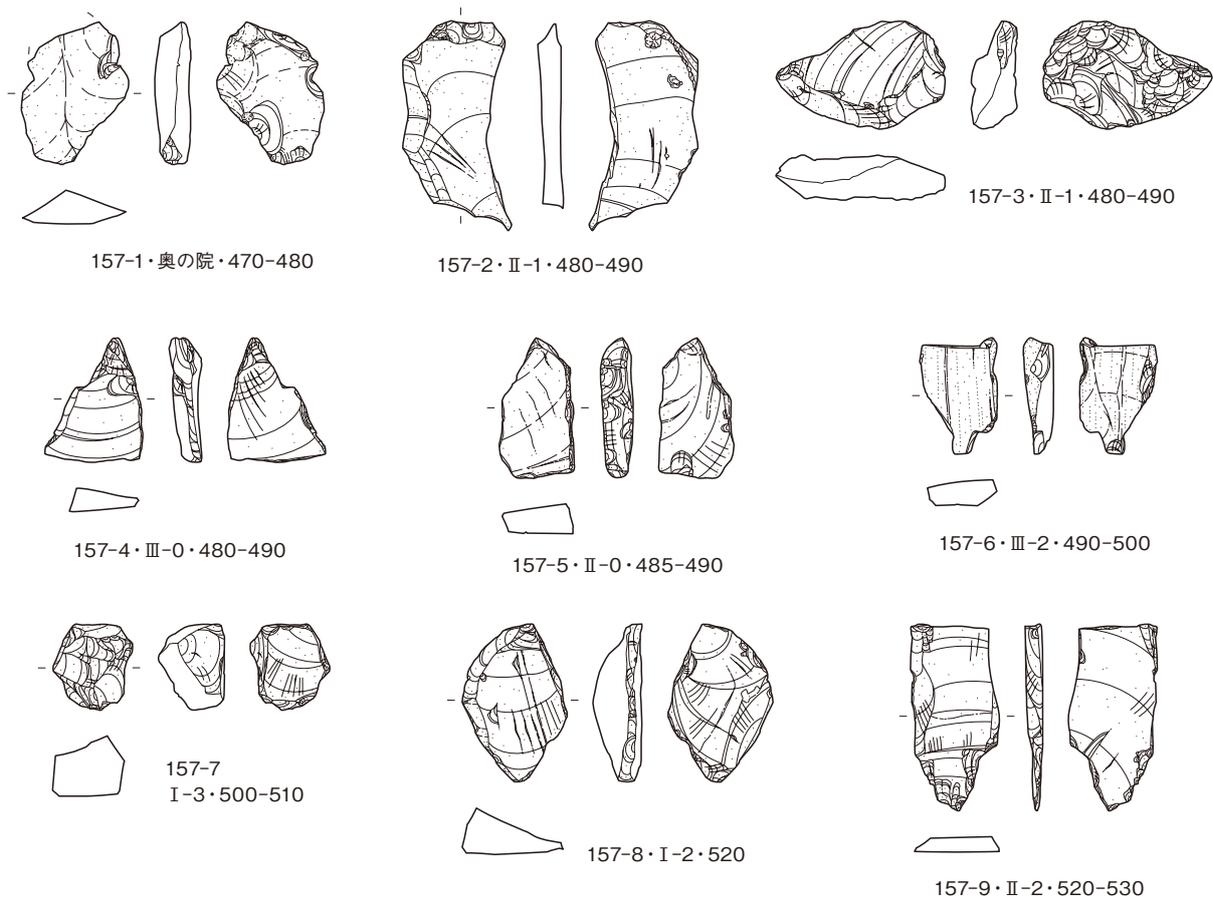


図157 I~IV区 剥片石器33 (S=2/3)

図156-1~7は「中部」の出土例。3や7のように厚みを持つものも含まれる。

これに対し図156-8~157-9に示した「下部」では、数もやや多く、小型かつ板状の原石が多い。実際にこのような板状原石を素材にした製品も散見される（図131-1、7、18、134-4、138-9、139-12、140-1、6など）。

残核

主に黒曜石の残核が、「中部」の-250cm付近をピークに確認されている。多くは小型で、8~4g程度である。

-185cm出土の図158-3や4は、例外的な大きさで、僅かな回数だけの剥離を行っているという点も際立っている。

他の多くの資料は、自然面が多方向に残るなど、原石自体も比較的小型の黒曜石である可能性を示唆する。また必然的に、得られる素材剥片も小型とならざるを得ない。実際に小型の剥片を加工した製品も存在するが、より大型の剥片石器の存在や、石鏃の素材として適したサイズであったか否かなど、今後の検討課題も多い。

剥離した平坦な面を打面にしたもの（158-9、159-6、162-3等）とともに、比較的平坦な自然面を打面にしたもの（159-8、160-4、11、161-5等）が見受けられる。

図162-7と8は「下部」出土の黒曜石残核。162-9と10は「上部」と「中部」のチャートの例である。

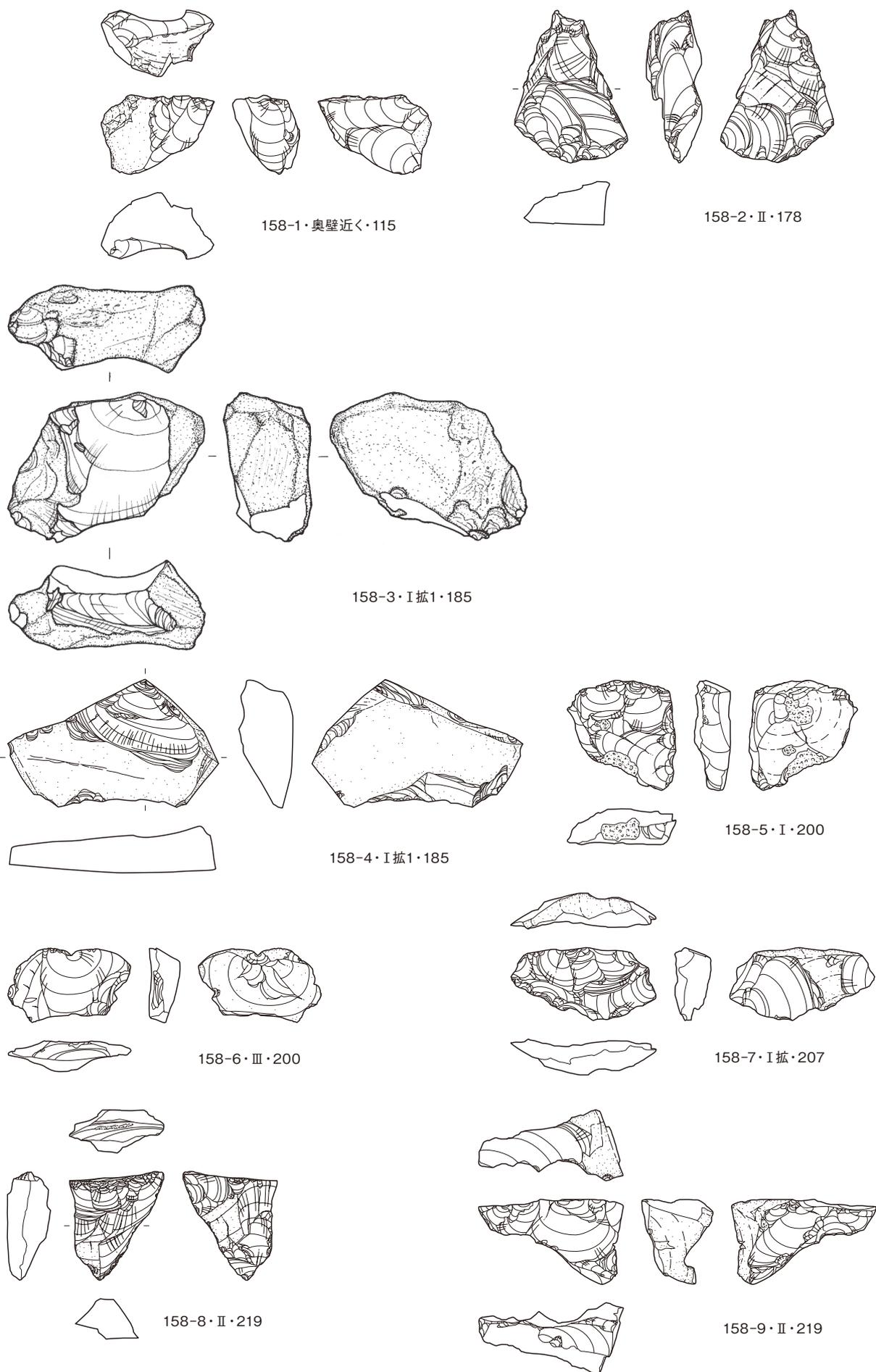
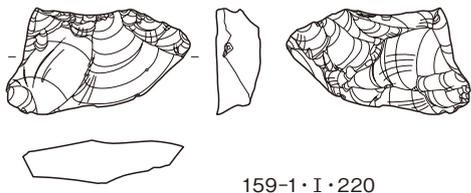
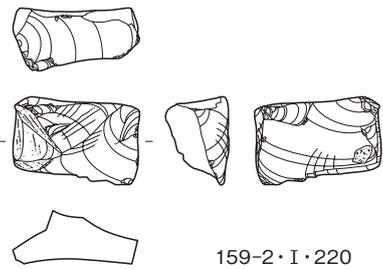


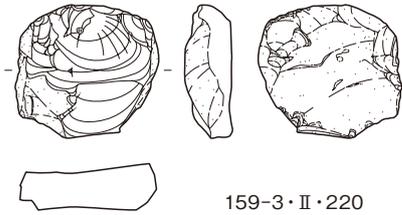
图158 I~IV区 剥片石器34 (S=2/3)



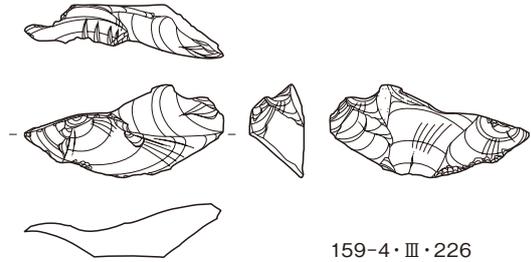
159-1·I·220



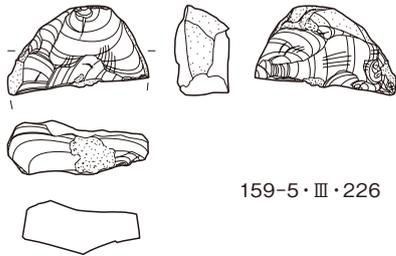
159-2·I·220



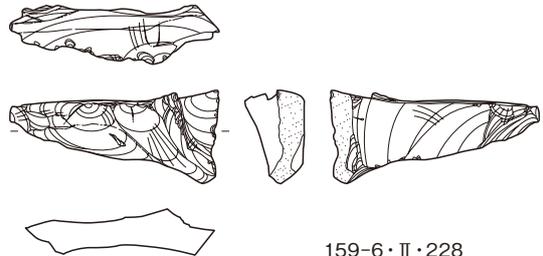
159-3·II·220



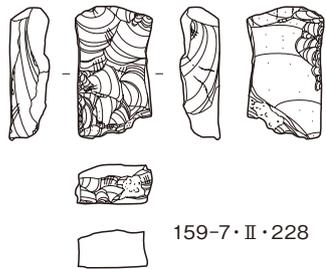
159-4·III·226



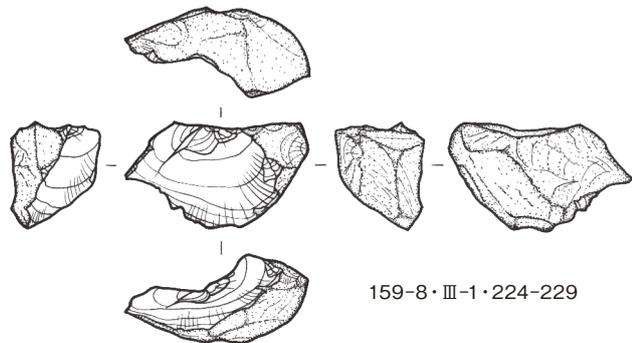
159-5·III·226



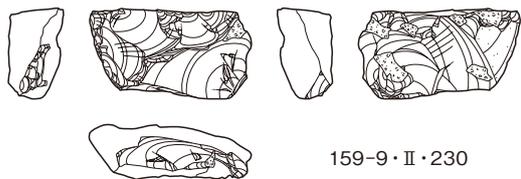
159-6·II·228



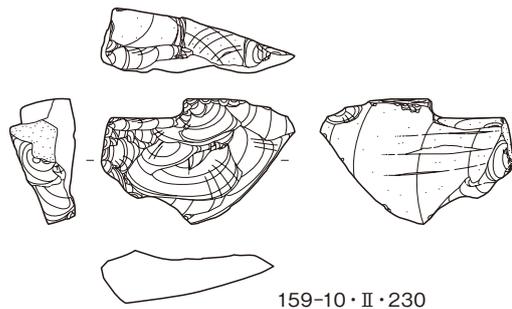
159-7·II·228



159-8·III-1·224-229

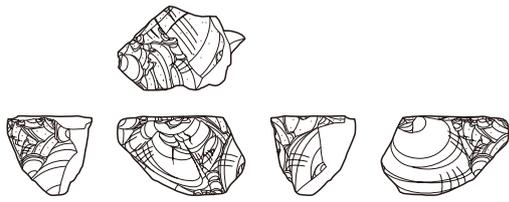


159-9·II·230

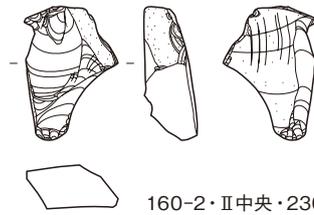


159-10·II·230

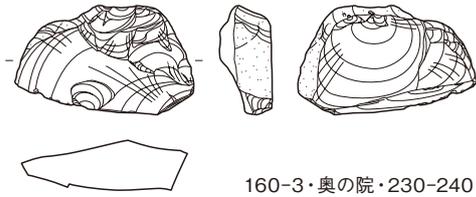
图159 I~IV区 剥片石器35 (S=2/3)



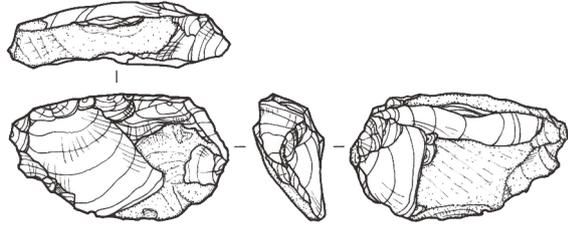
160-1・Ⅱ中央・230-240



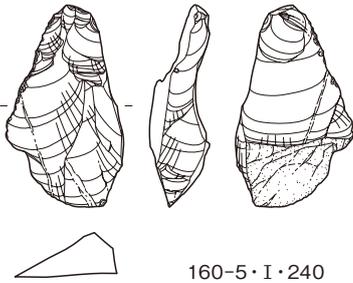
160-2・Ⅱ中央・230-240



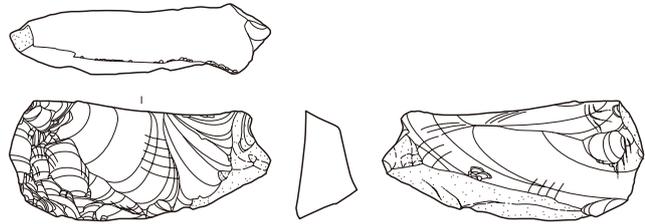
160-3・奥の院・230-240



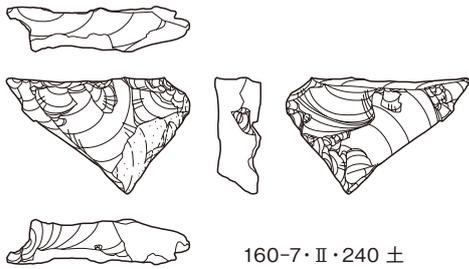
160-4・Ⅰ・240



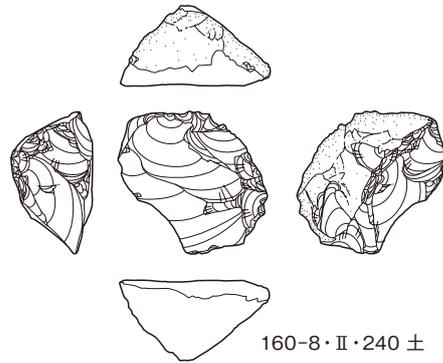
160-5・Ⅰ・240



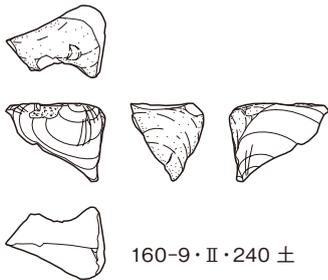
160-6・Ⅰ・240



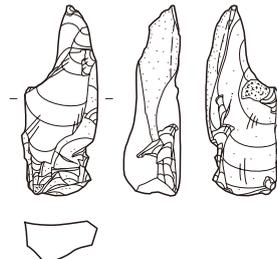
160-7・Ⅱ・240 ±



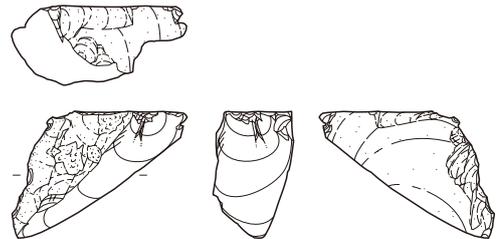
160-8・Ⅱ・240 ±



160-9・Ⅱ・240 ±



160-10・Ⅲ-1・240-250



160-11・Ⅲ-1・240-250

図160 I~Ⅳ区 剥片石器36 (S=2/3)

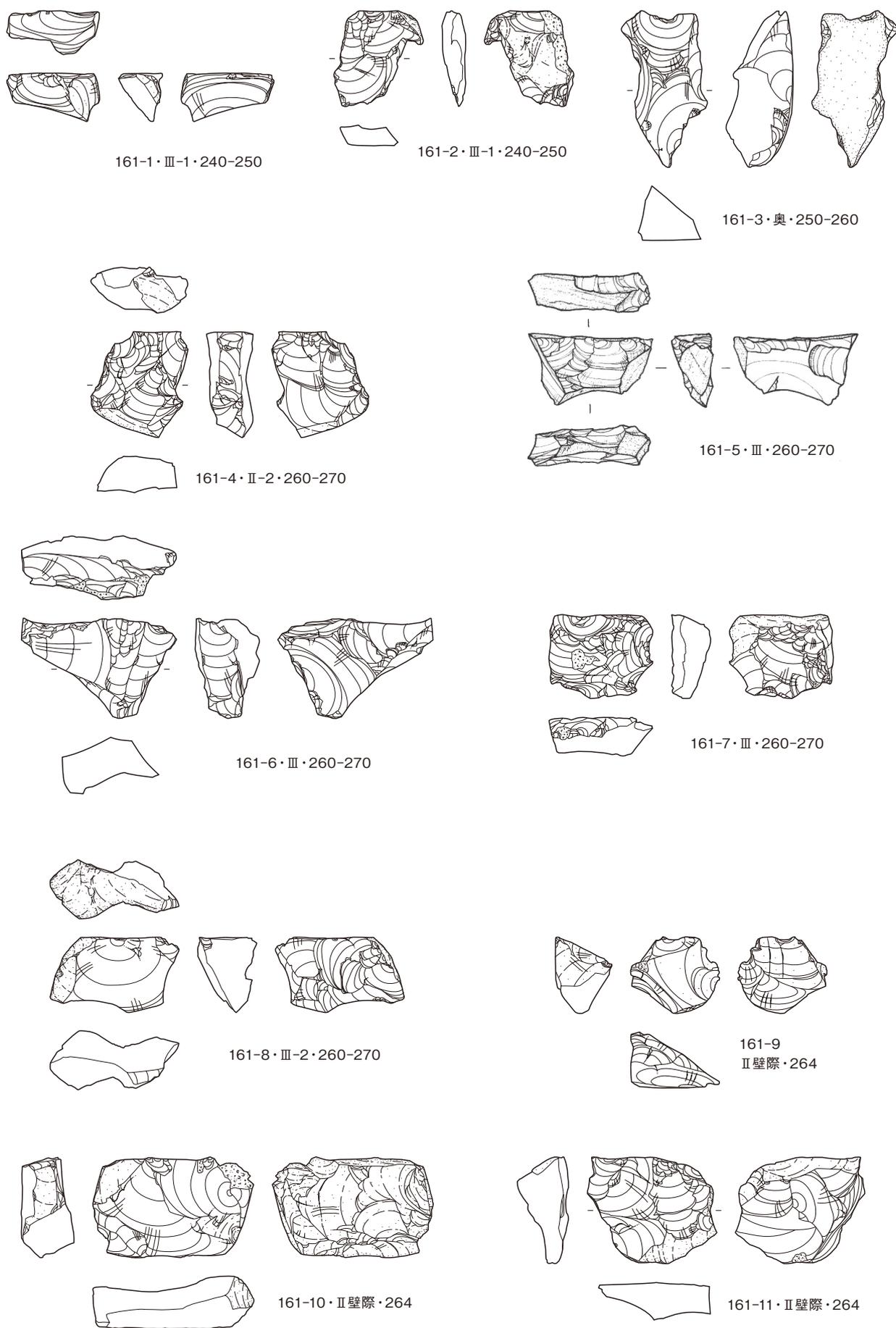
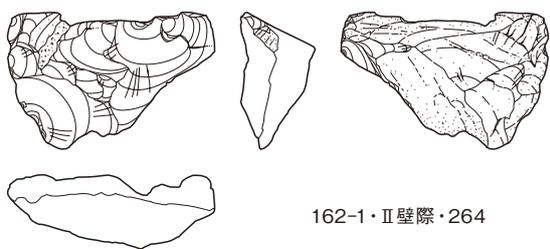
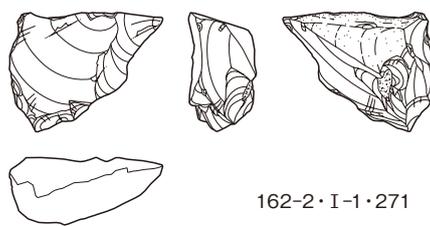


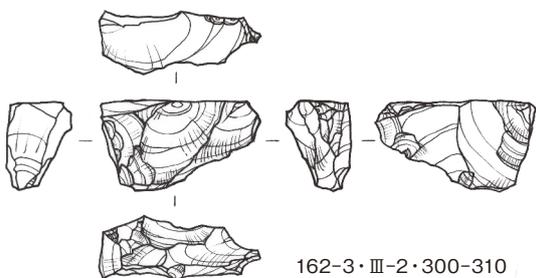
图161 I~IV区 剥片石器37 (S=2/3)



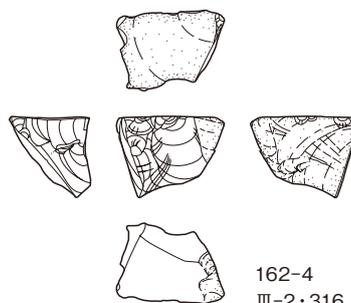
162-1·II壁際·264



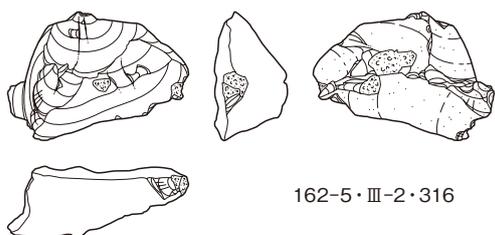
162-2·I-1·271



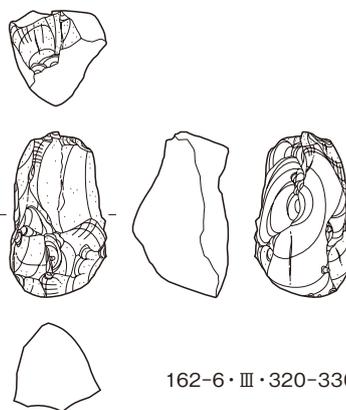
162-3·III-2·300-310



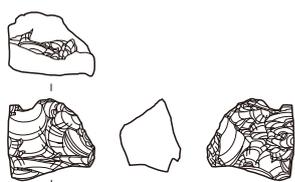
162-4
III-2·316



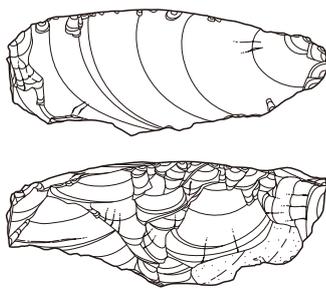
162-5·III-2·316



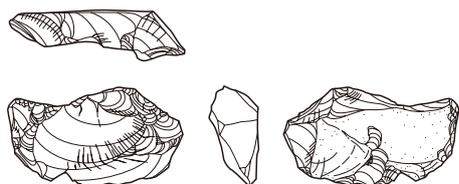
162-6·III·320-330



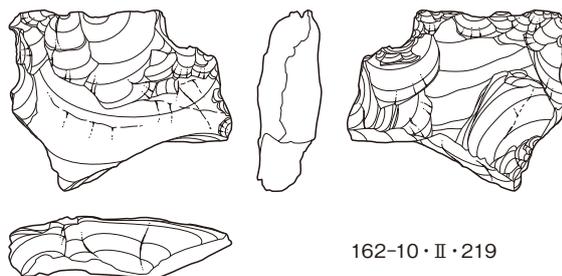
162-7·III-2·510-520



162-9·不明·20



162-8·II-3·510-530



162-10·II·219

图162 I~IV区 剥片石器38 (S=2/3)

剥片

図163～図165が剥片類である。約8割を黒曜石が占める（図163-1～165-3）。尚、使用痕か加工痕、もしくは調査時の破損など区別は難しいが、これらの僅かな剥離を持つものも含めている。但し、今回図示したものは比較的大型のもので、所謂チップ類はほぼ含まない。全体として、自然面を残すものも多いが、その中でも様々な形態のものが含まれ、打面調整などを積極的には行わず、入手した原石をそのまま剥離する様子が想定される。また、自然面を持つ資料の数やその形状からは、遺跡に運び込んだ黒曜石原石が小型のものであった事も示しているかもしれない。ただし、やや大型の剥片を使った製品や剥片（例えば164-17、20や165-1）、さらに石鏃の素材の大きさを考えれば、ここに示した平均サイズ以上の剥片がさらに多かったことも想定される。

黒曜石以外の石材（図165-4～11）ではチャートなどがあり、主に「中部」に見られ、比較的大型のものが多い。165-12は、1995年に藁科哲男、東村武信による蛍光X線分析が行われ、佐久市八風山のガラス質安山岩製とされている。

大型剥片石器

図166～168には、やや大型の剥片を使った石器を図示した。厳密な区分は難しいが、黒曜石、チャート等を除き、頁岩もしくはホルンフェルス、タフと思われる石材で、重量が概ね25g以上のものをあげている。形状は不統一であるが、横長の剥片素材も多く、ほとんどの資料が自然面を残す。

図166-2は自然面を残した横長剥片を両面から加工している。166-3は、表面に古い剥離面を持つ横長剥片をわずかに二次加工した資料。図166-4は、縦長剥片素材。図167-2はやや得意な形状の横長剥片の一辺を加工。図168-1は、やや縦に長い剥片素材で、わずかに二次加工がある。



图163 I~IV区 剥片石器39 (S=2/3)

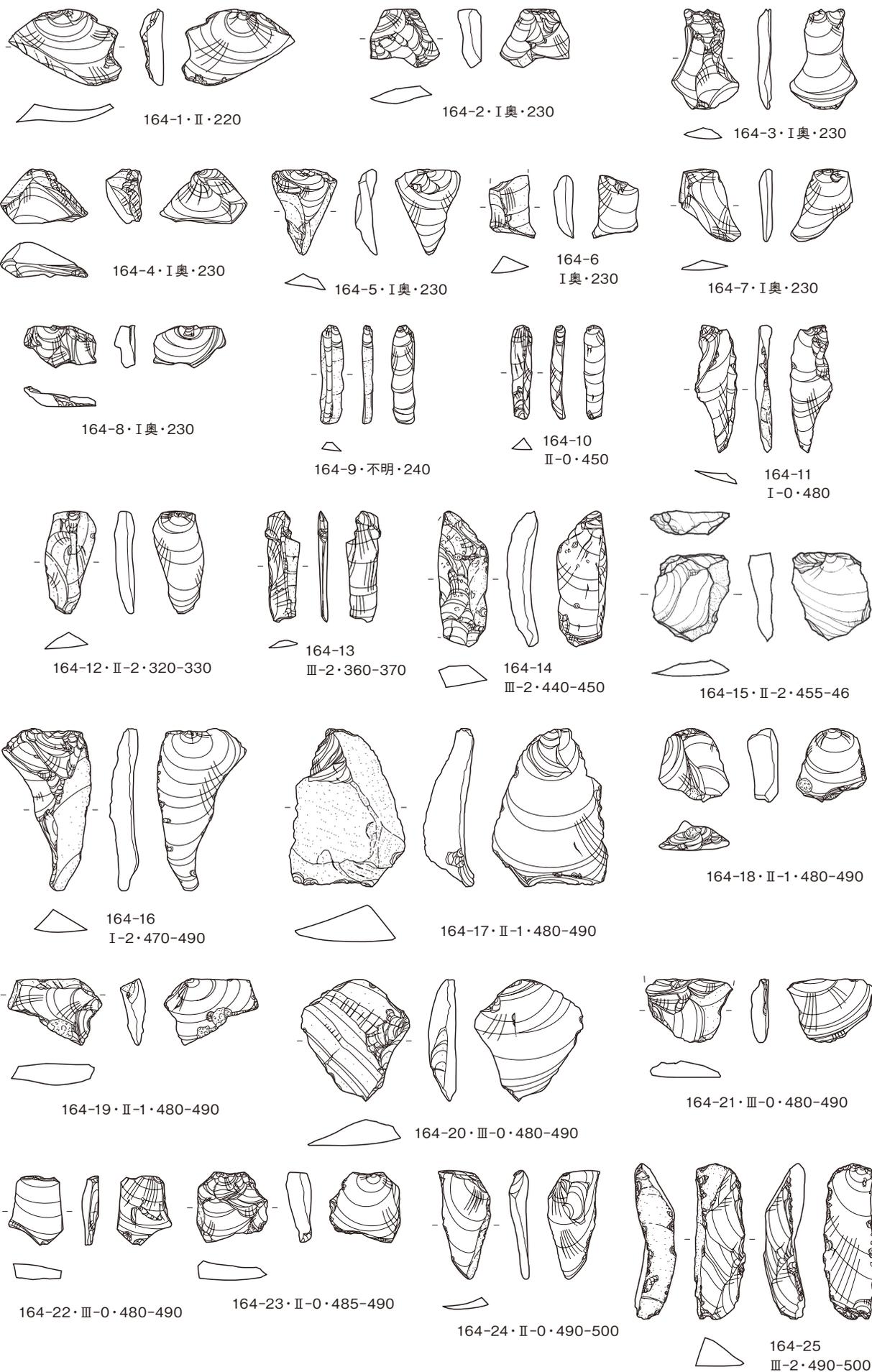


图164 I~IV区 剥片石器40 (S=2/3)

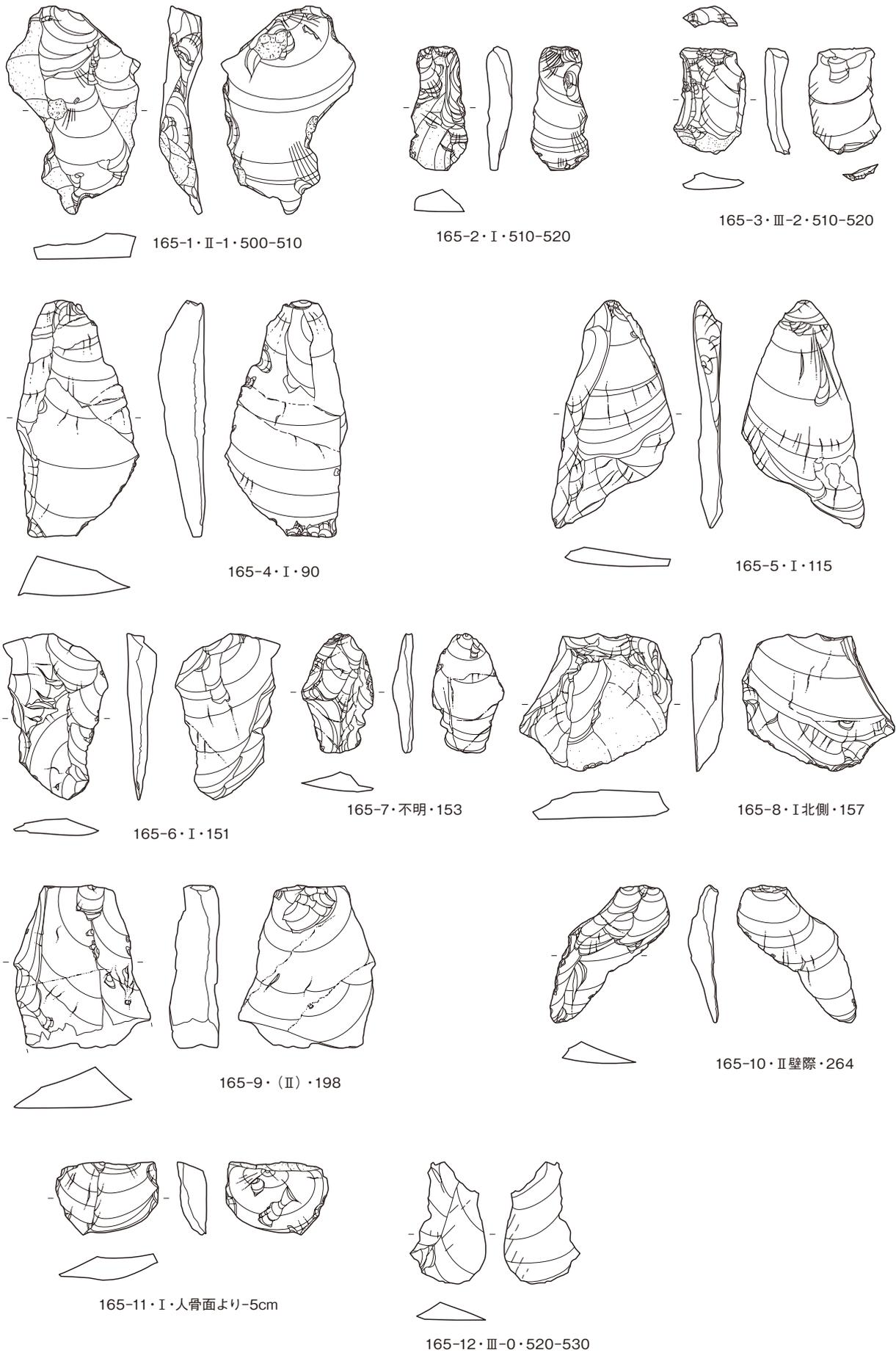
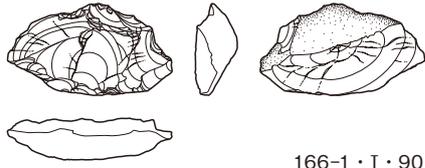
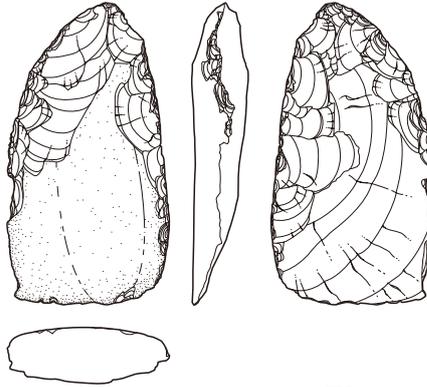


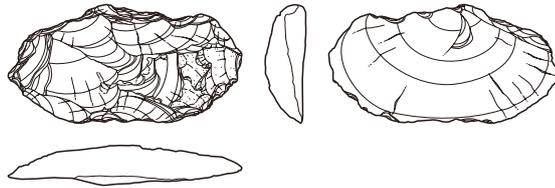
図165 I~IV区 剥片石器41 (S=2/3)



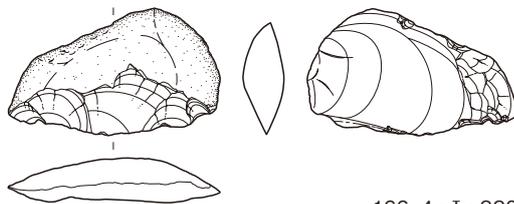
166-1 · I · 90



166-2 · 不明 · 90

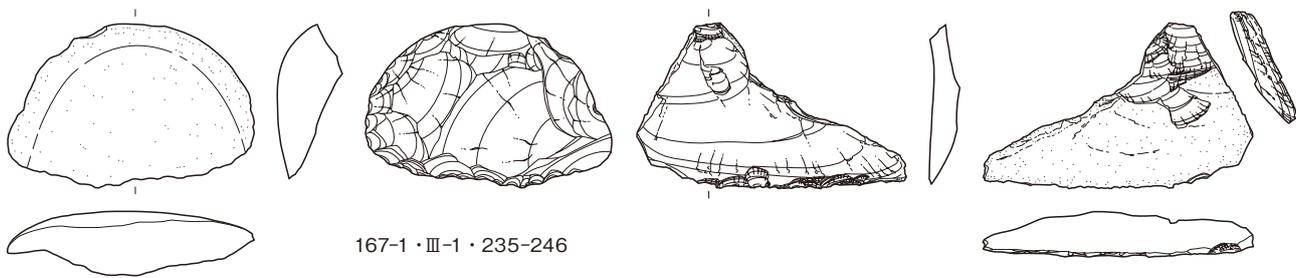


166-3 · I · 156



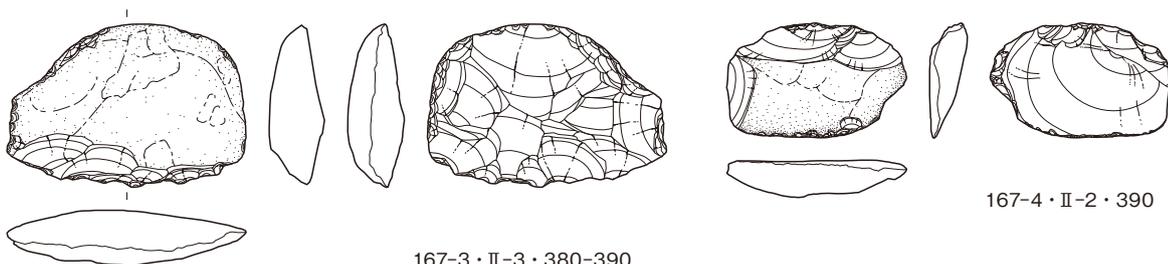
166-4 · I · 220

图166 I~IV区 剥片石器42 (S=1/3)



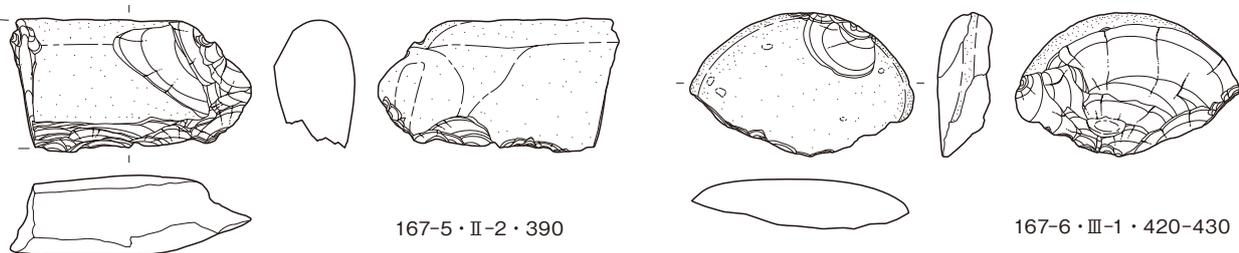
167-1 · III-1 · 235-246

167-2 · II-0 · 320



167-3 · II-3 · 380-390

167-4 · II-2 · 390



167-5 · II-2 · 390

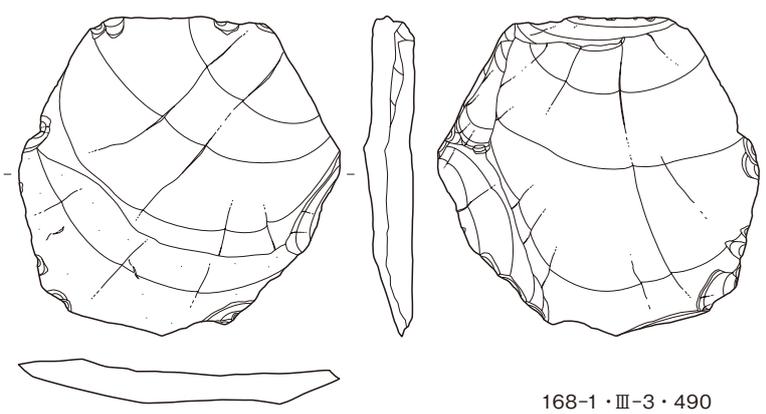
167-6 · III-1 · 420-430



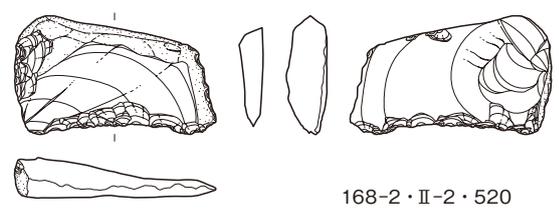
167-7 · II-1 · 450-470

167-8 · III-3 · 470

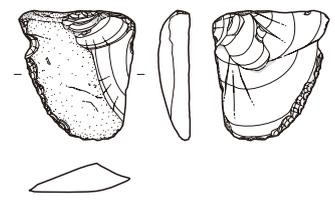
图167 I~IV区 剥片石器43 (S=1/3)



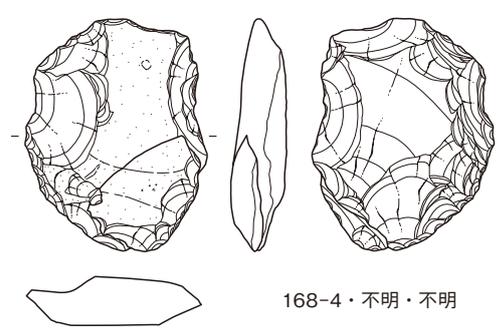
168-1 · Ⅲ-3 · 490



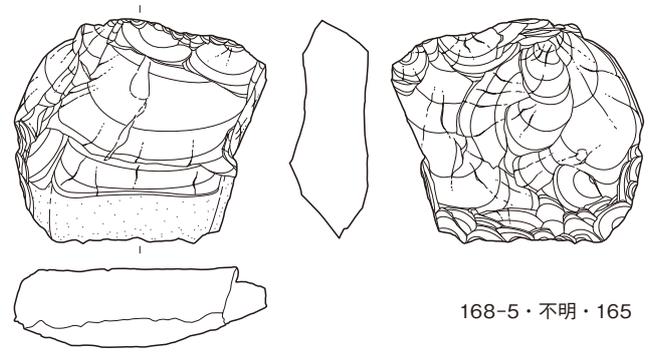
168-2 · Ⅱ-2 · 520



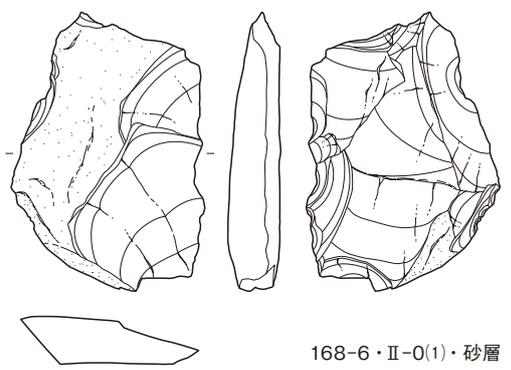
168-3 · Ⅰ · 中央配石下



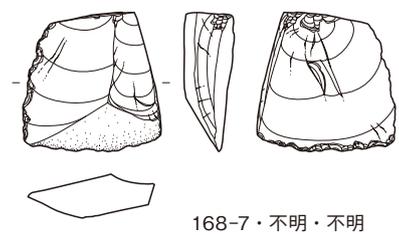
168-4 · 不明 · 不明



168-5 · 不明 · 165



168-6 · Ⅱ-0(1) · 砂層



168-7 · 不明 · 不明

图168 I~IV区 剥片石器44 (S=1/3)

礫石器

やや大型の礫を素材とした、所謂礫石器では、凹石、磨石、特殊磨石、敲石、砥石、その他がある。

凹石・磨石

図169-1～図176-1は、所謂凹石、磨石の類である。これらについては、凹み部の有無にかかわらず、表裏面及び側面の磨りや敲打には共通点が多く、また170-8や174-7、175-2、175-4などのように、表裏面にアバタ状の敲打痕を残すような、いわば中間形も見られる。このような理由から、ここでは該当する資料をレベル順に掲載した。

石材は砂岩、安山岩が多く、花崗岩なども含まれる。重量は300～500gのものが多い。レベル的には、-390cm以下の「下部」に多い傾向にある。

図169-3は欠損品と思われるが、右側面に強く磨られた面を持っている。170-7は比較的小型であるが、表裏両面の凹み部は一際深い。一方で172-1のように極浅い凹みのものや、170-1のように様々な深さの凹みが混雑するものも見られる。

図170-8や174-7、175-2、175-4などでは、アバタ状の敲打痕はあるが、凹みには至っていない。172-10は他とは異なるやや特殊な例で、石材は花崗岩、角のある形状で、浅い凹みが複数残されている。

図174-2は側面に敲打痕が広く見られ、表面は大きな凹みを形成している。174-6は剥離による整形がある。175-1は、断面が三角形に近い。

特殊磨石

図176-2と3は、いわゆる特殊磨石と呼ばれる資料で、断面図三角形の頂点をなす面が磨られているものである。穀摺石とも呼ばれてきた経緯を持つ。

図176-2は断面が正三角形に近く、各所に磨面を残す。176-3は出土レベル不明であるが、断面はやはり正三角形に近く、上下端を敲打により成形している。

台石（石皿）

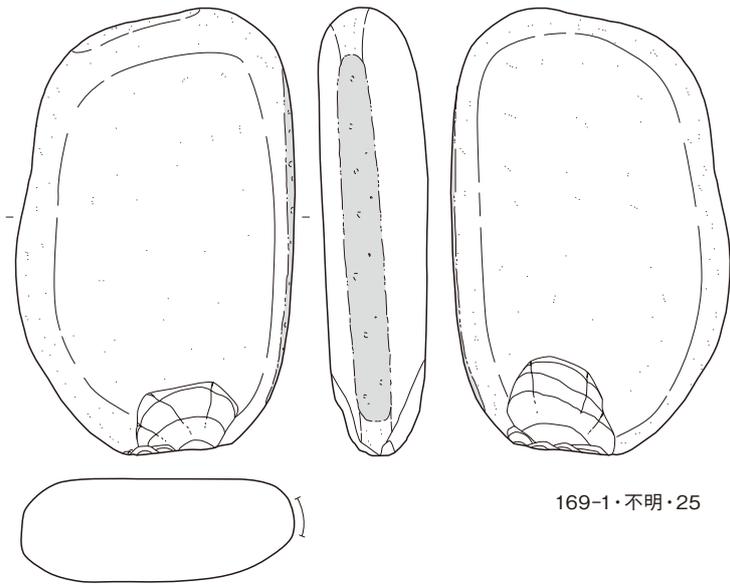
図177には、台石もしくは石皿としたものを図示した。用途等は不明である。177-1は砂岩製で、裏面の多くが欠損しているが、表面には敲打による広い凹みがある。-565cm、包含層の最下層で出土している。177-2は出土地点が不明であるが、やはり砂岩製で周縁に弱い磨きがある。

敲石

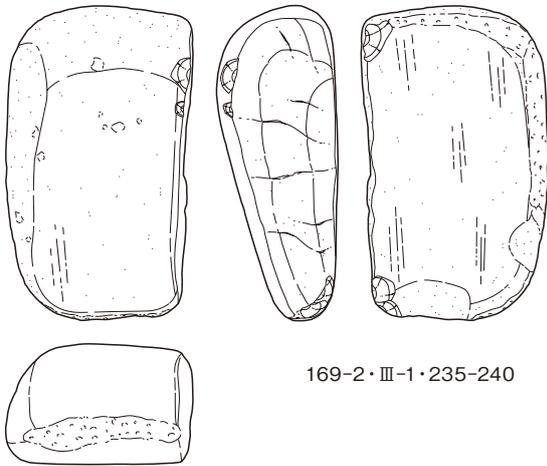
図178には、ハンマーとしての使用が考えられる資料を載せた。178-2、178-3、178-5は小型であるが、側縁部に敲打と思われる痕跡を持つ。黒曜石など剥片石器の加工も想定できようか。178-1は磨面も有し、断面も三角形で、他の用途も考えられよう。

砥石

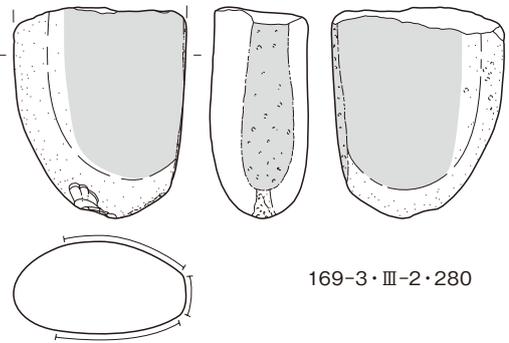
本遺跡を特徴付ける石器の一つであるが、形態的にはいくつかのタイプが存在する。ここでは出土レベル順に掲載する。粒子の大きい粗い砂岩系の石材が多いが、頁岩と思われるものもある。多くは扁平で、四角状のものが多いが三角に近いもの、糸巻き状のもの、その他がある。側面は平面のものが多いが、179-9や179-12、181-12、181-15のようにエッジを持つものもある。



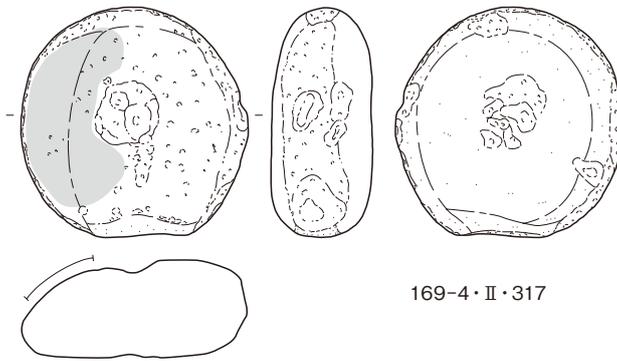
169-1·不明·25



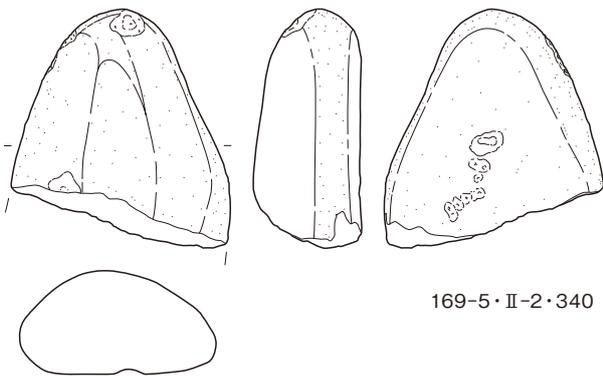
169-2·Ⅲ-1·235-240



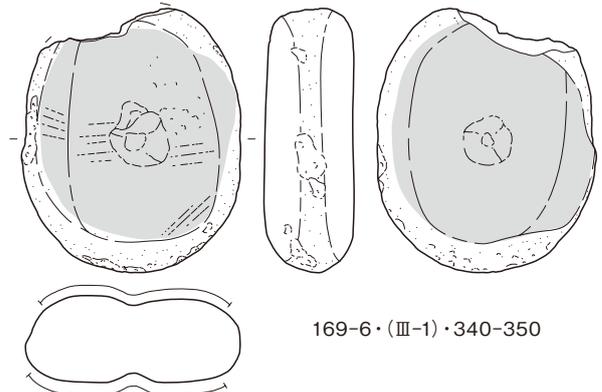
169-3·Ⅲ-2·280



169-4·Ⅱ·317



169-5·Ⅱ-2·340



169-6·(Ⅲ-1)·340-350

图169 I~IV区 礫石器1(S=1/3)

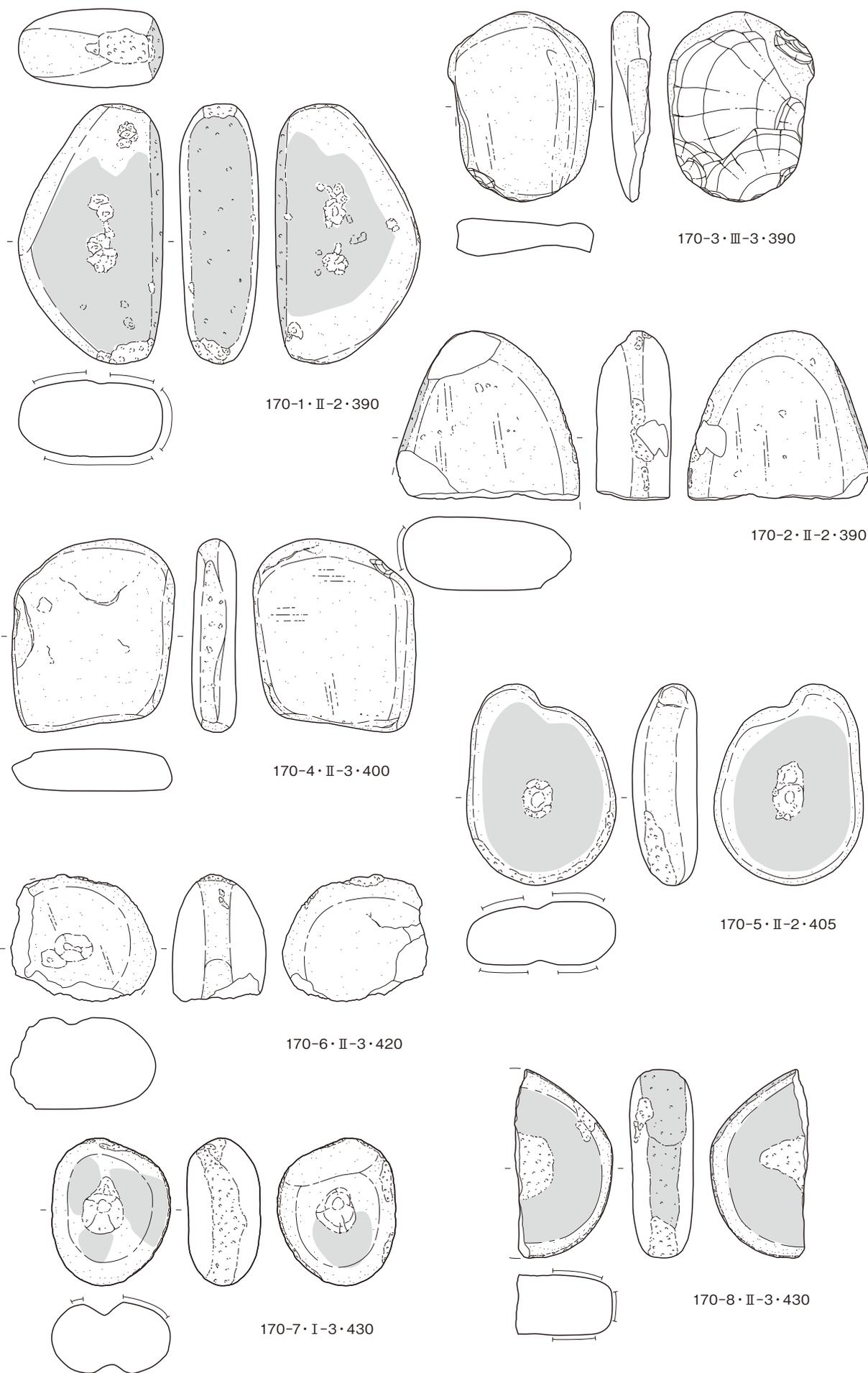


图170 I~IV区 礫石器2 (S=1/3)

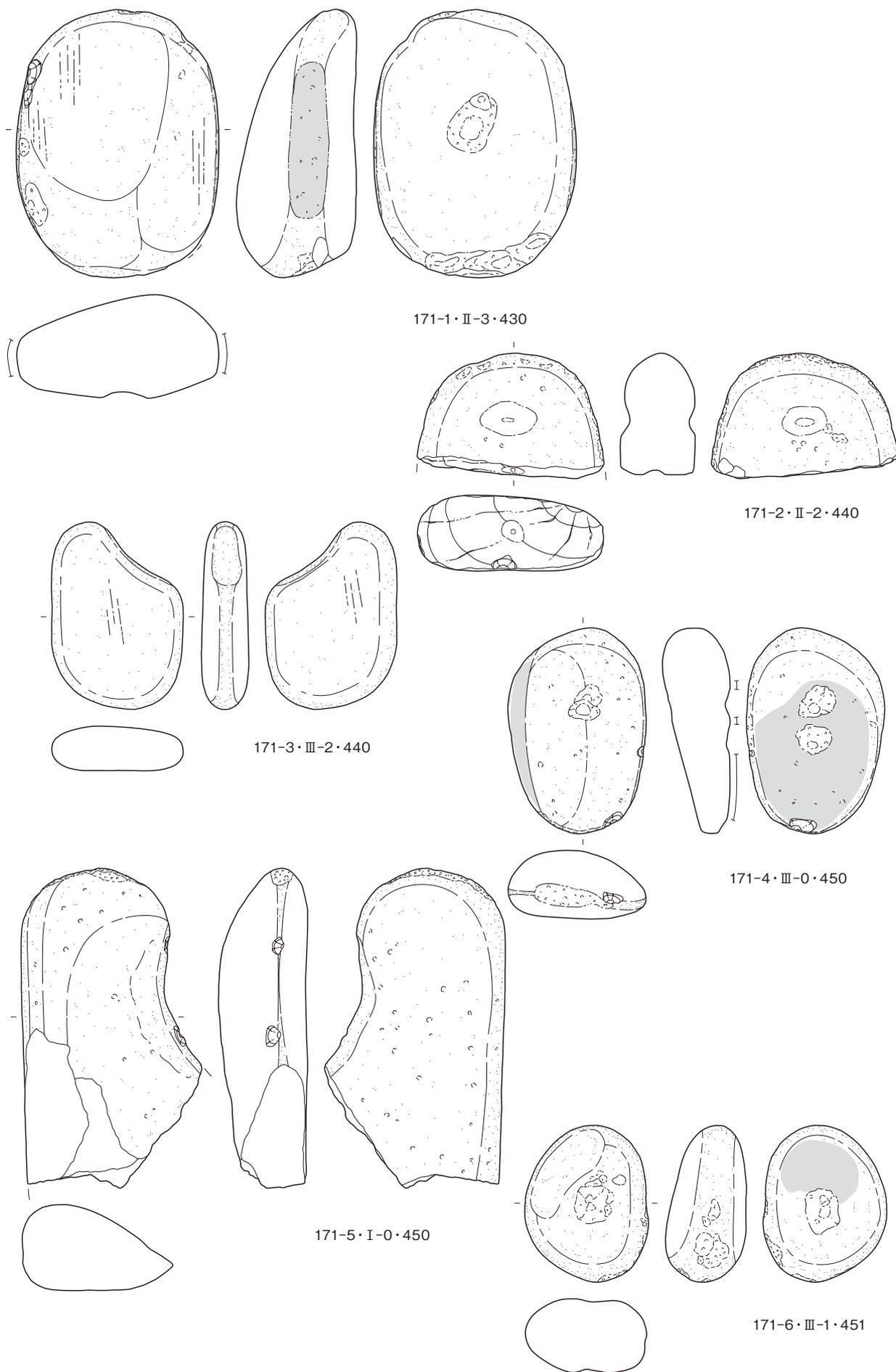


图171 I~IV区 礫石器3 (S=1/3)

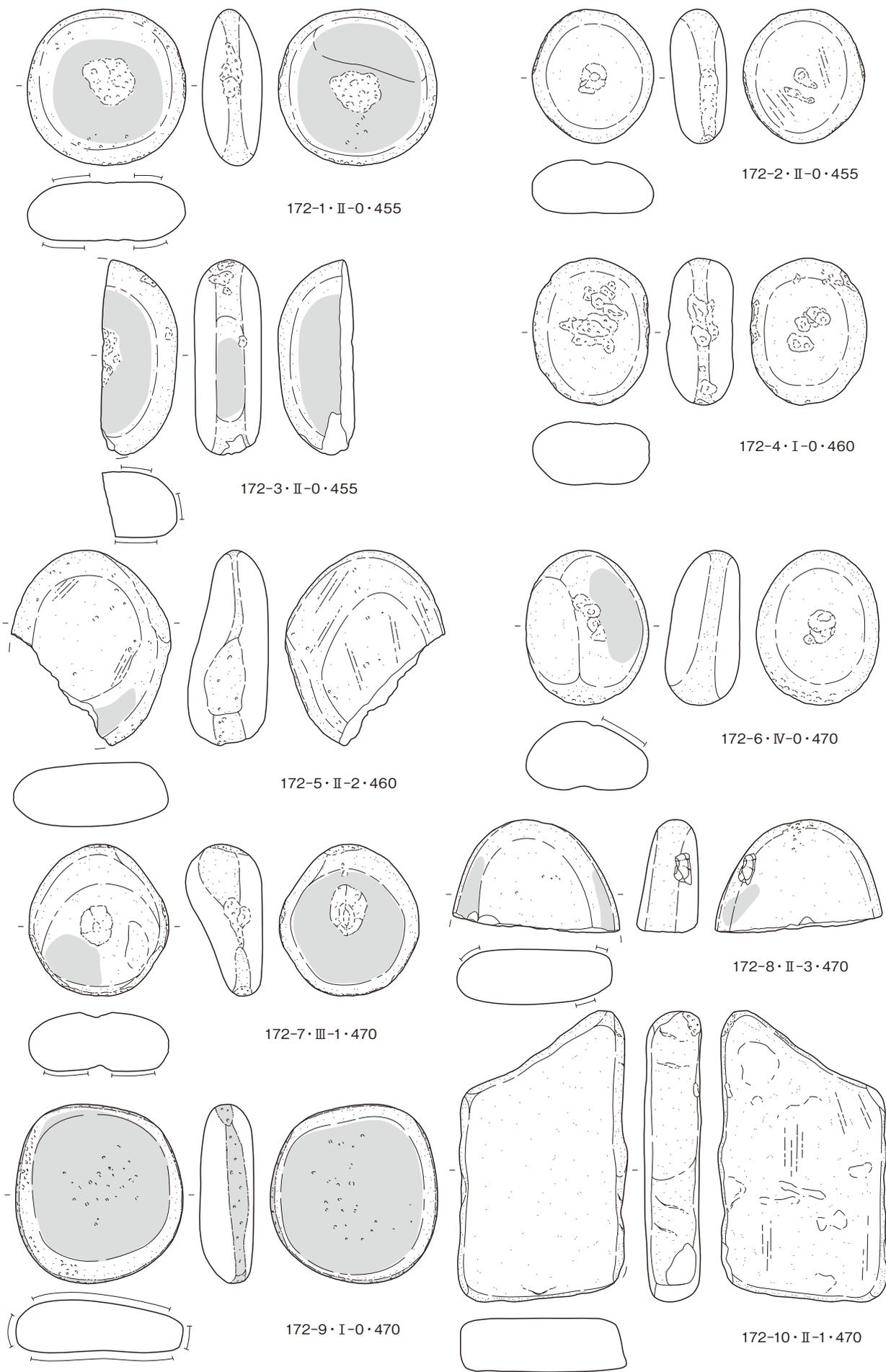


图172 I~IV区 磷石器4 (S=1/3)

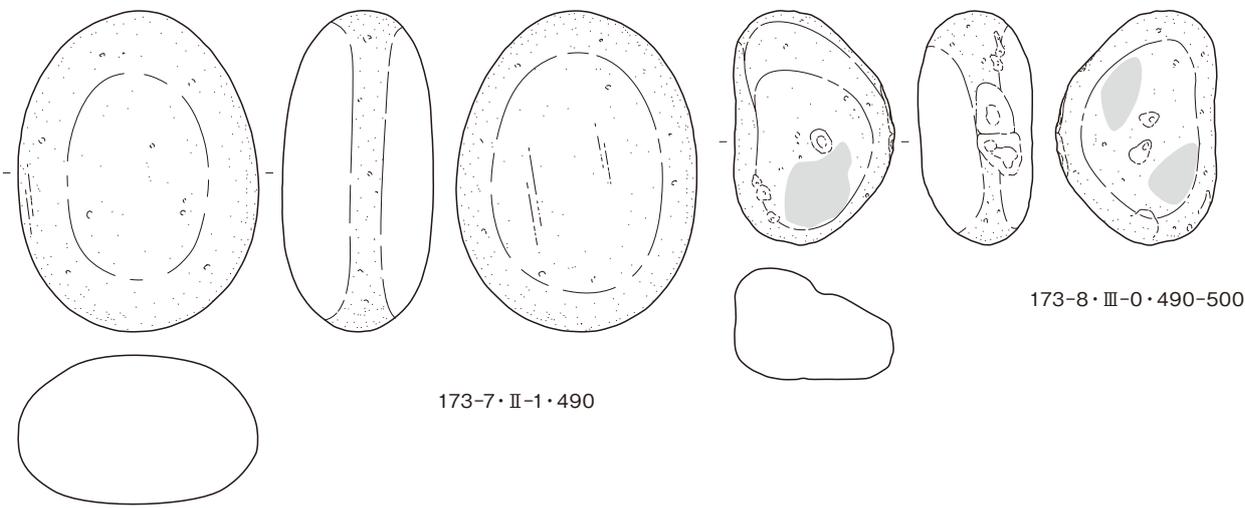
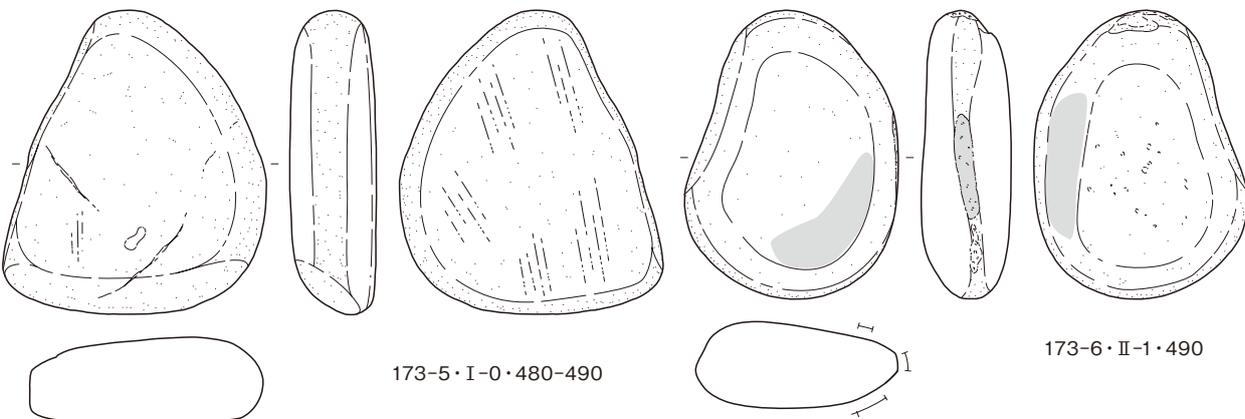
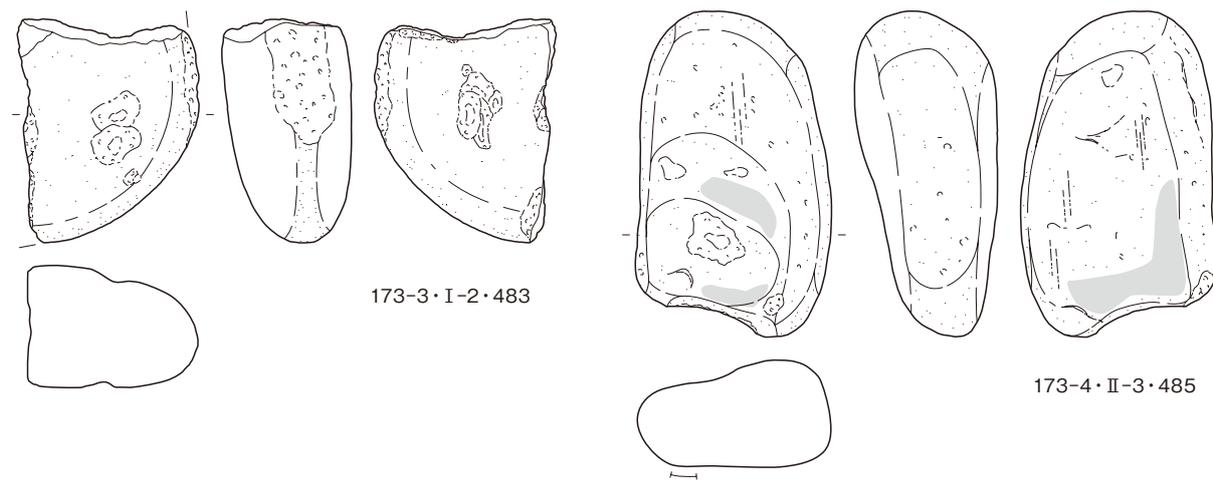
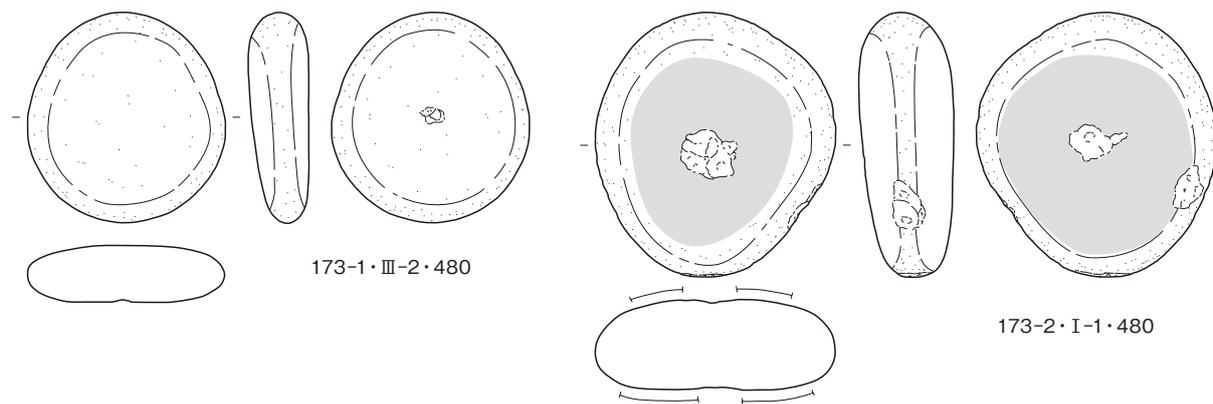


图173 I~IV区 礫石器5 (S=1/3)

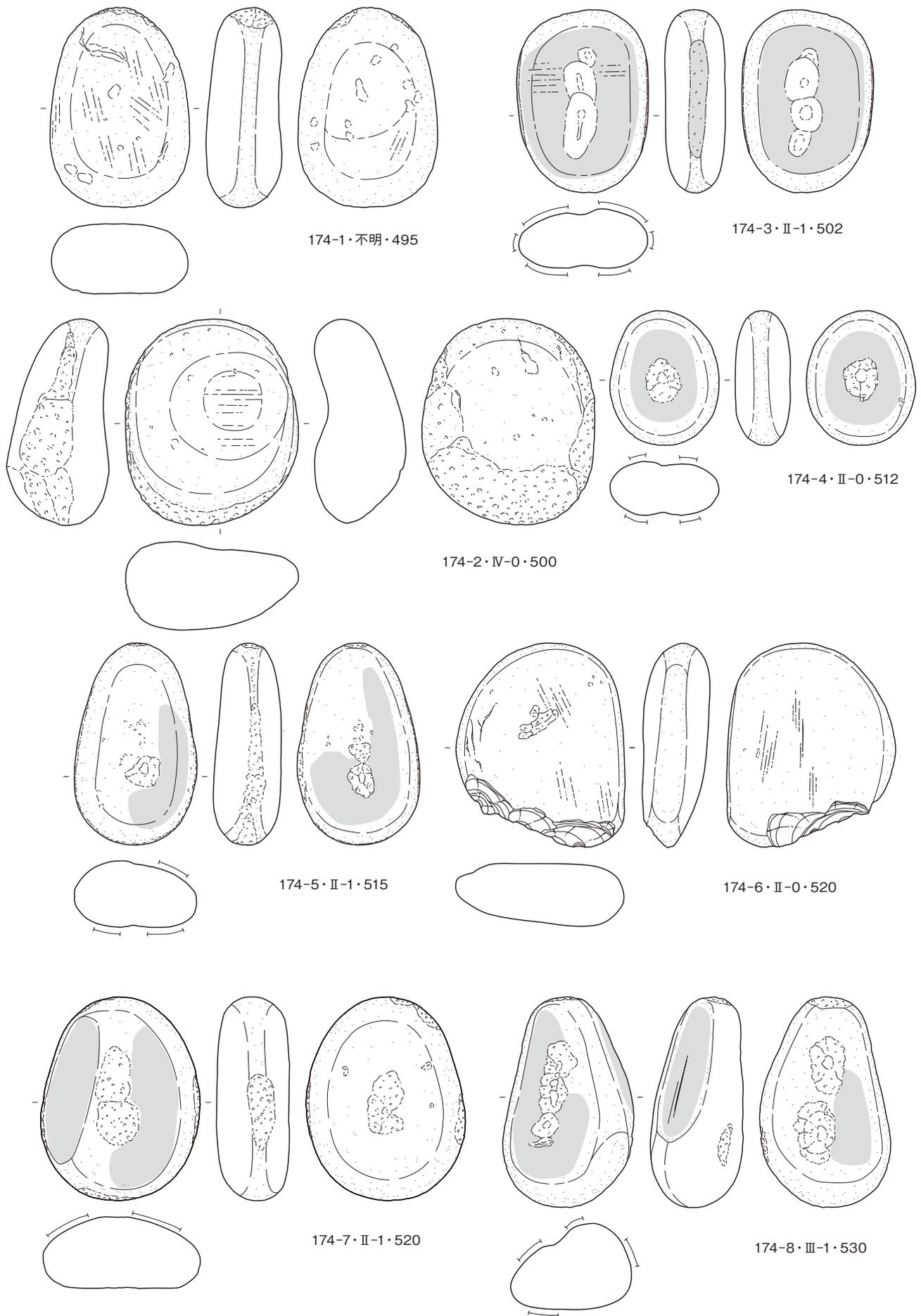


图174 I~IV区 碟石器6 (S=1/3)

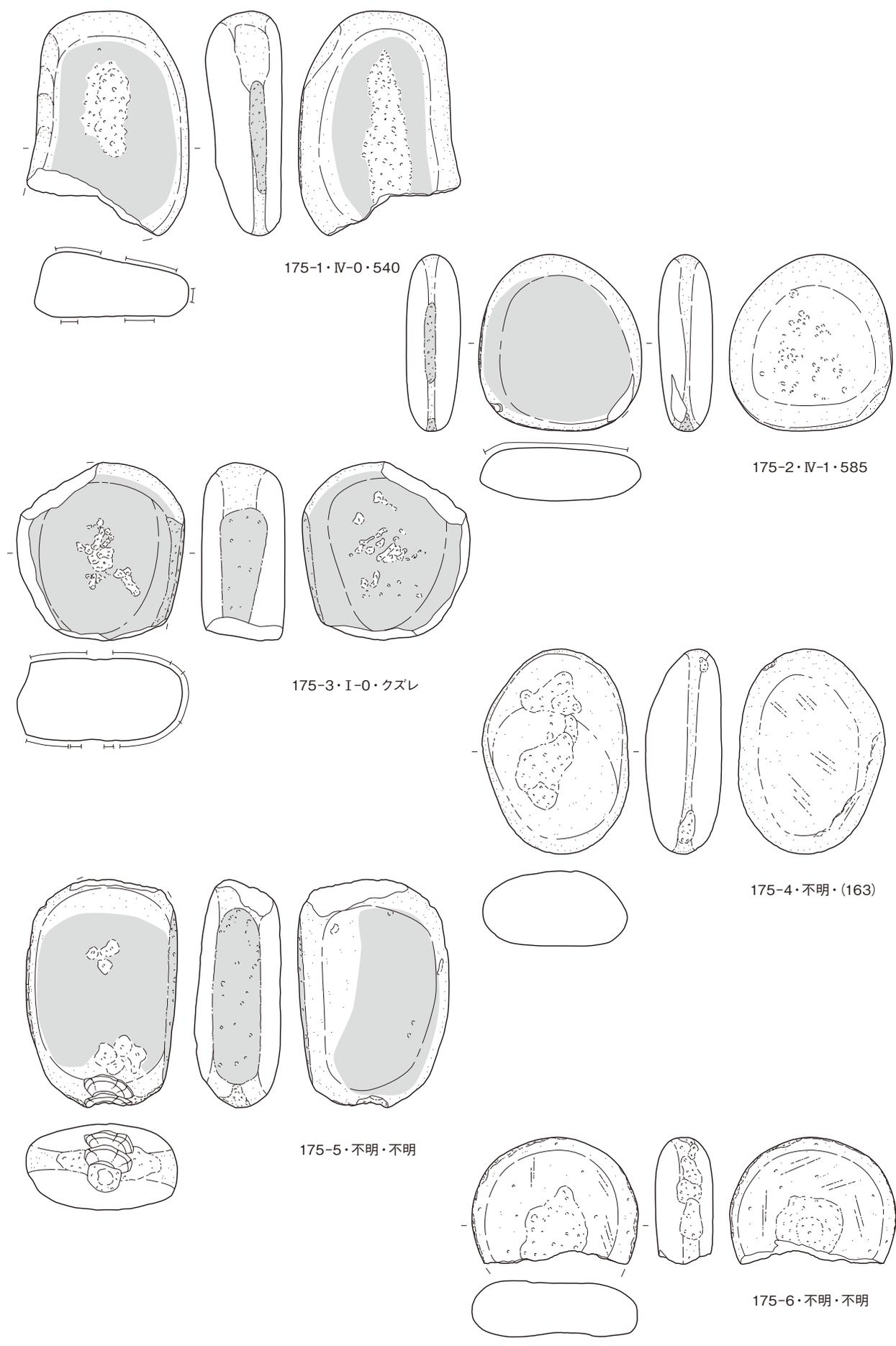
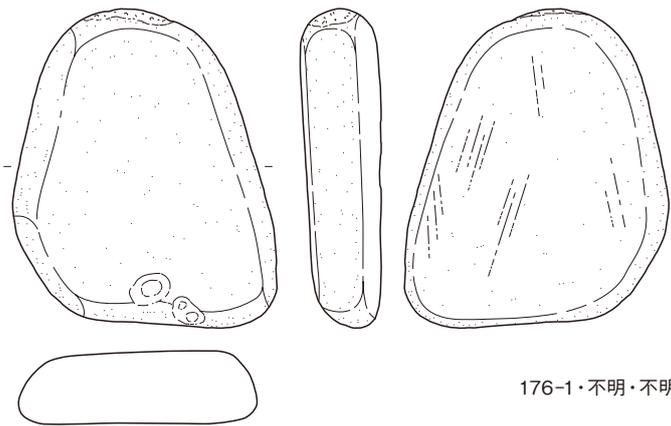
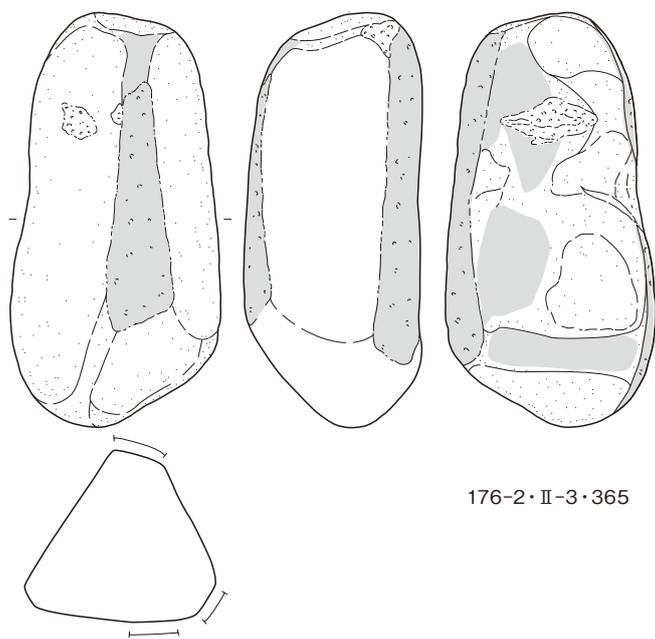


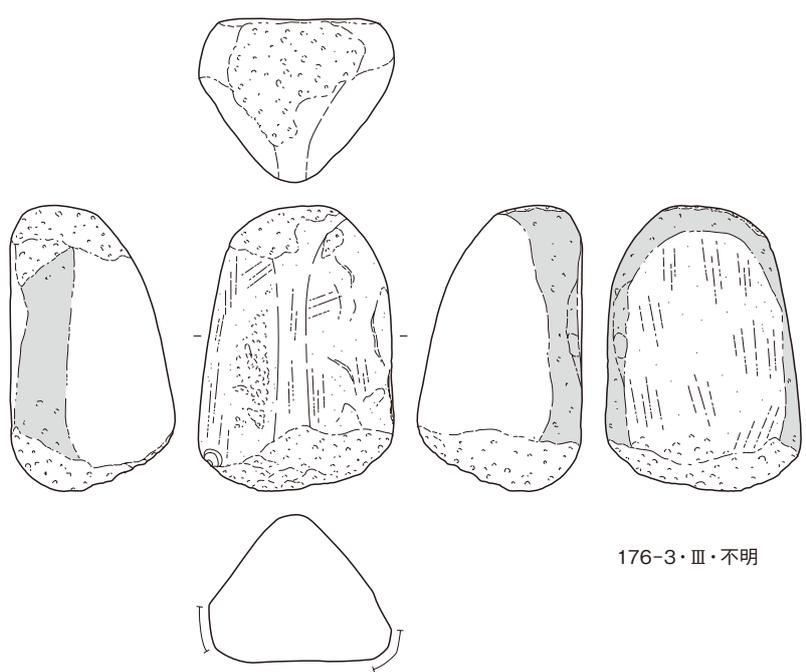
図175 I~IV区 礫石器7 (S=1/3)



176-1·不明·不明

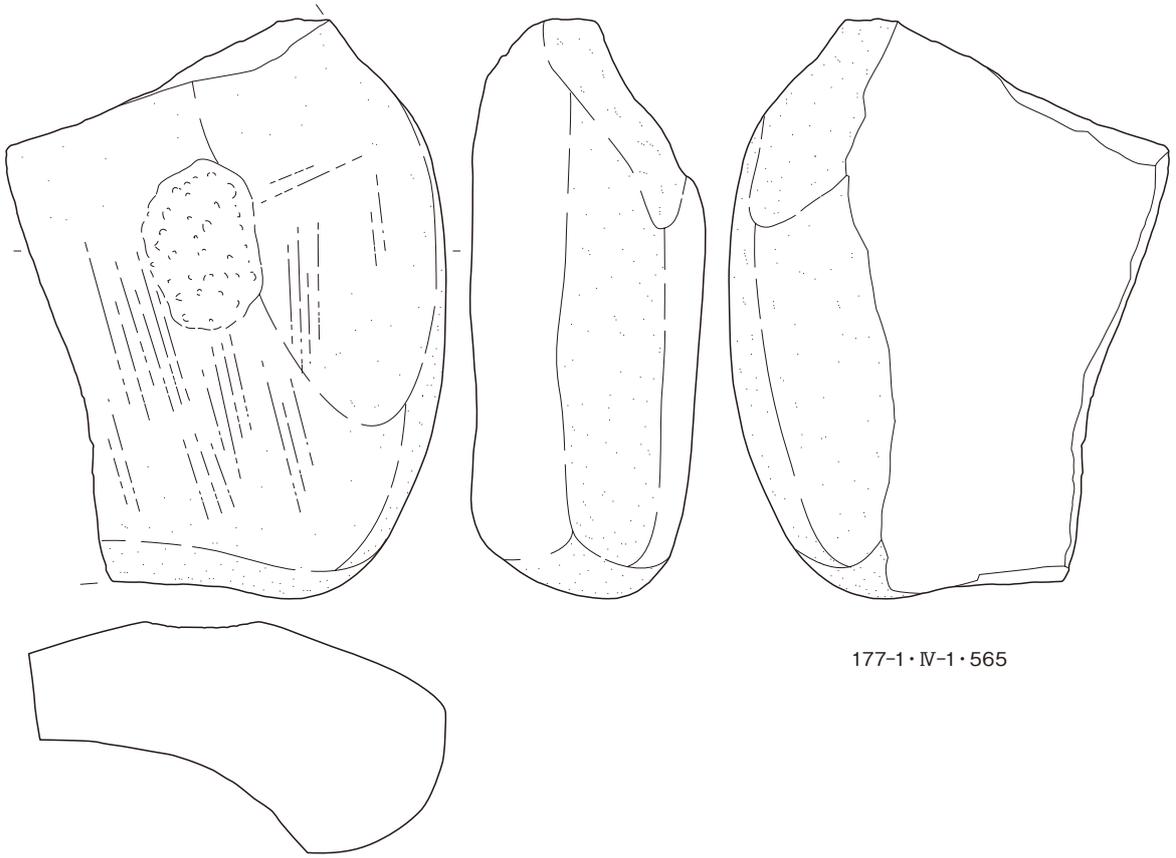


176-2·II-3·365

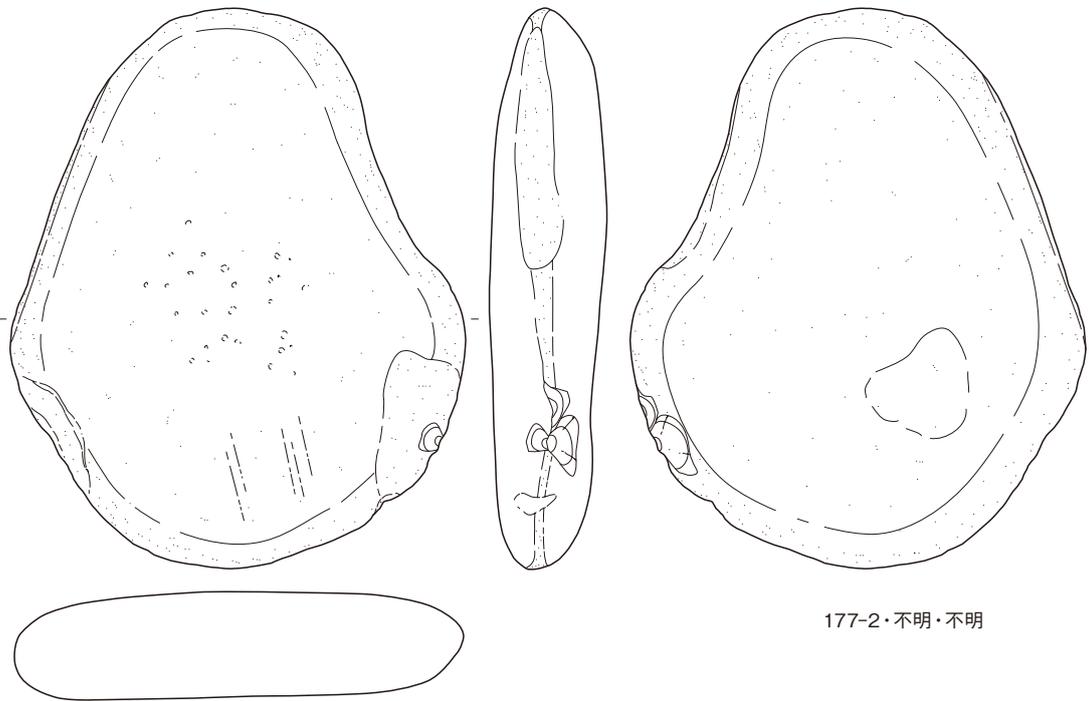


176-3·III·不明

图176 I~IV区 礫石器8 (S=1/3)



177-1·IV-1·565



177-2·不明·不明

图177 I~IV区 礫石器9 (S=1/3)

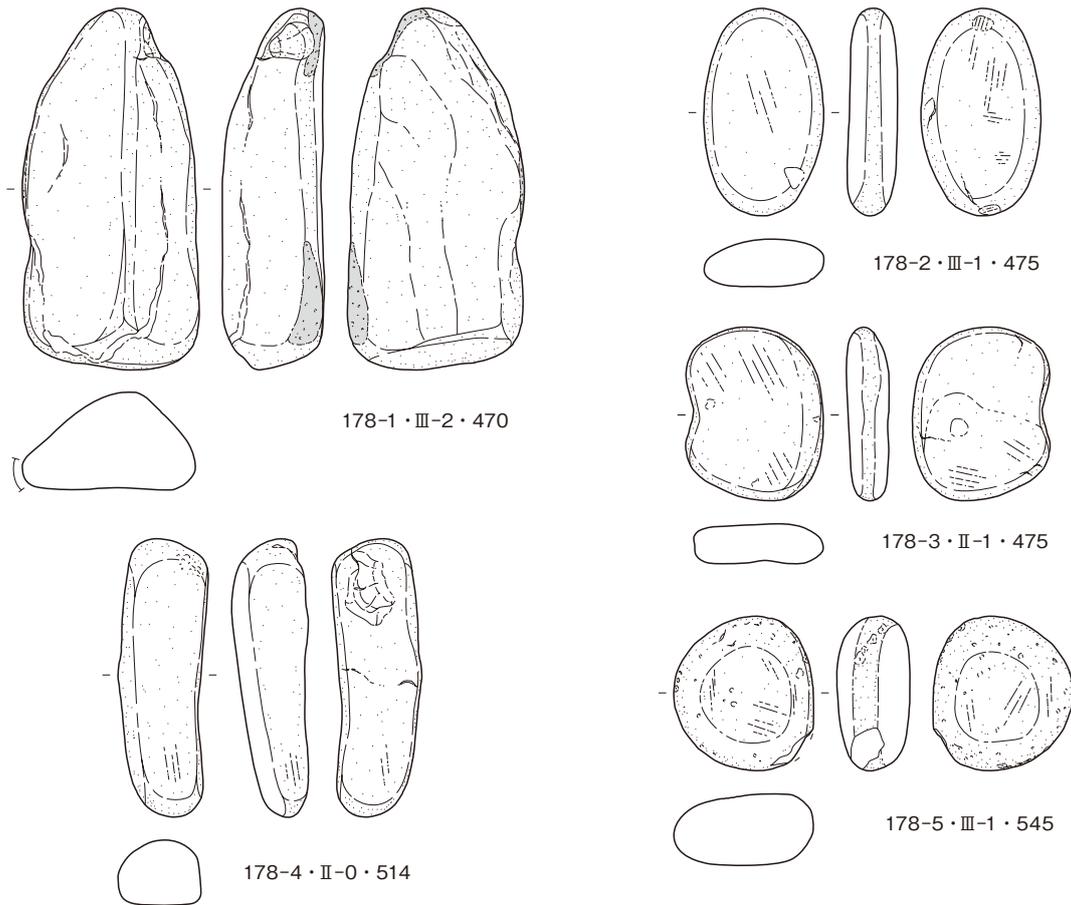


図178 I~Ⅳ区 礫石器10 (S=1/3)

表面あるいは表裏面に溝を持つ資料もあるが、その深さは一様ではなく、ごく浅いものから、179-3や179-11、179-14、181-18のように深いものもある。これらが用途の違いに起因するのか、あるいは使用頻度によるのかは不明である。

レベル別では、各形態とも「中部」「下部」それぞれに見られ、特に-300cm前後及び-400cm以下にピークがある。

図179-3は図裏面に2条の深い溝がある。179-8は欠損しているが、両側縁もしっかりと磨かれている。179-9は、両面の磨きにより、左側縁がエッジ状になる。179-11は粗い粒子の砂岩で、縦方向と横方向のしっかりとした溝が交差している。このような十字の溝を持つものは、ごく浅い溝だが179-13や180-2がある。

図179-15や181-2のような三角形に近いものや、179-14、179-18、181-10のような所謂糸巻き状の資料では、側縁が摩り込まれることで、この形状になっている。

図179-18は、糸巻き状の形態かつ、表面にやや深い溝をもち、多角的な利用が伺える。179-20は頁岩製で全体が良く磨かれ、一端が尖る形状となっている。

図181-6は欠損しているが、小型のものと予想される。全体がよく研磨されている。181-16は表裏面ともあばた状の溝があり、まだら状に研磨の痕がある。

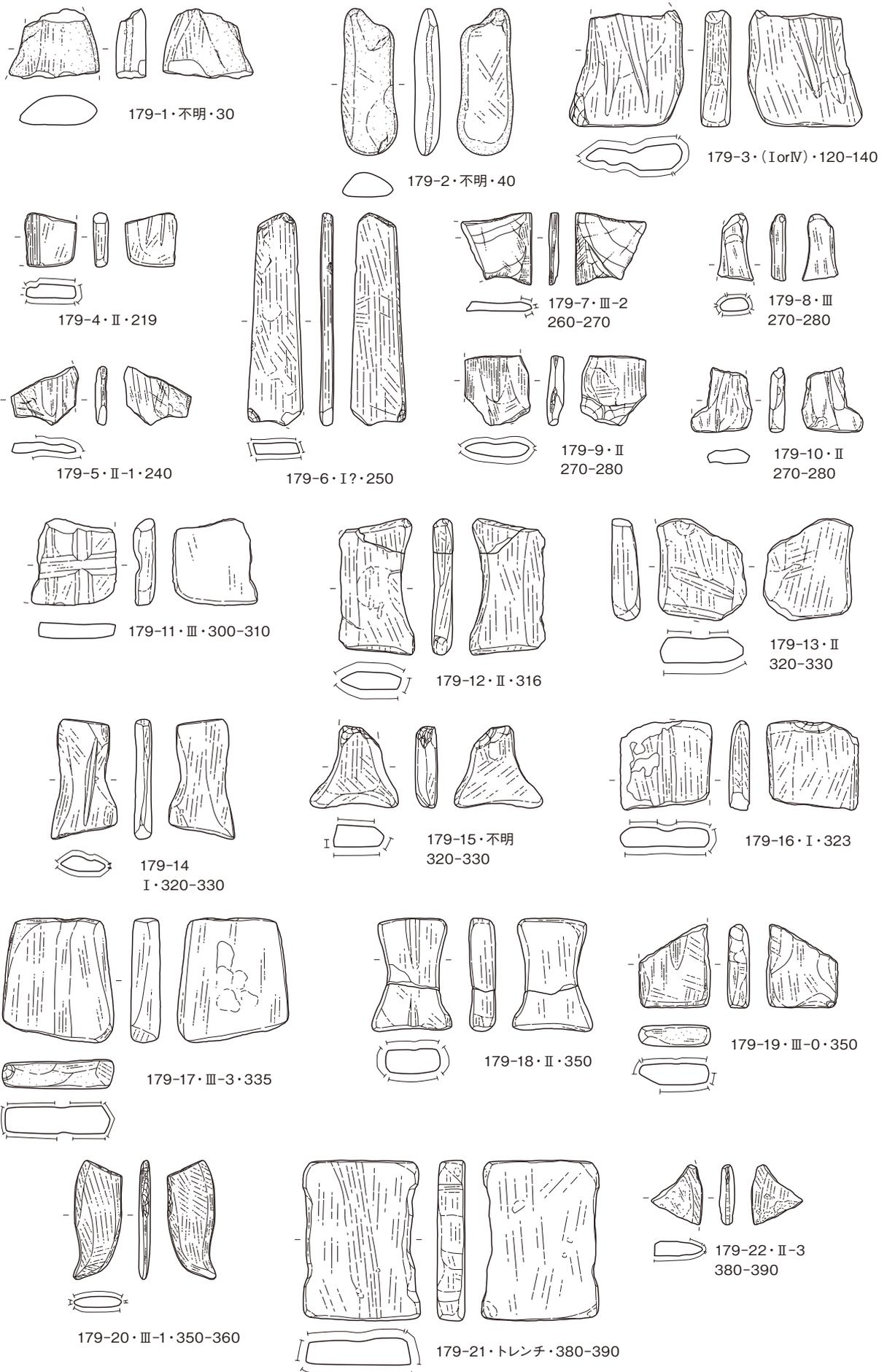


図179 I~IV区 礫石器11 (S=1/3)

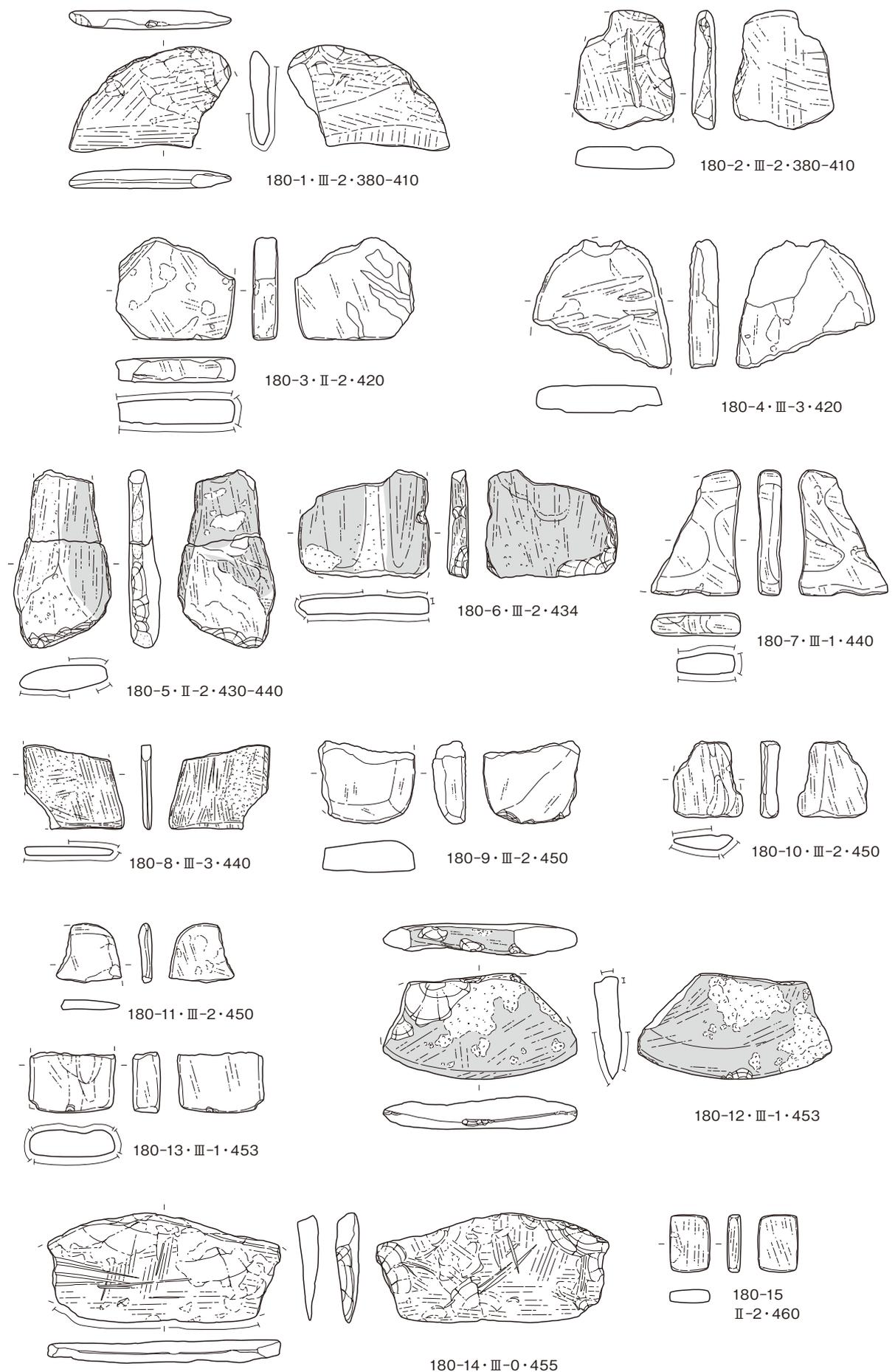


图180 I~IV区 礫石器12 (S=1/3)

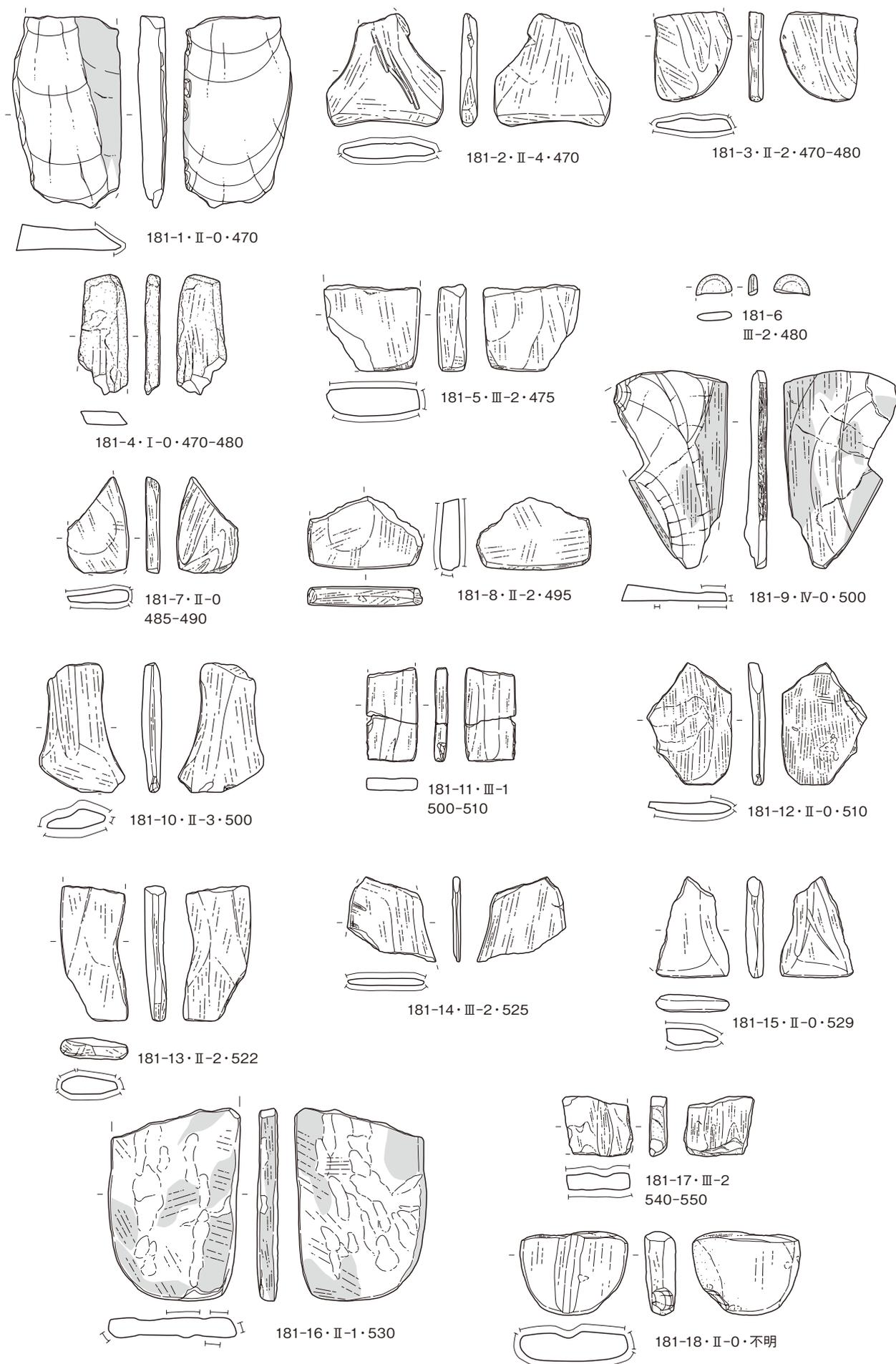


图181 I~IV区 礫石器13 (S=1/3)

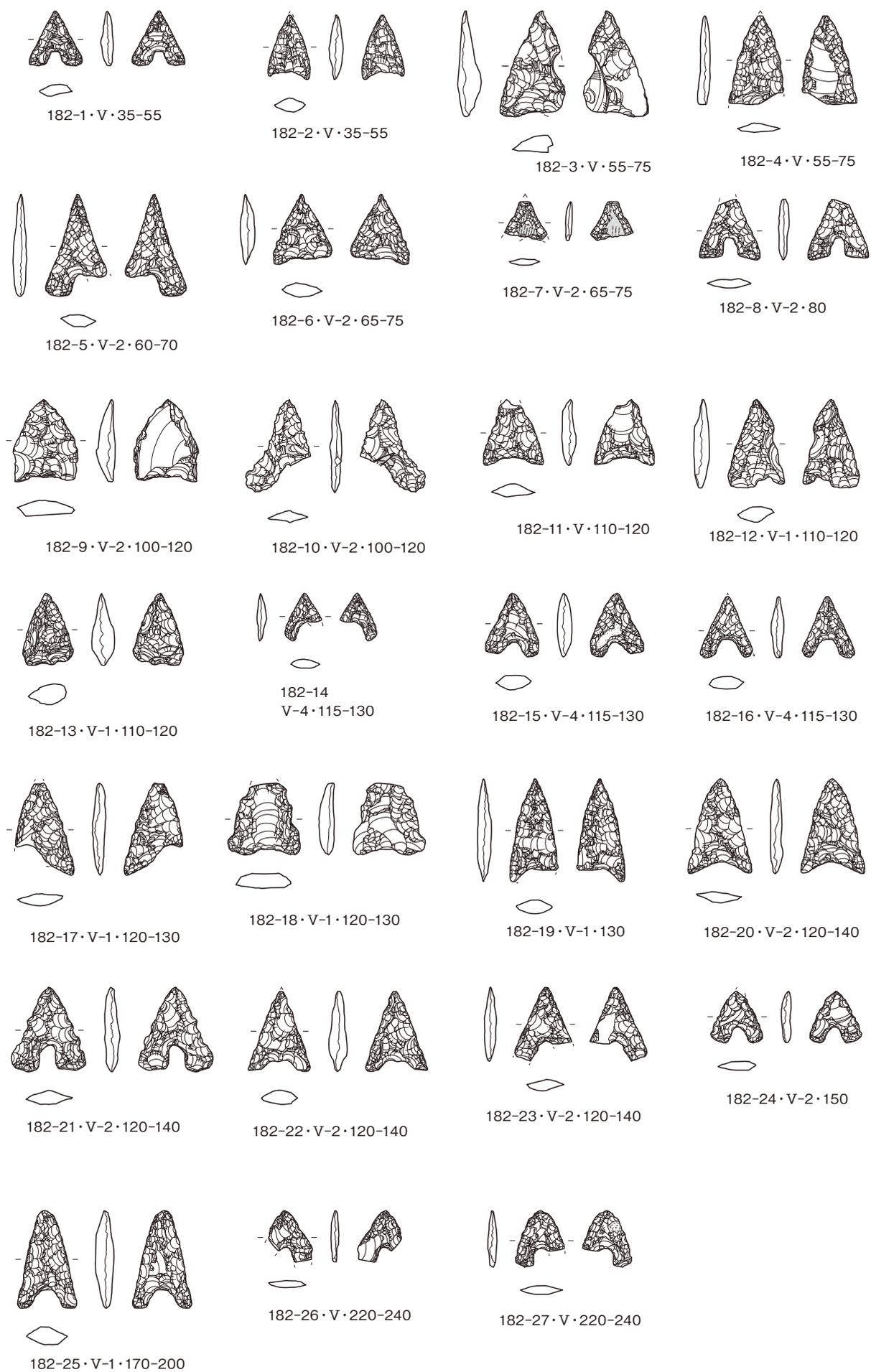


图182 V区 剥片石器1 (S=2/3)

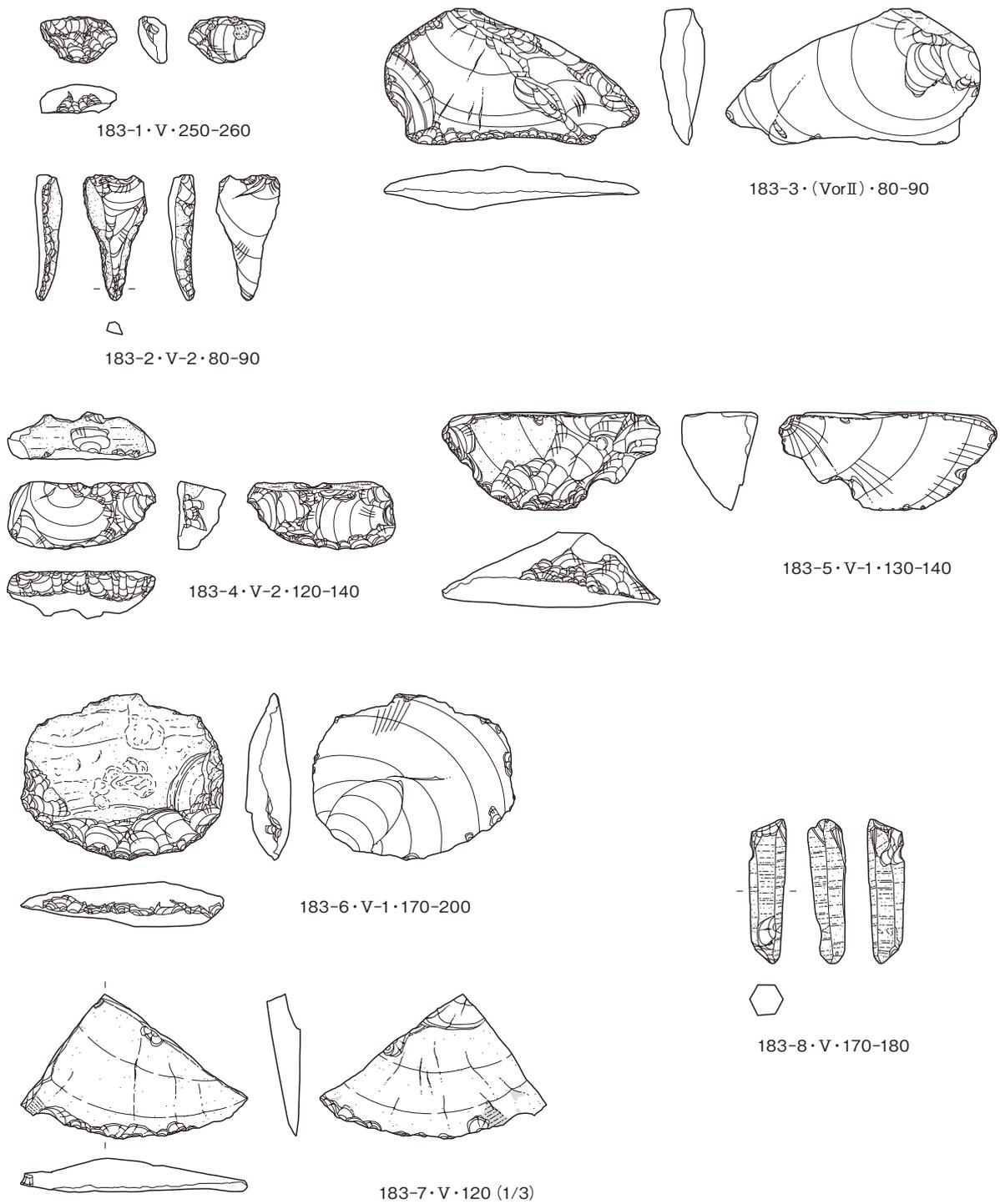
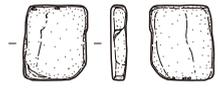
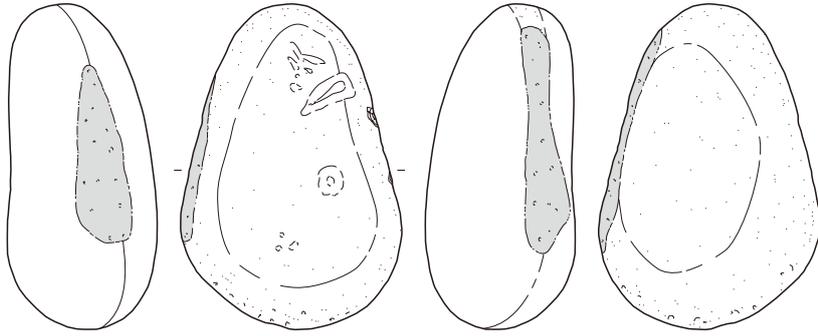


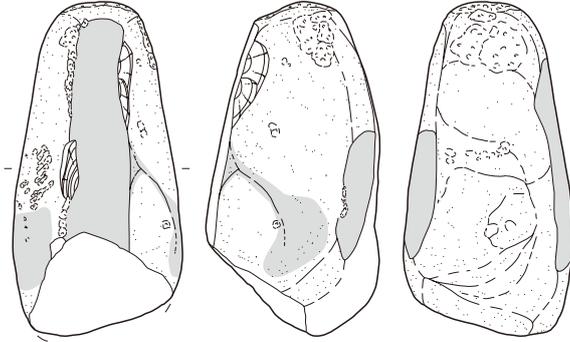
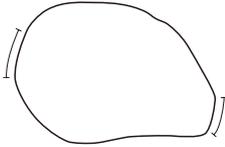
图183 V区 剥片石器2 (S=2/3·1/3)



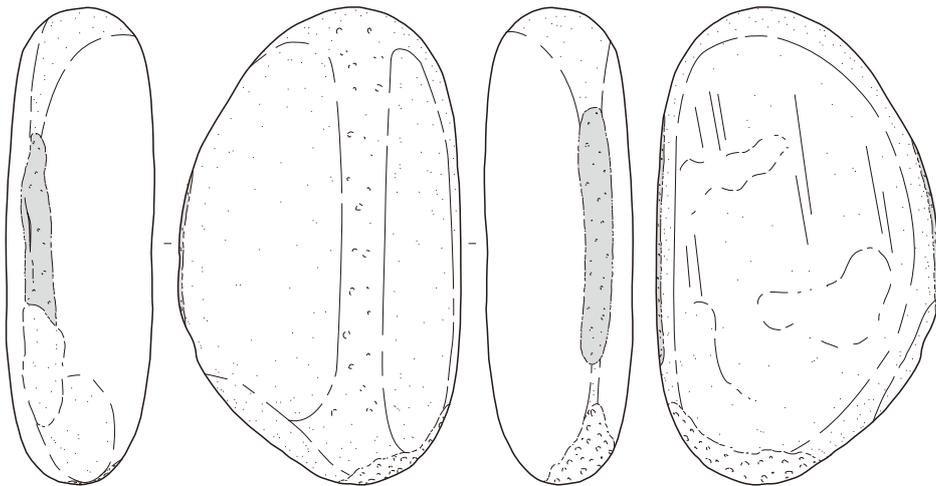
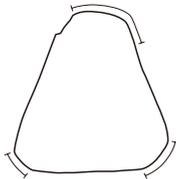
184-1·V·55-75



184-2·V-2·90



184-3·V·100



184-4·V·不明

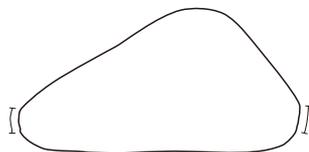


图184-V区 礫石器1 (S=1/3)

V 区

V区でも石器の出土は多い。特に石鏃が多量であった。形状としてはやや大型、抉りのあるものが多く、I～IV区との比較では「中部」出土のものに近い。石材ではチャートの占める割合も多い。

182-3は大型で、未製品か制作途中に欠損したものと思われる。182-7は小型で欠損があるが、両面に磨面がある。182-9は裏面に主要剥離面を大きく残し、未成品かもしれない。182-21はI～IV区の126-3や128-27同様、深い抉りと意図的に側縁に鋸歯状の凹凸を残した例と思われる。

V区からは他にも、スクレイパー類の出土がある。183-1は、小型だが黒曜石の拇指状搔器とした。2は黒曜石性のやや大型のスクレイパーである。183-7は大型の頁岩製剥片石器で、板状の原石に加工を加えている。183-8は水晶の原石。

大型石器では、砥石（図184-1）、凹石（184-2）、特殊磨石（184-3、4）がある。